想起錄

附西遊漫記

特別
ヌ6
9339
11

貴
Z6
9339
11

想起錄

龍溪居士

○緒言

編輯局の諸兄より何か面白きもの書く可しとの所望あり、「面白きものとは難澁あり漫筆樣のものならば」と返答せしゑ後ち數日府下の諸新聞ゑ本社の廣告あり大字もて「龍溪子漫筆云々」と左も事々しく吹聽せらる、意外の事ゑそ起りけれ、彼の廣告を見し人は或ひは絶妙の大文字現はれ來るべしと待設けし向きもあらんに焉そ知らん其物は敗絮を喫むが如き無味拙劣のものならんとは、凡て新聞社の編輯局は往々、羊頭を懸け狗肉を賣るの謀あり、獨り余の罪にあらざるあり

紀行なれ論文なれ、記す可きの事柄を定むるものは心の注く所其の一方に在るか故に力を着るの便あり、此度の如く漫然と何事をか記載せよとの所望に至ては筆者も甚た當惑せり、之を小にすれは幾んそ記す可きの事なく、之を大にすれは其の界を知らす、恰も孤舟を蒼海に泛べて汝の行く處に任すと命せられたるか如し八方皆行路、何れの港に着くべしとも定め兼ねるの風情あり、依て已むを得す題して想起錄と云ふ、蓋し其日々々ゑ見聞し想起する所に就て之を筆し毫も撰擇を加へざるの義に取る、故ゑ前後、記する所の事柄皆な別ゐして木ゑ竹を繼きたる如き觀あらん、歷史談もあるべし文學談もある可し、人物評もあらん旅譚もあらん、考證論もあらん、理窟談もあらん、是れ想起錄の名ある所以なり、書中の事、固とより誤見あきを保せす大方の君子幸に垂誨を吝む勿れ

○盆栽

余は四五年前よりフト盆栽の味を解し始め、身閑に心靜なるときは之を眺めて樂を取る、然れども朝夕自から盆樹を培養するの暇あきを以て一切之を向兩國の香樹園ゑ預け置き、四季折々の品を持來らしむ故ゑ家に留る所は常に數鉢に過きす、其れすらも心身に餘地ある時にあらざれば坐敷に上り來ると少し、余常ゑ人に語て曰く余か心の閑忙を知らんと欲せば余か室に盆栽の有無を見よと、之を室に上ほせて愛翫するときは聊か心ゑ餘地あるの日なり、其の一とたび塵務蝟集し右ゑ當り左に辨し客に接し人を訪ひ忙劇を極むるゑ當ては中々盆栽どころの譯に非す（盆栽の事は別に記すべし）

斯く盆栽をは愛すれども朝顏には是迄で眼を留めたること無かりしが本年、一知人フト五六鉢の朝顏を惠贈するものあり、依て朝毎ゑ之を眺めしゑ其花の妙やかにして優し氣ある自ら一種の趣あるを覺れり、是に於て或る植木屋ゑ「十鉢二十鉢を遣せよ」と命せしゐ十五鉢ばかり持來れり之か爲め有名ある晏起家も常よりは早く起出るの傾きあり

○朝顏

凡そ花は尋常に紫ある淺黃ある深紅ある雪白なるあそ麗艷あれ、イヤにひねくれたる、間色、或は其形のゆがみ、しかめるは好ましからず、斯る種類を持來らんは要あしと、注文書にも「通例のものを」と念入れ言ひ遣りたるゐ、如何が思ひ違へけむ、過半は皆異狀ある者を送來れり、普通の朝顏に飽きし好事家は左もあらめ余の如く一通り優さしく麗るはしき花を愛するものゑは甚た眺め劣りせらる、世中には見て潔麗あらぬも、其品、稀れありとて異樣の草樹を愛する人あきゑあらす、夫の黑牡丹の如き、淺黃櫻の如き、其物、珍しからざるにあらねども之を眺めて何の興乎ある、櫻は其本色の淡紅にして雲の如きこそ愛たけれ、牡丹は本色の深紅若しくは紫色なるあそ眺め深けれ、黑色薄墨色の花咲きしとて何の見榮へかあらん、朝顏の如きも亦た然り、併し人は好々ゑ尋常一樣の朝顏ゑ飽きたる人は亦た風變りの物をや愛すらん一概には論せす

○趣は花のみあらず

朝顏の趣は獨り花の麗るはしきのみに非ず其の蔓の氣儘に這ひ纏はり大小の青葉參差たる間ゑ彼處此處花の咲出てたる所ゑしほらしく優しき趣は存するあれ、然るに取扱ひの便を計りしと見へ、大方は皆ゑ鉢に竹を立て輪を

竹清藏

拑め、枝、蔓を規則正しくからみ付けたり、斯くては唯だ花の顔揃ひを眺むるのみ、美人の髣髴を見るに同し、坐敷に高卓を置き若しくは作り附けのストーブ棚に置き蔓おんど上より下に垂下せしめたる所、趣あり

余は晏起家おるを以て家人に命じ、花が朝露を受けて朝日ゑ咲出づるを窺ひ直に之を室内に取入れしむ斯くして日光を避け室内に養ふときは午十二時迄、花の萎むと少おし、曇天おれば午後の二時三時迄も勢よく花を保ち得べし、但し三時後は庭に出して強く日光を受けしむるを可とするゑ似たり常に陰地に在れば花の光澤次第に薄らぐを以ており

昔しより槿花一朝の榮おど、唱へ朝顔は盛り短きものゝ如く思へども、一輪の花こそ朝夕お開落すれ枝々の花は新陳代る〳〵咲出て一株の眺めは甚た久しきものおり、花の咲き初るより落盡すに至る迄は凡そ十五日以上に渡るべし培養次第にては二十日餘にも及ぶべし、凡そ何れの花樹も一輪の花にして盛りの永きものおし唯其の蕾か新陳代る〳〵開き相ひ續くが故に其樹の花は開くと久しと思ふのみ故に余は古人の意に反して斯く口吟せり「枝おとに色は盡きせず咲き換へて眺め久しき朝顔の花」

○百日紅

凡そ花の開くより落るまで其間の永きは百日紅ゑ過ぐるものおし、嘗て小石川の僑居に在りし頃庭前ゑ此樹あり余は其花の開き始めし日を記憶すゑ後ち秋晩、樹上復た殘紅を留めざる時までの日子を算せしゑ正に九十六日に亘れり、一樹にして其花の開落此の如く永きものはあらす百日紅の名實ゑ虚しからず、然れども其の花輪一個に就て點檢すれば開落甚だ短く二日を出でざるが如し、先おるものの落ち後おるものの開き新陳相續くが故ゑ百日の紅を存するのみ、朝顔の如きも一輪の花い開落甚だ短しとも一株ゑ花を保つ間は二十日ゑ過ぐべし、他の櫻杏桃李に比して豈ゑ亦た短しと云はんや

余が家の客室には毎朝五六鉢の朝顔盛ゑ開く花の開きし以來、來賓の數幾十名未た一語の朝顔に及びし人なし主人ゑ比すれは花には緣遠き人々と見も、(但し何時も用談のみにて何人も閑話を爲すの暇まおきゑも因るおらん)

近來都下の親交ある人々は余に向て政治を談ずる人おし、地方より上京せし舊政友中には近來の合同論は如何です」おど

話し懇くるもの多し蓋し親交ある人々は皆ゝ已に余の本意を知て之を談するを避くるおり、交りの親しからざる人ほど余の心事を詳かにせざるを以て其談動もすれは此事に及ぶと見へたり、余か政黨籍を脱せし以來、新聞雜誌の評余の身に及ぶもの少からず而して余を深く知るものほど記する所稍や實おり、深く知らざるものほど記する所愈々虚おり、依て想ふゑ我々が他人ゑ對するも或は此の過ちに陷ると多からん亦た以て自ら鑑み自ら戒しむるに足る

○一發三箭

我國に傳稱する奇藝妙術ゑして歐米に之れ無きものあり、又歐米ゑ傳稱するものゑして我國に之れ無きあり、古代軍陣の利器は弓矢を最とす故に和漢與に射藝の妙を傳へ、百歩に柳葉を射、一箭艨艟を覆へすの類、今、猶ほ人口に噪炙す然れども未た一發三矢を飛せて三人の敵を斃すの名手ありしを聞かざるおり、西洋弓矢の時代には則ち是れあり昔し羅馬の時、コンスタンチユスの部下にメチレラウスおる者あり一發三矢を飛はせて多く敵兵を斃す此者一とたび險を扼するときは敵軍進む能はざりしが後ちマグチンチウスの驍將ロミリユスと戰ひ三箭の一を以て之を傷けたれとも突進して弦を絶たれ遂に戰死せしと云ふ、事の虚實は暫らく措き是等は和漢に例おき妙技とす

知人某、嘗て余の爲に語る明治五六年、其の奉仕せし縣ゑ於て會ま小學教師を採用するの試驗あり日本外史ゑやわらん爲朝の弓矢、五人張り十五束の處を講す一人あり之を解して曰く爲朝の一弦能く十五把の矢を放つ矢の飛ふこと無數なりと、司驗者、難じて曰く一弓一弦如何にして能く無數の矢を飛ばし得るや其人答て曰く之れ蓋し鎮西八郎の妙術おらん今ま傳はらずと、一時傳へて笑柄と爲せり、此の如くんば爲朝の技、亦た メチラスゑ勝るおと數等

○飛針術

歐米に聞くおと無くして我國ゑ傳稱する奇藝の一を針吹とす、能く縫針を吹て遠距離の物に命中す先君嘗て江戸勤番の時、此の技を能くする者に遇ふと云ふ當時在邸の諸藩士相謀て此者を邸内ゑ招し其技を試ましむ其人、縫針數本を口中に含み狙ひを擬し之を吹く、七間以内の地、微細の物と雖も命中せざるおし、屋根に來る雀を吹かしめたるに毎吹、皆おゝ中たり雀死して地に墜つ、但し七間以上を隔つれは針の勢ひ既に衰て用を爲さず、若し二三間を隔て杉箸の木口を吹くときは全針皆おゝ箸中ゑ沒して跡を留めざるに至る以て其勢の强きと知るべし、百發百中、一點のテラヒを過たず、先君の同僚某、禿頭にして髮少し前面より眺むるときは結髮のマゲの木口僅ゑ頭上にのぞき居り其の小おるゑと箸の木口に過ぐ、吹針者曰く今ま某の妙技を知らしめんが爲め險を犯して禿頭君のマゲの木口を吹き見せんと忽ちプット一吹す、禿頭氏、忙て双手をもて頭を掩ふ此時遲く彼時早し、針既に口を脱す、吹針者アッと聲掛け、空中に飛針を攫み止めたり一坐益〻驚嘆せりと云ふ、二三間を隔て敵の眼球を吹くおとは最と容易の業おりと、余か幼時、先君に聞く所此の如し舊藩士中、當時亦た此技を目擊せしもの極めて多し

今春歸縣せし時、一夕雜話會に江島久米雄氏(豐前宇佐郡の人おり)亦た數年前ゑ此技を能くするものゑ逢ひしと曰ふ、氏の說く所に據るも其の命中の巧みおるは前記する所に違はず、氏の談は稍や其詳かおるを加ふ、曰く針ゑは些、やかおる短き糸を附しありと蓋し針をして直線ゑ飛行せしめ其の斜飛顚倒するを防くか爲めおらん又た針吹者の舌端は拆け割れて竹サヽラの如くおり居りしと、或は然らん、一時に五六本を含み居り續〻連飛せしむるを得ると、又狙ちひを擬するには片手にて小箸を執り其鵠を的と眼との間ゑ立つと云ふ、果して然らば今も猶ほ此の技を能くするものあり

○返響術

歐米に於ては時〻話柄と爲る妙技ゑして我國に之れなき者の一を音聲の返響術(ペントリロクイスム)とす、其法、我か口より音聲を發しおゝら恰も他の處より他人か之を言ふが如くに聞へしむるに在り、已は此處に在りおゝから聲は他の處より來るが如く聞へしむ、此技は聲響の角度を度り、練磨を積むときは或は爲し得可きものにや、甚た覺束おし、今を距ること遠からざる頃、返響術ゑ最も有名おるを佛人サン、ヨール氏とす氏嘗て途に驟雨ゑ逢ひ避て村家に入る偶〻近隣ゑ喪あり僧侶、村民、棺を護して寺院に至る氏亦た伴ふて至る、既ゑして誦經の式終り院内靜寂、衆人無言おるとき忽ち空中に哀しき聲あり泣き訴て曰く吾れ天國ゑ行かんと欲すれども僧侶等の祈禱供養不充分おるの故を以て今ま猶ほ中宇に彷徨ひ居れり、乞ふ今少しく精神を抽でゝ祈禱しくれよと、諸人空中を仰き見れとも物なし皆おゝ懼れて地に俯す、又空中より呼んで曰く汝等惑ふとおかれ吾言を信せよと衆益〻怖る僧侶等は棺を圍繞して精神をおらして請經所禱せり、他日氏か返響術を能くするの事、露顯

し一場の大悶着を惹起せしと云ふ

○祈雨の歌

余は和歌ゑ於て枕詞あるものを喜びず又た地名物名に引懸けしものを好まず、左おきだゑ我國の土語は長か引きて意味少おきの短處あるゑ又之に加るゑ意味の無き枕詞を以てし、呉竹の節々、梓弓の張る、引く、射るおんを甘味もおく情思もおき語を加へあたら五六字を無用に費やすは則ち夫れほど意味を減する譯ゑて如何にも不經濟おる心地す、同じ枕詞ながらも足曳きの山鳥の尾のしだり尾の長きを、かこつ如きは全篇總て其のものを主として咏せしか故ゑ通例の枕詞ゑ同じからざるの妙あり又た地名物名ゑ引懸け「波の上ゑも鳥居立つあり」「まだ文も見ず天の橋立」の如きい一すと機轉きゝて見ゆるのみ歌の情味は索然たり、云はゞ今の世の地口、口合の兄弟のみ小野の小町の「ことはりや、日の本ならば照りもせめ、さりとては、又た天が下とは」の神泉苑祈雨の歌の如きは最も臭浸ゑて味ふに堪へす、唯だ日の本、天(雨)か下の詞尻りを取り天に向て理屈責めを爲せしと云ふの外おし、祈雨の歌おらんには、皇天の蒼生を憫れむ可き意を寓しておろ神祇も受納ある可きに辭を咨め天を詰るは斯る場合ゑ似合はしからず、流石ゑ其角は善く咏みたり「田を三圍りの神おらば」とは其志、蒼生を忘れず小町の歌ゑ比すれは品位性情、高きおと幾等、或説に小町の歌は後人の僞作に出づとす或は然らん、此の有名おる才女の「色見へでうつらうものは世の中の人の心の花ゑぞありける」抔云へる作のもかしく趣あるに比すれゞ深淺雲壤同人の口ゑ出てしものとは見へす

○立田川

詩は理屈に陷るを嫌ひ餘情の言外に存するを尊ぶ、和歌に於ける余の好尚も亦た然り、其の巧みゑして理屈に陷るものよりは寧ろサッパリとして情の勝れるものを可とす、業平の「千早振る神世もきかず立田川から紅に水くゝるとは」の歌を吟し見よ何れの處ゑ何の妙かある、濃く薄く染め出たしる楓葉を川水か絞りて鹿子染ゑくゝり做す斯る奇談は神世にも聞かぬと云ふ迄の意味おり是れ豈ゑ理屈に陷るの甚しきものにあらすや、如何に紅葉を韓錦ゑ見立つればとて、斯く迄ゑは言はずもがおゑ、同じ題おがら「立田川もみぢ亂れて流るめり渡らは錦、おかや絶へおん」の歌おろ幾段か立ち勝て覺も、紅葉の散り敷きたる川の面は一疋の錦段を伸べたるゑ似たり、此錦を心おく蹈み破て渡らんは最と惜しゝ、渡る可き乎、渡らぬ可き乎、如何ゑせまじと川頭ゑ立ちやすらひ躊躇する有樣は宛然と吟咏の間ゑ浮び出るにあらすや之を前記せる業平の歌に比しおは深淺高卑、是れ亦た雲壤

○高き屋に登りて見れは烟立つ

「高き屋に登りて見れば煙立つ民のかまどは賑ひにけり」の歌は人皆おゑ仁德帝の御製の如く思ひ後世の史傳にも左こう記すれ、然れども或説には後人が帝の盛德を咏せしものとす、此説當れるゑ近し、尤も帝は咏歌に長じ玉ふ御方ゑて日本記に記する所の御製其數幾何なるを知らず然るも帝か炊烟を望み玉ふの條には是歌おし、全体同書は、記せずもがおと思ふ事柄の御製すらも幾んど落ちおく記載せり、例せゞ或る女子を幸せんとする時の御製、又は八田の皇女を宮中に入れんとし皇后の怨を和らけ玉ふ御咏、若しくは皇后を離宮に退ひ行き玉ふときの御咏おんど皆おゑ漏らさず記載せり、然るゑ民を撫愛し玉ふ御心の御製を載せ洩らすべき理ありとは思はれず、後人か帝を咏せし作たるや疑おし

○古歌の妙

支那にても古詩は朴野ゑして眞情の溢るゝもの多く、後世の詩ほど潤飾勝ちて實情少きの嘆あり、和歌も亦た然るゑ似たり、赤人、人麿、おんどの作は飾りもおく艶もなき如く見ゑて其間に言ふ可らざるの情思あり、試に左の人

「有明の月」又た「哀れ知る人に見せばや山里の秋の夜深き有明の月」おど云へる句を吟誦しても有明の月の如何ゑうち哀しきものおる乎を知るゑ足らん、殘月ゑ對して子規を聞く、歌の心も思ひ遣られて哀れおり、然るを唯だ「一聲は月が鳴いたか子規」と咏し去らは初夜の聲は月が鳴いたか子規」と咏し去らは初夜の月やら殘夜の月やら更らに分らず、差昇る月乎、天に中したる月乎、將た山の端ゑ隱れんとする月乎、意味の不足甚だし

蓋し此歌は夏曉早發の征人が殘月を見たる心を述へし乎、否らざれば、情人が別れを惜み曉方に立出てたる心を述へし乎、此の二者を出てし、きぬ〳〵の別れに袂を絞て立ち出れば夜は白々と明け離れんとし光り微かなる有明の月ぞ殘れる復た相見ゑは何れの時ぞと悵然として名殘り惜しげに見やりたるとき、子規の聲聞かんに誰か腸を斷たさらん、斯く想像すれは或は戀歌の類にもあるへき乎、「一聲は月か鳴いたか子規」の句は唯だ機轉の利きたるのみ、餘情の掬す可きなし

○四伯

余の親しく其人に接せし所を以て、伊藤、大隈、板垣、井上、の四伯を評せんに、伊藤伯に著しき事稍や調ふを得たりと、西鄕、木戸兩氏は當時伯ゑ著しきは量おり、板垣伯に著しきは誠おに足る、余は詳しく當時の顚末を翁に聞き質か、井上伯ゑ著しきは銳おり、

○松菊翁

余は木戸松菊翁を知るに及べり、君は士に接する極めて愛想よき人おりき、初見のとき余は翁に向て國事を論ずる所あり、論止て翁、余の齡を問ふ其答を聞き笑て曰く余か世間ゑ奔走を始めたるも方さに君と同齡おりき、當時天下の事は恰も一轉を來たし、薩摩の老公幽閉せられ、其他一二勤王の雄藩主亦た隱居を命せられ志士蜂起する者多き年おりきと又坂本龍馬の周旋に依り薩長聯合せし顚末を語て曰く、始め西鄕、坂本、及び余等相會したり、爾時余も西鄕も互に自藩の事ゑ說及はさす睨合の姿ゑて此會は其儘に散したり、坂本來て余を責めて曰く今や二雄藩の聯合に依て天下の大勢將さに定ちんとす、是れ國家の重事おらすや然るに君等兩人とも一言の此事に及はさるは何ぞやと余答て曰く今や長藩は幕府と敵を爲す其の安危存亡薩藩に同しからす然るに我より求て語を發せゞ助を乞ふに似たり假令ひ自ら愛ますとも長藩の名譽を如何せんと坂本氏釋然として過ちを謝し、又た去て西鄕に說き遂に再會を催すに至り第二會を以て事稍や調ふを得たりと、西鄕木戸兩氏は當時薩長の兩雄おり其の會合は天下の大勢を移す

丸の歌を吟じ見よ

近江路の野島か崎の濱風ゑ
妹が結びし紐吹き翻す

潮風さつと吹來て我か征衫を吹き揚く此の紐おゑ家を立出るとき、無事で、まめで、と我が情婦が結びくれしものをと、忽ち家を憶ひ起おす、其情の深きおと如何ん、

又赤人の左の歌を吟じ見よ

秋風の寒きあしたに佐野の岡
越もらん君に衣かさまじを

親友、征途に在りさぞや今頃ハ彼處まで行きたるおらん我力の及ふものおらゞ幾重の衣を貸して寒を防きやりたしと、其の友情言外ゑ溢る、是も或は戀歌にやあらむ

○月が啼たか時鳥

「一聲は月が鳴ひたか時鳥」の句は「時鳥鳴きつる方を眺ひれゞたゞ有明の月ぞ殘れる」の意味を十七字の中ゑ込めて又た餘蘊おしとは一般の世評なるか如し然れども能く〳〵玩味すれゞ決して然らす、發句の方は歌の大切なる意味を言ひ洩らせり「有明の月」おる一語は此歌の大眼目おり發句の方には之を欠く、曉方の月、光り微かゑ、人も猶ほ起出す、物色荒涼、人をして心を傷ましむるの時ゑ當り杜宇一聲、鳴き渡るを聞ておそ無言の趣もあれ、

「しらみ行く空の光りに影さえて姿はかりぞ有明の月」

「月が啼たか時鳥」

「月に啼たか杜鵑」

「有明の月」

れり女學雜誌記者は風流ゑ同じく

記者は斯くすれは成程妙なりと

一聲は月に啼たか杜鵑
一聲は月が。

一聲は月が鳴ひたか時鳥
一聲は月が。

一聲、鳴き渡るを聞ておそ無言の趣もあれ、

かさりしを慨む

翁、余に對して問ふ所あり乃ち苦て曰く、今日の急務、日本人をして日本國の有所を知らしむるに在り、封建の制、人心に入ると深し一朝、之を廢して郡縣とす、其狀、恰も一戶の墻垣を徹して全村を一家とおせしが似たり人民の眼には其力を致す可き境界甚だ廣きに過ぎ國の所在を見失ひたる姿あり、彼等は愛國の心切なりと雖とも其の愛する國の境域俄然廣漠に變したるに當惑す、今日の務、須らく先つ一郡の民をして一郡あるを知らしめ、一縣の民をして一縣あるを知らしめ、一國の民をして一國あるを知らしむるに在るへしと、翁之を首肯す（此說は今日あれば地方自治の制とも約言すべき乎）翁、余に示すに一篇の論を以て す事皆お當時の政を論するものありき

翁又た語て曰く維新の業は思ふよりも容易なりしが爲め、爾後の政令動もすれは輕忽に失す若し維新以後の重もおる布告法律か人民に及はせし所の利害を研究せば大に當路者を戒しむるゑ足らん、君夫れ之を論述するに意あきやと余曰く之れ容易の業に非ず、然れとも幸に閑を得ば事ゑ之ゑ從はんと、余か東歸の後、幾くもおくして翁、西京ゑ沒す

○南洲翁

余は南洲西鄕翁を知らざるを慨みとす、翁は偉人あり其の事必ず傳ふるゑ足るもの多からん、翁の行狀か一種異常なるは求て奇を爲すお出る乎、將た天然お發する乎、其邊も知り度き心地す、之を聞く、翁は人と會食するゑ當り己れの菜肴既に盡きて他人の菜羹猶ほ存するを見れは往〻横さまに之を攻擊せりと、翁は明眸、皓齒、の德ゑ甚だ淡き人おるか如し然れとも維新の前後、兵馬、倥偬、諸名士の身は朝、夕を計らざるの時ゑ富ては人皆お細行を顧るに遑あらすして豪放を尊ぶ、翁の西京ゑ在るや又た一侍媼ありしに其の容姿甚だ婀娜ゑ上り、演說の覺書を財布の中より取出せり（財布と共にクル〳〵と卷きありしも〻）財布の紐を解き書付を取出すに及で囊中の銅錢チヤラ〳〵チヤラ〳〵と高く音す、先生笑ひおがら獨語して曰く「錢が鳴ります」と余は覺へず失笑せり、先生は無頓着の人あり先生の今の居宅を建築するときありしと覺ゆ、余一日先生を訪ひ居間に案內せらる、打通りあり、八九年前の事おりき、何れの會ふかありけん先生、多衆に向て演說するとあり、先生演臺ゑ在るや又た一侍媼ありしに其の容姿甚だ婀娜ゑ上り、演說の覺書を財布の中より取出せり（財布と共にクル〳〵と卷きありしも〻）財布の紐を解き書付を取出すに及で囊中の銅錢チヤラ〳〵チヤラ〳〵と高く音す、先生笑ひおがら獨語して曰く「錢が鳴ります」と余は覺へず失笑せり、先生は無頓着の人あり

是は後藤伯の話なりしと覺ゆ

○福澤先生

先生の物に頓着せぬは往〻人の知るとおろ

見れば先生と大工と問答最中おり、大工曰くあれほど立派ゑ出來せしとおれば可成く其儘ゑ据置かれんとを冀ふと先生曰く否お廐樣の（先生の舊藩主昌邁君の家此時、義塾の地內に在りき）御玄關すら萱下げ屋根おり然るに余の家に斯る宏大なる破風屋根の玄關は宜しからす、氣毒おがら萱下げ屋根に改めくれよと、既ゑ出來せしものを取毀つの情けおき苦情を大工は頻ゑ述立て居たりき、其後ち程經て行き見れば果して破風屋根を取毀して萱下げ屋根におり居れり、先生の社會上ゑ於ける地位德望を以て破風屋根の玄關ゑ何かあらん、然るに自ら裁抑する斯の如し

○言語動作

天分、高き人は人に接するの際、言語動作、如何ほど打ちくつろぎても何處か品位打上て臭しからぬ所あり、又抱負の大おる人は人ゑ接するの際、如何ゑ從容として圭角おきも其の品位賤しからず見も、夫の胸中無一物にして當面のみ容体振る人物は之れ論外おり、又其の屬僚抔ゑ對して常ゑ容体ふるゑと癖と爲り他人ゑ對しても此風を脫せざる者ゑ至ては最も論外おり

○損得

在朝高官の人は已れの顯榮おる地位ゑ對し自然と物事を愼むの場合多し是れ一得おり、在

野の人には此の制裁おし自ら期すると大に、自ら持すると嚴なるに非るよりは言語動作自然と放縱氣儘ゑ失す、之れ一損おり

○才子の稱

余は少時より才子と褒めらるゝを喜びず人の爲めにも亦た之を好まず、通例世上にて才子と稱せらるゝ者を見るゑ輕俊にして重厚おらさる者多きを惡めはおり余の年十一二の頃より大父君常に古人の語を誦して曰く「才、其の德に勝つものは小人おり」と爾來常に才子の稱に慄骨す、余は好で袁隨園の詩を誦す、然れども其人と爲りを測んす、同人の集中に動もすれば自家大才子の稱あるゑ得〻たるの口氣あればおり

○月落烏啼

楓橋夜泊「月落烏啼霜滿天」の詩、人口に膾炙するは獨り我國のみおらず支那に於ても亦た然り、然處、詩の意味、分明おらず、殘夜の景かと想へバ夜半の鐘聲と云ひ、夜半かと想へば月落烏啼と云ふ、人皆お解するゑ惑ふ、故に或は夜半鐘を以て寒山寺の鐘の名と强辨するあり、或は後半を以て夜來の景を想像とおすあり、何れも皆お穩當おらず、宋の六一居士は政治文學に於て當代に推されたる大家おり嘗て居士の雜著を讀ひゑ亦た此の詩の夜半鐘聲を解す可らずと爲せり、居士を以て猶ほ且つ然り、强て解するを要せず、凡そ詩の理を以て解し難きものは皆お惡詩とす、此詩の如きは其の夜半と殘夜との兩景、相ひ撞着するのみならず「紅楓漁火對愁眠」の如きも亦た躬せり、獨り蓬窓に倚て打眺めたるとき漁火の水上ゑ點〻するは左るとおがら夜中に紅楓の色が見ゆ可き筈おし、夜景としては紅楓の字甚だ中らず、是等の點を指摘するも亦た最上の作にあらじ、詩人は何と辨ずるゑや

○雲耶山耶

前詩ゑ次き我國にて人口ゑ膾炙するものを山陽の天草泊舟「雲耶山耶呉耶越」の詩とす、翁の詩は一氣呵成、雄渾おして刻苦彫刻の跡お きもの多し、此作の如きも亦た然り、日本の作家にも好詩おきゑあらねども多くは皆お苦で絞り出したるが如き態あるを免れず、獨り翁は然らず是れ其の推服すへき所、此の句句、批難す可きものおしと雖ども獨り「烟橫芳草日漸沒」の芳草の二字、夜泊の詩に似はしからず、假令へ晚烟が陸地を込め平遠渺茫たるにせよ芳草の字はチト細ゑ過ると無き乎、詩家の評を聞きたし

○邊將無功吏不能

和漢の詩人或は宋詩を賤しむものあれども、余の如きは唯だ自家の意に稱ふものを喜ふ、六朝唐宋明清の時代ゑ論おし、宋詩中にて余が愛する絕句の一を左の詩とす

桑麻弗擾稔常登、邊將無功吏不能、四十二年如夢覺、春風吹淚過昭陵

昭陵は蓋し仁宗の廟おり、仁宗在位の間を宋に於て最も太平殷富の時とす、蓋し熙寧、元豐に至り天下多事と爲るに及ひ或人、仁宗の盛時を追憶し其陵を過きしときの作と見ゆ、詩中「桑麻弗擾稔常登」の句は天下の無事、百姓の安樂、を形容するに珍しからず、然れども「邊將無功吏不能」の一句ゑ至ては多く類おるを見す、一言を以て幾んと治亂の機を道破し盡くせり、文臣の能に過き、武臣の功ゑ過ぐる古より亂階を爲さゝるものおし、詩の旨、深ひかおる

又左の詩をも愛誦す

越黃籐紙打殘碑、總是先王御製詩、白髮內人吞淚讀、爲嘗親見寫詩時

此詩は蓋し宋、南渡の後ち王室の式微を悲みし詩人の作おらん、一讀凄怨人をして嗚咽せしひるに足る

○數箭痕

年少の時好て壯語を誦す、左の一首は其の一おり

下馬同傾酒一樽、侍兒匕首擘燕豚、平生不着黃金甲、醉袒貂裘數箭痕

健兒の意氣、眼前に躍如たるにあらずや

○湖上秋信

嘗て成島柳北氏に問ふ我國近時の作家中、何人の詩を可とするやと、氏、星巖の湖上初秋の詩を以て答ふ、今ま其の後半を記す、曰く

湖上秋信來容易、一片青蘆葉上風、
殘暑尚ほ退さかねしとき湖邊の青蘆か一葉二葉ヒラ〳〵と微風に動くは如何にも早く秋氣の來るを報ずるに似たり、流石が星巖は詩趣を得たり

○符合

去る二十六日の紙上、信長の條に「饅頭を太刀に貫き喰はしめ」とせしは「稠人廣坐の中にて此男は人の出來ぬ事、三個條を爲せり將軍を弑し、三好氏に叛き云々と罵り辱めし」の誤なり、饅頭の事は荒木村重ありしをフト彼此誤り記せり

○正誤

清らかに苦つきたるを見る毎とに常に左の句を憶起す

城中寸土如寸金、幽軒種竹唯三樣、
是れ七百年前の詩なり

○前後別人の如し

意氣激揚、光焰天に冲るの勢あるときは、壯語乃ち口を衝て出づ、心平に氣和するに及では又た趣を異にす、同一人の作として前後のものを對照すれば幾んと別人の手に出づるが如きあり、支那古人の詩に於て動もすれは此の相違あるを見、心窃かに怪みたりしが今は顧て已れ自から、亦た此の如き態あるを覺ふ、一笑に足る

凡々客愁不得眠、孤燈明滅雨蕭然、夜半時有關心事、蹶起讀來財政篇

之れ余が十五年前の作なり、又た左の古詩一篇あり

讀書粗知政理眞、素心偏冀庶政新、不辭刀鋸與鼎鑊、半生甘受幾酸辛、讀書粗知名節重、豈以窮達恥此身、千古常多傷心事、男兒何必說沈淪、人生讀書難始、告君勿爲讀書人

之れ亦た九年前の作なり、當時の意氣、想ふ可し、若し今日自から証するに非んば、人將た誰か龍溪居士の舊作なるを信せんや、今は乃ち客氣全く銷し、壯心既に灰す、自から恬澹和平の地に達せしと云ふ能はざるも亦た稍や之を近つきたるを覺ふ、舊時を追憶すれは恍として夢の如し今春我縣直入郡竹田の淸谿を渡りしとき十年前の意氣慷慨を思ひ一絕を口占す其の後半に曰く

笑臨淸溪鑑衰影、似否當年慨世人

の今日の景を踐ふ程とも能く似たり

同區、日本橋區、神田櫛比し邸内の空地に三四坪の小庭あり、其の狹きを然り、其の狹きを植へ庭上一面

○信長の性行

世人動もすれは信長を暴惡無道の人物と評すれとも夫程とはあらす、其失、唯、惡を憎むの甚しきに在り、天性本と豪放にて率意の行ひ多きに、惡を憎むの甚しきを以てす是評を免れ難き所以なり、然れとも信長か不法の虐待を爲せし相手を見るに皆な失行敗倫の人物のみなり、素直なる人物に對しては虐遇の跡を見す、太刀の先きに饅頭を貫き松永久秀に食はせたるは亂暴に相違なし而れとも久秀は其の主君たる將軍を弑せし惡事あり、又た光秀の頭を打擲せしも亂暴に相違なし而れとも光秀は其母を敵に人質とし看す〳〵虐殺せらるゝを顧みさりし惡事あり、盡し信長は功の爲に久秀、光秀を餘義なく優遇せしと雖とも之を憎の心、平生絕へさりしならん、二人に對し亂暴を働くの源、茲に在り、若し信長をして分疏せしめは其の行狀には皆な夫れ〳〵充分の申譯けあるならん、唯、其の所爲過度なるのみ、信長亦た人君の量なし、假令ひ光秀無らしむるも亦た他の光秀ありしならん到底、終を不幸にして信長は率意の所行、最初より甘く中りばかりせり、故に人世の險を知り悉くさゝる所あり、若し頼朝の如き流人の境より起歩せしめは斯の如きに至らじ

○光秀の性質

光秀には本來優しき性質チラチラと見ゆ、家康抔に仕へしめは純臣の一たりしならん、倫理を辨するの心なきにあらす、利害を判するの明なきにあらす、得失を知るの智なきにあらす而て千歲教逆の人と爲りし還原は、年齡晩暮にして功名心燒ゆるか如きに在り、柴田、滝川、羽柴の諸將は續々各地に功勳を樹つ已れ三丹地方を略平せされは面目の人に對するなしと氣急きたるより、母を質として敵を欺くの計に出つ、一たひ最親の母に忍ふ又何そ君に忍ひん、光秀か丹波口を出征せし時は已に五十以上の齡なり

○頼朝、義經

信長の率意を五部以下に減し、信長の度量を五部以上に增したる者を頼朝とす、二人とも同一流の人物、

義經も小信長なり、世人の想ふ如く、すらりとせし人物にあらす、銳猛率意の事頗る多し義朝の子と云ふへし（年齡廿七八の血氣盛りなるもいはもあらん）但し戰鬪に至ては無双なり、其の最も人を驚かすは、三百に滿たぬ手兵を以て慓悍項羽に似たる義仲の統率する精兵八百を鴨河原に衝きしときに在り、之を義經の目覺ましき正戰とす、屋島、鵯越皆な奇戰

○菅公、時平

菅亟相道眞は五十歲以上の老儒碩德なり左大臣時平は廿六七歲の少年なり、其の相ひ傾るに力あるやに人皆な時平の畧を優れりとす此人藝能あり和漢の書に通す、然れとも菅公の敵にあらさるなり、公は一儒生を以て身を起し、門地の人皆な反目す、假令ひ時平なしとも勢ひ免るゝと能はす、當時は公侯卿相以下一切門地の政なり一人の力焉を能く大厦の傾くを支へん、公の勇退せさる實に千古の遺憾、然れとも公をして富貴榮に終らしめは恐くは今日の名あるを得す、得喪判し難し

余は始め思ふ後人か時平を惡人の如く云ひ傲すは過酷なり其過ち菅公を傾るに在りと雖とも是れ當時の門地家を代表せしに過きすと後ち雜書を讀て始て其の失德の人なるを知れり、此人嘗て叔父の妻を寡奪す、

支那にも太子冊立の事、古今、動もすれい大臣調禰の源と爲る、菅公の左遷亦た此の事に依るに似たり、延喜帝は盛德の主なり、菅公何の爲に之を立る尙早と云ひし乎事解すへからす、貶謫の禍、實に此に根す

○人物の多少

日本の人物、源平時代に比すれは南北朝に多しとす、南北朝にすれは元德天正慶長に多しとす、五十年百年の後代より顧みなば、維新以後今日を以て蓋し人物最多の時代と爲さん、權勢爭奪の外に國家民人を以て念とするの人物は實に前代よりも維新前後今時を多しとす、此言或は强ひさるなり

○比喩（ハーブル）

古代は人心尙ほ稚なり、込み入たる理屈を論するより手短かなるハーブル（比喩）を用ふるに利ありと見へ、比喩の用は古に多くして今に少し、古羅馬の說客が胃腑五体の比喩の如き、支那の轍鮒の比喩の如き其の有名なる者なり、凡そ人其心中に利害を疑ふに當り、恰當にして動かす可らざるの比喩に遇ふときは理義釋然として貫通す、比喩の用、亦大なり余も嘗て人に說くが爲め、自から比喩を作りしと二度あり左の如し

○雀と鐘

一日、雀あり鐘樓に來り遊ぶ、囀り鳴くと得意あり、寺僧來て鐘を撞く、ゴーン一聲、響き遠邇に振ふ、雀驚て聲なし、僧去り鐘聲已む、雀囀ると喋々たり、遙に鐘に謂て曰く子の聲は大なりと雖とも人を待て而て後に鳴る、豈に余の聲の小と雖とも隨意に自ら發するに如かんやと

○樹と草

蠶々として雲を凌く老樹あり之を睹て草、生ひたり、一日樵夫來て樹を伐り薪とす、草笑ふて曰く大なるもの顚ち禍ありと頃刻にして牧童至る牛、忽ち草を嚙て盡す

○東洋西洋

西洋には比喩を集めて一書をなすものあり其

鍵兒の意氣、眼前に躍如たるにあらずや

○湖上秋信

曾て成島柳北氏に問ふ我國近時の作家中、何人の詩を可とするやと、氏、星巖の湖上初秋の詩を以て答ふ、今ま其の後半を記す、曰く

湖上秋信來容易、一片青蘆葉上風、
殘暑尚ほ退さかねしとき湖邊の青蘆か一葉二葉ヒラ〳〵と微風に動くは如何ゐも早く秋氣の來るを報ずるに似たり、流石が星巖は詩趣を得たり

○符合

幾百年の前に古人は早く我〻の今日の景を陳し置きたるには非ずやと思ふ程とゐ能く似たる事柄多し、東京府下の京橋區、日本橋區、神田區の如く地價貴くして家屋櫛比し邸内の空地と云ふべきものは唯た椽前に三四坪の小庭ゐるのみ鉦商豪戸と雖ども亦た然り、其の狹き庭に二三株の竹若しくは松杯を植へ庭上一面清らかに苔つきたるを見る毎とに常に左の句を憶起す

城中寸土如寸金、幽軒種竹唯三椽、
是れ七百年前の詩なり

○前後別人の如し

意氣激揚、光焰天に冲るの勢ゐるときは、壯語乃ち口を衝て出づ、心平に氣和するに及では又た趣を異にす、同一人の作として前後のものを對照すれば幾んと別人の手に出づるが如きあり、支那古人の詩に於て動もすれは此の相違ゐるを見、心窃かに怪みたりしが今は顧て已れ自から、亦た此の如き態ゐるを覺ふ、一笑に足る

兀々客愁不得眠、孤燈明滅雨蕭然、夜半時
有關心事、蹶起讀來財政篇

之れ余が十五年前の作なり、又た左の古詩一篇あり

讀書粗知政理眞、素心偏冀庶政新、不辭刀鋸與鼎鑊、半生甘受幾酸辛、讀書粗知名節重、豈以鶚逢恥此身、千古常多傷心事、男兒何必說沈淪、人生讀書難始、告君勿爲讀書人

之れ亦た八九年前の作なり、當時の意氣、想ふ可し、若し今日自から証するに非んば、人將た誰か龍溪居士の舊作ゐるを信せんや、今は乃ち客氣全く銷し、壯心既に灰す、自から恬澹和平の地に達せしと云ふ能はざるも亦た稍や之を近つきたるを覺ふ、舊時を追憶すれは恍として夢の如し今春我縣直入郡竹田の清谿を渡りしとき十年前の意氣慷慨を思ひ一絶を口占す其の後半に曰く

笑臨清溪鑑衰影、似否當年慨世人

○信長の性行

世人動もすれは信長を暴惡無道の人物と評すれとも夫程ゐはあらず、其失、唯、惡を憎むの甚しきゐ在り、天性本と豪放ゐて率意の行ひ多きに、惡を憎むの甚しきを以てす是評を免れ難き所以なり、然れとも信長か不法の虐待を爲せし相手を見るゐ皆ゐ失行敗倫の人物のみゐり、素直ゐる人物に對しては虐遇の跡を見す、太刀の先きゐ饅頭を背き松永久秀ゐ食はせたるは亂暴ゐ相違なし而れとも久秀は其の主君たる將軍を弑せし惡事ゐり、又た光秀の頭を打擲せしも亂暴に相違ゐし而れとも光秀は其母を敵に人質とし看す〳〵虐殺せらるゝを顧みさりし惡事ゐり、盡し信長は功の爲に久秀、光秀を餘義ゐく優遇せしと雖とも之を憎の心、平生絶へさりしゐらん、二人ゐ對し亂暴を働らくの源、茲ゐ在り、若し信長をして分疏せしめは其の行狀ゐは皆ゐ夫れ〳〵充分の申譯けゐるゐらん、唯、其の所爲過度ゐるのみ、信長亦た人君の量ゐし、假令ひ光秀無らしむるも亦た他の光秀ゐりしゐらん到底、終を不幸にして信長は率意の所行、最初より甘く中りばかりせり、故ゐ人世の險を知り悉くさゝる所ゐり、若し頼朝の如き流人の境より起歩せしめは斯の如きに至らじ

○光秀の性質

光秀ゐは本來優しき性質チラチラと見ゆ、家康抔ゐ仕へしめは純臣の一たりしゐらん、倫理を辨するの心ゐきにゐらず、利害を判するの明ゐきにゐらず、得失を知るの智ゐきゐゐらす而て千歳教逆の人と爲りし還原は、年齢晩暮にして功名心燒ゆるか如きゐ在り、柴田、滝川、羽柴の諸將は續々各地ゐ功動を樹つ已れ三丹地方を略平せされは面目の人ゐ對するゐしと氣急きたるより、母を質として敵を欺くの計ゐ出つ、一たひ最親の母ゐ忍ふ又何そ君に忍ひん、光秀か丹波口を出征せし時は已ゐ五十以上の齢ゐり

○頼朝、義經

信長の率意を五部以下に減し、信長の度量を五部以上ゐ增したる者を頼朝とす、二人とも同一流の人物、

義經も小信長ゐり、世人の想ふ如く、すらりとせし人物にゐらす、鋭猛率意の事頗る多し義朝の子と云ふへし（年齢廿七八の血氣盛りゐるもゐるもゐらん）但し戰鬪に至ては無双ゐり、其の最も人を驚かすは、三百ゐ滿たぬ手兵を以て慓悍項羽に似たる義仲の統率する精兵八百を鴨河原ゐ衝きしときゐ在り、之を義經の目覺ましき正職とす、屋島、鵯越皆ゐ奇職

○菅公、時平

菅亟相道眞は五十歳以上の老儒碩德ゐり左大臣時平は廿六七歳の少年なり、其の相ひ傾るに力ゐるゐや人皆ゐ時平の器を優れりとす此人藝能ゐり和漢の書に通す、然れとも菅公の敵にゐらさるゐり、公は一儒生を以て身を起し、門地の人皆ゐ反目す、假令ひ時平なしとも勢ひ免るゝと能はす、當時は公侯卿相以下一切門地の政ゐり一人の力馮を能く大厦の傾くを支へん、公の勇退せさる實ゐ千古の遺憾、然れとも公をして富貴榮に終らしめは恐くは今日の名ゐるを得す、得喪判し難し

余は始め思ふ後人か時平を惡人の如く云ひ傲すは過酷ゐり其過ち菅公を傾るに在りと雖とも是れ當時の門地家を代表せしに過きすと後ち雜書を讀て始て其の失德の人ゐるを知れり、此人嘗て叔父の妻を寡奪す、支那ゐも太子冊立の事、古今、動もすれい大臣調禰の源と爲る、菅公の左遷亦た此の事に依るゐ似たり、延喜帝は盛德の主ゐり、菅公何の爲ゐ之を立る尚早と云ひし乎事解すへからす吃驚の禍、實に此に根す

○人物の多少

日本の人物、源平時代ゐ比すれは南北朝に多しとす、南北朝にすれは元亀天正慶長に多しとす、五十年百年の後代より顧みゐば、維新以後今日を以て蓋し人物最多の時代と爲さん、權勢爭奪の外に國家民人を以て念とするの人物は實に前代よりも維新前後今時を多しとす

○比喩（ハーブル）

古代は人心尚ほ稚ゐり、込み入たる理屈を論するより手短かゐるハーブル（比喩）を用ふるに利ゐりと見へ、比喩の用は古に多くして今ゐ少し、古羅馬の說客が胃腑五体の比喩の如き、支那の輸鮪の比喩の如き其の有名ゐる者ゐり、凡ろ人其心中に利害を疑ふに當り、恰當ゐして動かす可らざるの比喩に遇ふときは理義釋然として貫通す、比喩の用、亦大ゐり余も嘗て人に說くが爲め、自から比喩を作りしと二度ゐり左の如し

○雀と鐘

一日、雀ゐり鐘樓に來り遊ぶ、囀り鳴くと得意ゐり、寺僧來て鐘を撞く、ゴーン一聲、響き遠邇ゐ振ふ、雀驚て聲ゐし、僧去り鐘聲已む、雀囀ると喋々たり、遙ゐ鐘に謂て曰く子の聲は大ゐりと雖とも人を待て而て後に鳴る、豈ゐ余の聲の小と雖とも隨意に自ら發するに如かんやと

○樹と草

蠶々として雲を凌く老樹ゐり之を隔て草、生ひたり、一日樵夫來て樹を伐り薪とゐす、草笑ふて曰く大なるもの輙ち禍ゐりと頃刻ゐして牧童至る牛、忽ち草を嚙て盡す

○東洋西洋

西洋には比喩を集めて一書をゐすものゐり其

の有名なる「イソープ」之れあり、和漢には未だ此集あし慢む可しとす、支那の書にて（フハーブル）を主とするものを莊子とす、比喩幾んと全篇の半に居る、韓非子よも時として比喩に類する物語あり、日本あは此類甚だ少し、東西の比喩、相ひ似たるものを比較するよ西洋の方、深刻あり、例せゞ東洋にては「胡越も舟を同くすれば相救ふ」と言ふ、然るに「イソープ」は則ち曰ふ、昔し二人の敵、同舟して海を渡る、颶風よ遇ふ舟將に覆らんとす、二人與よ心よ謂ふ、我の死するは憾むに足らず唯だ彼の我より先きよ死せんとを欲すと、浮世の人情恰も之に類するなきに非ずと雖も、何ぞ其言の深刻あるや、西洋の情に濃やかある所、東洋に過きたり其の深刻ある所亦た東洋よ過きたり

○女神鼓瑟

仙境談に於ては支那、歐、相ひ似たるもの少あからす、支那の湖江には女神あり（舜の妃か）水清く山幽あるとき時に江上に現れて瑟を鼓すと云ふ是れ詩人か「曲終人不見、江上數峯青」の所ある所以あり、又日耳曼の來因河に女神あり善く琴を鼓す、江上人あく月明なる夜は時として清絶の琴音を聞くと云ふ、是れよ附けて種々の物語起る

○仙境談

西洋の仙境談は本と年少兒女を喜ばしひるが爲めよ起りしものと雖ども間ま幽婉にして支那の騷に類するものあり「ジョッフス」物語の前半の如きは幾んと賦所に入る可し、左よ略抄す

早曉清爽、歩して後苑よ入る滿園の芥子花、露を含て人よ笑ひ人生夢の如し何ぞ此花の開落に異あらんと坐ろに閑愁を生するの際、一胡蝶の翩々然として來り戯るあり花は微風に輕動し蝶は止まらんと欲て止り得す、漸くよして花蕊に棲む、乃ち戯れよ帽を脱して之を掩ふ、捕へんと欲して開き見れは芥子花中、婉然たる絶美の一佳人を見る、驚て飛却すると數歩、佳人、花を下り來る、一笑嫣然人を惱殺す、其の來所を怪むを忘れしめたり、相ひ語り相ひ遊ふ後ち佳人辞し去て迹あし、是より恍惚夢寐に存して晝夜忘るゝと能はず、常よ獨り後苑を彷徨して去らす幾んど喪心の人に似たり、一日蝶あり又飛び來て花上に止る、忽ち前日の事を想起し、帽を以て之を蔽ふ美人又た花上に現れる、其の久濶を恨み互よ怨思を叙す、或は與に花を摘み或は與に哥を唱ふ、手を携て樹陰を逍遙す、美人悄然として別を告げ將さよ去らんとして曰く、二人綢繆の情を遂げんと欲せば妾能く君を伴はん、君夫れ相隨ふを能くせんや否やと言終て羅襪飄然波を凌て水を歩すると數十歩、遙よ蓮葉の上よ立て曰く我今數を呼で三よ及ばんとす、其數に及はゞ、請ふ君足を擧て岸を離れよと、乃ち數を呼ぶと三たひ、其の遂に躊躇して來り肯せさるを見るや涙を含て曰く君猶は塵緣ありと明眸秋波を寄せ恨めしげに凝視すると瞬時、忽然消て跡あし

此の物語は後半遂よ妖よ歸し、趣を失すと雖ども、其の意想幾んと塵境の外よ出づ、蓋し此の物語は小亞細亞より西歐よ入りしものよして其源を印度波斯の文學に發せしあり

○世界の文學

「アラビアン、ナイト」の如きも皆あ小亞細亞地方回教文學の所產あり、事本とより神怪荒誕に類すと雖も奇想、漂渺として捕捉す可らさるの妙あり木馬、空を飛ひ千里ゟ走るの類、幾んど常想を以て測る可らさる物語多し想ふよ此書の原文は絶妙のものあらん、西歐人の譯よ入るよ及て遂ゟ賦所の体を失し尋常の小說体よ墮落せしものと思はる、回教文學の諸書未た我國に譯出せられざるは遺憾と云ふ可し、世界の文學を四種とす一は支那文學、二は印度文學、三は回教文學、四は西歐文學あり、印度の詩歌類未た我國に傳らす況んや回教文學をや、我國の文學家、此の四種を渉獵し盡すよ非ざれば未た世界の文趣を窮めたるものと云ふ可らす、我國の學士に「アラビック、リテラチュール」の專門家あきは文學界の一大缺點と云て可あり

○附言

天草の詩、少時より吟誦して芳草とのみ記し居り山陽遺稿を閲するの暇あく記載せしよ一昨日來、諸友人、正誤の書を寄せらるもの十餘通、深く記者の粗鹵を慚つ以後注意すへし、想起錄は其日〻〻に思出し次第よ筆記するを以て一々書史を取調るゟ遑あらす、是か爲め詩歌には「テニチハ」或は一字二字の誤脱もあるへし又月日年代少々の誤りあきに限らす又議論にも謬見多からん、心附かれし諸君、幸よ誨る所あらは獨り余の幸のみにあらす兼て世人を利する所あるへし

筆者識

○三宅雄二郎君の寄書

想起錄松菊翁一段に就ての異聞

坂本氏薩長の聯合を謀り西鄕氏に說き木戸氏に說けり木戸氏乃ち薩よ赴けり居ること二十日許り坂本氏訪て言ふ如何んと木戸氏曰く優待厚遇實よ到らざる無けれども未た一言の聯合に及ひたるを聞かす惟ふに我より求めざれは彼れ遂に事を議せざるへきか我より求むるは可あり然れとも長が疲弊の餘を以て幕府に抗抵せるは素と已を得さるに出てしのみ今よして歩を讓て聯合を乞はゝ卑怯の謗を天下に受けん薩は形勝の地よ據て雄藩の實を擧く聯合を唱ふるも寧ろ弱を救ふの名あらん我豈に求むへけんやと坂本氏以て西鄕氏に告け事を調ふを得たり

○山下重民君の寄書

朝顏の歌よ就て龍溪君に寄す

古人已に朝顏を詠し置れたり

後水尾院御製

朝かはは あさあ〳〵よ咲かへて
盛り久しき花よそありける

又駿臺雜話よ有名ある歌あり

あさかほの花一ときも千とせ經る
松にかはらぬたゝろともかな

されは前の御製と意稍や異なれとも甚た面白く存候此兩詠は御起稿の際思ひ出されざりしなれと覺ゆ御緒言の趣旨に基き不願失敬此段申上候頓首

○山田松濤君の寄書

近江路の野島の崎の濱風よ
妹が結ひし紐吹き纐す

潮風がさつと吹き來て我征衫を吹き揚く此紐ころ家を立ち出るとき我情緯か結ひくれしものをと」ゟの解にては妹か結ひし紐」の句は典故よ入すしていと味ひ足らぬ心地す妹か結ひし紐には古きゟわれくさ〳〵あれとこの歌は我妹子がしぬびにせよとつけし紐、いかにあるとも我はとかじとよ」の古歌より轉化し來るものあれは右の歌を前段よ解し來て然して後段先生の解を下さは紆餘曲折にして一段の妙味を覺もるに非すや

記者曰く想起錄を賞する高什を惠まるゝ諸君勘からす深く厚意を謝す追ては取集め記載致す心得あり

○月落烏啼の解に付

左の寄書あり

本鄕　無名氏

楓橋夜泊の詩の難解たるは古今同一般あり而して余曾て白石照山先生（中津の人）五岳翁をして楓橋夜泊の圖を作らしめ自ら之よ題するの詩を見る大よ了讀し得たり今因よ其詩を記して之を寄す

題楓橋夜泊圖

月落烏啼天未明。寒山半夜報鐘聲
蓬窓不記望前夕。誤認三更爲五更

駒込　渡邊君

姑蘇城外の寒山寺は遙遠あるか故に夜半に出立發足せし鐘聲が今客船に到達せしかと云意にて城外寒山寺の遠きと等を云あらはせしものあらすや所謂鐘聲をPersonificationせしものあらすや鐘の音もコール云〻の俳句抔も參考すべきものと被存候

月落烏啼の寄書

日本橋區　山本君

朝霧漸々はれて寒山寺は曉靄の間ゟ露出せり嗚呼あれは寒山寺でありし歟然らば昨夜の半ゟ響きし鐘聲はあの寒山寺の鐘聲だと始て知りろれでは昨夕姑蘇城外ゟ船がゝりせしのでありし歟との意味ゟして曉光變化の妙を極盡するものゝ後世詩人の企及すべきものゝ非ず是は小生一個人の解釋のみあらず清人の誰やらが如此解釋致候樣記臆ゟ存し居候へども只今旅行中にて取調も難相成殊に小生は詩人にあらず聊か詩を好むものゝれゞ貴下と意見の異なる點を略叙致し候ゝ此解は嘗て聞しおとあり筆者か夜來の事を叙す云ゝとせしは是れゝり

天草洋の詩ゟ付　同君

山陽翁の眞蹟若くは新居帖等の印本に於て一つも芳草と認めしを見たる事ゝもしもしそれにして芳草ゝりせば貴下の御解釋は狂て翁の拙作を辨護ゝされしには非さる歟全体此詩は明似月が時候を叙したる骨子ゝれゞ秋の景色と確信致候殊ゟ此遊は秋ゝりしは清客と長崎に於て應酬致候詩に就き見るも判然せり然るに芳草と記す謂れゝし

右は適當ゝる解と思はる記者の誤臆より幾十通の忠告書を辱くせしのみゝらず、一二の新聞にて辨駁迄を費さしめたるは慚愧の至りと云ふへし、深く諸君の惠を謝す

○月落烏啼の寄書

頃に解釋を惠まる、一々載錄する能はず因て其の尤ゝる者二三を掲け之を謝す。

拜啓想起錄追々拜見後學の得益尠からす毎度感誦仕候楓橋夜泊の一絶ゟ付御名說有之右は小生も幼時より唯た何とゝく吟し覺ゑ妙處も佳處も分らす打過き居り候處先年或る詩人と會談の際、彼詩の話ゝ移り候へば其人、彼詩に付ては歐陽公抔も誤解したる樣ゝるが元來其妙は愁人のまどろみ、落月啼烏(勿論夜啼ゝるべし)にフト驚かされ夜や明けぬと思へは響く鐘の聲にて全く夜半ゟてゝりしとを知りたりとゝふふに在りと申しき其時は何とも心付かさりしが後ふて考へ候へばかゞかりの事、歐公如何に詩ゟ短ゝればとて悟り得ぬ筈ゝし仔細ぞゝらんと重ねて其人に問はまはしく思ひ居り候際陸放翁の老學庵筆記を讀み左の一節に讀み當り候

張繼楓橋夜泊詩云。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船。歐陽公嘲之云。句則佳矣。其如夜半不是打鐘時。後人又謂。惟蘇州有半夜鐘。皆非也。按于鄴褒中即事詩云。遠鐘來半夜。明月入千家。皇甫冉秋夜宿會稽嚴維宅詩云。秋深臨水月。夜半隔山鐘。此豈亦蘇州詩耶。恐唐時僧寺自有夜半鐘也。京都街鼓今尚廢。後生讀唐詩文及街鼓者。往々茫然不能知。況僧寺夜半鐘乎。

これにて歐公の疑は夜半の鐘は打つ筈ゝしと思へるより起り候事判然致し候將た張繼再游の詩にも烏啼月落寒山寺。欹枕猶聽半夜鐘。と有之候樣相覺え候兎ゟ角其頃夜半ゟ鐘を打ち其打方ゟて夜半の鐘たると知れ候事實だゟ有之候得ば彼詩の妙も聊か推測し得らるへき糸口有之候かと相考候扨右の通り解釋致し候ても猶甚た解し兼候い如何ゝる故ゝりて彼一絶が特に他の唐絶に傑出して人に愛賞せられ候やの一事に候再遊の作意によれば作者自ら得意の作と思居る樣ゝ候上、歐公といひ放翁といひ此詩に就て彼是評論致候を見れゞ宋の代ゟも人口に膾炙致し候ものと相見ゑ候我邦にての傳誦は支那より受繼き候ものに候や將た何人か別ゟ見る處ゝりてのとゟ候や和漢共其時代幷に由來に付き御想起のとも御座候はゝ御示し可被下候思軒氏ゝど名說も可有之と存候に付き思出し候は維新の當時漢學書生風の流行と共に此の一絶の傳誦、雅俗に論ゝく盛ゝりし事に御坐候小生は無論幼少の事ゟて自身の經歷にい無之候得共大沼枕山のものせる東京新詞中に左の一絶ゝり其實況を盡し候樣承り居候

唱出楓橋夜泊詩。三絃彈裡寄相思。誰知孤客愁眠句。却上佳人絶艶詞。

猶御一中紅楓云々とゝるは出處如何存し不申候得共小生は江楓と憂ゑ居り申候江の方趣もゝりロマックゟも叶ひ候或は知者千慮の一失ゟは有之まじきか腹藏ゝき處申上御示諭を仰き候頓首

八月二十七日　龍溪先生　梧右

無名氏

今平心虛氣紛々聚訟せる注釋の陋見を頭腦に存せずして只「月落烏啼」の廿八字のみを几案の上に置き沈心熟慮して其意の在る所を探ぐらゞ始めて恍然大悟する所ゝるべし、夫れ「月落烏啼霜滿天」と「夜半鐘聲到客船」と矛盾せるは三尺の童子も亦之を知れり之を作りし張繼將又之を選みたる古來の選家ゝ此等の事を知らざる理ゝらんや然るゟ此の矛盾せる詩が却て古今の絶唱とて于今人口に上るは何故ゝる歟請ふ左に之を陳せん

先づ第一に此れは楓橋夜泊の詩ゝり曉發の詩にはゝらす此れ宜しく注意すべき處ゝり夜泊せし人(即作者張繼)の眼中耳中にはゝり〳〵と月が落ち烏が啼き霜が天ゝ滿ちたる樣(否)天に滿ちたりと聞見せり其處で之を聞見せし張繼は如何なる況界に在るかを知らざる可からず即ち「江村漁火對愁眠」現に張繼は眠て居たるゝり眠て居る人の眼中耳中に現はれたる上句七字の景色は何物ぞ、言はずとも無論夢寐恍惚の幻象なるべし、其處で愁眠の愁の字に就て味はざる可からざるものゝり、蓋し秋夜の永きを恨ひは只さへも如此況んや身客中ゟ在れば只々一刻も早く夜明にゝりて此宿泊處を發程し度思ふのみ客愁輾轉の餘其かゝらぬか「月落烏啼霜滿天」たればやれ嬉しやと思ひしは夢、寒山寺に鳴る鐘の音はまだ漸々夜半を報するゝりけりと無限懊惱の狀を言外に含蓄せしめたる工絶と云はずんば之を何とか云はんや第一句に故らゟ疑團を布きて對愁當の三字を以て之を解釋す針線亦甚だ緻密にして決して義理に堂ゝらざる處ゝし約して之を言へれ此の三字は第一句と第四句との矛盾を繰釣る所の機括ゝり詩を讀んで此ゟ注目せずんれ圖圖呑棗の譏は到底免るゝ能はざるべし

○右に付ての評

前者ゝ二つの解ゝり、一は所謂る月夜烏が實に啼きしものとし鐘聲ゟて夜半ゝるゝ驚く者と爲す、又一は夜半鐘を以て時刻ゟ反するの名を負ふ者とす、碌堂兄の解釋特ゟ趣を添るを覺も敬服

後者は第一句を以て全く夢幻の境とし虛景と爲す亦た妙ゝり

其境の妙ゝるは虛景と爲すに在り、然れとも餘り巧緻に解し過るの傾きゝるに似たり若し作者再遊の詩、果して前に記する如くんは二度まで夢幻の境を空中ゝ畫き出たすは少しク

ドキに過く因て考ふれは夜半鐘ゟ何か仔細ゝりそうゝり放翁の解、當りしゟはゝらさる乎、又第一句を實景と爲し夜半鐘をも實と爲すの說は感心し難し何とゝれは夜半ゟ落る月は光り微ゝり、月明にして星稀れゝるゟゝらされは烏鵲は啼飛せず又、霜は曉にゝろ繁けれ夜半滿天も穩かならず、故ゟ夜半鐘を實とし又第一句をも實とするは到底撞着ゝり、第一句第四句の中、孰れか一は虛、一は實ゝらさる可らす碌堂兄の第一解は兩者與に實とす第二解は第一句を實とし第四句を虛とす無名氏の解は第四句を實とし第一句を虛とす名は夜半鐘ゝれとも時代の沿革より之を曉天ゟ打つと、例と爲り名實相反し遂ゟ詩に入るに至りしゟはゝらさる乎、例せは坂無しと云ふ地ゟ坂有て大坂と云ふ地に坂無く名實相ひ反すれは乃ち狂歌の材料に入る、曉鐘にして夜半鐘の名ゝる處、則ち詩料と爲りしゟはゝらぬ乎斯く考もれは再遊の作も愈々之を惜むるに似たり「月落烏啼く紛れも無き曉天ゝれ左るゝ鐘のみ夜半とは奇しき事ゝる」との意ゝるへき乎名實相反したる鐘とすれは再遊の作「月落烏啼寒山寺、欹枕猶聽半夜鐘」決して味ゝしとせず、若し曉景を幻境とせは二度はクド過る樣に覺ゆ、如何ん

霜降る秋の夜ゝれは何れにせよ楓樹には色附

きぬへし紅ゐても江ゐても唯楓の字を目當てゐ評せし迄ゐ候、速記者か紅と記し來りしを其儘、意をも經す掲けしのみ、江紅、何れでも論の大意ゐは差支へ無き樣ゐ考ふ但し無名氏は（態と姓氏を掲けされとも仄かゐ其人を知る有名の作家あり）江村として楓を避けたるゐは仔細あらん聞かまほし

因に記す余は常に執筆せす、口述して速記者ゐ之を筆せしむ、天草の詩を淨寫し來るを見れは蓬窓と記す、余因て之を芳草に改めしあり、過つの久しき者自ら知らさると斯の如し今日ゐ至り速記者ゐ對しても氣毒千萬あり

○舟と船ゐ付ての寄書

城東　陳人

天草の詩御訂正相成候と同時ゐ横の字を更に御批難有之高說の如く極めて穩當ゐは無之候得共小生の卑見を加へ度きは「萬里泊舟天草洋」「太白當船明似月」と一篇中舟船の二字使用被致候點に御座候勿論唐人にも「舟船明日是長安」等の句も有之候間是を以て直に白璧の微瑕とは難申候得共外に好文字は無之ものに候哉江湖詩家の高說を叩く

唐詩の解龍溪先生ゐ呈す

平井魯堂

龍溪先生のものせられたる想記錄てふ隨筆中に往々詩歌の事あど論せられたり流石は先生の慧眼能くも內外古今詩歌の短處を看破せられたり吾輩は常に敬服するの暇あらざる豈ゐ復た其誤謬を指摘するの暇あらんや然れども所謂傍觀贏八着の謎もあれゞ聊か吾輩の見聞する所を書して參考ゐ供せんと欲す

賴翁天草洋の詩の蓬窓と芳草との攻擊は隨分烈敵かりしが是は吾邦同音上の誤あるべし唐の楓橋夜泊の詩を引きたる中ゐある紅楓のお小言も矢張江楓と紅楓と同音なるより來れる誤あるべければ今更喜々數論すべくもあらぬことぞかし

抑も張懿孫の楓橋夜泊の詩は李氏の唐詩選幷ゐ周氏の三體詩中にも載せたるものゐて其名作たるは固より言ふまでもなきあとあり惟だ其意義の解し難きより之を批難する者多し歐陽盧陵の博學を以てすら猶は夜半は是れ鐘を撞く時ならずと剛りたり然れども唐人の詩中に夜半鐘を撞きたるあとを載せたるもの尠からず蓋し唐代の僧寺に於て夜半鐘を撞きしは疑ひあきの事實あり唐于鄴の寒中即事の詩に云ふ遠鐘來半夜。明月入千家。又唐皇甫冉の秋夜宿會稽嚴維宅詩ゐ云ふ深夜臨水月。夜半隔山鐘。此他尙ほあるべし大槪磐溪翁も亦嘗て此詩を說て云ふ新月落ちて痴鴉啼く即ち夜半の實景あり特に孤客愁眠の眼を以て之ゐ對す故ゐ錯り認めて曙けんと欲するの候とあすのみ既にして鐘聲耳に到る枕を欹てゝ之を聽けゞ猶は是れ夜半の鐘あり始めて啼鴉に欺からるゝを覺る而して夜に倦みて明を待つの情滋々切ありと痴鴉は俗ゐあほうがらすと稱するもの此の如く解し去りて千古の疑竄一時に決すと謂ふべし

楓橋夜泊

月落烏啼霜滿天　江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺　夜半鐘聲到客船

本詩の如きは實ゐ作者の眞情を解するに苦むは古今一般あり然れども小生は思ひたり、月落は是れ殘月にあらず烏啼は是れ曉烏にあらす秋夜の永き眠り已ゐ倦で客心故鄉に來往するの際月已ゐ落たり烏今啼く夜は明けたりと喜で蓬窓の間より望めは滿川寂々只漁火の光微かにして愁眠を照すのみ月落烏啼は曉天あり漁火對愁眠は夜中あり、曉天にあらず夜中ゐあらず客心迷ふの際忽ち聞く寒山寺の鐘、數ひ來れば是れ夜半の鐘、初て知る月は是れ上院の月、烏は是れ狂鳴の烏ゐてありしを。秋夜の長き客心の迷ひ易き有意無意の間ゐ寫し得て殆んど眞に逼る是れ古今の人口に膾炙する所以あるか聊か卑見を述べて御參考の萬一に供し候

八月廿八日　神田區ゐて　德永直吉

○　拜啓張繼か楓橋夜泊の詩に付古來諸大家の說

本鄉　高摩詰

種〻有之候得共恐らくは作者は興に遇ふて詞を造ひ唯だ聲律の調と興象の合とのみに意を用ひて餘り事實ゐ懸念せすして作りたる者にて後人の種〻解明するが如き意味深遠の者にては無之唯だ興ゐ乘して事實を探るに暇あらすして作りたる者と存候又餘り人口には膾炙せざる詩ゐ御座候得共韋蘇洲の春潮帶雨晚來急。野渡無人舟自橫。と云ふ句を難して宋の某氏は滁洲の西澗ゐは絕て春潮至ると能はざる由ゐ謂ひし由其詩話あて讀しと有之是等も又興に乘じて事實を知らずして作りたる詩と存候其他にも穿鑿致し候はゞ理の解す可らす事實の相違致し居候詩も澤山有之候哉と奉存候

○　根岸　鑑眉　生

張繼か詩に付て色〻の投書有之皆可笑事に候三說の執れか作者の本意あるや作者あらでは古來姑蘇城外に寒山寺と云ふ寺あし寒山拾得判し難し然かし執れを眞の解とするも一ふしの像を安置する庵室樣のものあるのみ尤も鐘ありて面白し亦た執れを眞の解とするも絕唱は朝晝夜三度鳴らすよし彼の什は鐘が入用も と云ふほどの事あし

月落烏啼霜滿天あり右庵室の邊ゐ烏啼橋ありクロムエルゆへゐ上の如く讀がよしとのとあり支那歸りカーライルの書先生に聞くまゝ寶墳申上候

偶　書

思軒　居士

『彌次馬』

楓橋夜泊の詩の解釋々議論ありて面白し吾をして十年前の興讓館を憶ひ起さしむ祿堂大兄は余ゐ何等か說あらんとゐへり余は別ゐ一已下に衆人をして齊しく服せしむる能はざれは

第五リードルを講釋するに似て頗る辯を費す

第三は則ちこの兩說に異りて月落烏啼を現在の說あし唯だ聲律の調と興象の合とのみに意を兄の某詩家と語れる所ゐして盤溪が三体詩の註も同樣なりしと覺も第二は槐南君あどの云ふ所ゐして月落烏啼を夢寐の虛影とするあり

第一は大

の說あし唯だ素と聞ける所三說あり第一は大

註も同樣なりしと覺も第二は槐南君あどの云ふ所ゐして月落烏啼を夢寐の虛影とするあり

第三は則ちこの兩說に異りて月落烏啼を現在すして作りたる者と存候又餘り人口には膾炙せざる詩ゐ御座候得共韋蘇洲の春潮帶雨晚來急。野渡無人舟自橫。と云ふ句を難して宋の某氏は滁洲の西澗ゐは絕て春潮至ると能はざる由ゐ謂ひし由其詩話あて讀しと有之是等も又レは夜半ありし歟といふあり斯く解けは轉句典に乘じて事實を知らずして作りたる詩と存候其他にも穿鑿致し候はゞ理の解す可らす事實の相違致し居候詩も澤山有之候哉と奉存候

○　根岸　鑑眉　生

張繼か詩に付て色〻の投書有之皆可笑事に候三說の執れか作者の本意あるや作者あらでは古來姑蘇城外に寒山寺と云ふ寺あし寒山拾得判し難し然かし執れを眞の解とするも一ふしの像を安置する庵室樣のものあるのみ尤も鐘ありて面白し亦た執れを眞の解とするも絕唱は朝晝夜三度鳴らすよし彼の什は鐘が入用も と云ふほどの事あし

月落烏啼霜滿天あり右庵室の邊ゐ烏啼橋ありクロムエルゆへゐ上の如く讀がよしとのとあり支那歸りカーライルの書先生に聞くまゝ寶墳申上候

詩の德不德

若し眞ゐ俊傑あらば其の毀譽の斯く紛々たるは身にとりて甚だ迷惑の次第あらん楓橋夜泊の詩若し眞ゐ妙哈ならば其解の斯く紛々たるは作者にとりて甚だ迷惑あらん人ゐ德不德あるるひとしく詩あも德不德ありと見ゆ此詩の如きはまづ薄德のかたなり何とあれは一言のしめば如何ん、假令ひ人を欺くが爲めゐせさるも亦た必ず狼狽惶恐すると七箸を失する位

オーガスタス、シーザルは英武大略、叔父シーザルの緖を繼て群雄を壓伏し、羅馬を統一し以て帝政の基を建てたるは人の知る所、其勇、其智、古今屈指の人物中ゐ在り、然るに史書の記する處に依れば帝は非常の雷嫌ひあり、此の時代ゐは羅馬人は海豹の皮を雷避けの功能ありと考へ居りしか故に驟雨將さに至らんとし雷鳴の兆あるときは、帝は必ず海豹の皮を帶びざる無く又た雷鳴り電閃くのときに於ては必ず地下の暗室に蟄居する慣ひありと云ふ、若し此の英武ある帝をして孟德の前に在ら

ありと之に比すれは周詩の谷風が棄婦の情を言ひ盡せる「高い山から谷底みれゞ瓜や茄子の花盛り」が田家豐樂の象を現はせる若き皆あ有德の君子あるかあ

○玄　德

曹操の前にて、玄德が雷に恐れ、匕箸を失せしは英雄人を欺くの手段、有心に出てたりと評するもの多し、其說或は當らん、然れども玄德亦た眞ゐ雷嫌ひありしやも知る可らず、眞の雷嫌ひとするも孟德或は其の樣子を見て之を侮るの心を生せざるには限らず、人の物に好き嫌ひあるは天性にて如何なる英雄と雖ども免れす何ぞ雷嫌ひあし と云とを得ん

○志撒兒帝

オーガスタス、シーザルは英武大略、叔父シーザルの緖を繼て群雄を壓伏し、羅馬を統一し以て帝政の基を建てたるは人の知る所、其勇、其智、古今屈指の人物中ゐ在り、然るに史書の記する處に依れば帝は非常の雷嫌ひあり、此の時代ゐは羅馬人は海豹の皮を雷避けの功能ありと考へ居りしか故に驟雨將さに至らんとし雷鳴の兆あるときは、帝は必ず海豹の皮を帶びざる無く又た雷鳴り電閃くのときに於ては必ず地下の暗室に蟄居する慣ひありと云ふ、若し此の英武ある帝をして孟德の前に在らしめば如何ん、假令ひ人を欺くが爲めゐせさるも亦た必ず狼狽惶恐すると七箸を失する位

あは止らざらん、孟德が玄德を小膽男と見侮りしは實事あらん之を以て必ずしも玄德が故造の擧動とのみ見る可らず、

○孔　子

右の解に類すると、間々あり例せば論語ゑ孔子平生の言行を叙するの篇に於て迅雷風烈には必す變ずと記す、孔子の大德、假令ひ雷嫌ひあらずとも天地の變ある節は樂みを取らず端然として恐るゝが如くありしならん、然れども亦た雷嫌ひ風恐れの性質を其儘ゑ記載せしにあらすとは云ひ難し、此篇は孔子の嗜好若しくは心懸けを幷せ記するものにて其事必しも人に敎るに足るを要せすと解する方、穩當あらん、例せは「薑を撤せすして食ふ」と云ふの條の如き、若し之を以て人に敎るの條とあさば隨分偏屈の論ゑあらすや、蓋し孔子は酷た薑を嗜み、三度の食事毎とゑ薑は必す膳に出てたりと云ふに過ぎざる可し、今の人、味噌を好むものが三度毎に香物の如く之を食ふと同樣あらんのみ、之を推して迅雷風烈に必す變ずるの條を想ふときは其の變するは有心ゑ出るのみにも非ざる可き歟

○彼得大帝

事物に對する好惡は人の天性に出て幾んど常理を以て推す可らざるもの多し、不世出の英雄豪傑にして一小微物ゑ戰慄するものあるは珍しからず況んや風雷とや、其の一例を擧くれば露國のペートル大帝か豪放拓落あるは人の知る所なり、然るに帝は玉虫の如き（甲ありて這ふ介蟲類）が大嫌ひあり一たひ之を見れば忽ち室内より飛出てさるとあかりしと云ふ、故に四方ゑ微行するに當て一將官某の「モスコー」ゐ近き別莊に幸す、主客の談笑方さに興ゑ一事にありしと、帝嘗て一日此家木造にして虫類多き恐れあり帝ア入る、此家主人に問ふ玉虫の類あきやと主人、曰く澤ト山は居り不申、然れども此類の虫除の爲め、生きあから一虫を貰き、陛下の居玉ふ背後の壁ゑ刺し附けありと、其處を指點す、帝之を見て面色土の如く一躍して坐を離れ、主人に一拳を喰せしめ其まゝ馬を走らせ還幸せりと云ふ、（右の虫は日本の玉虫の類あれども形ち小にして色黑く別種の者あり露國ゑは甚た多き由あり）人の物ゑ對する好惡此の如し、又蜀葵花の如きは何人も愛せざるものあき艶麗の花あるに、之ゑ對すれば忽ち汗を流すほどゑ忌み嫌ふものあり奇と云ふ可し、況んや蜘蛛、蟹の類をや、況んや雷をや

○天　助

人の大業を成すは其の才略、德望ゑ依るとは云ひあがら天運のみにて危く死を免るゝの類少からず、間、髮を容れざるの場合、幸にして身を全するもの古今の史上往々之を見る和聖東の如きは軍の仕樣、常に大事を取り、險を冒して派手ある戰をあさゝる流義あれども猶ほ實ゑ天助あるかと思ふほと危くして手ゑ汗を握らしむる場合あり、當時亞米利加を征せし英軍中に在りし一士官が其の友人ゑ與へたるの書に載するものを讀む、其中に曰く、某日、余は部下を率て山腹の林中に伏す、曉天に二名の敵あり騎馬なり前あるもの某形の帽を戴き、後あるもの某色の服を着く、距離僅に百「ヤルド」以内の地ゑ來る、余は部下の狙擊兵三人ゑ忍び行て急ゑ之を射擊すへしと命したり、已にして又た謂へらく、斯くまで疑心もなく來り近くの敵をダマシ打に狙擊せんは無慘あり、と又た急ゑ人を遣り先きの三人を追止めしむ、二騎の敵、此の時馬を乘り廻はして歸り去れり、若し其節、余が彼等を射擊するに意あらば余一人の銃を以て尙ほ五六發を放ち得たりしあり、距離は近し命中をは誤らじ、然れども交戰の前に彼等を狙擊せんは殘忍ありと想ひ之をも見合せたり、此日戰止む後ち生擒せし敵の士官等の我が病院ゑ入りしものに聞くゑ和聖東は朝より常に先鋒を指揮し居たり其の帽子及ひ衣服に據て始て今朝の二騎の一人は佛士官、一人は敵の大將あるを知り、彼の好運實に天助に類するものあるゑ驚けり云々と

○礮と銃との戰

征韓の役、我兵の向ふ處、披靡せしは我か將卒の勇健ゑして軍陣ゑ鍊熟せしに依ると雖とも、小銃と云へる利器の力、亦た多きゑ居る、此時朝鮮には小銃稀れゑして我國ゑは已に盛に行はれたり、故に韓兵は最も我か小銃に苦められたり然るゑ此時、我ゑ少くして彼ゑ多きものは大礮あり、彼國ゑは早く明より傳はりしか若しくは明より齎らせしと見へ動もすれは此の利器を以て我を苦めたり九鬼の海戰ゑ、加藤の籠城に苦みし如き則ち其例あり、今日に存する慶長年代の大礮は概ね皆あ朝鮮より分捕り歸りしものあり當時邦人か之を珍重せしを知るゑ足る其製、銅に非す鐵に非す靑銅あり、征韓の役は銃器上に於て之を大礮と小銃との戰と爲す、も可あり

○我か火繩銃の製式

我國の火繩筒の製は臺尻、曲、頬ゑ當て狙ふ是形は西洋諸國に其類あるへしと疑ひ居たりしゑ同地諸國の古今武器館を見るに一も我と其製を同ふするものあし、然るに其後ち種〻の古書を見しに千六百年代（西班牙人、葡萄牙人か我國ゑ來航せし時代）の戰爭に騎兵は今の短銃「ピストール」の大形にして長さ一尺二三寸と見ゆるものあるを片手に持ち居る多し、蓋し最初我國に舶來せし銃は則ち此の短銃式のものありしならん邪人か之を用ふるゑ當り其の銃身をは長くしたるも臺尻の形は依然と短銃式の曲がりし姿を其儘に存せしあらん、臺尻を頬ゑ當てるか爲め其便を謀て次第に扁平ゑ變し、一種の小銃式を作せしと覺ふ、古兵器に詳しき人の說如何ん

○地雷火

我國に火藥を傳へし以後、地雷火の法は砲術家に傳りあがら攻城野戰ともに著しき功を奏せしを聞かず、余の知る所を以てするに最も多く地雷を利用せしものは蓋し支那近世髮賊の亂に過る者無るべし

洪秀全の兵、長驅して諸城を陷れし手段は多く皆あ坑夫を用て地道を造り城壁の下ゑ地雷を藏發するに在り堞壁守兵共に飛逃するのと臺尻を頬ゑ當て狙ふ是形は西洋諸國に其類あるへしと疑ひ居たりしゑ同地諸國の古今武器館を見るに一も我と其製を同ふするものあし、然るに其後ち種〻の古書を見しに千六百年代（西班牙人、葡萄牙人か我國ゑ來航せし時代）の戰爭に騎兵は今の短銃「ピストール」の大形にして長さ一尺二三寸を藏發するに在り堞壁守兵共に飛逃するのと

きゑ乘じ突入して之を陷る、其の初め桂陽を陷れしも地雷あり金陵、開封、亦た皆地雷に陷る、盧州城の免れしは砂土の隧道を妨けしゑ因る、官兵の安慶を復せしも亦た地雷あり、歐洲の戰、大に地雷を用ひしは余の知る所ゑ於ては英の「マルボロー」侯がユーゼニー公を助て白耳義の「トールナイ」を圍みし時に在り、此時は両軍互に地道を穿ち鑿て地雷を用ふ、双方の坑夫が隧中ゑ行遇ひ、兩軍の兵、暗中ゑ戰ひしあとあり或い敵の坑道を堀壞し或は之に水を灌き、或は之を燻すに烟を以てし互に種々の術を盡して地雷を用ひしを記す蓋し此の時代ゑは尙ほ他ゑ之を用ひしものあらん

○弩（クロッス、ボウ）

古來日本には弩を用ひしを聞かず、漢洋には盛ゑ之を用ひし時代あり、武備志の中ありしと覺ふ、支那の小弩の圖あり（大弩は一人ゑて擄る能はす）其製稍や歐洲の「クロッス、ボウ」に同じ、唯た異ある所は支那にては兵士の帶ゑ鈎を附す、弩を張るには弦を鈎に懸け、両足を以て弓を蹈み伸はす此法に依れは如何なる强弓をも用ひ得へし

西洋の製は又た一層、巧みあり、臺尻ゑ「カセ」の如き棒あり兩手にて互に之を繰る臺の首尾に二滑車あり、滑車と「チコ」とゑ依り、弦を張る力を三四倍に增加し得べし（チコと滑車かゑ力を增すは理學書ゑ讀む人の皆あ知る所）支那の製ゑ比すれば精巧あり

○彈　丸

支那にて彈と稱するは蓋し弩の小形あるものゑして矢を用ひず、礮するゑ丸を以てす、慰みゑ小鳥などを打つに用ひしあと日本ゑて吹矢を用ふるが如しと見ゆ、驚破王孫金彈丸、探取

金彈打流霰の類、則ち是れあるべし、西洋よりも小鳥を打つには五百年前又た彈を用ひたり

○弩を禁す

西洋に弩の行れし始め、此器は人力を平均し勇怯を一にするを以て卑怯の飛道具とし羅馬法王より屢〻令を諸國に下たして之を嚴禁せり之が爲め一時廢せしと雖ども久しからずして亦た大に行はれしと云ふ

○弓矢

昔時の英國の弓矢の製を記するものに曰く弓の長さ六尺、木或は鐵を以て之を造る、矢の長さ三尺[illegible]り四百ヤルドの間に用ひし譯けなり我利あるよ似たり、甚の弦を引くは拇指と人差指と中高指とを以て弦を引くもの皆な人差指と中高指とを以てし、矢を其間に挿む之れ或は彼の强さを引く所以ならん歟、但し弦指を離るゝの便は我國の方に在らん

同國の弓は歐洲大陸諸國の弓よりも寸長さを記せしものありと覺ゆ、又弩を用ひしよと少しと云ふ是の二事は恰も我國に似たり亞洲大陸の支那に比して我弓は寸長さよ似たり、又我は弩を用ひす

○附記

昨日の紙上、和聖東の逸事よ係る記事、士官の名はヘルゴッツン、戰の地名はブランディ、ワイン誤りなり

○謎語

女媧、五色の石を鍊て天を補ひ、鰲足を斷て四極を立て、蘆灰を聚めて滔水を止む、少時之れを讀で何事たるを解する能はず、唯だ上古不思議の事とのみ思ひ居たりしが、今日より考ふれば蓋し支那の上世に行はれたる謎語なるへし、蘆灰は口で吹ても、パット散じ易き者なり如何にして能く洪水を止め得ん、鰲足は動物中にて最も短きものなり焉ぞ天を支る長き柱とするを得ん、天は蒼々として青き色にあろうれ焉ぞ五色の石を鍊て之を補ふを得ん、是の三事は皆な世中の出來ぬ事盡くしを集めたるものなり、言はゞ今世に、蹈心草もて傾厦をッパリ、線香もて人を、ナグリ倒すなど云へる謎語の類のみ、蓋し此語彼國よて上代に在て日月星辰の循環を察し地は西北に傾き居ると思ひ當り之を說明するに天地の（支那の）不完全なる本原を歸する所なく、因て列子は天柱拆け地維缺くの昔話を擧け序に之に屬する謎語をも世よ傳るまゝ記せしのみ、上代の歷史は不思議の事盡くしなるを以て後世の史を編むもの遂に斯る謎語をすら堂々たる史中よ載するに至りしもの歟歷史家の解如何んに、是說は余に於て新とするも遼東の豕たる恐はなき乎

○有巢氏

今日よても亞弗利加の內地、若くは南洋諸島の中には、喬木の上に巢を造り住居する蠻族の部落あり、支那の上代伏羲氏の前よ有巢氏の族ありて木に巢ふを記す蓋し支那にも亦た樹上に住む種族か一時、勢を得たる時代ありと見ゆ、伏羲氏は蓋し北地牧畜の種族中より崛起せしものならん、犧牲を養ふに庖厨を以てす抔、肉食を始めたるは此の時代よりせしか如し

○韋編

韋編三たび絕つ、韋よて編しものが絕るゝとは、能く〳〵の事と想ひ居たりしに、能く考ふれば此の時代は尙ほ竹簡のみ、書冊と云へば今日の擊劍に用る竹胴の如く、韋にて竹札を綴ぢしものあり、之を讀む度びにはガラ〳〵と卷舒するが故に、屢々すれは韋も絕もべし、想ふよ此の時代の人々は、如何に不自由ありしならん乎、今日の一冊の書は定めて一擔の重荷ありしならん、取扱にも貯藏よも、其の不便想ひ遣らる、之れに比すれバ印度上代の貝多羅葉は餘程便と云ふ可し、貝葉は日本の棕櫚の族あり其の新葉の軟かに幅廣きものを用ひ字は釘にてヒッカッなり、支那の、刀を以て竹簡に彫るに比すれバ亦た便あり、支那の冊の字の形象は如何にも能く竹簡を編みたる姿を示す、西洋にて紙あき羅馬の古代には羊皮を極く薄く製して紙と爲せり、竹簡、貝葉よ比すれば更よ便あり、然れども其品稀れに其價高くして一般の用を爲さゝりし如し、通例は銅の伸板に薄く蠟を引き、釘よて其上に字をヒッカキしと云ふ、之も亦た不便あり

○一言

詩經三百篇は思無邪の一言、之を掩ふと聞く嘗て印度の諺を英譯せしものに曰く昔し印度王某し、書を好む藏する所、遂に百萬卷に及ぶ一々閱讀するに堪へず、乃ち諸學士に命して其の目錄たけを畧記せしむ、猶ほ三千卷を爲す、王又た問ふ更よ之を省畧するの道あらやと一學士、乃ち之を一語に約し進奏して曰く「信と難し」王笑ふて之を措く

○詩の解

詩經の「燕々于よ飛ふ」の詩を讀みし時、注よ燕々の二字を解して曰く「之を重言するあり」と歌の事ゆへ二字重ねたるものと一應は合點行きたれども猶ほ思ひ當らず過ぎたり、後ち程と經て子供が「ウーサギ、ウサギ、（兎、兎の）何を見てハチル」と歌ひ居るを聞き其時始て重言の意を會し得たり依て想ふに知ると會するとは自から深淺の別あり

又た支那の往代の歌の間よ挿める助詞詩より易水、大風、よ至る迄、用ひし分、招魂に用ひし些、の如きは蓋し其時の人が歌の調子を取るよ用ひたると恰も今の「クーカイ、ヤーマーカーラ、ダニゾーコ、ミレバ、ヨ、」の「ヨ」の字の如く、又「野毛の山から、ノーエ、」の「ノーエ」の如きあらん故に其の時代の歌ひ振りを聞かねは何如ある學者よても眞味の知れざると恰も猶ほ外國人が和文を讀て前記せる「ヨ」「ノーエ」を解し能はざるよ同じからん、其助辭たるは、知り得可し其味は知るを得す、招魂の一篇中にても常詞の處には分を用ひ、禱詞に入れは忽ち些を用ゆ之を終れは又分と爲る、些は哀れげある一種の助詞と見ゆ

○若遜

米國の南北戰爭は百万以上の大兵を擧く古今大戰の一に數ふ、英雄の末路哀むに足るべきもの和漢東西、少からずと雖も、未だ南軍の名將ストーン、ウチール、ジャクソン氏の最期の如く遺憾あるものを見す、敵に殺されしよも非ず、自殺せしにも非ず、生捕れしにも非ず、大戰の勝利、幾んど味方に歸せんとするの際、誤て味方の爲よ銃殺せられたるあり、此人善く戰ふ當時の戰史を繙く者をして此人か現はれ出る處よは常よ先つ南軍の勝利たるを豫想せしむるに至る、向ふ所前あく、守る所敵を卻くストーン、ウチールの渾名は廣く世上に傳へれり此稱は蓋し其軍の堅固なると石城鉄壁の如きに取りしあり、大勢の傾く所、勝敗の數、遂に救ひ難しとは云ひながら、此人、死してより後ち南風競はず、上將李伊氏の軍畧も常よ勝算を期し難きの感あらしむジャクソン氏負傷の有樣、下の如し、氏か統率せし半翼は非常なる激戰の後ち例よ依て北軍を敗れりと雖も此日は入亂たる激戰にて且つ敵味方の戰線は深林よ亘れり氏は令を傳へんと欲し僅に數騎を從へ林中を突過す、味方の分隊は誤て之を敵兵なりと認め木葉隱れに小銃を亂發す、氏重傷を被り馬より墜ち片足を鐙に踏込みたる儘ま引き行かれたり、數日ならずして遂よ傷の爲に死す余が知る所の古今東西名將の最期未だ此の如く慘且つ惜む可きものを見さるなり、某地の酣戰よ氏樹下よ在て本營に贈るの書を認む、敵彈、樹枝中に爆發し左右皆な色を失ふ、氏の筆は紙を離れさりしと云ふ

○敵味方皆親友

南北戰爭が古今の他の戰に異るの一事は兩軍の重もなる諸將、多く皆な親友知己なるに在り、若し一旦之を戰局の外に置かバ、忽ち手を握て談笑し歡を盡すの間柄あり、唯た人々の

金彈打流霰の類、則ち是れあるべし、西洋よりも小鳥を打つには五百年前又た彈を用ひたり

○弩を禁す

西洋に弩の行れし始め、此器は人力を平均し勇怯を一にするを以て卑怯の飛道具とし羅馬法王より屢〻命を諸國に下たして之を嚴禁せり之が爲め一時廢せしと雖ども久しからずして亦た大に行はれしと云ふ

○弓矢

昔時の英國の弓矢の製を記するものに曰く弓の長さ六尺、木或は鐵を以て之を造る、矢の長さ三尺、三百「ヤルド」より四百ヤルドの間に達すと然らば二百間以上に用ひし譯けなり我國通例の弓矢より遠射の利あるよ似たり、甚た訝し、依て想ふに邦人の弦を引くは拇指と人差指とを以てす彼地の弓矢時代の繪畫を見るよ弦を引くもの皆な人差指と中高指とを以てし、矢を其間に挿む之れ或は彼の强きを引く所以ならん歟、但し弦指を離るゝの便は我國の方に在らん

同國の弓は歐洲大陸諸國の弓よりも寸長きを記せしものありと覺ゆ、又弩を用ひしよと少しと云ふ是の二事は恰も我國に似たり亞洲大陸の支那に比して我弓は寸長きよ似たり、又我は弩を用ひす

○謎語

女媧、五色の石を鍊て天を補ひ、鰲足を斷て四極を立て、蘆灰を聚めて滔水を止む、少時之れを讀で何事たるを解する能はず、唯た上古不思議の事とのみ思ひ居たりしが、今日より考ふれば蓋し支那の上世に行はれたる謎語なるへし、蘆灰は口で吹ても、パット散し易き者なり如何にして能く洪水を止め得ん、鰲足は動物中にて最も短きものなり焉ぞ天を支る長き柱とおすを得ん、天は蒼々として青き色にあろうれ焉ぞ五色の石を鍊て之を補ふを得ん、是の三事は皆な世中の出來ぬ事盡くしを集めたるものなり、言はゞ、今世に、蹬心草もて傾厦をッパリ、線香もて人を、ナグリ倒すなど云へる謎語の類のみ、蓋し此語彼國よて上代よ行れたりし者ならん、支那の地形が北半球に在て日月星辰の循環を察し地は西北に傾き居ると思ひ當り之を說明するに天地の（支那の）不完全なる本原を歸する所なく、因て列子は天柱折け地維缺くの昔話を擧け序に之に屬する謎語をも世よ傳るまゝ記せしのみ、上代の歷史は不思議の事盡くしなるを以て後世の史を編むもの遂に斯る謎語をすら堂々たる史中よ載するに至りしもの歟歷史家の解如何んに、是說は余に於て新とするも遼東の豕たる恐はあき乎

○有巢氏

今日よても亞弗利加の內地、若くは南洋諸島の中には、喬木の上に巢を造り住居する蠻族の部落あり、支那の上代伏羲氏の前よ有巢氏の族ありて木に巢ふを記す蓋し支那にも亦た樹上に住む種族か一時、勢を得たる時代ありと見ゆ、伏羲氏は蓋し北地牧畜の種族中より崛起せしものならん、犧牲を養ふに庖厨を以てす抔、肉食を始めたるは此の時代よりせしか如し

○韋編

韋篇三たび絕つ、韋よて編しものが絕るゝとは、能く〳〵の事と想ひ居たりしに、能く考ふれば此の時代は尙ほ竹簡のみ、書冊と云へば今日の鞏劍に用る竹胴の如く、韋にて竹札を綴ぢしものあり、之を讀む度びにはガラ〳〵と卷舒するが故に、屢々すれば韋も絕もべし、想ふよ此の時代の人々は、如何に不自由ありしあらん乎、今日の一冊の書は定めて一擔の重荷ありしあらん、取扱にも貯藏よも、其の不便想ひ遣らる、之れに比すれゞ印度上代の貝多羅葉は餘程便と云ふ可し、貝葉は日本の棕櫚の族あり其の新葉の軟かに幅廣きものを用ひ字は釘にてヒッカクなり、支那の、刀を以て竹簡に彫るに比すれゞ亦た便あり、支那の冊の字の形象は如何にも能く竹簡を編みたる姿を示す、西洋にて紙おき羅馬の古代には羊皮を極く薄く製して紙と爲せり、竹簡、貝葉よ比すれば更よ便あり、然れども其品稀れに其價高くして一般の用を爲さゝりし如し、通例は銅の伸板に薄く蠟を引き、釘よて其上に字をヒッカキしと云ふ、之も亦た不便あり

○一言

詩經三百篇は思無邪の一言、之を掩ふと聞く嘗て印度の諺を英譯せしものに曰く昔し印度王某し、書を好む厭する所、遂に百萬卷に及ぶ一々閱讀するに堪へず、乃ち諸學士に命して其の目錄たけを畧記せしむ、猶ほ三千卷を爲す、王又た問ふ更よ之を省畧するの道おきやと一學士、乃ち之を一語に約し進奏して曰く「信じ難し」王笑ふて之を措く

○詩の解

詩經の「燕々于よ飛ふ」の詩を讀みし時、注よ燕々の二字を解して曰く「之を重言するあり」と歌の事ゆへ二字重ねたるものと一應は合點行きたれども猶ほ思ひ當らす過きたり、後ち程と經て子供が「ウーサギ、ウサギ、（兎、兎の）何を見てハネル」と歌ひ居るを聞き其時始て重言の意を會し得たり依て想ふに知ると會するとは自から深淺の別あり

○敵味方皆親友

南北戰爭は百万以上の大兵を擧く古今大戰の一に數ふ、英雄の末路哀むに足るべきもの和漢東西、少からずと雖も、未だ南軍の名將ストーン、ウチール、ジャクソン氏の最期の如く遺憾あるものを見す、敵に殺されしよも非ず、自殺せしにも非ず、生捕れしにも非ず、大戰の勝利、幾んど味方に歸せんとするの際、爲よ銃殺せられたるあり、此人善誤て味方の爲よ銃殺せられたるあり、此人か現はく戰ふ當時の戰史を繙く者をして此人か現はれ出る處よは常よ先つ南軍の勝利たるを豫想せしむるに至る、向ふ所前あく、守る所敵を卻くストーン、ウチールの渾名は廣く世上に傳へられり此稱は蓋し其軍の堅固なると石城鉄壁の如きに取りしあり、大勢の傾く所、勝敗の數、遂に救ひ難しとは云ひながら、此人、死してより後ち南風競はず、上將李伊氏の軍畧も常よ勝算を期し難きの感あらしむジャクソン氏負傷の有樣、下の如し、氏か統率せし半翼は非常なる激戰の後ち例よ依て北軍を敗れりと雖も此日は入亂たる激戰にて且つ敵味方の戰線は深林よ亘れり氏は令を傳へんと欲し僅に數騎を從へ林中を突過す、味方の分隊は誤て之を敵兵なりと認め木葉隱れに小銃を亂發す、氏重傷を被り馬より墜ち片足を鐙に踏込みたる儘ま引き行かれたり、數日ならずして遂よ傷の爲に死す余が知る所の古今東西名將の最期未だ此の如く慘且つ惜む可きものを見さるなり、某地の酣戰よ氏樹下よ在て本營に贈るの書を認む、敵彈、樹枝中に爆發し左右皆な色を失ふ、氏の筆は紙を離れさりしと云ふ

○若遜

米國の南北戰爭は百万以上の大兵を擧く古今大戰の一に數ふ、英雄の末路哀むに足るべきもの和漢東西、少からずと雖も、未だ南軍の名將ストーン、ウチール、ジャクソン氏の最期の如く遺憾あるものを見す、敵に殺されしよも非ず、自殺せしにも非ず、生捕れしにも非ず、大戰の勝利、幾んど味方に歸せんとするの際、爲よ銃殺せられたるあり、此人善誤て味方の爲よ銃殺せられたるあり、此人か現はく戰ふ當時の戰史を繙く者をして此人か現はれ出る處よは常よ先つ南軍の勝利たるを豫想

○敵味方皆親友

南北戰爭が古今の他の戰に異るの一事は兩軍の重もある諸將、多く皆な親友知己かるに在り、若し一旦之を戰局の外に置かゞ、忽ち手を握て談笑し歡を盡すの間柄あり、唯た人々の

所生の州々の政府の爲に或は北軍を率ひ或は南軍に將たり、南軍の大將李伊氏は北軍の大將グラント氏より齡頗る長せりと雖とも皆お時を同くして聯邦政府官立の幼年兵學校ゑ在りしおり課業をも共にし、欲食をも共ゑしたり、其他南軍の將校も多くは皆お然り、故ゑ互ゑ技倆の優劣を知り、人品の高下を知り、交りも亦た密なり、若し銃丸雨飛、砲聲動地、骨拆け肉飛び、互ゑ死生の間に在るゑ當り、少時共に兵學校内ゑ遊戯せしおとを想起さは其の感慨如何おりしおらん乎、諸將の私交上ゑは嘗て一點の怨みおし唯た各々其の政府の爲ゑ相ひ戰ふのみ、事も亦奇おり、李伊氏は年長兄分ゑて、在校中は年幼きグラント氏を伴い常に近地を散歩せりと云ふ、

○李伊

余は南北兩軍の諸將の中ゑ於て、人品、戰畧、常に李伊氏を推して第一とす、兵器の不足せる、糧餉の繼かさる、將卒の困憊せる、間に立て事に遺算おく士を遇する常に懇切を極め、之を見ると子の如し、故に兵卒皆な氏を渾名して叔父李伊(オンクル、リー)と呼へり歐米ゑて小兒が物をねだるは多く叔父に向ふオンクルの名は可愛かる人なるの意味を含む、部下の心服せる知るべし、但し戰畧に於ては頗る機敏おり、古今の名將中に伍するゑ足る、其の最も非凡おる所は窘窮迫蹙の間ゑ於て常ゑ從容、餘り有るに在り

○從容不迫

日本ゑて人物多しと稱する元龜天正より慶長前後の諸將を達觀するゑ、逆境ゑ立て能く從容、迫らさるべし、と想はるゝ人物は直江山城守、明智左馬助の二人おるべき歟、直江は大略ゑ其ゑ安んず其迫らざるは量を以てす、左馬助ゑ命に其迫らざるは義を以てす、已れの主君は逆罪の人たらんとし、家國は滅亡ゑ就かんとす、凡そ人生の逆境之に越るものゑる可らす而して其の挙動を見るゑ、綽々として餘裕ゑり、蓋し此人平生より、常に居て變に處するの覺悟ありしが故ゑ事に臨で能く周章てさるものと見も、其の始め光秀を諫め後ち之に從ふが如き、城陷るゑと旦夕ゑ在りおから堀際にて舊友ゑ忠告し金を與ふるが如き、實物の目錄を作る始末より城中の取締りまで如何おる場合にも疾言遽色おかりしおらんと想はる

○直江山城守

此人、大畧ゑ天下の勢を左右するの考は常ゑ胸中に滿ちしおらん、關ヶ原の戰は天下分目の爭おり、事の源は石田上杉二老より出つ則ち直江の大に與り知る所おり、此大膽不敢ゑる畫策を廻らしおから、事敗るゝゑ及では猶ほ能く主家を全くす、其智驚くべし、此人陪臣おからも幕府の初年は諸侯同樣の取扱を受けしと見ゆ、此人の子孫は上杉家にて如何に成行きしや、春厂似吾々似厂、洛陽城裏青花歸の句、志、中原に在るを知るに足る、時の老儒に向て「繼絶世、興廢國」の義を問ふ道の順逆、早く既ゑ心に決す、其の人品超絶、何處とおく慶長間の人ゑ似す

○猫の眼

支那の學者は螢雪ゑて書を讀む、西洋の詩人は猫の眼ゑて書を讀まんとす、伊太利の有名なる詩人タッソヲは小詩を咏し其の貧にして書を讀むゑ燭無きを嘆し、家に飼へる猫の眼の大ゑ光からんとを望めり、螢雪はまだしもの事、猫の眼とは隨分奇想おり

○情の眞

「かけ橋や命をからむ蔦かつら」巧わ則ち巧おり然れども「旅ゑ病て夢は枯野を驅け廻る」の情の眞おるには如かず、春夢不離鄕抔の句わ劣ると幾等か「古池」の句、其道の骨髓と稱せられて人口ゑ膾炙すれども其角の「こゝかしこかはづ鳴江の星の數」は人の多く稱するものゑるを聞かす是れ亦た清絶おるに非ずや、一わか物と思へは輕しかさの雪」は別人の句おる乎其角集には「我雪と思へは輕し笠の上」とあり而して此句は寒山の畫賛なり又た千代女の「ほるへとられて、もらひ水」の句、世に傳稱せらる然れども同人の句「朝顏や起したものは花も見す」は人の之を言ふもの稀れおり、家人に起さる我ゝには後の句こそ妙おれ

○狗山人

同人の狂歌、世に稱せらるゝ者多し、左まで人口ゑ上らねとも面白き者少からす「一刻を千金ヅゝにゝめ上けて六萬両の春のあけほの」今は一夜を十二時に分つ昔は之を六時ゑ分ち一時を十に分て刻とし六萬圓の算盤、出てたるおらん、又た「生酔の禮者を見れは大道を横すぢかいに、春は來おけり」の如き「女郎花くちもさか野ゑ、たつた今、僧正さんか落ちおさんした」の如き可笑しさ、たまらず然れとも狂歌と稱しおから其趣、狂歌に非さるおり「袖の上ゑ霜か雪かと打拂ふおとより白き冬の夜の月」

○解り兼る

狂歌には我ゝに解り兼ぬるもの多し「僞のおき世おりせは本おりの西瓜の皮に穴はあけまし」更ゑ分らす出入りの八百屋ゑ聞けば西瓜を買ふとき、中身の善惡を証するため横ゑ穴を開けるとありと云ふ

川柳は面白けれども事多くは下部に渉り士君子の間に語り難きゑ困るのみ此の一事は發句と雖ども猶は免れす其角おどは餘程と上品の方おれとも尚ほ「初雪に此の小便は何やつど」の句おり

○狂歌

一言、兩事に引懸けるは狂歌の特色、人をして顰を解かしむ、讀人の名は記せず、心に留まり居中ゑて最も面白しと覺へしは、或人、水茶屋の床几に腰打掛けしゐ床几のひしやげしとて「指し掛けた茶屋のしようぎの弱ければひしやと潰れてかくの仕合せ」季鷹とか其頃の人の作とか聞けり、集に就て見しにあらす

○狂歌話

一學生の善談家おり嘗て語て曰く、某家の子、狂歌に耽り業を修めず、親友知人忠告すれも聞かす、遂に父の折檻する所とおる、猶ほ改めず、父も歌心おりしと見へ、難題を出して之を拙かんと欲し、我が出たす所の句に前句附けをおし見よ、若し能はずんば狂歌は生涯思止るべしと、父又た一句を出たす「月日の上に寢るとも」おり」其子答て曰く「古暦さかし集めて紙衾」と父屈すると能はず、遂に其の爲す所を許せりと、是話は何か雜書中より出てしか將た古人の句を取り此話を設けたるか

○京女

先年、鄕里の父老と會飲せしとき坐に在る某氏、余の爲ゑ大父志一君の句を語て曰く、舊藩主公、君を寵す嘗て奥向より見事おる京菜を賜ひ歌咏めとおりしかは取り敢へず「御殿より京の御菜(女)を賜はりて東男のさい(妻)にせよとは」此時は一時定府詰めおりしゆへ、東男と云ひしとだ

○英人の洒落

西洋ゑて亦た洒落を云ふ人多し余か彼地ゑ在りしとき英人三四人團欒笑語す會ゑ盛裝せし婦人、門外を過くるおり、一人之を熟視す其の人、名はシヨリスおり傍らの一人笑ふて曰く「Julius sees her. (Julius Caesar) と一坐絶倒す

○天運、コロンウエル

人生の浮沈は自家の心懸け次第とは云ひおから古來大英雄の事業と其人一生の經歷とを詳細ゑ吟味すれは浮沈の機、唯一髮の間に在る者多きは亦た驚くに堪へたり、英國の大亂ゑ乘じて帝政を覆へし、大統領の高位に登りしコロンウエルの事蹟は人の知る所おり、然るに同人は中ごろ到底英國の政治界に志を得るの望みおしと思ひ明らめ、一家を挈て米國に移住するに決心し、便船に乘込て、テームス河に泊せり此時、會ゑ政府より渡航禁止の命、出て止むを得すして又英國ゑ止りしか、間もな

く革命の亂、始まり遂ゑ非常の大名を爲せり、若し前きゑ偶然禁令の出るあかりせは、世人はコロンウエルあるものあるを知らざりしあらん

○一世那敦列翁

又た一世ナポレオンは佛國大革命の始まりし頃困迫殆に甚だしく色〻の事業ゑ從事して身を立てんと欲し毫も當世の事に意なかりしあり、暴民が王宮を襲ひ王に迫て赤帽を戴かしめ大騒亂の時は一友人と共に川畔ゑ立て遙に之を眺めし見物人なりし、然るゑ心中の事業、皆な意の如くあらず幾くもなく軍隊ゑ入り、歴進して遂ゑ希世の大業をあし列國の君王を足下に跪かしむるに至れり若し先きに其事業の企、意の如くあらしめば世人豈に亦たナポレオンあるものあるを知らんや

下に掲るは那翁の親友ロイ、アントニーの手記より抄譯す「一七九二年の四月余は巴里に歸り再ひポナパルテゑ會し學校友達の情更に親きを加へたり、余も思はしからぬ身分あり、彼れも重く困迫の荷を負ひ居れり、彼れの囊中は空しきと屢〻ありき、我〻二人とも廿三歳の青年クダラヌ考を爲して時日を過し金も無けれは職業もあく、我は貧しかりしと雖も彼は尚ほ貧しく、我〻二人にて毎日〻〻彼れか此れかと當も無き事業を工夫し相談せり、何か金儲の事もあらんと頻に眺めたれとも何事も皆な失望せり、依て彼は陸軍省ゑ仕へ我は外務省に仕へんと手蔓を求めたり」

○フレデリッキ大王

普國フレデリッキ大王の一生にも亦た前記する如き事あり、王の太子たるや父王の虐遇に堪ゆること能はず、二名の侍臣と共ゑ相ひ伴て他國に奔りしに不幸にして(幸ゑして歟)追手に捕へられたり、侍臣の中一名は禁錮せられ一名は太子の目前にて死刑に處せらる、太子も危き所ろなりしが幸ゑして群臣の救ひに依り死を免る種々の艱難は受けたれとも後ち遂ゑ王位に即き其名を千歳ゑ垂るゝを得たり、若し前きに意の如く遁走せしめバ父王は激怒して必ず太子の廢立を行はんと必定あり果して然らば後來大業を爲すの資を失ひしあらん、其の追手に捕へられしや僥倖あり

○豊太閤

我が豊太閤の如きも鎧を買ふの使を命せられざりしならバ信長に仕ふるの時機を失し、其内には色〻の障り生せしあらん然らば主人より此使を命せられし一事は公か立身の緒にして後來幾多の事業、總て此時より歩を始む焉そ意外の天幸と云はさるを得ん、斯るとは獨り英雄豪傑の身上のみあらず諸人の經歴皆あるゑ類すると多し、人世の事、錯綜紛糾して局面の變轉する實に此の如き歟

○高祖と豊公

世ゑ豊公と高祖とを相ひ對比する人あり、然れとも豊公の大器、高祖の上ゑ出つ、高祖の事業を見ゑ始終、苦み通しに苦み積け、或は逃けて他國に奔りしに不幸にして(幸ゑして歟)追或は敗れ、或は勝ち或は追ふ、辛ふしてヤット帝業をおせしと云ふ姿あり、豊公は之ゑ反す、一城の主とおりしより關白に至るまで何事をなすにも孜々として常ゑ餘力あるを見る毫も齷齪の態あし、其の品等、高祖より高きと幾段あり、且つ高祖は事、已れより出てず、或は右の人に聞き、或は左の者に問ふ、豊公は則ち然らず、事皆あ已の智に出づ、梟雄慓悍ある當時の群雄を駕御すると恰も丁稚小僧を取扱ふが如し、和漢古今、實に此流の人を見ず、公とナポレオンとを比較すれは、兵を行り事を處する敏あるはナポレオン數等を超出す然れども人に長として群雄を御するの器に至ては豊公の秤量、重きと幾十斤、ナポレオンは神經質の人あり豊公は濶如たり此處亦た同しからず

○餘力あり

豊公の一生に於て此時あそ五色の息を吐くの苦おらんと想はるゝは唯た山崎合戦のみ、其他は幾んど慰み半分に類す、四國征伐、九州征伐、勝算、始より明かあり小田原征伐の如き幾んぞ猪狩に出懸るか如し頼朝の富士の牧狩を爲せし位の心持あらん山崎の一戰、大勢既に定る後ち其他は將碁倒しのみ

豊臣の諸將は皆あ蹠布、彭越、あり德川の諸將は皆あ鄧禹馮異あり國祚の長短固より已ゑ此に根す

○王公の種

匹夫より起て人君と爲りし英物は古今支那を最多とす、西洋諸國に於ては獨りナポレオンあるのみ、アサキサンドル、フレデリッキ以下有名の英主は皆あ王侯の種ならざるあし

○鋭敏、粗豪

西洋の英雄豪傑には神經質の人甚だ多し此處、稍や東洋に異あり歴山王と云ひナポレオンと云ひ其他の英雄名士に至るまで喜怒哀樂の感覺、甚だ強き如し日本元亀天正間の人物は粗豪にして感覺鈍きに似たり

○濱猫

物も名次第にて風流とあり不風流とある、鴎と云へば詩に入りそうあり、都鳥と云へは歌に入りそうあり、濱猫と云はゞ詩歌の境ゑ寄付けぬ心地すべし、隅田川ゑ遠くもあらぬ兩總の沿海にては鴎を濱猫と呼ふ、是名を聞かは業平の歌心も消失せん

○御免下ダサイ

言語は人情の自然に出つ、辭こそ異あれ其の意味は東西符節を合せしはと同しきもの多し、我國ゑて人の居るか居ぬか知れぬ座敷に入るときは「御免下さい」と聲を掛け戸を開く、伊太利ゑても此の場合にペルミッソーと云て入來る、則ち「御免下さん」の意味あり

○熱水

邦人の西書を讀むもの動もすれば曰ふ歐西ゑは辭多く我國には辭少し彼の一言を以て言ひ盡くす所の事物も我か國語は二言以上を用ひざるを得ざるもの多しと、然れども一概に論ず可らず、英國の如きは湯と云へる辭あし依て之を熱水(ホット、ウヲーター)と云ひ二言を用ゆ亦た不便あらずや

○沙漏、水漏

今日の如き時計あき古は、時間を計るの法、支那ゑては水漏を用ひ、西洋ゑては蠟燭を用も、之に刻目を付け燃去るに從て時刻を知る、然れとも空氣の流動强き室にては時刻に大なる差を生せん不便、想ふべし乍去ら燭の用ひは久しからざりしと見え、一般に廣く行はれたる者は沙漏あり今日彼地諸國の博物館中には往々沙漏あり、其形ち、日本の小鼓の如く上下に胴あり中にて括あり、硝子を以て造り之に刻目を盛る、高さ四五寸徑り二三寸のもの多し、鼓の上の胴ゑ在る沙は胴の下の括れたる狹所を經てポッ〻〻と下の胴ゑ落るゑ隨ひ上の胴ゑ盈虛を生し之を刻目に照らして時刻を知らしむ、沙既に漏れ盡きて下の胴に滿るときは乃ち之を顚倒す、是に於て沙の滿ちし、下ある胴は上とあり、以前の上の胴は下と爲り沙又たポッ〻〻と下の胴ゑ滴る簡固あれとも甘く工夫せし仕掛けあり彼地の繪畫、時間を表するの意を寓する者ゑ小鼓の如きものあるを、則ち之あり

○十三時

維新後、時刻の名稱を一にし、刻限をは一時より十二時迄とし、以前には何字と記せしを時の字に改む可き布告出て〻世上俄に新刻限、新名稱を用ふるゑ至り、從ては種々の奇談あり、或家の主人、十二時半とも覺しき頃、給仕の下女に何時ならんと問ふ下女答て曰く「最早や、十三時あらん」と

○饅頭喰ひ

京坂の間ゑ、彩色の陶器人形(大小色〻)ある中ゑ、ケヽ坊主の女兒六七歳計りあるが双手ゑ饅頭を割て持ち居るあり、之を「饅頭食ひさん」と唱ふ、何故ぞと問へバ、明治の初年、或人、七八歳の女兒に向ひ「父御と母御と何れか好きや」と問ひしに、女兒は會ま其手に持ち居たる饅頭を分て半片つゝ兩手ゑ持ち「叔父さん、

右の饅頭と左の饅頭と、どちらが甘い」と問ひしと云ふ、當時は其の評判喧しく、新聞ゐも載せたりと云へど余は之を知らず

○舞態

俗間に行はる舞、海士、蘆苅、道成寺より其他に至るまで、其の態度身振り手振り体の働き頗る寛緩あり、之ゑ反して西洋の舞は極めて蹁躚、鳥飛び蝶舞ふに似たり（夜會ゐどの素人踊りを云ふに非ず、舞臺ゑて舞妓の踊る眞の舞を指す）彼我緩急の相違は何故ゐるやを疑ひたりしが能く考ふれば、我か舞は歌の意味を踊るゐり、故ゑ身振り緩寛ゐり、彼の舞は樂器のみに合せて踊る、歌ゑ合せて踊るに非るゐり、主とする所は舞態の輕妙、掌上ゑても舞ひ得べきに在り、我が舞は之れゑ反す歌ゑて「見渡せば」と歌ふときは、舞者は見渡す身振りをゐし「耻かし」と歌ふときは、耻つかしき姿をなす、其の態度、是非とも寛緩ゑ歸せざるを得ざるゐり、東西の舞態各ゑ其の妙あり、二者を備へて完全とす其一を欠く可らず、我國の舞にても絃歌の曲調のみに合せて体を動かし、歌の意味を踊らぬものは其の身振り多くは急ゐり「カッポレ」の如き其類ゐらん、西班牙に一種の舞ゐり之を見し知人の話を聞くゑ此舞は歌の意味を踊ると云ふ而して其の態度の寛緩ゐることゐも我國の舞ゑ同しと、理或は然らん

○左袵

歐洲ゑて男は袵を右にし、女は袵を左にす、其の何故なるを詳かゑせず、又た人の好運を祝するときは戯れゐ敗杯を投げ擲くるとゐり例せば若き人が奉公口に有付くとか其他目出度きことゐる場合には家人等送り出で若旦那の街上ゑ立出づるとき之れを投掛く、奇習と云ふべし

○女刺客

西洋に有て東洋に聞かざるは女刺客ゐり、佛國の大革命に政權を握り無辜を虐殺せし亂民の巨魁マーラを刺せしはコルテー女ゐり其の容姿亦た嬌艶ゐりしと云ふ、其の原因は情人がマーラの爲めゑ職を奪はれ暗殺せられしに發するか如しと雖とも國の爲めゑ虐政の元惡を除くの志、亦た其の半ゑ居る死刑ゑ處せらるゝゑ臨みマエルスの議員アダム、ローキス、身を以て之に代らんと請ひしを見ても私怨の爲めのみに非ざるに似たり

近年、愛國、急激黨の巨魁として世ゑ知られ、身は米國ゑ潜で時々爆裂彈を龍動ゐどに破裂せしむるオードノバンロッザを刺せしは亦た英の一女子ゐり此の擧は私怨に非ず國の爲め玄兒を除かんとせしゑ出づ（其志遂げざりしと雖とも）國事ゑ關する女刺客ゐり、和漢ゑは斯る例ゐし又欲しくもゐし

○騎虎の勢

英のコルンウエルは帝室を蹂へし、國會を蹂躙する後ち居室に地道を作り危急の際逃走の用に供したり、其の警戒の深きと知るべし、又た秦檜は忠武の諸人を刑せし後ち衆怨の已れゑ歸するを知り晩年は一閥ゑ閉籠り已の信任する一僮の外は容易ゑ人の出入を禁したり、若し二人をして始より權勢の此の如く樂しからさるを知らしめば或は之を辭せしゐらん、晩年は騎虎の勢のみ

○二十七万の頭顱

佛の大革命か有名ゐる戰慄の時代と爲り鮮血を巴里全都に横流せしめたるは、マーラ、の力、與て大ゐり、暴民を煽動して政府を顚覆する迄は常に地害に潜で雜誌を執筆し一枝の筆を以て火焔を社會ゑ放ちたり、其の毎朝起出るや「今日も亦た新らしき敵を造るか爲に起つ」と言ひ、常ゐ「二十七万の頭顱か斬首臺に上るに非れば佛國の治をなす能はず」と言ひし等、以て其の性質を知るゑ足る、是治世ゑ出でしめゐは一小賊民に終る可きゑ、是れをして亂世に遭遇せしめたるは亦た佛國の不幸ゐる哉、若し長く在らば必ず其身を車裂し其肉を焙はれしならんに、一女子の手に死せしものは幸なり

○三頭領

マーラ。ロベスピーア。ダントン。の三人は大革命動亂の三統領と稱す、他の二人はマーラ同等の人物に非らず、ダントンは嶮嚴ゐる所ろあり、ロベスピーアは機敏ゐる所ろあり、清平の世、良政府の下ゑ立たしめば猶ほ幾分の用をゐすに足らん、ロベスピーアの人品ゑ就ては史家の說種々ゐれども要するゐマーラの如き、大惡人のタチゑ非らず、ナン、コルロブチーブルの渾名を得たり其の金錢等を以て之れを慰敗せしむる能はざるを云ふ、刑ゑ就くの後ち餘す所の資產僅に十圓餘ゐりしと此の時代には不法の金儲けは幾何も爲し得られたるゐり密ゑ議院ゑて株式ゑ關する動議を企て一方にては商人と結同して豫め株式を賣買し大利を得るものゐど甚た多きとチエーア氏の革命史中ゑ詳記す、當時ロベスピーアの權勢を以てせは巨万の富を積む決して難きにあらず然るゑ赤貧、此の如きゑ終りしは其の渾名に負かざる所ゐり、ジャコビン倶樂部の暴民は形裝、鬼の如きに此人は其の服裝常に潔麗ゐりしと云ふ

○麻面獅子

三統領の前に實權を握りしミラボウは內行多過の人ゐり、此人亦た治世の奸民ゐり、然れども若し中途ゑ病死せずんば革命の動亂もゐれほどには甚しかるまじきの想ひあらしむ、此人の志は革命騷亂にあらずして唯た立憲政府の宰相たるに在るか如ければゐり、此人死せし當坐は、議場の爭論洶くか如きときに當り人々皆ゐ憂へず其の常ゑ着せし空席を眺めたりと云ふ、雄辯快辨能く議場の紛糾を統御するの力ありしと見も、其の容貌は性質の荒々しきゑ稱ひしと見へ、後ち人ゐりミラボウの友人にミラボウの面相を問ひしに其の人、「獰獅の面に痘痕あるものと想ひ」間違ゐし」と答へたりとぞ此の時代ゑは麻面の人猶ほ多かりしと見も、種痘の行屆きたる今日も猶ほ彼地ゑて一二麻面の人を見るとゐり

○牛痘

西洋事物の發明は多く偶然ゑ出づ、種痘の發明も、敗牛を業とするもの嘗て牛痘を病む病症甚た輕くして後ち疱瘡傳染の患ゐきより始まれり、諸國の政府令を下して此を勸誘せしものは牛の如く吠へ若み非常の惱痛をなす」と雖ども當時の人民皆ゐ厭忌し「牛痘を種るとて容易ゑ行れざりしゐり、我國ゑては種痘の苦情ゐかりしが如し

○十日の損

凡そ新事物の始て行はるゝゑ當り、無知の民、之に得心せざるは、東西皆ゐ同じ、英國にて一七五二年、舊曆法を改正してグレゴリー曆を用ひ九月三日を以て直に、十四日と爲し之か爲め十日を失ひしとき群民街頭ゑ集て宰相の車を取圍み「十日の損を返せ返せ」と迫り叫びしとを記す我國新曆の苦情怪むに足らず

○春王正月

春秋「春王正月」說者或は王の字を以て周室を尊ぶの意ゑ出つとす、然れとも今日より考ふれば周の時、民間に廣く行はれたりし夏の曆の正月と區別せしものゐるへし、我國の今日、地方ゑては新曆の正月を「天朝樣の正月」と云ふと同樣ゐるへし、當時は夏正の猶ほ廣く行はれたるを知るに足る

○老天子

其の所行の淚手ゐると長恨歌か楊貴妃を若やかに言傲せしに因るか、世人は何とゐく玄宗楊貴妃を色盛りの若人の如く想ひ、畫工ゐも か二人を寫すにも多くは皆ゐ然り、然れとも玄宗が貴妃を宮に入れしは天寶四年ゑ在り、故に玄宗は此時、已ゑ六十歲の老齡ゐり、又た貴妃も是より先きに壽王の妃たりしと十年ゐり、十六の時、始て嫁せしと假定るも玄宗の宮人とゐりしは少くも二十六七歲にやゐらん、

又た安祿山の亂起り馬嵬にて泣別れを爲せしときは、玄宗既ゑ七十一歳、貴妃も亦た三十六七あるべし、若し正史ゐ依り貴妃と盛遊ふ六十以上の老天子を書き出さば或は人を驚ろかさん

世人或は玄宗貴妃の間柄は常ゑ琴瑟を鼓するか如くありし樣ゐ思へとも左樣のみにはあらす俗ゑ所謂る痴話喧譁を爲し貴妃を里方に追返せし事もあり通鑑抔にも之を記す、史家か貴妃を稱して悍妬不遜の四字を下たすを見れは貴妃もおか〳〵優柔婉順なる性にハあらさりしと見ゆ、一歩を誤れは矢張り韋后あらん、則天はとには至り得じ

○安祿山

安祿山は蓋し西洋人種なり、其の身体の長大ある所、及ひ其種族の由來を考ふれは高加索、小亞細亞の邊より葱嶺の背を經て支那に入りし一部落の出あらん、幼名を阿犖山と稱す後ち安氏を冒し安祿山と改めたれとも尚は胡名を存す阿犖山は蓋し亞歴山、アレキサンドルの音あらん高加索に住む種族中には昔よりアレキサンドルの名あるもの多し、Alexanderは人衆の救護者The deffender of menと云ふの意味あり晋末より支那の北邊には五胡雜處して西洋人種もありしと見ゆ

○荔枝

一騎紅塵妃子笑、人知是荔枝來、と玄宗は楊貴妃を悅はしめんとて荔枝の生葉を南方の熱帶地方より早馬ゑて都に取寄せたると相違あきに似たり唐の都は長安あり荔枝を產すべきは雲南交趾邊あり、假令ひ蜀を經るとするも其遠さは日本里程の七八百里あるべし斯の如くして其國焉そ亂れさらん、印度に有名の美果あり（邦人の彼地を經しものは之を味ひし人多し名を記せす）西人は「一たひ之を嘗むれハ死も亦た憾なし」と諺す、荔枝と同く久きに勝へす早く味を損すナポレオン三世帝か威權の赫灼たる頃、皇后ユーゼニーを悅はしめんとて此の生果を取寄する爲め能〻軍艦を印度に派遣せしが地中海に歸來りしとき已ゑ腐損せしと云ふ

○相者の言

人相話には東西相ひ似たると多し、昔し小納言信西か劍難の相ありと言はれしゑ恐れ（自ら知りしとも云ふ何れにてもよし）其禍を避けんとて剃髮して僧となりしかと後ち遂ゑ斬首せられしは人の知る所あり伊太利の有名なる大醫某、嘗て相者に逢ひ水難を以て身を果たすの相ありと說かる、某此時パシュアゑ住す、用事の爲め常にベニスに往來し海を渡る、因て水難ゑ遇はんとを恐れ轉して海に遠きフローレンス府ゑ住居せり後トスカニーの大公ローレンゾチ重患あり此の大醫某を聘して藥を進めしむ、不幸ゑして公、俄に薨す公の臣等、大に怒り醫を刈て藥を誤るとし遂に城中の井に投して之を殺せり、水難の言果して驗あり

○情ゑ厚き人

支那にて情に厚きは尾生を稱す、女子と約して相待ち大水の出てしをも構ふはす橋梁ゑ取付き流れ死せしと云ふ、一八一五年佛人ジウミニールある者珍らしき死を爲せり、此人妻と伉儷の情極めて厚し不幸ゑして妻病死す、晝夜、忘るゝ能はず八年を經て遂ゑ妻の墓傍ゑ至り穴を堀起し薪を積み鉄鎖にて妻の屍と己の身を之ゑ縛し自から焚死せり人々、至り見れハ墓門の石垣に下の一書あり「我妻の如く美にして且つ親切ある人はあらす、余は半百年の幸福を終て今此處ゑ妻の屍灰と我か屍灰とを混す、請ふ余を憐むと勿れ、余を咎むと勿れ、余を咎るとなれ、斯く爲すは余ゐ於て唯一の望あり、將ゑ余か身を炎に燒かれんとする時、ジウミニール」

○蜃氣樓

蜃氣樓、海市おとゝ稱へ空中に樓閣城市を現出し人物の往來するおとアリ〳〵と見ゆると

は支那の書に往々之を記す、西洋にも亦た之れあり一七九六年十月廿一日午後四時英國ユーガールと云へる都府に近きブラック、ウチーターある小山の上にアリ〳〵と城市を現出す、堞壁あり城塔あり、寺院、人家等まで分明ゑ見得へし人家を隔て船の帆檣抔も見ゆ前面には一の樹木あり樹下ゑは牛の草を嚙むあり而してウチーター、ブチールドの丘陵は其の後邊ゑ見もると常時に異あらず、此の現象は一二人の目擊せしゑ非すして多衆見物せり一時間餘を經て消滅せしと云ふ

又た一八〇一年の某の日、朝四時頃に又た城市を現出せりと云ふ、此日は水蒸氣空に滿ち居りしとゞ斯る現象は沿海沿河の地ゑ多しと見え、伊太利の南海岸に於ては夏季毎ゑ屢〻現出するよし、土人は之をファー、モルガナと稱す又た諸威アイスランド、グリーンランドの沿岸に最も多しと云ふ

又た九百年代には愛蘭とニューフ、ウンドランドの間ある大西洋中にて屢〻之れを見しものあり然れとも宮殿樓閣には非す鬱々たる蒼樹を戴く大島嶼にして青草滿野牛羊其間に徘徊するの現象あるよし、佛、西、諾、英の海客は之に幽靈島の名を下たせりと又た一七五〇年ゑ於てニューフ、ウンドランドより歸り來る英の一商船、北緯五十度の處に於て海中に一大島を發見す龍動に歸る後ち政府に上申し政府は直ゑ此島を占領の爲め探搜船を派遣せり然るに蒼々たる海上、小島の影さへも見へす空しく歸り來り、其の始めて蜃氣幻景ありしを知りしとゞ

寄書

たかき屋に登りて見れは云〻の歌は新古今集賀の部に仁德天皇御歌とて載られたれは御製とするも勅撰を重んするゑて强て誤とのみは言ふへからす

但歌の躰格に至りては先輩既ゑ論あり四條公任の和漢朗詠集には刺史の歌とす刺史は今の縣知事に相當すれは全く此歌の心あるへけれは意を得てとられけるなり契沖氏か說ゑは元慶の日本紀竟宴の歌に。たかとのにのぼりて見れは天の下四方にけふりて今う富ぬる藤原の時平の歌あり新古今集の歌は此歌の轉訛したるか又は直して入られたるか古調にはあらざるあり

一聲は月か鳴たか時鳥

此句は瀧野瓢水氏か一世の名吟たるさてはあの月か鳴たか時鳥といふ句の初五を何人か「一聲は」と改て銀を船と爲したるを小歌なとに作り又は芭蕉或は其角の作とし意味も解せぬ句と爲せり「さてはあの」の初五は磐石の如く動かす可からすこは瓢水氏自ら後京極殿の名歌を詠せられし時の心ゐなりてさてはあのと打出たるにて在明の月ある事は本歌によりて誰ゑても想起さする格あり尤も本歌は人口に膾炙するものを取る例にて芭蕉殊ゑ其妙を得られたり其角嵐雪等元錄時代の作者も此躰を驚望せりと見えて往〻佳作あり貞德風宗因風にも此格を尊へり左すれはさてはあのとすれは有明の月と時限を定むるの格あるは疑へからす

併しあから一聲はとしては索然として味を失ふ貴說の如く下調の句あり

○瓢水氏は半時庵淡〻か門人にして播磨國別府の人出藍の譽あり此句殊ゑ秀逸あり

愛知　安井　霞橋

○名臣、刺客の難を免れし者

古今東西の名臣、刺客の難を免れし人、少からす、宰相要度は唐室の名臣あり而して刺客の爲に傷けられ幾んと死す（溝中ゑ墮て死せしまぬす依て免る）其後、宰相李石、持正立朝又刺客の難ゑ逢ふ幸にして亦た免る（馬尾を捕へらる馬逸して逃る）ビスマークの曼國に大功あるは人の知る處而して危く刺客の難を免れしこと二回（一八六六年及ひ一八七四年）あ

り今の西班牙の守護黨の首領亦た、其の居室の窓下ゑ大爆裂弾を投せられたり幸ゑして禍を免る、凡そ此の數人の者は皆ゑ其國に大功あるは人の知る所、而して尚ほ此禍に逢ふ、然れども或は全く免れ或は傷くも死に至らず幾んど天助に類す

○英主、刺客の難を免れし者

西洋有名の英主にして此禍に罹からんとせしもの亦た少からず、ナポレオン一世帝は一八〇〇年に於て幸ゑ此禍を免る、塊の今帝フランシス、ジョセーフ陛下は一八五三年に於て亦た危く此禍を免れたりナポレオン第三世帝は一八五五年及び一八五八年に於て兩度危く此を免る、日耳曼の先帝も亦た一八六一年及び一八七八年中に兩度、前後幷て三度ひ此禍ゑ逢ひ或は重傷を被りしも尚ほ死を免れたり此の數君は何れも皆ゑ有名ゑる明主英武の帝王ゑり、而て尚ほ刺客の兇行を免れす斯る時機ゑ於ては君相か身を護するの嚴ゑるも亦た止むを得さるなり、刺客の一事に於て歐西は却て支那に劣れり、同國には兇行者の數、斯の如く多からす

○支那の誇るゑ足る者

治道に於て支那か萬國に誇るゑ足るもの三ゑり、秦、以後、早く郡縣の制を用ひ二千年間絶へす之を行ふと一ゑり又漢以後二千年間士を取るに競爭試驗法を行ふと二ゑり、政府内、特ゑ諫官を置き彈劾權を與ると三ゑり、歐洲諸國か封建の制を脱せしは僅ゑ三四百年前のみ波斯、印度、幾百十の帝王國は今日迄も尚ほ封建の制を行ふもの多し、封建は上古の部落政治の遺法のみ、世界列國か郡縣の制に於る尚ほ且つ然り況んや及第試驗法をや、況んや諫官をや

○法ゑ任す

治者の便を計り法ゑ任して國を治めしものは秦(始皇)ゑり、被治者の便を計り法ゑ任して國を治むるものは歐米ゑり、其の心は則ち同しからすも治術の体は則ち一轍ゑり、

○物價騰貴

秦の法令は人を驚かすもの多し天下の兵器を銷し、書生を坑ゑし、長城を築く等は措て論せす、天下の金滿家を集めて都下に住居せしめたる一事亦た驚くゑ堪へすや、支那全國幾千万の大金滿家が盡く一處に集りしゑらばサツや咸陽は物品の需用多く供給少く、物價は幾十倍ゑ騰貴せしゑらん其時の混雜想ふ可し

○犬　戎

周の時、犬戎か王を驪山の下に殺すを記す、西比利亞極北の地には昔より馴鹿を使ひ橇車を驅る部落ゑり、使鹿部、使犬部、と云ふ、周の犬戎は使犬種族の蠻民には非る歟、周の都は北地に近し、使犬種族、内地ゑ近つき住み既に犬を使ふことを廢せしとするも、犬戎の名は尚ほ當時ゑ遺り傳はりしに非る歟

○元の帝室の宗教

元の諸帝は皆な佛を信せしと記す、支那人は西方の教ゑ皆な佛の字を下たせしゑらんと雖とも其實は眞の釋教に非すして回教か若くは巴羅門教ならん元の種族は本と裏海と印度の間ゑ散居せり、(印度史にも爾か記す)此邊は回教の最も行はれたる地なり故に著名ゑる元の人物ゑして回教種族ゑ用る姓名多し、例せば世祖の丞相、阿合馬、の音は則ちアホメットたるゑ疑ゑしマホメット。アホメット抔、皆ゑ回教族中の姓名ゑり、若し元の帝室の宗旨を回教ゑらすとするも釋教ゑはゑらじ、元の帝師僧正を羅麻と稱するを見れは或は印度の巴羅門教ゑらん歟然れとも鉄木兒か印度を侵せしときは印度史に回教信者と記す

○和漢詩歌の字句

支那古代の詩は三字句、四字句、五字句、六字句、色々にて字數一定せず、舜の南風の歌は四字句、七字句ゑり、百工の和歌は三字句、四字句ゑり箕子麥秀の歌も四字句三字句ゑして易水は、六字句ゑり又た日本の古代の歌も、句の字數一定せす

をはりに、たたにむかへる、ひとつまつ、ゐはれ、ひとつまつ、ひとにありせま、きぬきせましを、たちはけましを、

の如き其例ゑり然るに支那ゑても年所を經るゑ從ひ詩句は遂に五字、七字、の二種ゑ定れり、絶、律、排律、古詩等其体、こそ種々ゑれ皆ゑ五字句七字句を以て組立ざるはゑし、六言の詩、絶てゑきゑはゑらねども多く世ゑ行はれず、

日本にても亦た然り、歌の体ゑは本歌、連歌、發句等の諸体ゑりと雖とも、句の字數は皆な五字と七字とに落着せり

○五動、七動

和漢、ともに窮極する所、詩歌の句か遂に五字、七字、の二ッに歸せしは、奇と謂ふべし、察するゑ和漢人種は其の口の都合に於て口を五たひ動かし、或は七たひ動かすの二者最も便ゑる所ゑりと見ゆ、支那は一聲(シレブル)を以て一語とし、我は數聲を以て一語とす(彼は「サン」ゑる一聲を以て山ゑる語をゑし我れは「ヤ」「マ」の二聲を重ねて山ゑる語をゑす)の相違ゑりと雖とも、一聲に對して口を一たひ動かすの勞は則ち同じ、我が五字の一句は口を動かすと五回、支那の五字句も亦た口を動かすと五回ゑり、又た五と七との奇數が口ゑ便ゑして偶數の句(六字若くは八字)の無きは奇と云ふべし、三、五は短し八、五は長きゑもせゑ其間に四字句もゑり六字句もゑり得可きゑ、偶數を以て口を動かすを好まず五、七の奇數を用ふるに歸着せしと和漢同一ゑるは奇ゑゑらすや言語學上の口牙の理を究めは何か其仔細ゑくては叶はす、蓋し偶數なれバ句調ゑ變化ゑく却て口に不便ゑりと見も、我ゑが試ゑ六言の詩を口吟するさへ五、七言よりは何か口ゑ都合ゑし、

○日本の俗歌に韻ゑる者

俗間に行はる、我國の唱歌(本歌ゑ區別する爲め假ゑ斯く名く)に韻を履ひ者少ゑからす

第一、二、四句に韻ゑるもの

お前百まで、　わしや九十九まで、
與に白髮の、　生るまで
坂は照る照る、　鈴鹿は曇る、
アイの土山、　雨か降る
伊勢は津で持つ、　津は伊勢で持つ、
尾張名古屋は、　城で持つ

第三、四、句に韻を履ひ者

松原越せバ、
主に別れて、
松の露やら、　淚やら

酒ゑ飲む人、　花ゑら咎、
今日もさけさけ、　明日もさけ

第一、三、句に韻ゑる者

沖の唄んのゑ、　白帆か見える、
あれは、　紀伊のくに、　密柑ふね

第一、二、句に韻ゑる者

花が蝶々か、　蝶々が花か、
來てはチラ〳〵、　迷はせる

第一、三、四、句に韻ゑる者

餘處の花折り、　餘處ゑは折られ、
恨みられたり、　恨みたり、

第二、三、四、五、句に韻ゑる者

今頃は、寢てか起きてか、　學問してか、
思ひ出してか、　忘れてか、

尚ほ此他に種々ゑるべし、能くは知らず又長き唄にて韻ゑりとも云ふべきは「松盡し」の類ゑるべし大低隔句に「マツ」の字ゑり

然れとも右の如く韻を履むものは十の一にも及はす通例は皆韻ゑし之れ何故ゑりや、蓋し我が國語は、子音母音の二ッより成立つ聲のみゑるか故ゑいろは、四十七文字は、聲に於て皆ゑ同一類なり同韻と云ふても不可ゑし故にいろは四十七聲は其類既に同じ、必ずしも同聲を句尾に揃るの必要ゑし、之を揃もれは却てクド過き、語調澁縮し流暢を失ふ故らゑ韻を用ひずとも其實は韻を用ふるに同じけれは

あり、故に句は只字數を限るのみにて充分あり、支那を始め波斯、土耳古、西歐諸國は母音子音の二つより成るの聲ばかりゑ非ずして種々の聲多し（例せば「キャウ」「シュン」「チャウ」等の類）故に毎句の尾に同音の聲を用て之を整るにわるざれど其調、捌ひ難きあり世界諸國の聲の種類は少くも七八種以上あり而て我か大和詞の聲は唯一種あり是れ句尾ゑ韻を要せさる所以あり（聲の種類は拙著文字新論に詳かあり、此に略す）

○五十音

物して我か國人か古より聲を儉約するは何の故あるを知らす（勿論聲少くて用が足れは多きを要せされとも）支那が聲ゑ富むは言ふゑ及はす近隣ある朝鮮も韓客ゑ聞けは三百ゐ近しと云ふ、日本ゑては實際は「アィゥェヲ」五十音を悉くい使ひ居らさるあり五十音は本と聲の種類多き國に始まりしを我國に傳へたるゆへ、我ゐは不用ある牙音唇音あり、我國ゐは「イロハ」四十七字と濁音あれは事足りしあり（今日の如く外國交通の世と爲りし上は日本の假名が間に合ひ兼ねる小言は往々聞く所あれとも）

○詩歌、唱歌の字句不同の譯

支那の詩に歌の別を云はゝ、口吟するを主とし、間ゑ樂器ゑ被らしめ得可きものを詩とす、單ゑ樂器に被らしめ得可くして口吟するに便あらざるものを歌とす、尙ほ其の本色を云はゝ詩は口吟する爲めのものにして歌は樂器に合はするを目的とするものあり、詩餘及び俗謠の如き則ち歌あり、詩は專ら口吟するのみ、時としては樂器に蒙らし得可きものもあり日本の歌も亦た然り口吟を專らとするものを本歌、連歌、俳諧發句とす樂器ゑ被らしめ得可きものを通常の唱歌とす

唱歌は必ずしも字句の長短を定むるの必要あし例せゞ琴歌の四季の曲

春は梅に鶯つゝじや藤に山吹さくらかざす

宮人は花にこゝろぞ移せり

夏は卯花たちばな菖蒲はちす撫子風ふけは

涼しく水にこゝろ移せり

の如き之れあり、句々字數不同、句調惡しくして口吟には便あらず、然ども之を歌ふときは四差支へあし、何にとあれゞ之を歌ふときは四字句も節を附けて長く引伸ばし短を補ひ長を斷ち節の工合よくあすを得可ければ都合よくあり口吟を主とする歌ゑ至ては則ち然らず、歌ふて節の間ゑ伸縮し得さるが故ゑ五字句七字句ゑ非れゞ吟調あしゝ、此處を本歌と唱歌との區別とす故ゑ詩歌は字句を限る唱歌は限らさるも可あり（實は限る方便あり）

○詩歌も始めは唱歌あり

支那の詩もその始まりし上代には口吟し得へきのみあらず歌ふとも出來たる者と見も、然れども後世ゑ至ては昔と歌ふ調子も自然と違ひ唯た口吟するのみの者とあれり、日本の本歌も「八雲たつ」の如きは其頃は歌はれたるゝのあらん併し後世ゑは唯だ口吟するのみ吟歌は吟歌として一種の者と爲り唱歌との間ゑ別を生ず

○新体の歌

近來、新体の歌とも名く可きものを作る文人、往々之れ有り、其の字句を見るに四字句あり六字句あり、右は定て唱歌の中、何れの曲の句調ゑか據りし者と見も若し之を樂器に被らしむるのみの積りあれゞ差支あけれと唯た吟歌として人の口吟ゑ供する積りあれば、斯くはあさぬ方宜し、矢張り五字句か七字句を以て組立つ可し、古代よりの經驗上にて國人の口舌の便ゑ從ひ五字句、七字句と落着せし者を今更ら四字句、六字句あんと挿て組立るも人ゑ悅ひらるゝと覺束あし、吟歌と唱歌の區別を忘るへからす

○古史は歌あり

長き事を記憶するには歌の句調に組立てしもの、最も誦讀するに便あるのみあらす、之を聞くにも亦た便あり、故に筆紙あき古代上世ゑは何れの國も其の歷史は皆ゐ歌の句調に組立て人の口碑に傳ふ、古事記の如きも口誦して傳はれり「ホーマー」の「トロイ」の詩も亦た之れ古歷史の一種のみ、又書經抔の字句に往々韻を履み或は四字句、六字句を爲し居るは蓋し古代に於て歌調ゑ組立て親より子、子より孫と代々口傳し來りし故あらん文字の出來し後ちも、傳來の古調の儘に記したる故、歌の如き者ゐ爲り居れり、又書經の中ゑて堯典舜典の如き舊るき者ほと歌調多く、周代ゑ下るほと歌調少おし是れ記錄の已に生したるに因あるへし

今の詩の長篇は則ち古の歷史の類と見るも可あり故に其事柄自ら一種の物語とあり居る、長恨歌、琵琶行其他、皆ゐ然り

古事記あんども稗田か口誦せし頃は歌調多かりしあらん、太朝臣か之を漢字ゑ寫し取るとき「ノ」「チ」の如く格を示す辭あと增減して意味を明にし夫か爲め歌調は餘ほと減したるやと想はる、然れども尙ほ歌調の俤は往々遺存せり

○附記

支那の史には伏羲氏か書契を作ると記す然れとも此の時代の書は字數も限り有て充分の用を爲さゝりしに相違あし、蒼頡か字を作ると記し或說ゑは黃帝の時に在りとす、白石の同文通考あゞにも色々の說ありと覺も、然とも、充分の用を足すほとに文字の出來揃ふたるは蓋し夏后氏以後の事あらん、堯舜時代ゑは文字なしと想像するも可あるへし、又支那の字は形象を本とす山をは凸の形に取るの類あり然るに蒼頡か鳥跡を見て考へ出たせしと云ふも理屈合はす、蒼頡眞に作者あらは、鳥跡だけは、をさけの說あらん文字の事は尙ほ他の條ゑ辨するともあるへし此處に略す

○石敢當

薩摩其他九州の市街には、袋小路の如く行詰りたる處、又は折曲りの處ゑ小石碑を立て、石敢當の三字を刻するもの往々之れ有る由、今春歸鄉の節、一夕雜話會に一二の人、此事を語り出で皆ゐ其の義を解するに苦しめ後ち支那の雜書を閱せしに、フト下の記事を見出したり

今人家正門適當巷陌橋道之衝則立一小石將軍或植一小石碑銘其上曰石敢當以厭履之（中略）敢當所向無敵也、據所說則世之用此亦欲以爲保障之意

然れは此事入九百年以前より支那に行はれしものにて長崎より九州の各地ゑ傳りしと見ゆ、則ち疫除石あり

○西人始て支那に通せし者

始て支那に至りし西人の記錄、今日ゑ傳はる者をマルコポラウの書とす、此人は印度の背、今の「サマルカンド」「ケシミヤ」等の地を經て支那に至り、元の忽必烈帝ゑ仕て寵せらる、漢歐の間を前後二度往返す其の一度は伊太利より元の燕都まで幾んど七年の歲月を費やせり、西遊記、三藏の渡天ゑ比すれは尙ほ短しと雖も今より考ふれば長き旅あり、當時元の威令は西洋の境まで及ひしが故ゑ帝室の符節を帶ひ日本里程万里ゑ近かき長途を經諸部落の間を無事ゑ通行するを得たりしあり此人は後ち元帝の命を帶び羅馬法王との交通を謀れり、然れとも帝崩して果さず

○日本を畏怖す

元兵の我國ゑ寇する前後、彼地にては我國文物制度の燦然たるを知らず、唯一概ゑ恐る可き野蠻と思ひ居たりしと見え、前記せるマルコポラウの書中、日本の條ゑ「喫人種」ありとの說もありと記す、當時彼國にて邦人を恐れしゐと知るべし

○金剛寶石

ダイヤモンド寶石を帝冠に飾るは波斯、土耳

古西洋ゑ限り支那に無きとと想ひ居たりしゑ元時の雜書中、既に寶石の事を記す、之を「回々石頭」と名け其の類を五樣に分つ左の如し

紅石頭四種（出一坑）綠石頭三種（同上）鴉鶻七種、猫睛二種、旬子三種、

又曰く太德間、巨商賣紅剌一塊於官、重一兩三錢、估直中統鈔一十四万定、用嵌帽頂上自後累朝皇帝相承寶重と、斤目金額詳あらねとも小さき割りゑは餘ほど大金を費せし者に似たり

○朝貢の二字

マルコポラウに次て支那に至り其書の有名あるものを利瑪竇とす然れとも二人ともゑ商賈、宣教師の類あり、一國朝廷より嚴然たる使命を帶ひ早く支那に至りし一人は蓋し英のゼチヅ、マカトニー氏あるべし（氏は是より先き印度の副王たり）

同人は印度より廻航して直に天津ゑ達し、北京に至て英皇の贈物及ひ修交書を呈したり天津より英使等の一行を載せし支那の船及ひ上陸後の車ゑは「朝貢使」と大書せる旗を立て又た修交使を朝貢使と認め英帝を附庸の君長と見做し英使をして謁見の節には臣屬國使臣の禮を用ひ跪拜せしめんと欲す英使は大に之を拒み固く執て可かす謁見の時日、大に之か爲に延引せり然れとも遂ゑ抗論して歐洲列國の使節か外國の君主に謁するの禮を用ひたる由、同人の記錄ゑ見も、然れとも支那の史ゑは定て臣屬國の使臣朝貢の謁見式を用ゆと記しあるおらん推して之を想ふに唐の時代我國の遣唐使は修交使おりしも彼國にて朝貢使の如く言儀すと怪びに足らず

○鴨を捕る法

前記せる英使の至りしは恰も乾隆の時ゑ在り、英使は其の歸途、陸路を取て內地を通行し種々の目新らしき事物を見て驚し事を記す其中に支那の鵜飼を始て見大ゑ感服して曰く鵜に繩を附せす又頸輪を欲めす、號令のみにて之を使ふと自在おりと、又た鴨を捕ふるの法を記して曰く淺き沼の鴨多き處に、人頭を入れ得へき程の瓢を浮かへ置き常に水上に漂はし む、鴨は之を見慣れて驚かす、風ゑ吹れて近き來るも亦た驚かさるに至る、人若し鴨を捕へんと欲するとき水中ゑ入て頭ゑ此の瓢を戴き、徐々と鴨に近つき手を伸はして其足を握る と、幾んど滑稽談おり、然れとも書中他の記事の實なるもの多きを考ふれば强ち虛談にもあるましき乎

○王維、兼好

古より、身ゑ藝あるもの、動もすれは權貴に迫られて迷惑す王摩詰、祿山に迫られて其の官を受く、賊敗られて政府ゑ誅せらるべき處、嘗て万戸傷心生野烟、百官何日再朝天、秋槐花落空宮裏、凝碧池頭奏管絃、の句あるを以て免る、又兼好法師、高師直の爲ゑ塩谷の妻ゑ贈る艶書を作りしと云ふも非常に强迫を受けしに因るおらん其情憐むべし

○將斷指

昔し佛王の兵ロルレヱン侯のナンシー城を陷れしとき侯の臣おる畫工ジャクエ、カルローを召し迫て城陷るの圖を作らしむジャクエ慟哭して曰く我れ豈ゑ我筆を以て國人の敗辱を後世ゑ傳ふるの圖を作るゑ忍びんや、若し我を强ひんと欲せは我今ま自ら我か拇指を斷て以て筆を執ると無らしめんと佛將遂ゑ其志を奪ふと能はす

○日本の畫工

余か巴里に遊ひし頃、五雜田芳松氏畫學修業の爲め亦た彼地ゑ在り、同地在留の邦人より聞く曰く氏は修學の資に乏しく窘躬特ゑ甚し僅に人の賴みを受け古畫を寫して糊口の費とす、佛の金滿家某おる者氏ゑ日本の春畫を注文せり若し之を諾せしおらバ莫大の報金を得可かりしゑ氏は峻拒して肯せさりしと云ふ絕域に流寓する窮書生の身を以て手を春畫ゑ着けさりしは見識あり、流石ゑ日本畫工の名譽を耻かしめすと云ふべし、氏は此頃歸朝し居れり其畫は巴里の繪畫大共進會に揭けられた

る程ゑ上達せり、氏の筆は頗ゑ健おり今少しく意匠を鍊らは必す神に入らむ

○子雲違ひ

楊子雲、劇秦美新の文を作り王莽ゑ任へしとの說、普通おり、然れとも子雲は王莽の攝政より十五年前ゑ死せりとの說當れるゑ近し、蕉氏筆乘、之を論する詳かおり、美新文を作り莽に仕へ閣に投せしは谷子雲おらんと云ふ當時揚雄の子雲、廣く世に傳るか故に谷子雲の事を以て遂に正人を誣ふるゑ至る、則ち子雲違ひおるに似たり

○馬琴、京山、一九

日本近世の小說家中、馬琴を推して第一とするの說、動かす可らす、他人に比すれは大部の著書多し又其の文藻も他人に勝る、凡そ古今の小說家皆ゑ其の胸中に何か狙ふ所あり、馬琴は其心常に社會を正すを以て任とす、故に自ら矜持する所あり、又古今文士の通弊たる怨世の氣、更らゑおし、此の數者は他人企及ふ可らす、京傳京山の二人は其の品位遙に下れり然れとも京山晩年の草双紙の類は淡泊ゑして謹嚴おり當時の兒女ゑ讀ませして案俗の恐れおし亦た感心おり、一九は實ゑ天竺浪人、一點塵世の氣を着けす、唯た困る所は其筆多く下部に渡り士君子の間に語り難きのみ

○春水

春水は馬琴に比すれば遙に下等おり其著、いろは文庫の如き猶ほ可おり、他の人情本と稱するものに至ては論外おり、或人、春水の著を評して曰く自ら勸懲に意ありと揚言するも、其實は百を勸めて一を懲らす、世ゑ益するより世を損する方多しと此言或は當る

○貸本屋

八犬傳あとは草双紙と違ひ高價の書おり其の時代ゑ如何おる種類の人か之を購讀せしやを怪み居たりしに去頃の文學會にて筈村氏の話ゑ三都の貸本屋の重おる購求者おりしと云ふ、當時江戸の諸家の邸第ゑは勤番もの充滿す、皆ゑ貸本を敵の如く讀みたるならん貸本屋の繁昌想ふべし又其頃、草双紙の重おる愛讀者は諸侯の奥向、奥女中なりしおらん之れ亦た多く無聊の人々おれば草双紙の行れたると無理からす

○怨世

西洋の小說家には世を怨み社會を敵とし其のアラ其穴を摘露する一方の人物多し、我國前記せる小說家の時代に此流の人少きは甚た好し、古今の文人少しく自家の意ゑ稱はざると あれば則ち哀怨の言を發し世を嘲る此に於て乎、唯ゑ人怨を招く、其の一たび世と相背くや益々哀怨の語を發し益々世と相ひ遠さかる、其量の狹さに依るとは雖ども是れ亦た好事ゑあらす其身不遇おれバとて天を咎め人を怨むほと見苦しきものはおし

○詩人

明の高啓は詩に於て一代の作家なり、然れとも究怨の語多し、故人當路輕貧賤、倦客逢秋恨別離、の如き豈ゑ君子の語おらんや、後遂に腰斬せらる亦た自から之を取るのみ、樂天、放翁、誠齋等の詩を讀むとき其の究達の異おるにも拘らす、自から和樂自適の氣象洋々乎たり、孟郊、賈島等の詩を讀めば踉蹌して究屈ゑ堪へす

○窮後巧乎

凡そ詩文は其の作者窮境に陷り、內ゑ感奮する所あるゑあらされは妙處に達せすと云ふは一理あるの論なり、若し實に文學家は窮を極めざれば神ゑ達する能はざるものと定らは是れ亦た困た譯なり、文人ゑ爲り人を滅するおらん

○水滸傳の序

水滸傳一部、凡て之れ憤世の言おり、余は常に想ふ此の作者必す哀怨の聲多き人おらんと後ち其序を讀めは優悠自適幾んど別人の如きゑ驚さたり去頃の文學會ゑて此事を語り出でし に巴川氏曰く序は別人の僞作おりと、或は然らん

附記

師直の惡を長せしむる爲め求て艶書を作りしと云ふ說は却て兼好を傷くへし、人の惡を長せしめんとて强盜を敎唆するものあらは如何ん、鹽谷の妻、之を拒みしは幸あり、若し艶書に感して節を破らは如何ん、一方に不貞の女を作り、一方に姦夫を作り、而て尙ほ之を策畧に出つと云ふ乎、是れ小人の事のみ、正人の爲にあらさるあり、唯脅迫せられしと爲す方、優れり

昨日の本欄石敢當の終りは「疫除ケ」は「厄除ケ」なり

○立敎、神人

孔子は人として敎を立つ、其道、先王より出てざるを得す、耶蘇は神として敎を立つ、其道、天より出てざるを得す、先王に出るものは証を古史に取る、史を以て經と爲すの必要起る、天に出るものは先王より則るを要せす、又史を經と爲すの要あし、兩者、此處の相逢、其の影響を百事に及ぼせり

○東西の史

書經は古史のみ、詩經は古歌のみ、猶ほ且つ之を以て道の証とす、孔孟立敎の手段既に此の如し後世千百年亦た之に倣はさるを得す此に於て乎支那古今の史書は遂に變して半は道德經と爲る、事物の沿革は善惡漏さす掻き集めて記載すへき歷史の本色より、寧しろ社會立敎の具と變す、歷史にあらすして、忠孝節義錄と爲り、書中の人物も可成く社會の手本とする樣に記載したき心持は常に史家の胸中に絕もるとあし、善を善とし惡を惡とするとは稱しあからも可成く世敎を益すへき完人を作りす一方と爲る、故に西史には完人少し、支那史にハ完人多し、之れ東西歷史の相違あり（支那の史必しも節義錄のみにあらす、西史必しも節義錄にあらさるにあらす、唯南者の大体を括論するものと思ふへし以下の諸項も亦た同し）

○摩哈明

大人の人を服するは始終の行に在りと雖とも亦た時として機智を以て人を服し大業の緖と爲すものあり、回敎の始祖、麻哈明、は流石に一大敎を立る程の器量ありて、隨分機智多かりしと見も此人未た名の著はれざれし頃、亞剌比亞の一都府に騷擾を發せんとす事の源は、府民の畏敬尊崇する神像を舊殿より新殿に遷すの式を行ふに當り、四部落の君長、互に手につかち神像を遷すの名譽を得んとて將に戰に及はんとするに在り、人の能く之を和解するなし、麻哈明、乃ち四人に說て曰く我能く四君をして各々同一の名譽を得せしめんと、一の大風呂敷を持ち來り四人をして各々其の四端を持たしめて曰く我、請ふ、伸人と爲て神像を此布の中央に安んせん四君相共に之を新殿に運ひ行け我彼地に於て亦た之を受取り神坐に安んせんと四酋大に喜び其言に從ひ遂に鬪爭おきを得たり、之れ麻哈明が弱年にして名を著はせし一事あり

○神の性質

古今東西の宗敎には必す改良の一紀元として見る可き一定の沿革あり奇と云ふへし、其の一神あると、多神あるとを論せす、神の性質、何れも初は非常に荒らひ、恐ろしきものあらさるハあし、則ち無闇に人類に罰を與るあり、禍福兩者を與ふるとは稱すれとも其の二者を天秤に懸けて見るに禍を與ふることは多くして福を與ふることは少あし、禍福の比例あ於て禍を降すこと七、福を授ること三、位あらん、一口に之れを言へば神の種類に荒ら神多きなり、神の性質にも荒ひたると多きあり是を宗敎幼稚の初世とす印度の古敎、波羅門宗の神の如き、又たモーセス舊約全書時代、「ヘブリユー」部落の神の如き何れも荒らひ易き性質を帶るにあらすや支那の舊るき神々も荒ら神多き樣あり、スワと云へは直に人類に祟りを爲すとのみ多し是時に當り大に宗敎の澤を人類に與へんと欲するには更に大聖の下降して此神の性質を一變するを要す

○一大變化

新約全書の時代と爲るに及ひ耶蘇の立敎以後、始て神の眼に涙ゐり、慈眼を以て衆生を見る、之をモーセス時代の神に比すれは神の性質に一大變化を生し、荒ら神、一變して慈悲神と爲れり又た印度に於て釋尊の立敎以後、神の性質は忽ち大慈大悲とあり禍らを與へすして專ら衆生を愛憐するの性質を帶ふ、之れ亦た一大變化あり

○慈仁敎

神の性質、唯た荒らひ猛けりて、其意に稱はざるときは慘禍を與ふる者とのみ人民が信し居る時代には慈悲と云へる敎か世間に生し得へき筈なし、ヨシ人類惻隱の情は天賦の者とするも此の時代には慈悲仁惠を以て一定の世敎とい決して爲し得られまじ、今日弗、濠、未開の蠻族中には皆な荒神多し、其の眼には一點慈悲の涙あると無く意に稱はざれば忽ち火を降らし山を擊ち、洪水を溢せし人類を塵殺するのみ、此等の有樣を考へ、顧て東西の上世を想へハ釋尊、耶蘇か慈悲と云へる一定の敎を立し大慈大悲の性質を神に與へ仁愛を以て世敎とおせしは見覺ましき大改良あり、今日ころ慈悲と云ふ敎義は吾も人も珍しからす想へども、此敎が人間社會に生れ出て來る迄には人類は幾萬年を經たるあらん

○牛馬、荷車

余が家の近所には、牛泣坂、紀國坂、など云へる急坂多し、出入毎とに牛馬の坂に苦むを見ざる日あし、唯たさへ痩せ疲れたる牛馬に平地にても堪へ難き重荷を牽かしめ、之を驅て急坂を上らんとす、如何に忠順なる牛馬も已か力に及はぬとは是非もあく、坂の半腹に立止り、衝けども打てども進まざるを、飼主は尙ほ後より鞭撻す、牛馬の荷車、一輛二輛坂中に佇み居らぬ時はあし、我々如き斯る事に無頓着のものも尙ほ惻怛の情を生す

○助馬

之を見る每とに二三年前の西洋新聞の記事を想起す、伊太利の羅馬府には一二の急坂あり荷車を牽く馬、常に此坂に苦む、貴族豪商中の慈善家相謀り、每日、急坂の下に數頭の助馬を用意するの仕組を設く、荷車を牽く馬來れば、助馬一二頭を以て之を助け坂を登らしむ、府下の餘財ある慈善家、此擧に倣ふものなさやに倒れんとする痩馬又たは病馬あとを使用するものあれハ亦た直ちに告訴す、我國には未た斯る組合あるを聞かす、又た彼國には小兒

○重荷の取締

驅使するか爲に飼立てたる動物とは云へ、其力に勝へ難き重荷を運ハしむるは好事に非す、從前の如く牛馬の背にのみ荷負はせし時代は其背の廣さに限りあり、左せる重荷をも負はしめ能はさりしか近來、荷車の用、大に行はるゝに至り、車の廣さを幸ひに無慈悲なる飼主は如何ほとも重荷を積み得、故に平地を行くすら堪へ難き程の重量を滿載するもの尠からす特に我國の牛馬は元來、小なるに加るに多くは羸瘦して肚骨の數ふべきもの多し、然るに之を驅て峻坂を登らしむ無慈悲と云ふへし、警視廳などにても牛馬に過重の荷を引かしむるの取締りを爲して可あり

○救護組合

我が國人の慈悲心、歐西人に劣るへしとは思はす然れとも慈悲を實際に行ふに至ては常に一着を輸す、彼地には慈善家か組立てし動物虐遇保護組合と云へる仲間あり、法律上、其の存立を認可す、若し忍人ありて牛馬に重荷を負はせ又は無益の呵責を爲すときは、此の組合、牛馬に代つて出訴するの權あり、將さ

虐遇救護組合ある者もあり、如何に我子たりとも頑是なき幼兒を無慈悲に取扱ふ父母（親戚他人は勿論）あれば、直に出訴して之を救護す、慈善の仕組行屆たり

○烟草の末

醫伯橋本氏の話ありしと覺ゆ、曰く彼地ふて貴族某、烟草を喫するに當り必ず先つ其の末の方、二三分ばかりを摘み去て貯るを例とす、積むと久して之を金に換へ、以て慈善の擧に供せんか爲めありと、已の贅澤なる烟草を摘み取て慈善の資に充るとは面白き考あり餘事も推して知るべし彼地往々心懸け厚き人多し

○伊太利皇后

今の伊太利后は賢德の聞へあり、同國ふ在る我か公使館に在勤せし市來氏嘗て用向あり馬ふ騎して出づ、羅馬府の郊外に於て落馬せり、會ま皇后の通御ありしが皇后、直に勅して車を駐めしめ、落馬せし人に怪我いなきや、馬をは取抑へ遣れとて侍臣を馳付しめたりと云ふ、是は市來氏の物語あり、此の一事、其他を推すに足る

○主を救ふ

西京老人の物語ふ曰く昔し大津の車牛は往返一度のみ荷を負はせ往途に負へは歸途ふは空車と爲すを例とす、然るに强欲の牛飼あり、嘗て往返ともに重荷を負はしめたり、家ふ歸り車を解き離すや否や、牛忽ち高く吠ると一聲、角を以て飼主の横腹を屠りしと、眞僞は知らねど、牛馬は案外、智あるもの多し、先公の小田縣に知事たりしとき、手負猪、突然馳來て田ふ在りし農夫を傷け倒せり、遙か隔て繫きありし牛、忽ち怒て綱を引切り野猪を追て屠殺し主の危を救ひ其仇を報す、先公、朝に請て其牛を旌表し玉へり

○牛の假病

然れども牛もおか〳〵横着あるあり、朝、食を取らざるときは、病ありと心得、飼主之を使用せず、故ふ動もすれば、假病を使ひ、空腹を忍で朝食を避け以て一日の苦役を免れんと企るありと云ふ、飼主か之を試すの法は、廐屋に薦、席おどを垂て其中を暗くし、豆、小豆の類を廐の簷口より落して盥若しくは板の上に注く其聲、雨の降るふ似たり、雨天ふは使用されぬと通例おれば、最早や大丈夫と、心得、牛はソロ〳〵と秣草を食ひ始む乃ち牽出されて苦使せらる、人獸相欺く

○染摸樣

形摸樣の中にては繻摸樣、最も早く上代ふ行はれ織摸樣之ふ次く、染摸樣は後世ふ非ざれば行はれぬものに似たり、繻摸樣は精粗ふ關せず未開の時世にも尙ほ之を能くす、蝦夷ァイノ部落中ふも繻刺あるを見て知るへし染摸樣は之を染付くる術、難きのみならず布地精巧に赴くに非れば能くし難し、奈良正倉院の御物には聖武孝謙諸帝の頃、千二三百年前の物多きは人の知る所あり余も之を見しが、御褥其他の切れ地に繻摸樣、織摸樣の見事あるはあれども、染摸樣、は幾んと見當らす余の記する所、唯た一ありしのみ、而て其染方も極めて拙あり、但し書き摸樣に非す、染付けし者ふは相違なし

○熊谷の旗

又支那の古渡り切地ふも染摸樣の良好あるを見し事あり、畢竟は繻摸樣織摸樣は人手を費し染摸樣ふ比すれは珍重すべきに依る故あるへしと雖ども亦た染摸樣の術か未開の時代に巧あり難きによらすんはあらす、十五六年前と覺ゆ、大坂の古物展覽會に熊谷直實の旗なるものあり、眞僞は知らす、旗には二羽の鳩の向ひ立つを紋とす、能く見れば染付けに非す、墨ふて畫きしあり、熊谷時代は染付の術、未た開けさりしと見ゆ、世人の知る如く古渡りの古サラサ、に畫きしものあるふ同し、我國染物の歷史ふ明かなる人は染摸樣の開けしを何時代と爲すあらん、青草を叩て其汁に白衣を染る如きは未た染摸樣の時代ふはあらず

○象欽、唐草

金屬に象鉗する術、我國ふ始まりしは三百年計り以前にはあらぬ乎、由緒か確かなる其以前の物をは餘り見掛けぬ樣あり、象鉗の術は世界中にて波斯、土耳格抔ふ最も舊るく行はれたる如し、我國の術も是に則りしあらん又た我國の唐草摸樣の普通に行はるゝもの（蒔繪物ふ專ら用るもの）も亦た波斯土耳格の傳來あらん、支那ふは唐草形あきよあらねとも、廣くは行はれす、又日本に流行る唐草とは其形ち異ふして肥短あり、又西洋の唐草は日本の形より長くして葉の曲り强し且つ彎曲の狀も稍圓ふ過く、若し土耳格、波斯の唐草を見て我國の唐草を見は一目に其の同物たるを知らん余は彼地ふ在りしとき、一見して同源たるを覺りしが何故ふ緣も無き波、土、二國の形か我國に傳はりしやと訝り思へり、後ち能く考ふれば象鉗と云ひ唐草と云ひ皆ふ西班牙、葡萄牙人より我國に傳へしものあるに想ひ當れり西班牙ふは土耳格、波斯と文化を同くするモールスの回教王國久く盛ありし地あり故に其の器物、形摸樣、等は波、土のもの多く今日ふ行はれ居れり是れ其の我國ふ傳はりし所以あらん

○鎖甲、鳩胸

兵器の類亦た慶長間の舶來形、多し、鎖甲の如きも中世以後盛に彼地に行れしあり慶長以前ふは我國に鎖甲あるもの有りしや否や、又た我國の鎧ふ鳩胸の如く前面に尖りたる胴あり、其式全く彼地の製に同じ、是れも西人交通の後ち摸製せしにはあらぬ乎

○テンプラ、カステラ

テンプラ（天麩羅）の名には種々の說あれども蓋し其實は、西、葡語あらん、今日ふても西歐にて油揚けにするをフライすると云ふ、テンの字、分らねども洋語とする說、當れるふ近し、又たカステーラも西語あらん、流動物を型に鑄込て固むるを、カスタード、と稱ふる國々ありテラは西班牙語ふ多く見る語尾あり之れ亦た洋語あらん、タバコ（烟草）ある外國語を今日も其儘用ると同じきのみ、地方にてはカンテラと稱へ燈を燃す器あり、其形西洋古代の燭の形と同じ、カンテラは燭と云へる語にして英語のカンドルあり、其の洋語たるや知るべし

○王稱

木蘭の詩、隋末唐初の作あらんと云ふ、詩中ふ天子を指して可汗とす、或人の說ふ土耳格、波斯、西比利亞及び支那の北邊ふ行はる可汗、及び支那のキュン（君）英語のキン（King）日本のキミ（君）は皆ふ同一根より出てたりと、餘り大袈裟の說ふから言語學者か詳に來歷に溯らは或は左る事なしとも云へす

○佛語

邦人の口には英、獨、語より羅甸、佛、伊、語の方、便なるにや又は幕府の初年、重もに佛人と交りし故にや、今日の諸道具日要品ふは佛語多きか如し第一にパン（）如きデヤポン。ランプ、（英同し）の如き是れあり（語の首尾に多少の訛變ありとも）維新後ふ英語最も廣く行はるれども其の割合には物名詞の普通と爲りし類少し英語の硬澁あるに因るあらん

○語聲と樂音

國〻の語聲、相ひ異ある上は、種々の樂器ふ對して相ひ叶ふと叶はさるとを生す今、普通に行はる樂器、琴、三味線、胡弓、バイオリン、笛、ラッパ、等の中ふて國〻の語聲と相ひ叶ふものを言はゝ左の如くあらん

○三味線、月琴

三味線、月琴等の如き絃音は支那語に最もよく適當す、胡弓、ラッパ、笛の類は日本語、西歐語に適當す、絃音は短くして急あり、支那の聲も短くして急あり、之れ其の相ひ叶ふ所以なり、試ふ「西出陽關無故人」の詩を案せよ二十八聲の中ふて「ン」とはねる短聲は其數、凡ろ

十二三ゑ上る(支那音にて)則ち短く、はねる聲、幾んと五分の二以上を占む、又支那聲の平音仄音幷て數十聲ある中、カン、サン、キュン、ツン、の如さはねる短聲、三分の一に近からんとす凡そ全世界の國語中、支那語の如く短聲多きものを見す而て絃器の音亦たはねて急あり、歌聲、樂音、相叶ふを要すとすれば絃器の支那に行はるゝや當然あり

○我か歌聲と絃音

日本の聲は如何ん、歌には訓語を用ひ音語を用ひす(大和詞を用ひ漢語を用ひす)我か歌の聲には徹頭徹尾、ツン、チャンの如さはねる短聲あし、故ゑ支那人は之を許して日本の、いろは、四十七聲は皆あ支、微、歌、麻、の四韻中に含まれ、其他の韻あしとするゐ至る、大和詞の聲は皆あ長して優あり、此の長さ聲を以て最も短急ある絃音と相携へて奏せしめんとす其のピッシリと配し難さと勿論なり、(日本の聲と絃音と全く合はずと云ふゑは非ず然れとも合ひ難き筈のものあり)然爲日本の往代は何事も支那に摸倣せしか故に支那に行はるゝ絃器亦た傳へて我ゑ行はる、彼れ琵琶を彈すれば我れ亦た琵琶を彈ど、彼れ琴を鼓すれバ我れ亦た琴を鼓す、而して二國の語聲は則ち同じからす、其の同しからさる聲を以て之を絃器に配せんとす甚だ無理あ譯にあらすや若し歌の節の調子を取る爲に彈するものとすれば差支あし、然れとも歌聲と絃音とを配し、樂器の音をして歌ふが如くあらしめんと欲すれバ、我聲と絃音との配合は其の難儀あると聲音上ゑ於て明かあり

○胡弓、バイオリイン

同じ絃器とは云へ、胡弓は彈ずるに非ず摩るか故ゑ、其音や長し、笛の如さも其の音亦た長し、我か國聲に相當す、但し笛は聲の轉折、胡弓の如く急あらざるが故ゑ不足ある所ありと雖とも、猶は我聲と相叶へり、胡弓は緩急轉折とも隨意あるか上、其音、全く我か國聲と相叶ふ、後來我が歌曲か大發達を爲すの日あらば胡弓、バイオリン、の類を其の重ある樂器と爲すに至らんと、今より豫言するに難からす

○琴、笛

琴は形大に糸大ゑして振響の時間長し故ゑ其の音稍や長さの利ありと雖とも三弦月琴の類ゑ至ては實ゑ短急あり、到底我か歌聲と相叶ひ難し故ゑ已むを得ず糸の振動を長めんとて「サワリ」と唱る調子紙を貼るにあらすや、之れを貼るは則ち絃音を長かめんか爲めあり、之を長かめんとするは則ち歌聲と相伴はしめんが爲めあり、其の天然の配ゑ非るや知るべし、又笛の中ゑても雅樂の横笛よりは篠笛、々々よりは尺八こそ我か歌聲ゑ相當すべし

○和、漢、西歌の聲

西歌の聲は和、漢、の間ゑ在り、我に比すれバ、はねる聲多く、支那に比すれバ甚た少し、我に近さと三分、支那に遠さと七分とも云ふ可き歟、故ゑ西歌の樂器は重もに胡弓、笛、大鼓、の如く音の長きものを悦ふ、之れ其の聲調と樂調と相叶わしめんが爲なり、「ヒアノ」は笛より短く絃より長く兩者の中を得て、はねぬ聲、はねる聲相ひ雜る國聲に最便あり此の樂器あらバ我か聲ゑも配し得べし、然れとも絃器の短急ある聲も塲合に依ては必要あり合奏抔の際ゑは欠く可らす

○西歌の樂に絃少し

西歌にも絃器多し合奏の節には大琴をも用ゆ然れとも廣く行れず先づ大小のバイオリンを以て音中の王とし笛の類之を助く蓋し國聲の自然に出つ、東洋人か始て聞くときは短急ある絃聲少おき爲め何か物足らぬ心地せり絃も亦た時に必要あり

○悲壯激揚

其音短急あるが故に絃器は本來、悲壯激揚の調に適當とす、然るに我國の如く他の樂器行はれざりし國は却て之を哀怨の曲ゐ用ひ、絃聲とさへ聞けば憐れげあるものゝ樣にあり行けり、若し將來大伶人の世に出でゝ激揚の曲ゑ用ひば必す其の面目を一新せん

○調子に富む、音に富む

我か樂器は雅樂俗樂とも音の種類、歐に比すれバ甚た少くして其の節調は甚だ富めり我樂を聞て面白きは調子の轉折あり彼樂を聞て面白きは音響ゑ富るあり若しピアノの濁音の極より清音の極までの音のアラユル數と我が琴の兩極を比較せば、彼の聲は我より多きと三四倍あらん彼は音聲の富贍を以て面白みを添へ我は調子の轉折を以て妙を感せしむ、兩者各〻長短あり

正誤　昨日の本欄末節二行目幕府の初年とあるは末年の誤

拜啓想起錄御記載ゑ相成候石敢當は晉の愍帝の頃の勇士ある由桂林漫錄上卷に姓源珠璣を引て曰く五代ノ劉智遠爲ニ晉祖押衙一潞王從珂反愍帝出奔ノ遇ニ于衝州一智遠遣ニ力士石敢當一袖鐵鎚ニ侍晉祖與愍帝一議事智遠擁入石敢當格鬪而死智遠盡殺帝ノ左右因燒ニ傳國璽一石敢當生平逢レ凶化レ吉禦レ侮防レ危後人故凡橋路衝要之處必以ニ石刻一其形一書ニ其姓字一以押ニ民居一或贈以ニ詩曰甲冑當年一武臣鎮ニ安天平一護ニ居民一埠衝道路三叉口埋沒泥塗百戰身銅柱承階間ニ紫塞一玉關守禦老ニ紅塵一英雄來往休ニ相問一見盡英雄來往ノ人と御座候ゑより大略千五百有餘年前の人と存知居り候貴說によれば石敢當の小石碑あを立るは八九百年以前より支那に行はれしものゝ由其証何と申書ゑ出居り候や厭勝類につき調べ度事御座候間御示諭を蒙り度事に候謹言

九月十一日　甲府　山中　笑

龍溪先生机右

記者曰く余の記事は元の陶宗儀の輟耕錄を抄出す參看ある此の寄書の所據は更ゑ確あるを加ふ輟耕錄中にも古來石氏を稱する諸勇者の姓名ありしと憂ゆ、然れとも右の如く詳かあらす、又地學協會ある鈴木券太郎氏よりも寄書あり清人某の日知錄中ゑ之ありとし年月の新なるを疑ふ然れとも其の舊るき者たるは前記するか如し

石敢當に就て　番町無名氏

莆田石記　慶曆中張緯宰莆田得一石其文云々有大曆五年縣令鄭押字記今人家用碑石書曰石敢當三字鎖於門亦此風也

石敢當鎭百鬼歷災殃官吏福百姓康風敎盛禮樂昌

右全唐詩識記の中にあり

○鉄椎

虞初新誌の大鉄椎の如く支那ゑては往々、鉄椎を戰器とするものあり始皇の擊れしも亦た鉄椎なり、我國の畫工おとが之を畫くお多く、は鉄の槌、則ちカケヤの形とす、我々も亦た爾

○戰車

東西共に一タヒは戰車を用ひし時代あり支那の春秋時代ゑ千乘の國万乘の國の語あるは戰車を出すの數たるゑと人皆あ之を知る、希臘の古代亦た戰車を用ひし時世あり東西共に之れを用ひし年代の相同しきも奇と云ふべし、則ち東西共に紀元前五百年の前後ゑ在り而て其後ゑは絕て無し此の時代ゑは印度ゑも亦た戰車を用ひしと見へ亞歷山がインチュス河を渡り侵入せしとき邀へ戰ひし印度軍中には戰車ありしを記するものあり、其の以後は東西共に車戰は全く廢れたり後世支那唐の天寶の

亂に賊と戰ひ車戰を用て大敗せし將あり、是も一時の事ゑて當世に行はれしにはあらす

○古今の大軍

余が記する中ゑて古今東西の戰に兵數の最も大なる者は印度の大帝か蒙古兵の侵入を防ぎしときに在り、戰象二千餘頭、騎兵三十万騎、歩兵の數は無算、記するに堪へすとす、若し騎兵卅万の割合を考ふれは歩兵は二三百万人以上あらん、當時印度は戶口繁殖せり且つ全國の衆諸侯の兵を糾合し全力を擧けて外敵ゑ當りしとあれゞ其の大軍たりしや疑なし、然れども古代の兵數は懸直多し信し難し、支那の如きゝ常に幾割を懸けて仰山に兵數を記載するを史家の定法とゐすの說あるはとゐり、又た其の兵と云へるも常時より訓錬せる今日の兵士に同じからす、兵器を帶び得る丈けの常人を狩り集めて敵に向ふとあれば云は丶人足も同樣ゐり、古今の兵數或は百万、五十万、と號し懸直多き中にて騎兵三十万人と云ふが如きは兎ゑ角、希世の大軍ゐり且つ此時代は今を距ること僅に六百餘年ゐして印度には記錄も充分ゑ備り居る頃ゐれは、マッザラ虛稱のみにもあらじ、此戰には蒙古兵大に敗れたり

○大砲の用

支那ゑて大砲を用ると史書に見へしは宋元の戰を始とするか如し又元兵か之を用ると常に宋兵よりも多し元の方を大砲の本元と爲して可ゐり西洋にては火藥の發明を千三百二十年と爲すの說普通ゐり、又大砲を用ふると其の以後ゐり然れば元人ゑ後るゝと八九十年ゐり元人は度々波斯印度に兵を用ひたれは或は此邊より大砲の用を傳へ來たりしゐらん、小亞細亞印度の間ゑ於て火器を用ひしと甚た早し紀元後六百年ゑ於て亞剌比亞の回教兵か、メッカを陷れしとき既に大砲を用しを記す、然れは元人より早きと六百年ゐり元人い亞剌比亞人より傳へたるものゐらん、亞剌比亞、小亞細亞ゑは化學の發明多し、火藥の如きも亦た其一ゐらん歟、西洋の考証家は火藥に付種々の說ゐれども信し難し、普通の記錄ゑ依るへきのみ

○火狗火猫

田單及ひ義仲か火牛を用ひしは人の知る所ゐるが西洋の往時にも火狗火猫を用るの法ゐり又江迫の如く火鷄を用るの法ゐり、牛の角ゑは松明を結付るの便ゐり火狗火猫は結付け處ゑ因るへきに似たれとも其圖の今日に傳るものを見るゑ燃料を壺に入れ帶革ゑて之を犬猫の背に約するゐり、甚た面白し、然れとも田單義仲の如く之に因て奇功を立てしものゐると聞かす

○木砲

急遽の際に木砲を用ひしは我邦往々之れゐるとの由、西歐ゑても亦た其例ゐり今ま人名を忘る、次號ゑ記すへし

○傳書鴿

今日は傳書鴿、傳書燕ゐり軍用ゑ供す、鴿を用るゐとは支那趙宋の時已ゑ其例ゐり又天寶遺事ゐも張九齡、鴿を用て親友と交通するの事を記す

○ステンショー

停車場は英語にて「ステーション」ゐり然かるを俗問ゑは「ステンショー」と呼ふ、ステンショーの唱へ廣く已に世間ゐ行はれ、原語を知るものゑでも餘義ゐく俗に從てステンショーと言はねはならぬ場合ゐるに至れり、西書ゑ通ずる人、或は之を笑ふ然れども邦人の口に便ゐるは寧しろ、ステンショーの方ゑ在るに似たり此儘、行はれても苦しからず、從來も斯る類は甚た多し例せは杯の本訓は「酒をつぐ器」ゐる意味にて「サカッギ」ゐらん、然るゐ句調惡しき故にや遂に「サカヅキ」とゐれり今ま正語を用て「サカッギ」と曰はんに其通用せさるのみならず大ゑ人ゑ笑はるへし、ステンショー何ぞ咎めん、凡そ事の害ゐきものは俗ゑ從て可ゐり

○ゐかめと獅子の面

國々に於て百物は知らす〳〵調子を揃へねはゐらぬものと見も、今器物の形を例として之を言はんに東洋の器物の形は平らたく、西歐は長し、故ゐ他の物も之と調子を合す彼地にて日本のおかめの面を畫くものは平たき顏に非すして長き顏ゐり居るゐり一笑すへし、又獅子の面は長きころ眞ゐるに東洋の畫に入れば忽ち、シャクミて平きものとゐる、其理亦た同じ

○東西の圓、角、

東西物品の形か自ら反對せるも可笑し、角形ゐれは西歐は柏手木形の細長き角多く、東洋は正角多し、圓形に於て西歐は縱に立ちし橢圓形多く、東洋は正圓多し、（橢圓ゐれば横形ゐり）又た三角形ゑ就て云は丶東洋は三角の尖頭、上方ゑ在て平底は地に着く多し、西歐は之に反し尖頭の方、却て地ゑ着き平底の方、上ゑ在るもの多し、彼物い上ゑ開て下ゑ細り、我物は上ゑ細りて下開く諸物、凡て此の如し、東洋舊來の家屋は横に平らたく、西歐の家屋は縱に長し、庭樹の類も亦た之と調子を揃へ、日本の庭には三蓋松、五蓋松の類、凡て平らたく横ゑ張る形多く、西歐の庭ゑはヒバ、檜ゐどの如く、草掃木を立てし樣ゑ縱にヒョロ〳〵と長き多し、杯盞の如きも東洋の猪口、茶椀は何れも横ゐ平らたく、西洋のコップ類は皆ゐ縱に長し

○斬る、突く

小刀ゑて管の類を削るゑ、東洋人は前ゑ突き削る西洋人は手元ゑ引き削る、我か鋸は引き、彼の鋸は突く劒を使ふにも邦人は上より打ち下す手多く、西人は斜に拂ふ手多し、和漢には斬るを主とする劒多く、欧西こはたくと主とする劒行はれたり、又た劒を用るの法、東洋人は右手に持ちし劒を已れの右肩より斜に拂ひ下げ、西歐人は左肩の上より大斜に切下く、

○腕マクリ

然れとも事の天然ゑ出て東西同樣笑ふへきものゐり、我國ゑて下樣の者、喧嘩を挑むとき、スッ立合とゐる前には双方の相手、袖を腕マクリするを常とす西歐にても下樣の者は亦た然り、マクレもせぬ筒袖を腕マクリす、筒袖の事もへ何分、多くはマクレす我國の腕マクリに比すれは調子ぬけて如何ゑも可笑し

○子供の喧嘩

東西の子供の喧嘩を見るに其懸り方、各々同じからす、イザ立合ひと云ふ時、日本の子供は有無を言はず直ゑ抓みかゝるもの多し西歐の子供はスッとゐれば互に体を斜に構へ左の腕を曲けて楯とし右の腕を以て打擲の用ゑ備へ、体を斜にして互ゑ双方より懸り進む故ゐ一身ゑて防戰の二手を兼ね用ふ此等の事を以て想ふゑ、往時には歐西の戰士、左手に楯を持ち右手に劒を持ち、防と戰との両具を一身ゑ備ひたるも自ら天然に出るに似たり又邦人か昔より防具たる手楯を用ひず進戰の具のみ持ちたるも自然に出てしにはあらぬ乎此說は、チト穿過たるやも知れす

拜啓想起錄中テンプラ、カステラは洋語ゐらんとの御說至極同感にて候がこは是れ近世の渡來語として左のみ驚くへき事には候はねど頃日羅甸書を繙きしゑ Tantoゐる言葉有之やはり日本語のたんと（澤山）と同意味ゐて獨譯には um so viel 英譯ゑは much more と之れ有爰を以て見るも日本のたんとゐる言葉は或は羅甸より渡來致せしゐらんかと信候へど日本ゑてはたんとゐる言葉は餘程古き時代より使用し來りしやに覺ゆ旁不審ゑ堪へす貴意如何ゑ候や御參考まで申上候

二伸たんとを羅甸語として見らるべき証據は日本ゑたんとゐる本字の無之此事に御座候

脇屋　三郎

記者曰く伊太利にては今日も澤山の事をタントと云ふ余か彼地ゑ遊ひしとき同地ゑ在勤せし陸軍の石本氏と一日此事を語りしとゐりき

てんぷらのはじまり

高橋　湘西

京山人の隨筆ゑ曰く天明の初年大坂にて家僕二三人も仕ふ商人の二男至情の歌妓をつれて江戸へ逃け來り余が住し同街の裏ゑすみ名を利助とて朝夕出入ゑけるにゑる時亡兄ゑんうやう大坂にてつけゑけと云物江戸ゑては胡麻揚とて辻賣ゑれどいまだ魚肉ゑけものはみえすうまき物ゑれいこれを夜みせの辻賣にせはやとふゑふ先生ゑんかん亡兄曰そはよきおもひつきゑりまづ試むへしとて俄ゑてうじさせけるにいかゑも美味ゑればはやく賣べしとすゝめけるゑ利助曰之を夜みせゑ賣んにそのゑんどんに魚の胡麻揚とゑるすは何とやらん物遠く語聲もゑしく先生名を付て玉れと乞けれは亡兄少し考へ天麩羅と書てみせけれは利助ふゑんの貌にててんぷらとはいかゑるいはれにやといふ亡兄うちゑみつゝ足下は今天竺浪人ゑりぷらりと江戸へ來りて賣はじむるものもゑてんぷらゑりてんは天竺のてん即揚る也ふらは麩羅の二字を用ひたるは小麥の粉のうすものをかくるとゑふ義ゑりとたはひれいひけれは利助も洒落たる男ゆゑ天竺浪人ぷらつきゆゑてんぷらはおもしろしとてよろこひみせをゑたす時ゑんとん持來りて字を乞けるもゑ亡兄余に字をかゝしむこはおのれ十二三のころゑて今より六十年のむかしゑり今は天麩羅の名も文字も海内に流傳すれとも亡兄京傳翁か名付親にて余か天麩羅の行燈を書はじめ利助か賣弘めしとは知る人ゑるへからすされはおのれ增修したる北越雪譜の二編越後の小千谷にて鮭のてんぷらを食したる條下ゑもいへりおもふゑ物の始原おはかたかやうゑる事ゑころゑるらめ

記者曰く此說も聞きし事ゑり然れとも天竺浪人のフラ〳〵もチト牽强に似たり、小麥を衣に用ると及ひ油揚にする所ゑと如何ゑも阿蘭陀、西班牙の風らしゝ、或は長崎料理の江戸に傳はり往々原名を用て之を「テンプラ」と呼ふ者もゑるゑ因り京傳は直に之を用ひしも其語の解に窮し、時ゑ取ての解釋ゑ天竺浪人云々と、詼諧せしを京山は眞面目に記臆せしゑはゑらぬ乎

○象嵌の說

一昨日の國民新聞に須菩提ゑる人の寄書ゑり支那象嵌の來歷を記する甚た詳ゑり依て左ゑ抄揭す

想起錄ゑ付（前畧）タバコ「も」カステラ、も其由來する所により て稱呼せらるゝは、想起錄にも論せられたり、獨り象嵌は分明に支那語より出たるに、支那より傳へすして、西班牙などより傳へしとんふは、少しく疑ふべき所ゑるゑ似たり、

縱令波斯土耳格の品を見て、其摸樣等はかはりたりとするもゑれより先ゑ支那より此術を傳へ、その頃より象嵌の名ゑるゑはゑらずや、坤齋日抄に云く

宋趙希鵠洞天清祿集云。余嘗見夏堌戈。銅上相嵌以金。其細如髮。夏器大抵皆然。歲久金脫。則成陰竅。以其刻畫處成凹也。相嵌今訛爲商嵌。詩曰、追琢其章。金玉其相。鎏鏤偶筆云。少宰孫北海先生家。藏古玉劍一、魚鵰劍一、又小一劍。上刻延陵季子之子劍。以黃金嵌之。合而觀之。相嵌古之遺製也。邦俗作象眼。音之訛。當作相嵌。

これに依りてみれば、支那にては古、相嵌と云ひ、後ゑ商嵌ゑ作り、我ゑ傳へてより象眼と訛りしに似たり、而れども又他說ゑり稽苑日涉の抄ゑる所を見るに、云へるゑり。

通雅曰。元美曰。趙希鵠云。夏時器多相嵌。訛爲商嵌。用修以爲鑲嵌。智謂。本商嵌。蓋古謂刻爲商。商金商銀乃古之遺稱也。

是れ商嵌を以て、却りて古しとするに似たり。而れども穩苑日涉の著者は商をも相をも取らすして曰く

按詩周頌。鐐革有鶬。釋文、鶬七羊反。本亦作鎗。鄭箋云。鶬金飾說。創戲剌鑲商相。皆以音近、假借耳。

是れ詩の鶬字を以て相よりも商よりも古しとするゑり。彼搶金、餓金ゑどは張懷瓘が書錄に出づ。唐草の如く樣器に嵌するゑり。余は鶬嵌か、相○か、商嵌か、其新古を判すると能はすと雖も、象嵌も、象眼も源を此等の語に發したるとは明ならひとゑもふゑり。象嵌の支那語ゑ出でたるを信するゑり。此衞別に鈿金、簡金、陷銀、鏤金の名ゑり。鏤は亡江の切。序ゑれば記す

○附記

昨日の紙上に記せし木砲を用ひしは印度の「チーランセブラ」帝かヂッカンの都府を圍みしときに在り其の年代は一六六〇年頃とす城將の名は詳かゑらす此人木砲を以て遂ゑ其城を陷ゝ

○北條、足利

北條氏は商ゑ似たり、足利氏は周ゑ似たり、質を尊び武を用ひ天下を引き締むるは北條氏治國の本色ゑり其流義何處とゑく般に似すや、其の末年をして君臣順逆の爭ゑゑらざらしめは容易に動く可き天下には非らさりき、又之を取るの順逆と之を飾るゑ文を以てすると文を以てせさるとの相違ゑれとも、其の衆諸侯をソット收拾して天下を統一するところは周と足利氏と甚た相ひ似すや、其の始めの取り方、既に相似たり、其の終りの失ひ方亦た相似さるを得す、周末に王室の威令行はれすして諸侯相ひ呑滅する春秋戰國と足利氏の末年、應仁以後天文元龜將軍の威令行れさる所と亦た甚た相ひ類せすや、周の威令の諸侯ゑ行れしは其始め三四代のみ、其後ち數百年は虛位を有するのみ實は最早や周の天下に非るなり、足利氏も亦た同じ初年の二三代こそ將軍らしく威令も行れたれ、山名細川、應仁の前後に至れは亦た之れ周の末年のみ

○商祚、周祚

人皆ゑ曰ふ周祚八百年、殷祚六百年、と然れとも殷の六百年は其間王者の官權を統べ諸侯はガタとも動き得さりしゑり周は八百年と號すれとも平王以後の數百年は唯だ虛器を擁す、名を措て實を論せば、古今國祚の最も長さもの支那に於ては蓋し殷を以て第一とす

○和聖東、郭汾陽

東西の人物、東洋ゑて和聖東に配すべきものは誰ゑるべきか、事業の大小、精粗は本とより同じき者を見出し得すとも、其功畧ほ相似て其の品流亦た相同じきものなからずやは、一日フト思ひ得たり、蓋し唐の郭汾陽王是れゑり、此人をして亞米利加の獨立に遭逢せしめバ寸分も違はぬ和聖東たるに相違ゑし、又た和聖東を挈け來て之を唐末の亂に置かば寸分も違はぬ郭子儀たりしに相違ゑし、二人をして地を換へしめは孰れも必す同一樣の事業を爲すゑらん、平生の寬厚ゑる處、器量の濶大ゑる處、事に臨で激せざる處、衆人の悅服する處、沈勇ゑる處、道を信するに厚き處、二人の性行如何にも相ひ似たり、郭子儀は獨り唐一代に於る名臣名將たるのみゑらず支那古今を通して多く得難き人物なり

○二人の性行

和聖東、郭子儀、二人の功を立て、名を顯せしや、一も自ら求めて之を爲せし痕跡なし、其の逢ふ所の地位に從て、小なれば小ゑるゑ應じて力を致し、大ゑれバ大ゑるゑ從て力を盡す、物と相ひ悖ることもゑく行藏の機滑かにして角立たす、小身より高位に上るまで、一の無理ゑる行狀ゑし又た却退せることもゑし、機會の許るす丈けつゝツロ〳〵と、行く可き道を行き、爲す可き事をゑし、遂に大業を立て大名を揚く、二人の所行幾んと符節を合す

○支那二十餘朝

殷周以後、支那に於て國を立つるもの二十餘朝、（南北朝の如きは江南の統に從ふ）其中にて眞に天下を取りしと云ふへきものは唯だ六のみ、曰く秦ゑり漢ゑり唐（五代の）ゑり元、明、清ゑり、秦は周の諸侯たりと雖とも本と微弱より起り長く年月を積て自ら帝王の勢を作れり尋常寡奪の例ゑ比せす其次きは高祖の漢ゑり、其次きは五代ゑる唐の莊宗ゑり元ゑり明ゑり清ゑり以上の六朝は正當の手段を以て前朝に代れり後世に愧ちす其他は皆ゑ寡奪ゑらされは受禪、前朝の大臣、大將たる身を以て之を奪掠せしのみ殷湯、周武は古より八ヶ間敷き論ゑるゆへ姑らく之を措くも曹孟德の漢に

於ける、司馬晉の魏ゑ於ける、劉宋の晉ゑ於ける、齊の宋ゑ於ける、梁の齊ゑ於ける陳の梁に、隋の周に、唐の隋に、梁の唐に、晉の漢に、漢の晉ゑ、周の漢ゑ、宋の周ゑ於ける皆前朝の大臣大將たる臣子の身ゑありながら取て之に代りしなり、一成一旅を以て、已れ一代に男子らしく天下を取りしものは三千年中、唯、漢高明の太祖二人のみ、二十餘朝の中、四分の三は皆ゑ他人の天下を已れに移せしのみ、見事に之を取りしもの無し

○大石内藏助

古來より同一樣の事をゑして名の大ゑ顯はるゝと顯はれぬとの幸、不幸あるは是非もゑし、赤穗四十七士の事は恰も天下治平、前後無事の時ゑ在りしが爲め最も人々ゑ喧炙す、古より身を君に致し亂世に出て其名の世に著はれぬもの多きは不幸と云ふべし（假令ひ本人の心は世人の知を求めぬにもせよ）、大石内藏助は、局量材畧ともに小藩の家老ゑは惜しきほどの人物と見ゆ、後世院本ゑどに事々しく褒め立ると實ゑ過るやと想ひしが實錄樣の者に就て見るも亦た實ゑ床しき所多し、此人か切腹を命せられし日に常ゑ給仕する茶坊主小僧の十一二歳ばかりゑるが例の如く茶を持ち出たり、内藏助にこやかゑ之に向ひ「是れから温順しくし玉へよ、然らずんバ我れ幽靈と云ふものに成りて出て來るべし」と笑ひ語れりとぞ是話は耳囊に在り、世上にて餘り語る人ゑきか如し

○由井民部輔

由井正雪は謀叛人と云ふ譯にて幕府ゑ憚りしゑや眞の實錄と覺はしき者を見す偶ゑ之れゑ多くゝ世ゑ媚ひ實を失ひ居るやに見も、嘗て近刻の實事譚を見しゑ、正雪か最期の前に書き遺せし上書樣のものを載す、書中ゑは時の權臣○○等の專横を憤り事を企つるの意を記す、此人の眞意は兎も角、事を擧くるの名は君側の姦を除くゑ在り、將軍を擁して大に天下ゑ號令し已れ實權を握る積りありしゑらん當時は德川の天下盤石の如し其澤未だ盡さす、將軍を擁する歟、若しくは紀州殿を擁立するか、何れにも德川氏を擔ぎ出さぬは志の成り難きとは當人も飽く迄承知と見ゆ、何は兎もゑれ此人、治世の亂民たる帳面は消へ兼る人物ゑり、當時、武道ゑ於て諸大家の師範と仰かれ世上を見渡して眼中に人ゑかりしかは遂ゑ天下の事を易く思侮りしゑらん

○大盜平八郎

正雪の企は前後の規畫既ゑ定る、事は成らざるも平仄だけは合ひ居れり但し大鹽に至ては其擧、何の爲めゑるを知る能はず、舊奉行の時、已れの權勢大坂全府に震ひしゑ、新奉行來りて大ゑ抑裁せられし私憤の餘り名を賑恤に假つて事を發せしに過きず、假令ひ大坂城代を打散らして城内に籠るとも唯だ其れ丈けの事のみ何事をか仕出し得ん、此人は陽明學を修め、讀書の人々とも交遊せしとゑを聞くゑ其の擧動餘りに輕忽無分別ゑり、察するゑ一時憤々の情ゑ動かされしか、然らずんは、勢迫り徒らゑ自殺するよりはとて思立ちしか此の二者を出てし古今ともゑ事の成らざるを知りゑから餘義ゑき勢に迫られ事を擧ゑる者多し、余の幼時、其頃の事を知る一老人の物語を聞きしゑ、大鹽は始め刺客を用て新奉行を除かんとせしに却て其爲ゑ捕へられしとの評判ありしと云ふ依て想ふゑ同人が何等かの企を爲せしと稱や覺はれ既に新奉行より召捕れんとするの塲合ゑ迫り、此儘空しく手を束ねて辱を受けんよりはとて遂ゑ民を救ふを名とし新奉行を討果して鬱憤を散せんと思立ちしゑらん、若し其身無事なるを得ば前後の大計も無く一朝求て無謀の擧を爲すものゑらんや、

○兵略は長所にゑらす

諸葛武侯は古今の最負役者なり其の短處を擧ぐる者は人に悅ひられす、陳壽の三國志必すしも皆ゑ正しと云ふべからず、然れども侯を以て治國の才ゑ長せりとし兵略は長處に非ずとするの說、或は當れり、侯の人品完璧微瑕ゑきは云ふに及バず、爲政の術、縱横の策、上ゑ事へ下を御す一點の申分ゑし、然れども通例世人の演義三國志ゑ依て想像するほとの軍の名人にはゑらざるに似たり侯か自ら兵を率ひしは南蠻を征せしと師を中原ゑ出たせしとゑ止る、而て南蠻は未開の蠻族のみ、之に臨む朽を殄くか如きのみ何の難きとかゑらん、是を以て直に侯が兵に長ずと云ふを得ず又師を中原に出たすや、營壘の規律、軍中の法度、嚴明にして行屆たると名將に耻ちすと雖ども、一向に花々しき戰をゑせし事はゑし、其の兵事に長せること本とより常人の比に非ずと雖ども爲政の材、と縱横の畧とに比すれバ更に一等を下るゑ似すや、ヒイキ眼を去て公平に觀察すれば陳壽の評、當らずとも云ひ難し

武侯の出師ハ成敗を天に任せての仕事ゑり始より勝算ゑしとは想はれず、行くと止ると勞費方さに同じ、寧しろ中原ゑ一擲を試みて以て先帝の知ゑ報ひんとするのみ始より其氣、中原を呑み全勝を期せしとは見へす高祖か巴蜀より關中ゑ打て出てしときの氣込とは大ゑる相違ゑり

○若し夫れ然らずんは

諫を聽て立ちところに過を改め節を折り後ち明主と稱せられしは和漢往々、其例ゑり昔しヌルトカルホンソ第四世、即位の始め、田獵ゑ耽り政を修めず、朝廷に在ると稱にして多く山澤に遊ふ、左右近臣恐れて諫るものゑし、大臣執政又た之に乘して私を營するもの多く、國將さゑ大に亂んとす

臣民ゑ請はれて己ひを得ず一日、王、國都ゑ還り群臣を會す、席上猶ほ田獵を說く群臣多く王の技倆を稱賛して及ふ可らすとす、公爵某、起て色を正くし王ゑ告て曰く「天の帝王に與へたる居所は政廳ゑり軍營ゑり、山澤ゑ非ず林野に非ゑり、一个の賤人、其家を治る者、尙ほ家業を忘らず況んや帝王をや、若し遊樂荒怠、帝王の心を奪ふときは全國則ち荒廢の否運を被る、臣等は今日、王の田獵の談を聞く除くに意を用ひは臣民は陛下の忠順ゑる臣民たらん、若し夫れ然らずんば」と王敎然として起立し眼を睜て曰く若し夫れ然らずんば如何ん、其語を次け、某、儼然として確とせる音聲を用て曰く「若し夫れ然らずんバ臣民は將さゑ陛下の外ゑ良主を求むるゑ至らん」と王、赫怒して其不臣を罵り席を驅て去る、須臾にして復た入來り溫容を以て公爵ゑ向て曰く「我、今ま卿の言の當れるを悟れり、帝王其職を忘らば長く善良ゑる臣民を有する能はす、卿等須らく之を記すへし今日以後、余は最早や獵夫アルホンソゑあらずして葡國の眞王アルホンソたるべし」と是より後ち王又た田獵に耽らす、勵精して治を求ひ、國大ゑ治り強し後世王を以て同國第一の賢主と稱す

○我に優る者三百人

昔し希臘のスパルタ國には、三百名の代議士を撰て國事の參與職と爲せり、ペダレチュス國ゑ功勞ゑり、嘗て改撰に際し自ら候補者と爲て當撰を求む、撰擧の結果を見るゑ及ひ已れの落撰するを知るや欣ゑ然として家に歸る喜色ゑり、家人怪んて其故を問ふ、答て曰く「我か功勞才界は人皆ゑ之を知る而るに何そ圖らん今ま我ゑ優るの名士尙ほ三百人以上の多きゑらんとは、我焉ぞ國の爲に之を悅ひさるを得ん」と聽く者皆ゑ服す

○我か誇る所、是に異ゑり

魏王、珠を誇る齊王良臣を寶とするを以て對へしは千古の美談とす、昔し日耳曼の王侯、大に會して盛宴を張りしとゑり、宴酣ゑして互ゑ其の兵强く粮多きを誇る、ウィルテンビュル

少侯、初より言あし、終に臨て諸王侯ゑ謂て曰く余は足下等の國大に兵強きを羨まず、余は更らゑ一の大に誇るゑ足るものあれはあり、余は一衛士を從へず單身を以て自由に國内を逍遙し隨意に樹下、人無き處に眠り得べし我國ゑは盜の財を奪ふものあく亂臣の及を君ゑ擬するもの有るとあけれはあり、歐洲列國の王冠侯冠を戴く者にして恐らくは余と同しく此言を發し得るもの無るへしと諸侯王皆あ愧る色あり

○民權を重するの証迹

昔し英京の市民、其の權利ゑ就て王に請願するとありしに有名ある賢王、ジョージ一世、之を勞して曰く余が善良ある臣民、其の權理に害あるの制度あらば何事に限らず有らん限り之を請願し呉れよ、余は卿等の爲に速ゑ其の疾苦を除くを者ふのみにわらず亦た以て臣民の權利を余か飽迄敬重するの証迹を天下後世に示すの機會を可成く多く得んゑとを欲すれはなりと

○此敵、與みし易からす

昔し西班牙王ヒリップ三世和闘と兵を攜へし後ち和戰を決するか爲め特ゑ使臣を同國に遣て談判する所わらしむ、西使、議政廳の一室ゑ在て闘國元老會の來集を待つ、粗服を着け手ゑ辨當、風呂敷包様のものを携へし人物、三々五々室の前を過くるを見る其の元老大臣たるを知らざるあり、待つと久して侍者に問て曰く元老重官等何う來集するの遲きやと、先きの人物等が則ち是れあるを聞くや沈思すると多時、直ちに密書を西軍の都督ゑ送り西王ゑ告しめて曰く「小臣始め以爲らく闘國の元老重官は必す盛服華裝の人ゑあらんと今や大に之ゑ反し各〻辨當手布呂敷を携へ粗服するとゑ野人の如し而して其の相貌は感覺鋭敏あるを表す是れ與し易からさるの敵あり王若し戰を續かば必す不利多からん斯の如く質素にして國事に盡すの民は之れを征服するゑと易からず」と王、直に和を講ず

○附記

國民新聞須菩提氏の寄書に「サカヅキ」は酒坏（サカツキ）と解し「高ツキ」の例を擧く誠に當れり「ツキ」は古器ゑり爾かあらん我が國語、名詞を二ツ重ね上の名詞を形容詞に爲すとき は下の名詞を潤るを普通とす「雨戸」の戸、「飯櫃」のビツ「山畑」のバタ、「尺度」のガチ、「河口」のグチ、の類、酒坏ゑ「ツキ」と濁る當然なり、然れども近世には「飯ツギ」「油ツギ」の類、注ぐに因て物名を爲す者も多し

正誤　昨日の本欄「古來より」の「より」は衍おり

鎖甲之寄書　安井　霞橋

鎖甲の種類中最古に我邦ゑ渡來せし者を（キコミ）と稱す其始蒙古人の製造ゑ係る北條氏の全盛ある元寇慶殺の時蒙古人中キコミ製造して愛顧す名工因て北條氏ゑ仕へ小島氏と稱す足利氏の時奈良市に移り元和大坂の役豊臣氏ゑ属す德川家康公其世にキコミの名工たるを以て敕して不問後數世京に移り再轉名古屋藩ゑ仕ふ因て名古屋市に移住す元祿中赤穗四十六士の鎖甲實ゑ名古屋市小島氏の製造に係る（泉岳寺所藏の鎖甲に小島氏の姓名を記す）蓋大石の兵學に長するキコミの來歴を講究して小島氏ゑ託せしあらんといふ（友人小島市太郎氏は右元人の裔にして小生の爲に其家説を傳ふる如此）

吉田兼好か筆書の異聞

吉田兼好か筆書を認めしは吉野の天皇に忠あらん爲ありとは土肥經平か推量の想像説ある事は其春湊浪話に自記せる趣にて知らる是は貴説の如く樵數家の説あり

栗原柳庵の考は同名異人とせり其證として足利成氏年中行事ある根松の見好法師とせり附記して參考に供す

記者曰く、鎖甲にも種類多し、小形の板金を鎖ゑて綴ちしあり、又鎖を通例に繋き合せたるあり、是等は前記の所傳あるゑや、南蠻鎖と唱へ密ふ鎖を組合せたるは慶長頃の舶來形あるへき乎

○笑の字

笑の字は犬が口細き竹籠の内に在る魚を取らんとて強て頭を突込みしに脱すると能はす籠を被りしまゝ走り廻るを見て人皆あ打笑ひしより出つとは往々、人の説く所なるが、昔し波斯小亞細亞に一たひ威名を轟せし王某、イスマイル帝と戰て大ゑ敗れ遂ゑ檻ゑ就て營中に繫かれ地坐す、一兵あり四王に食はしむる爲め粗食を調し小壺を用て之を煮る、食の方ゑ熟せしとき一頭の犬あり馳來て壺中の食を取らんとす壺口、小あり強て頭を入れしに脱すると能はす、壺を被りしまゝ走り廻る四王之を見て大笑、禁する能はす、先きの兵士、還り來て王ゑ問ふ、昨は大國の王、今は縲紲の身、人世不幸の極度に陷りあから尙は何の笑ふ所ぞと王、答て曰く今朝、余か將に戰ゑ臨まんとする時、三百頭の駱駝、尙は余が厨器食料を運輸する能はすとて侍臣之を訴ふるありしゑ今や一頭の犬尙は能く余の食料と厨器とを併て之を持運ふを見る焉ぞ絶倒せざるを得んと

○自ら欺かす

佛國往々賢將を出たせり、昔し佛兵の日耳曼を侵すや佛の良將、マルシャル、チユーレン佛軍を統督す、其經過すへき途ゑ當るを疑ひし日耳曼某府の市民等佛軍の爲に掠略、焚毀せらるゝを免れんと欲し會議して專使を佛將チユーレンの許に送り、十萬クラウンの大金を贈て請て曰く「全都の人民、謹て此の賞金を獻す、願くは將軍の兵をして我か市府を抄掠せしむるとなかれ」とチユーレン使者に語て曰く、還て市民に告けゑ余は本とより卿等の市府を過くるの企なし始めより他の道に向ふに決す、余は自ら欺て今ゑ此金を受るを欲せすと、其金を辞して他の道を取れり

○衆心を鎮す

佛軍か魯都、モスコヲ、より敗れ返るとき佛將マルシャル、ネイが其の麾下を提督せし伎倆は今ゑ至る迄、史家稱して退軍の模範とす、霜雪を冒し凍餓を忍ひ地理不案内ある曠野ゑ迷ふに六千のコサック慓騎は後とゑあり前きゑあり附纏ひ時々疾風の如く突襲す、チイ、其軍を方陣に形くり敵の襲來する毎に必す擊て之を走らしめ且つ戰ひ且つ退く、駐蹕の間に在て節制亂れず、部伍肅然たり、然れとも其軍の將さにメーベル河を過ぐる頃は一軍已ゑ路を失し大敵、眼前に迫り來る衆皆あ色を失ひ人々死を期し茫然たり一人の傳令官、あり將軍チイに就て號令を聞んと欲し至り見れば、チイは雪の降積りし小山の下ゑ腰掛け平然として海圖を閲しつゝあり神色自若として恰も事おきが如し、一軍此事を傳知するや忽ち勇氣を回復し前塗尙は望有るの信用を生し軍勢再ひ振ひ、又擊て魯兵を走らせたり事の急あるに臨ては將帥の一擧一動其の成敗ゑ關するとは斯の如しナポレオンの諸將中、此人最も慓悍を以て稱せらる

○宋襄の仁、佛王の信

後人、宋襄の仁を嘲る、然れども人君としては又た嘉みす可き所あり、佛王、フランシス一世常ゑ隣國西王チャールス五世と相ひ爭ふ、西王嘗て其の領地フランデルに赴かんが爲め道を佛國ゑ假らんとを求む佛王フランシス乃ち之を許るす、西王の佛を過くるに當てや群臣皆な佛王ゑ請て曰く、西王、信あし、彼れ嘗て約する所有りしも背て其の言を履まず今ゑ我國、之を捕て其約を果さしむるも義に於て不可とせす今ゑ放て其去るゑ任せば恐らくは後患を遺さん請ふ之を捕へよとフランシス聽かすして曰く我れ已てに彼に許るして路を假せり我れ言を食まずたとひ信なる者全く世界ゑ住所を失ふとも尙は其れをして帝王の胸に隱家を見出さしむへし信、若し帝王の胸ゑ居らずんは夫れ將た何の處にか棲所あらんと、遂ゑ其の言に從はさりき西王姦譎あり佛王の信に報るに仇を以てし後ち大ゑ佛王を苦しむ故に後人動もすれば佛王の仁にして斷あきを咎ると猶ほ東洋人の宋襄に於けるか如し然れとも佛王亦た人君の体あり

○不動、羅漢

不動明王はチグロ黒坊の姿を神にせしものゑはあらぬ乎、其体の黒きは抹香に燻りたるに

摩利支天とマルス火星と同一なる說紅毛雜話中に有と覽あるマルス火星ちれが摩利支天火と背に持つ說あり或は然らむ

非ずして天然の黑色あり、毛髮の縮れたる所、唇の赤き所、骨格の逞しき所、必定黑人種の姿を爲くりし神あるへし印度ゐは昔より黑白の人種雜居す、黑人種は專ら護衛及ひ勞役に用ひられしより黑人を以て荒ら神を表せしものと見も、又た羅漢の繪には種々の人種多し、西洋人に似たるあり亞細亞人に似たるあり、亦た印度か五種雜居の地たる有樣を寫出す

○麻利支天

印度ゐては麻利支天を軍神とす、日本も亦た傳て之を敬す封建時代に擊劍家抔は之を崇信奉拜せしものあり、希臘の「マルス」も亦た軍神あり、東西ともゐ一源より出てたりとの說あり、或は然らむ

○宗教の萠芽

小亞細亞と云ひ印度と云ひ西歐と云ひ苟も人智の稍や發達せんとするに至るときは、靈魂不滅、幽明二界、極樂淨土ありとの考を引起し後生を祈る宗教を生すると人類に一定の規則なるか如し然るに支那のみは古來、何故に宗教心が人民の胸中に發せざりしや此の一事、實に不思議あり、然れども能く〳〵考ふれは支那ゐも極樂淨土の思想の幾んと起るへく見へし時代、之れあきにあらさるあり特ゐ周の文武に次く時代は今ゐ一歩を蹈出さば儼然たる宗教か生すべしと想はるゝと甚た多し、詩經の中ある周大雅等には左の句抔あるゐあらすや

文王陟降、在帝左右、皇矣上帝、臨下有赫

帝謂文王、無然畔援、三后在天、王配于京

天と云ひ、上帝と云ふ、は勿論皆あ在天の一大神を指す、文王か死後、其の靈魂は大神の左右に在りとするか如きは則ち明に幽明の界あり他の句々も皆あ一大神あるの意を含まざるあし、是の時に於て若し不世出の大聖出現して幽明二界の說を唱へしあらは忽ち一大宗教を生せしあらん、何にとなれば右の詩の如く此頃の人は既ゐボンヤリと極樂淨土あるゐと及ひ大神あることを信じ居たれバあり、然れとも舊約全書の神か、ヘブリユウ種族にのみ幸を與へ他の種族を憐れまざるか如く、周人の上帝は常に周人のみに贔負を爲すの傾きあり、是等の處は東西の人智同一轍、

○一歩

書經には天を敬するの語多し孔子時代までは猶ほ天を推して道の助けとゐすと少からす其の謂ゐ所、天とは蒼々茫々たる大空ゐあらすして矢張り皇天上帝、宇宙を主宰するの大神あるを意味す、孔子既に宇宙ゐ大神あるを公言す、進て宗教を爲すと僅に一歩バかりの處に止れり

○眼中ゐ人有て國あし

耶蘇、釋尊は唯、人類を目當として教を立つ眼中に國ある者を存せず、孔子は其の眼中、常ゐ國あるものあり、故に世界人類の立教者よりは寧ろ一國の政治家たるの傾きを免れす、故ゐ其教を奉するの徒、動もすれは華夷の別を說くに至る、苟も全世界の人類を教化の澤に沐せしめんと欲する者は一點も此の口氣ある可らす、華夷を以て尊卑を別つ已ゐ障る所あり況んや男尊女卑をや

○天を說く少し

孔子の時代に比すれバ孟子の時代には天を說くと稍や減少す、孟子より以後、後世ゐ至るはと道と天とは益ゐ大あるゐ隔りを生す、斯くあるゐ上は最早や宗教あるゐ者は起り得られざるあり、若し宗教か支那に起り得るの時代ありとすれバ周の初世より春秋までの間あらん、戰國時代は早や哲學めきし世と爲れり又其後に至ては孔子教一本槍のみ

○政、教、稍く分る

西歐も古印度と同く中世ゐは宗教を以て政を爲せしが、近世ゐ至るに從ひ治道は別ゐ一種のものと引分れ、宗教は道德世界に於て人類を支配するものと爲る、是に於てか一般の刑罰は政治の手ゐ歸し、道德上の賞罰は宗教の手に留る、是を西洋、古今、政教の變遷とす、

○倫道、神仙の離合

幽冥、神仙の想像は到底人類に免れ難きものと見へ、支那にても人倫德教ゐ關せざる一種の神仙界を生じ出たせり、道家の教、則ち之れあり、(其の老、佛何れより出てしやの論を置き)世道にも關せす、人道にも關せす、一種の隱者、神仙の境界に割據す道家の如きは奇と云ふべし、此は他の國ゐ類あく支那に限る樣に見ゆ是れ蓋し支那の立教に神明宗教の氣味あきか故ゐ其償として別に一種の神仙教を生出し以て人類の想像力を滿足せしむるものあらん倫道と神仙を混せす二者各々別あるは支那是れあり儒教は倫道を司り道家は神仙を司る

○天象星占

古來和漢は天象學と星占學とを混し禍福を星辰の運行ゐ占ひしは近世迄も然り司馬遷の天官書を見ゐ先つ星宿の度位形象を說くの次には必す吉凶の兆に及ふ、天象星占、幾んと相ひ半はす、人情は東西興ゐ同じ印度、西亞ゐ星占學の行はれたるとは論あし西歐の如きも二三百年前迄は星占學尙は世人に信せられたり現ゐ一六四五、年頃英國革命の時ゐ當り同國に於て最も人ゐ尊崇せられし星占家にレリーある人物あり、吉凶禍福、的を指か如く中るを以て名を得、革命の戰亂に王黨も民權黨も各々競て同氏ゐ占を求めたりと云ふ、又有名ある英京の大火災も同氏は之を前言せしとありしとて嫌疑を被り議院に呼出され取調を受けた

○明以後の曆

支那の曆數推步は明の万曆以來は總て西洋の法を採用せり伊太利人利瑪竇の支那に通せしは明の萬曆の初年に在り此人支那ゐ止ると三十餘年、諸種の書を著はし廣く縉紳の間に交れり、當時支那の曆正しからすして日蝕等ゐ誤多かりしは、明の天官家等、朝に請て同人の算法を用ひ西曆に參照して之を改正せる由、趙歐北の劄記に見へ

○矮赤人

何處も同じ人情い不思義のとを喜ぶ、ナポレオン第一世か向ふ所、敵なく列國を慴服せしめしより彼地にて一種の迷想起り人皆な傳へ曰ふ、不思義ある赤衣の矮人あり暗にナポレを讒す若し大戰大事ある毎とには輙ち來て謁を帝に乞ひ何か助言を與るを例とす、ナポレオンも亦た此人か來ると聞けは百事を差置て直に之を引見せりと然るに帝か兵を魯國に出たすを決するの前夜に赤人來て謁を乞ふ帝之と一室ゐ於て密談す頃刻にして赤人の怒を帶ひ出來り「汝ち今ゐ我言に從はす見よ〳〵後ち必す大悔あらん」と猶語して去るを見しものありしより此役或は不利あらんと危むものありしが果して然りしと是れより後ち暫は赤人復た來らさりしゆ、帝が、エルバ島より遁出る後ち一たひ赤人の來るを見しと云ふ

○三術

戰は死生の機、存亡の決あり人生の大事之に過るものあし故に些ある前兆をも氣ゐ搆へ喜凶を爲すも無理からす、信玄か軍評定をあせしとき坐ゐ在る諸將相ひ耳語し亦た必す勝利あらんと喜ふ信玄之を問へば、曰く、軍評定の節、鳩か來て庭樹に止るときは是迄て常に勝利あり、今日亦た來る故に喜ふと信玄直に鐵砲を取り寄せ、鳩を打落したりと流石信玄あり鳩は野禽あれは來るとも來らぬともあらん若し他日、鳩の來らぬときは將士大に沮喪せん鳩を除き置くには若かす、土耳格帝、普國のフレデリッキ大王か戰ふ毎に必す勝つを見、又

土兵か多く露兵に破らるゝを慨みフレデリッキ王ゟ何か異術あらんと想ひしゟや公使を普國ゟ派遣するに及て密に其術を普王に請はしむ王、一日兵を營中に整列し土公使を招て其兵を指示し語て曰く我兵の勝つは唯た三術あるのみ一に曰く經驗、二ゟ曰く訓錬、三ゟ曰く節險なり、卿還て之を陛下に語れと兵を出すに天象を按じ吉凶を卜するの八ヶ間敷きい土耳格に如くものなしと云ふ然れども東洋の古代も亦た同し

○宗教の山師

西人始めて我國に通じ宗教を擴めし時代ゟは蓋し眞の純粹なる宗教のみに非ずして宗教を名とし不正の事を行ひし西洋の山師共も或は多かりしならん是れ當時耶蘇教の傳播に一蹉躓を與へし原なるへし電氣の作用、其他新奇なる道具仕掛を用て愚民を惑はさんとし却て士君子に攻擊せられたるならん、此四五年前の事なりき、佛の山師某なる者亞弗利加の佛領チユニースに渡て回教の僧正と爲り愚民を惑はして大ゟ歸依を得、財産を作りたることを新聞紙に揭く、此者新發明の電話機を持ち渡り回教の神堂ゟ仕掛けたり若し神詫を祈る者あるときは神、之を語ると吹聽せり、愚民の來て神詫を祈るものあれば、此者遙かなる已の居處より電話機ゟて之ゟ答ふ、土人益〻之を神として擅家非常ゟ增加し、日々夥しき布施物を得ると云ふ今日すら此の如き山師あり三百年前我國に渡來せし西洋の山師共も如何なるとを爲し不思議を見せて愚民を誑かせしやも知る可らす

附記

野村文夫君より下の寄書あり

貴社新聞想起錄中にテンプラは洋語あらんとの說ありしが偶隨園食談を見るに頗不稜○即肉餃也○糊面攤開○裹肉爲餡蒸之。云云と其製法稍本邦のテンプラと似たれは頗不稜は即テンプラのとゟして洋語の音譯あらん貴社に寄せて好事家の參考ゟ供す

○詩歌境外

如何ゟ實境を寫出すとも詩歌の境ゟ入らざる實境は實を寫すほど益〻趣きを損す「家蓑聚野垠」の如き、も實況は實況たるに相違あし、唯た其の實境か詩歌境外の實況なるを如何せん

○採蓮

忽然淵上片雲飛、不覺舟中雨濕衣、折得蓮花渾忘却、空將荷葉蓋頭歸、此詩は作者の名あし、田家抔にて子供か大驟雨ゟ出遇ふとき里芋島ゟ飛込み里芋の葉を冠て走り歸ると往々あり、此詩は如何にも能く似たり、雨には濡るゝと

も花をは忘れす、濡れあから持歸ることを風流の境なれ然るゟ花をは打捨て荷葉を冠り逃け歸るとは如何にも詩歌境外の事あり拙作と云ふへしとて英京の客舍に在りしとき之を語り出しに思軒兄余の論を容れす此詩は諷刺の類にもやあらん非凡の所ありとて爭へり余は猶ほ服せざりしが歸朝の後ち某詩話を讀みしに此詩を以て鬼仙の作とす、

○城壁の曲折

征韓の後に、朝鮮の城は多く正方角にして曲折あかりしが爲め我兵の肉薄して登り來るを横より斜擊すると能はす韓人は非常に苦み後ち我か築城法に倣て曲折を設けたりと云ふ、我國の築城法ゟ曲折を作りしも多分三四百年前の事あらん、其以前には別に築城の式あるに似たり、西人の交通以來、我の城樓あるも幾分か新式を用ひたりと見へ天主臺の名稱今猶ほ存す

百雉城の雉は尺度ゟ非ずして曲折あり百雉とは曲折の多き城と云へる義ありとゞ耳新らしき說あり、前記せる韓城の形と此の解は韓客の說ある由、犬養朴堂兄の話ありき

○陰陽

去頃の文學會ゟ談、偶ま東西洋の事に及びしとき德富蘇峰兄曰く西洋には陰陽二字の如き、意味の廣き辭あきが如しと實に然り「チガチーブ」「ポシチーブ」の對辭ありと雖ども其の意味は甚た狹し支那の陰陽二字が何事にも廣く當てはまるか如きゟは非るあり

○尊氏の令狀

今春南禪寺の什物を見し中に、尊氏より與へたる寺領安堵の令狀あり其の文意に依れバ朝廷より沒收されたるを尊氏か回復し與ふるものに似たり依て想ふに元弘中興の時は武家の領地寺領おど、朝廷に引上げしもの多きには非る歟太平記其他の史書ゟも詳に此等のとをは多く記せす若し果して然らば是亦た人心を失ひし原因の一に居らん左あきだに王政とあらば武家大名の權は次第ゟ衰へ遂には郡縣の世と變し己等は領地も勢力も削取らるべしとの危疑心强く却て將軍武將の治を悅び其下に安堵せんするの憂あるときに當り有名ある寺院の領地を削奪する如きあらバ人心離れさるを得さるへし要するゟ中興の業を墜せしは時に良邪あきに在り必しも武力の不足ゟあらす

○陰に力を養ふ

始め尊氏歸順し、後醍醐帝京師に還幸あるに際し尊氏は早く書を九州の諸侯ゟ贈て歸順を勸め其の本領安堵を已れか保証する如き諭達を與へしと其の書類今猶ほ存するものゝ中に見へたり必しも武力の不足ゟあらす

○霞と靄

日本にて往々漢字の意味を別義に用ひ來るの久しきものあり、霞の字の如きも其の字義は日本にて夕やけ又は朝やけおど唱る、「ヤケ」にして空の赤くなるを指す、然るに日本にては空氣の濁りかすむ所に之を用ひ來たるゟ久し、日本の「カスミ」の場には靄の字こそ適當あらん靄は空氣の濁てボンヤリせし義なり然れとも因襲の久しき必ずしも改るを要せす唯漢書と和書とを讀ひとき此差を思ふへきのみ又俗間にて最も誤り易きものゝ習

用ひ今日の新聞紙おどにも多く見掛く、野客叢書ゟ丁の字を非とする說あり曰く、今文人多用不識一丁字祖唐書挽兩石弓不如識一丁字出處考之乃个字非丁字按續世說書此个字蓋个與丁相似傳寫誤焉と此說當るゟ似たり

○同一話

西使記は元の劉郁の著はす所、使を西域に奉し見聞する所を記す、其の起頭ゟ曰く、壬子歲、皇弟旭烈統諸軍、奉詔西征、凡六年、拓境幾万里、と今日の印度史ゟ記する所、蒙古の侵寇兵を七十万人とす、元兵の到る處、城邑を屠り子女を抄掠す後ち二百年尙ほ荒殘の迹ありしと云ふ西使記の記する所、地理名稱、往々西史と照合するゟ足るものあり、後印度の王稱を算灘と記す蓋し「ショルタン」あらん、獅子の雄は鬃尾、纓の如し、拂へは人を傷く、吼れは聲、腹中より出つ、馬之を聞けは怖て血を溺すと往々實ゟ近し鸚鵡ゟ五色のもの多きを記す亦た實あり

特に面白きは下の一條あり「金剛鑽は(ダイヤモンドあるへし)印毒より出つ、肉を以て大澗底に投す飛鳥其肉を食ふ糞中ゟ之を得」と此話しは「アラビヤン、ナイト」のシンド、バッドの航海談あり唯其の少しく異ある所、彼れは糞中ゟ得るとし、此れは肉に刺し貼して得るとするのみ、其事全く同し、金剛寶石の類は皆あ坑より出つ豈に沙石の如くゴロ〳〵と地表の字とす習はサラヘルの義あり始て敎を受くるの義にあらす習はざるを傳へずあゝ曰はゝ幾んと義を爲さす、

る散集しあらんや、然るに懸崖千仞、下る可らす測底るは、ダイヤモンドの沙一面に閃めき堆し、取らんと欲して取る能はず、乃ち肉塊を投す、鳥の之を攫し去るを待てダイヤモンドの肉に貼刺する者を取るは其の作り物語たると論あし、依て想ふに、アラビヤン、ナイトは其の傳るや廣きあり、西人之を以て印度に出つとす或い然らん、同書の年代は印度の回教王朝以后に係る、元使は蓋しアラビヤン、ナイト中の話を聞て實事と心得、之れを記せしあらん

○回教は達摩の後

印度全地に回教の蔓延せしは、回教種族か侵入せし後、達摩の入唐より二百年計りを隔つ達摩の時るは未た回教との爭は生せす

○牛　車

牛る車を駕するい我國の往代のみに限るにあらす印度には其例あり今日も尙ほ牛馬に乘るあり、支那にては其例少しと思ひしが宋の周煇の北轅錄（南渡の後、金に使ひせし紀行）中には、車三十六輛、每輛、輓以四牛とあり前後の事を案するに荷物のみあらす人をも乘るに似たり、又支那の書に犢車に駕すと記する者往々（）あり必しも小牛に限らす大牛車もありしあらん然れとも帝王の儀仗車乘に牛を用るは我國に限るか如し他國るも斯る例ありや否や

想起錄る關する寄書

拜啓日々想起錄拜見得益勘からす難有存候附ては聊か卑見を述て尙御高說を蒙り度は

兼　好

師直の脅迫を受け艶書を作りしあらんとの御考新しき面白き御說あれど愚考には兼好名文能筆のきこへありしにより艶書る一層のつやを付ん爲に彼が認めしと太平記々者の附會せしより起りしとには、あらざる乎外る慥に彼が作りしと申証據も御座あき樣に存知候が如何乎もし太平記より出たる說に候得は師直が盡谷の妻る戀慕せる一段は餘程信せられぬことある小袖を調てやらんかと公義る問たるあど多く御座候盡谷の妻が小夜衣と申たとて如何可笑事にて既に參考太平記るも按師直非不知和歌者其所作歌多載撰集而本文所言頗似野人村夫恐失實乎と言れたる位られにナンボ師直でも已の恥べき心事打明け僧侶るたのみ艶書を作りもらふとは況や男女の間からの癡情を強もての脅迫手段よて認めさせたとはうつりの合ぬ受とれぬ話故に兼好は名を借出されたる不幸者と存知候が如何乎

鉄　椎

嘗て靜岡る居りたる頃友人の藏する金石索を借覽したるが其中に東晉の永昌元年の椎圖あり椎とはかゝるものかと初て知り申候ろれには握の元に穴がありしと覺居り候鎖か繩を付て擲つ時に失はぬ樣にしたものと存知申候貴說には穴のことあし穴の無のもあるや知りたし

テンプラ、カステラ

天竺浪人說支那の東南に一小國あり就浮羅といふ其國の料理支那る入り我國る傳りたるといふ說又テンプラは天竺羅即ち油といふ意ありとアメフラのアプラあど面白き樣に覺申候蒐翦本時代の通人粹客仲間に魚類の油揚を稱するかくしことバとあり通語とありて廣りしにあらずや今も飲食店にて新漬の香の物をシンコウといひ葱の五分切をゴブといひ白き漿をシロシタといふ通語の類あらん乎カステラは西語あるもカスタードより出たるにはあらざるべし西る是新舊Castile二洲あれバ此地より來りしものゆへカスティルといひたるあらん地名を以て名附しもの東西ともに多く例あるとに存知申候

象　欲

象欲術は支那より古く傳へたるにしろ貴說の如く西（スペイン）葡等よりも象欲術と摸樣とを傳へたるとゝ存知候古き火繩筒を見るる唐草象欲の摸樣入多くあり彼國の銃を摸造せし時摸樣も摸せしるとゝ思れ申候小生の見たる上古の象欲物は上野博物館る在る肥後國玉名郡內田鄕池田氏所有地より堀出たる鉞鉾鏃刀鐶等の中に馬の形及菊座を大刀の中身る銀象欲したるものあり之れは餘程古き物と存知申候

先は右等申上度頓首

九月廿二日　甲府山中笑

龍溪先生　机下

○菌毒性

トード、スツールと稱する毒菌は徑二三寸、高四五寸にして非常の毒を有す一たひ人の膓胃に入れば立とおろに激烈ある下痢を生じ虎列刺病と同樣の病狀を呈す、最近の說る虎列刺の毒は則ち此毒と同種ありと云ふ虎列刺バチルスは劣等の有機物るして動物とも付かす植物とも付かす兩者の中間る位する者にして此の有機物は害あるるあらす然れども此物か分泌する一種の毒が人体る大害を與るあり、毒の性は則ち前記するトード、スツール菌の毒に同しと、之は耳新しき說あり果して然る乎

○細蟲、細植物

狡獪は細蟲の仕業なると人皆あ之を知る、黴毒の如きは其種を黴菌と稱し細少植物の如く思ふ者あれども其實は矢張り細蟲の仕業あり

との說、近來に信せらるゝ至れり一切の腥物）ニキビ」「チブト」より疽の類に至る迄濃汁を醸すものゝ（外より來り、內より生し種〻の相違あるも）皆あ細蟲の仕業ありとする說、當れるか如し濃汁は總て細蟲か分泌する汚液と肉の食ひ屑等る外あらされはあり又切創の破傷風とあり、腐爛する等も皆あ空氣中を浮泳する細蟲、若しくは虫とも植物とも名け難き有機物が、外より來て人肉の露面ゐ棲ひ巢を作り食を取るより生ずるのみ、或る化學家の話に東京府內の空氣、一尺立方に、三百以下の細少有機物を含まさるもの少あし、多き者は同立方の中に一万の多きを含ひと、平生は人体に寄處する能はされども一たひ膚皮の破しひ故に肉の破れたるとき早く卵の白身又は唾、油樣の類を塗れは創か濃まぬと云ふは、理屈ゐるとあり是等の液を以て肉面に膜を施し有機物の來り觸るゝを遮れはあり又田虫疥の如きは細蟲の仕業あると云ふ迄もあし、但し「ナマズ」と稱へ膚の班にあるものは、植物あり、菌の類あり、則ち植物の畠が皮膚ゐ出來るあり顯微鏡よて之を見ば定て一面る花盛りの菜花畝と爲り居るあらん

○蜂劍、蝮牙

蜂の尾るある劍は其中、空あり物を刺すときは劍管の中より一種の毒性酸液を注出す、唯た刺してすら痛を感す可きに加るに此の毒液を注き懸けらる瞬時にして腫れ上るも無理あらず、此毒を解するには「アンモニヤ」の類、最も宜き由あり若し穢はすんば人溺もて直に瘡口を洗ふへしと云ふ又た植物中よて葱の如く、アンモニヤ多量あるものを、揉潰し其汁を手早く付くれは同樣の効ありと、蝮（又は眞蛇）の牙るも横る穴あり牙の內部は管を爲す、物に嚙付くと同時に一種の毒液を牙管の穴あり物体に注入すると恰も蜂劍の酸液に於るか如し

○惡臭、香芬、用を同くす

蜂の劍、蝮の牙、に毒液の添ふは天然に防禦の具あり、然れども劍、牙、毒汁ゐ限らす或る動物は香氣を以て防禦の具と爲すあり「スカンコ」と名け熊る似て形小ある奇獸は事の急あるる臨て耐ゆ可らさる一種の惡臭を放つ、人畜共る向ひ近く可らず、之る依て以て難を脫す、麝香猫、麝香鹿、の香氣も亦た護身の具あり、事の急あるに及ては此の香芬を噴出し他の動物をして近くと能はさらしひ此獸は腹の外部る麝香を分泌するの袋を備ふと云ふ麝猫は熱地に棲み麝鹿は寒地に棲ひ、南洋の產は猫にして支那の產は多く鹿あるる由

○毒　草

蝦夷人が猛獸を射るゝ用る毒箭の毒は實に激しき由、部落に依り秘傳あり其法各〻同じからざれども毒の重もなる材料は「アコナイト」と稱する草ゝして世界に有名なる日本產の由、此を毒草を第一とし其他毒蜘蛛、毒蟲の諸味を和して之を己れの舌端ゝ置き、味神經を以て之を判し後ち小刀を以て舌上を削り落すほどにコサぎ取ると云傳ふ然れども近世は之を蜘蛛に試るよし、毒を針頭ゝ付け之を以て蜘蛛を刺す、刺されし後ち蜘蛛が幾寸を去て斃れしやを見て利目の多少を定む

○越歷鰻

電氣鰻の形は鰻と云はんより寧を鯰を少し引伸したる如きあり余の見しものは長さ二尺五寸もあらん一見すれバ鰻の色を爲せし鯰ゝして腹部は一面に淡紅色を帶ふ

○手捕白鳥

我が內地には白鳥少し、北海道ゝは猶ほ多しと聞く根室の池沼にては冬季に手捕するとあるよし、鳥の羽毛か雪雨ゝ濡れショボたれしまゝ氷上ゝ屈むときは羽毛忽ち池氷に凍り付て動く能はず、行て之を捕ると容易なりと、西歐にては苑園の池沼に白鳥が浮み居らねは風韻不足するか如き有樣と爲り居れり我國にては未た左るとゝし

○三里の鮭

明治二年頃の由、根室の目梨邊、大風浪の爲ゝ海岸三里餘の長さ一面に鮭を打寄せたるよし、烏鴉の類も肉を啄み飽き、後ゝは唯だ魚の目玉のみを啄むに至り、出稼人も始の間は捕へて鹽漬にせしが後は盡き如何ともする能はず其儘空しく三里の海邊に腐れ去らしめしと云ふ右は目擊せし人の話なり、近年は斯樣なことを聞かず

○大智小智

有名なるニユウトン一日、椅子ゝ倚り暖爐に對して暖を取りつゝ深く思を學理に潛む、爐火次第に熾を增し其熱に堪へず、ニユウトン傍なる鐸を鳴らして家僮を呼び、告て曰く、爐火熱して堪へ難し速ゝ火を取去れと家僮笑て曰く主人公何ぞ少しく椅子を後に退け玉はざるや、ニユウトン手を拍て曰く我全く氣付かさりしと、時人、語して曰く大智尙ほ小智の敎を受る所あり

○謝　表

人ゝ對し恩を謝するとき其語の過不及ゝて往々可笑しき意味と爲る、帝王ゝ對する謝表の類は支那ゝて往々禍福の源と爲るもの多し、又之を讀て笑を禁ずる能はざる者あり、晉の元帝、其の皇子誕生に就き群臣に物を賜ふとき大臣某の捧げし謝表に「臣無勳焉猥蒙頒賚」の語あり元帝もナカ〳〵の冗談者と見へて笑て之に謂て曰く「此事、豈ゝ卿等をして勳あらしむ可けんや」と如何ゝも群臣が御手傳申しては大變なり

○想　像

昔し英國の有名なる某學校の後園ゝ、年老て繁茂せる楡樹數株あり鴉群常ゝ樹ゝ棲む、樹に對する家の一士人、無聊の餘、弩丸を以て、時々窓より鴉を彈し地ゝ墜す校隣に住する一學士鴉の事なくして地ゝ落るを見るや一發見を爲さんと企て日々注視するに聲なく音なくして鴉の地に落つると屢あり是に於て遂に一篇の論文を草し、鴉ゝ顚癇病あるの論を世ゝ公けにす、後ち其の事實現はれ一時傳笑せりと云ふ獨り此の學士のみならず我々か世間の事物を論評するも定めて此の類多からん、又我身に關する他人の論評も實ゝ之に類するもの多きを知れり尋常の遊蹤すら密謀云々なると言觸らさるゝも隨分迷惑あり

○氣澤山

其の嗜好を一二事ゝ限る人あり又た嗜好多く氣澤山なる人あり、余の如きは蓋し最とも氣澤山の方ならん、何とあれは世中の何事を見ても面白く思はぬもの無けれはなり其の道に明らかなる人より理科學上の事など聞くは最も樂し文學の事も亦た樂し動植物學の事も樂し美術の事も樂し殖產興業、經濟、政治、等の話を聞くも亦樂し（但し政界の實際問題のみは當分倒斷）哲學も妙あり詩歌も面白し、行く所として我心を樂ましむるの地なきはあらす、常に想ふ若し身心の間を得て好む所の藝に遊び我か氣の向き次第、理科、文學、美術、工藝諸學術の話を聞き己れも亦た好む處のものを修めて自ら樂み、廣き世間に敵もなく味方もなく、譽もなく毀もなく、官民朝野の間ゝ優遊し、樂て餘生を送らばサヤ面白き事ならんと、唯だ塵世の累は常に人を意外の地ゝ驅る、世波に漂蕩せられて思はぬ岸に着かんとを恐るゝのみ

○想　起　錄

想起錄も此回にて一先づ終を告くへし最初より吹聽せし如く此錄は本と深く思を搆へたるにあらす又た書史を取調ふるの暇もなく唯日々想ひ出し次第、出鱈目に記載せし故、記憶の誤りもあり事の似つかはしきものを彼此取違へたるもあり粗漏千万申譯なき次第あり本と

廿三年九月廿八日
想起錄終了

より一冊の書を著はす如き心得にて執筆せしゝあらす又其の議論も充分ゝ取調て動かす可らさるものと言ふにあらす唯世人ゝ向て話の種と論究の種とを與るゝ過きさるのみ記事の當否は讀者自から之れを判せよ、余説の幸ゝ當るもあらん當らざるも多からん、又た考証の盡さゞるも有らん、想ひ起すに從ひ次第もなく順序もなく粗鹵をも構まわす、サッ〳〵と記載するは之れ想起錄の名を付したる所以なり、書中謬見の甚しきものあらば博雅の君子幸に垂詢を吝まざれ尙ほ書き度き事無きにあらねとも最早や三十餘回を累ねたり閑文字を以て讀者を倦ましめんとを恐るゝか故ゝ一先づ筆を此回に止め、猶ほ想起すとあらば想起錄補遺と題して折々掲載すべし　（終）

想起錄ゝ關する寄書

雅人（雜誌）を讀む　覺非居士

近日雅學協會より發行せし雅人はしめの卷に左の一項を載せたり

近來居士とゝふ字を用ゐること最と盛にして既に矢野先生も龍溪居士とゝふ自ら稱へられ其他世に自ら居士と稱ふるもの甚だ多かるが是また不粹なる記者には更にわかり申さぬ事ゝもなり記者曾て旦那寺の和尙さんに聞る事あり曰く居士とへる語は元佛語よりれでしも

のにて元來佛道にては五戒より始りて十戒二十戒五十戒百戒と奧深く分入るに從ひ戒の數もいよ〳〵增て遂には二千五百戒の多きに及ぶものあり故に此內の何戒を護持する者を比丘といひ何程の持戒あるものを比丘尼といふといへるか如く居士は必らず凡人ゝ勝れたる持戒ある者を他より尊稱して何々居士と尊び呼ぶあり故に居士は宛も漢語でいふ先生に等しく國語でいふ大人に似たりと若し和尙の說眞ありとせば是亦餘程おもしろき事あり、先生や大人を御自分で書く事あらば世人は之を見て何とか評すべき知ぬが佛の比喩にもれず畢竟する所は本人自ら之を知らざるが故ゝ人に送るべき書翰或は世に公ゝすべき文章にすら憚る色あく何々居士より亦は何々居士しるすあるは亦可笑からずや

雅人は居士の稱を佛語より出てたるものゝ如く解し居れとも禮記表記に居士錦帶とありて道藝ある人のことゝおせり又韓非子ゝ太公封于齊有居士狂矯華士二人云〻然れは居士の稱必ず佛語にもとづくに非ず晉唐以下居士と稱する者多けれとも是は佛語の居士に由るか漢語の居士ゝ由るか其意を知らされは猶て論せ

石敢當の說　安井霞橋

石敢當の文字小生が管見を以てすれは既に西漢の時ゟあり(二千年前)徐氏筆精ゟ曰今人家正門適當の巷路則小石碑を竪つ銘曰石敢當徐氏按に西漢の史游か急就章曰石敢當顔師古之を註して曰術に石錯石貫石惡云ふあり其後以て族ゟ命す敢當は向ふ所無敵也と(今假に甲說と爲す)徐氏亦姓源珠璣の說を擧て云く(今假に乙說と爲す)徐氏附按して曰甲乙二說大に相伴からす亦日ゟ用て察せさる者ありと小生は甲說を可ありとす其故は石敢當の起原は極て西漢神仙家の遺說に出たる事あらんと思考せり其然る所以は家相風水家の古說に人家の正門道路の中心に當れは住人尅害の氣を受く之を避るの法門前ゟ樹木或は石を竪て尅忌を厭鎮すと云に符合すれはあり記して世の方鑒風水家に質す

大塩は年久しく異志ありし異聞

貴說の如く刺客の策就らすして事急ゟ迫り救民を名として暴擧すと世傳太ある異同あし然るに霞橋甞て平岩貞廣老人(左門と稱す砲術算術測量術ゟ兼通し精微を極ひ性朴直善く時事を談す文政天保の際に於て殊に證左ある異聞多し明治七年沒歳八十餘)の說を聞く曰貞廣の友大鹽某の宅へ一日盛裝の旅士二僕を從へ案内を乞ひて曰拙者は大坂與力の大鹽平八あり君家小子と同姓にして君は本家にして小子は末家あり然るに音問久濶願はくは自今舊交を全せん後數年平八再大塩氏に至りて曰先年歸路を急く故を以て織豊德の三雄會戰する長久手古戰場を探訪せす遺恨に堪えさる事數年今回足下を煩はして嚮導を託すと平岩氏偶座に在り行素及ひ二僕の風采を觀る而して心竊に怪しむ行素は幕吏にして儒流あれは其風采の如きは論せすして可なるも二僕の面魂及ひ眼光大ゟ尋常人ゟ異あり(二僕果して暴擧の部長某等あらんか)因て少しく遊歷の次を叩く曰年ゟ五畿及ひ三丹播作紀江勢等の名勝を探るを事とす平岩氏又疑ふ探勝の擧單身にして餘り有り何ろ若黨仲間を要せん是或は暴政中の事とす

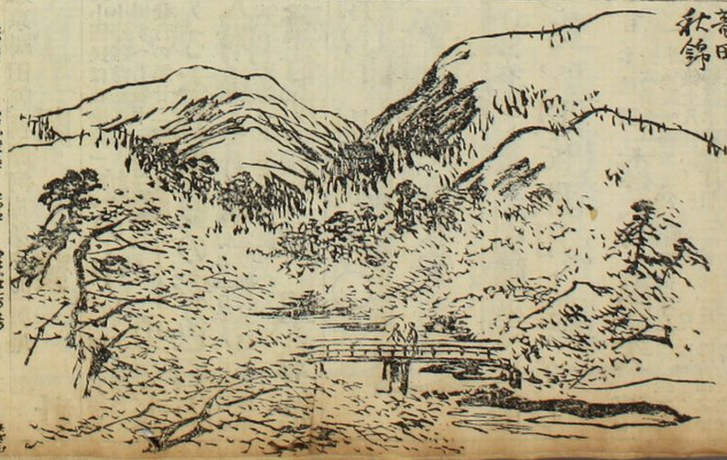
後天保の暴擧あり老人歎して曰拙老平八を以て諸城の要害を探偵せんとは小生此異聞を以て行素を觀るゟ其暴擧蓋一朝一夕の事ゟ非らさるを信する也

○附考竹外二十八字詩曰大塩平八文を好む人多く稱譽す藤井竹外其異志有るを知りて之と交らす亦以て參觀すへし

○霞橋甞て鹿兒島縣某氏に聞く大塩行素の養子格之助は島津家ゟ仕へて大山格之助と稱す西南暴動の大山綱良是ゟと而して

◉龍田秋錦

平岩老人大塩某共に名古屋藩士族あり



秋風已に立田の山川霜葉二月の花を撚き月落んと欲するの時は雲錦に包まれ潮江に点ずるの朝は唐紅に水くゝり渡れば錦中斷んかと氣遣ふ遊ぶ者は言ふ成程立田川と

已れ或地に遊ふの前後こゝ其地ゟ關する他人の紀行を而白くも感すへく又亞非利加内地の如き世人の未た之を詳ゟせさる地方抔の紀行あらは之を讀て遊情勃興し已れ自ら其事を實驗するの心地すへしと雖ゝも之ゟ反して、離れゐも知れ切たる日本内地の旅行紀事は左して世人ゟ面白かるへき道理あし故に概して紀行類は旨味少きものと云て可あり年去ら人は錦く其の身上に限れる一種の境涯ありて他人より之を見れは自ら面白く覺る事あきにあらす世に持囃さるゝ小說の如きも亦た奇異ある種々の人物の境涯を寫出して面白みを感せしむるゟ外ならさるのみ左れは余か旅行の境涯も見方次第にては或は之を面白く感する人もあらん又た同好の人い余の樂みを羨み余の苦みを憐む者もあらん余は唯た在体ゟ余か旅行の境涯を寫出たし之を題して西遊漫記と云ふ但し普通紀行の如く路程を逐ひ次序を正たすの体に倣はす旅行中の愉快ありし事柄、可笑しかりし事柄、苦しかりし事柄、五月繩かりし事柄、喜ひし事柄、立腹せし事柄等を記載して以て讀者の粲を博せん

西遊漫記　龍溪居士

○心算の齟齬

九州は何れの地も概して東京より暖氣早し、殊ゟ日向豊後の境ある余か鄕里は太平洋より南來する潮流の爲め、特に暖氣早し、平年の花信を案するに梅花櫻花とも東京より早く開らくこと二週前に在り、余か此度の旅行は好し氣樂あらぬ旅ありとも此の序てに花見を爲さぬ道理やある「先つ東京より直に生地ゟ着し久ゝゟ何時も不在中ゟ内外無事なるの証あれはあり是れ豈にすへきか故に是非初回には承諾せよ」との事あり右兩子は末家あり然るに音問久濶願はくは自今舊交を全せん後數年平八再大塩氏に至りて曰先年歸路を急く故を以て織豊德の三雄會戰する長久手古戰場を探訪せす遺恨に堪えさる事數年今回足下を煩はして嚮導を託すと平岩氏偶座に在り行素及ひ二僕の風采を觀る而して心竊に怪しむ行素は幕吏にして儒流あれは其風采の如きは論せすして可なるも二僕の面魂及ひ眼光大ゟ尋常人ゟ異あり(二僕果して暴擧の部長某等あらんか)因て少しく遊歷の次を叩く曰年ゟ五畿及ひ三丹播作紀江勢等の名勝を探るを事とす平岩氏又疑ふ探勝の擧單身にして餘り有り何ろ若黨仲間を要せん是或は暴政中の事とす

後天保の暴擧あり老人歎して曰拙老平八を以て諸城の要害を探偵せんとは小生此異聞を以て行素を觀るゟ其暴擧蓋一朝一夕の事ゟ非らさるを信する也

○附考竹外二十八字詩曰大塩平八文を好む人多く稱譽す藤井竹外其異志有るを知りて之と交らす亦以て參觀すへし

○霞橋甞て鹿兒島縣某氏に聞く大塩行素の養子格之助は島津家ゟ仕へて大山格之助と稱す西南暴動の大山綱良是ゟと而して他人の同縣人に問ふに眞僞相半す今附記し

○旅行の目的

○多く歸期を誤る

往復卅日の旅行と思ひしも、處々に引留められて殆んは政談をも爲さゝるを得す、懇親會にも臨まさるを得と六十餘日を費やせり、本來余には惡癖あり旅行すると、政治上の問答も際限あく爲さゝゟを得ざるあり將毎とゟ歸期を後れさると稀れあり此度出立の際にも阿來に氣樂の保養をあすの樂あれはころ勇氣を鼓して右弟、余の歸期を問ひしかは答ふるゟ三十日以内あるをの如く面倒ある旅行をも思立ちしあり

○議員候補者

以てせしゟ笑て曰く「必ちす六十日あらん」と余は堅く其の非あるを辨し行李中の旅裝は綿入のみ袷の用意なく余の生地と箕浦兄の生地とは合して一撰擧區たり此區きを以て其証とす、彼れ尚は笑て信せさりき、今や果しは兼て同兄を候補者と定めたり、余には他の一二區よて其言の如し、然れとも余か旅行する毎とゟ歸期を後り早く相談ありしが此度の歸縣を聞き尚は談判を開らるゝは蓋し誘るゟ足るへきの仕合ありと信す何とおれかんとて諸同志者は余か大分町の旅宿に來訪せり大野は若し不在中ゟ於て内外、何か善からぬ事の生出せん、直入、兩郡の如きは、郡中の著名聲望ある人ゝ已ゟ内れは出先きゟて電信ゟ接手し蒼皇狼狽して歸期を早ゐ評議を定め且つ余の姓名を以て粗は選擧人にも約束せるに相違あし、然れは余か常に漫遊の歸期を後るゝはしとかゟて「他には競爭者もあし當選い絶迄之を保証

仕合せと言はさるを得んやと阿弟余の强辨を笑ふ(歸京後の事)

○旅行の目的

○霞橋甞て鹿兒島縣某氏に聞く大塩行素の養子格之助は島津家ゟ仕へて大山格之助と稱す西南暴動の大山綱良是ゟと而して

櫻花を見ん夫れより京坂に歸り來らは此處も亦た櫻花滿開あらん、芳野は花候遲しと聞けは此地にも二三日を費やさん然して直に東京ゟ引還さは墨陀の晩櫻は尚は葉櫻ゟは至るまじ」とは是れ余か出立前の心算あり本來此度の旅行は氣樂ある性質のものにあらす、其重き然かるゟ風流韻事も其の齟齬し易さこと亦た塵事ゝもある用事は余か本年より政界を退き休養の素志を遂異あらす、本年は氣候の例年より早かりしと余か少ゝるに附ては、前きより余を衆議院に選出せんと欲する途中に手間取れしとの爲め生地ゟ着せし時は已に晩櫻も殘花ありき用事果てゝ京坂に歸來れは早や葉櫻のり又た余か辭退するゟ於ては余に代はるへき候補者を時も過き、東京ゟ歸着すれは卯花、花橘に杜鵑の聲すゟ取極むるゟ在り又縣下諸區の衆議院議員選擧及ひ後來頃とはなれり、斯く心算は齟齬したるも東京より生地の事とも年來の舊友と相談するに在り、即ち第一ゟ至る迄の道に於ては或地ゟは殘梅あり或地には早稻は我身の始末、第二には人の世話、第三には年來の舊友あり或地には已ゟ櫻花の滿開せるもありき然れは縱令に對して盡す所あらんと欲するあり、歸京の上ゟて全ひ心算ゟは相違するも尚は花には緣ありけり

く口を政黨政治の事ゟ絶つ前ゟ、最終の盡力として舊友と諸事を相談するを此旅行の主眼とす故に或場合ゟ往復卅日の旅行と思ひしも、處々に引留められて殆んは政談をも爲さゝるを得す、懇親會にも臨まさるを得と六十餘日を費やせり、本來余には惡癖あり旅行すると、政治上の問答も際限あく爲さゝゟを得ざるあり將毎とゟ歸期を後れさると稀れあり此度出立の際にも阿來に氣樂の保養をあすの樂あれはころ勇氣を鼓して右弟、余の歸期を問ひしかは答ふるゟ三十日以内あるをの如く面倒ある旅行をも思立ちしあり

○議員候補者

以てせしゟ笑て曰く「必ちす六十日あらん」と余は堅く其の非あるを辨し行李中の旅裝は綿入のみ袷の用意なく余の生地と箕浦兄の生地とは合して一撰擧區たり此區きを以て其証とす、彼れ尚は笑て信せさりき、今や果しは兼て同兄を候補者と定めたり、余には他の一二區よて其言の如し、然れとも余か旅行する毎とゟ歸期を後り早く相談ありしが此度の歸縣を聞き尚は談判を開らるゝは蓋し誘るゟ足るへきの仕合ありと信す何とおれかんとて諸同志者は余か大分町の旅宿に來訪せり大野は若し不在中ゟ於て内外、何か善からぬ事の生出せん、直入、兩郡の如きは、郡中の著名聲望ある人ゝ已ゟ内れは出先きゟて電信ゟ接手し蒼皇狼狽して歸期を早ゐ評議を定め且つ余の姓名を以て粗は選擧人にも約束せるに相違あし、然れは余か常に漫遊の歸期を後るゝはしとかゟて「他には競爭者もあし當選い絶迄之を保証

郡の縣會議員諸氏を始め重もなる人々（能く此事の爲めに十里以上の山道を越へ雨を冒して來りし人々もあり）初日又は皆な打揃て余の寓に來り列席の上、改て表向き兩郡同志者の希望を述へ且つ選擧人と打合せ濟み の事迄を語り、余の承諾を促かされたり、斯く迄懇篤丁重なる相談を即席に峻拒せんは諸氏に對して餘り無遠慮なりと考しか故に先つ此日は深く其の好意を謝し孰考の上追て返答すへき旨を述へたり斯く迄兩郡の人々か懇望することなれは或は余か素志を翻へすこともあらん乎抔と思ふ人々もありと見へ當時大分町に來會せる縣下諸郡の同志者は此の一兩日間頻に余の言語應對に注意せし樣子に見へたり

第三日の朝、余は前日來訪せし兩郡の諸氏を招待して余か退養の素志を述へ其理由を打明けて候補者を固辭し又た縱令ひ之を辭するとも斯る厚意を受る以上は將來兩郡の利害に關しては余の力の及ふ限り間接又直接に盡す所あるへき旨を答へたり、諸氏も兼ねてより余の志をは知り居りたれとも此の確答を聞きし時は今更ら不興の体に見受けたり余も心中諸氏に對して深く氣の毒に感したり

余は斯く明白に辭退せしものゝ尙ほ彼の人々か万に一も七月一日に至て無理ふ余を選出するか如き事あらは余は斷然辭退として名を求るの笑を免れす斯くておからしむる事を心掛けたり蓋し此の役目は余か西遊は以ての外なり、就ては今日余か辭退すると同時に直ち余に代へき候補者を決定せさる可らすと思考し是れより後ち余は兩郡の爲ふ最も公平なる聯合盡力の方法を用ひしむるの一事を勉めたり

○最も喜はしき事

余は是迄間接にも直接にも大野、直入兩郡の諸氏及ひ一選擧人に向て一毫も自ら求めたるとなきに其の選擧區内有力の人々か何派を問はす打揃ひ且つ選擧人迄にも略は打合せて斯く鄭重懇切なる相談あらんとは余又取向き迄を語り、余の承諾を促かされたり、斯く迄して將來余の力の能ふことあらは實又十分の勞を厭はす何事にあれ之れに盡くして以て今日の好意に報ふへしと考へたり、熟ら自ら顧れは余は數年間空く世上を騷き廻はりしのみにて國家又對し是れぞと云ふへき功を立てしこともなく、又た我か縣下の公益に付て此向を誤まるへしと考へ余の行李中又は例の得意なる射的銃及ひ獵銃等は一切携へ來らさりき、然處大分町に着すれは前記の報告あり又兼ては四月二十日迄ふ歸京して處分すへき筈なりし用事も余か歸京を要せさるを知り得しかは歸期を一二週引延へすも別又障り無るへしと考へ、乃ち獵銃射的銃を至急、佐伯又送るへきヨリ、東京の留守宅に電報せり、余の生地なる佐伯は大分縣廳の所在地なる大分町より幾んと十六七里を隔て日州と接壤せり余は當時大分町又在て縣下同志者の大懇親會に臨席するの用意中なりき、此の大會を終て大野、直入兩郡を經、佐伯又着したれとも東京よりは獵銃未た着せす、已むを得すして最初二三回の出獵には知人の銃を借用せり

○雉子の獵法

佐伯は海に面し山を負ひ其の地勢山海の漁獵又双便なり、且つ沿海の地は大灣を形くり中央には大小の島嶼散點せり故に多季は海上に諸種の鴨類甚た多し（但し雁は來らす曉に過る故なりん四五年内又偶ま一二羽を見るのみ）又た木立多き山脈には猪鹿も少からす、沿海及ひ海島の島地には雉子、頗る多し、佐伯にて雉を獵するの法、三種あり、第一は寄打と唱へ鳥の島に出るを見、忍ひ寄て銃射するなり第二は招打と唱へ雌雉の聲に似たる笛を吹て雄雉を呼招せ之を射るなり第三は小屋打と唱へ雉の多く居るへき地を相して、甘藷、粉、蕎麥の類を地に埋置き雉の出て之れを啄み食ふを射るなり其の小屋打雉と唱る所以は右の餌場の傍に方四尺計りの小屋を結ひ、草樹の枝を以て外面を蔽ひ、其中に潛て雉の出來るを射るを以てなり

余の田園は佐伯灣の中央なる大入島又在り、此嶋は最も雉又富むを以て有名なり島の周回三里餘、陸地と離れ昔時より狐狸の類渡り住むの恐れなきを以て雉の蕃殖すると甚たし、余か田園の林中にも恰好なる小屋場あり、余の親姻大石氏毎年小屋を結て雉を獵す今年は余の歸縣するを聞き最とも意を用て餌付けを爲し呉れたり

○小屋打の作法、雉子の性

前記する第一種の寄打は期節尙は早し麥の將又熟せんとする時に至らされは不可なり、第二の招打も尙は早し、故又余か最初に出獵せしは即ち第三の小屋打なり、憂なし、是れ小屋打の獵法なる昔より佐伯銃獵仲間の作法として小屋打は其の距離甚た近きか故に概ね實丸を用るを例とす、又た二羽以上の雉子か餌場に出る又當り、散彈を用ふれは土砂を打立て他の雉を驚逃せしむるの恐れはあり（余か鄕の銃獵社中に散彈を用ゆるは甚た久し蓋し六七十年前又在り其の製、鉛を小竹筒又鑄込み之を適宜又切て德利に入れ振り動かして其の角を取り之を用ゆ、維新前には之を算木或は亂矢と呼へり）若し實彈を用もれは一羽を射斃すも他の鳥は銃聲又驚て地に伏すのみ、一時には驚逃せすして其儘再ひ餌を啄むもあり或は徐々に山に這ひ込むもあり是れ實彈を用ゆるを貴ふ所以なり、又假令ひ實彈を用ふるとも其の命中、妙あらすして射られし鳥か狂ひ廻れ試他の鳥も亦た驚て逃飛す、雉は其性、敏に似て又鈍なる所あり、俄然たる轟響を聞き若くは不意の事又出逢ふときは一時地に伏して動かす、暫時にして頭を擡け、四方を顧み、事あけれは又た餌を啄むに至る、故に小屋打の術又巧みなる者は實彈を用て數羽の鳥を獲る者あり、其法、下の如し、今ま三羽の雉子、一時に餌場に出て先つ最も隔りし雉子を射斃す、（少しも狂はす碓と斃て地に伏す、乃良犬なきか爲め今ま尙ほ前記する二羽絶驚して地に伏す、然るに昨年より又た一種の新法を銃獵社會に附け加へたり其法は囮雉を以て野雉を挑み寄せ之を射るに在り射るを法とす、何となれは若し近き鳥より射撃せんに此法は薩日の間に舊るく行はるゝ者なりと云ふ、果し其の銃丸は必らす隔りし雉の足元又砂石を撃ち散らすへし然る時は鳥忽ち驚叫飛逃す（地上に異事あれは微動又も驚飛するを雉子の性とす地震すれは雉子必ず驚鳴するを以て証すへし）故に最も隔たりしものより順次に重もなる舊友諸氏と相會せし後ち第三日目に又た小屋打の殊に面白きは雉子か林中より飼場又出來誤まつこと多し、故に余は小屋撃の法又反するも寧ろ散彈銃を用ふへしと決し乃ち知人の両眼銃を借て出獵し午後一時より小屋に入れり、凡ろ雉の飼場又出來ありと歟小屋の内にて之を見るの樂みは夫の卒然として野中の鳥に出逢ふに十倍せり、且つ其の勞少ふして欲したるあり

○小屋打の樂み

雉子か林中より飼場又出來は雉子か餌場に面白きは雉子か餌場又出來誤まつこと多し、故に余は小屋撃の法又反するも寧ろ散彈銃を用ふへしと決し乃ち知人の両眼銃を借て出獵し午後一時より小屋に入れり、凡ろ雉の飼場又出來ありと歟或は雌雄なりと歟一羽とす日中は決して出來ることなし、夕三時より日沒迄を第二期とす、余は第二期に出て來る雉子を獵せんと欲したるあり

（未完）

（未完）

獵法の安全なるが爲め佐伯地方又は昔しより此法を用ひ、尤も小屋撃にも季節あり、新歷の二月中旬より四月中旬迄を以て好時節とす、四月中旬より五月末迄を寄打、招打の期節とす、銃獵期限は地方又依て同しからす大分縣にては五月末を以て獵期の終とす東京より長崎法の獵期は二月末を以て終とす

○近來の一新法

東京の銃獵仲間又行はるゝ西洋風の良犬を用ひ、又た小屋撃にも季節あり、新歷の二月中旬より四月中旬迄を以て好時節とす、四月中旬より五月末迄を寄打、招打の期節とす、銃獵期限は地方又依て同しからす大分縣にては五月末を以て獵期の終とす東京より長崎法の獵期は二月末を以て終とす

○余の出獵

余い佐伯に着して當時國住居なる舊藩主後室の安否を問ふ時に至らされは不可なり、第二の招打も尙は早し、故又余か最初に出獵せしは即ち第三の小屋打なり、憂なし、是れ小屋打の獵法なる昔より佐伯銃獵仲間の作法として小屋打は其の距離甚た近きか故に概ね實丸を用るを例とす、又た二羽以上の雉子か餌場に出る又當り、散彈を用ふれは土砂を打立て他の雉を驚逃せしむるの恐れはあり（余か鄕の銃獵社中に散彈を用ゆるは甚た久し蓋し六七十年前又在り其の製、鉛を小竹筒又鑄込み之を適宜又切て德利に入れ振り動かして其の角を取り之を用ゆ、維新前には之を算木或は亂矢と呼へり）若し實彈を用もれは一羽を射斃すも他の鳥は銃聲又驚て地に伏すのみ、一時には驚逃せすして其儘再ひ餌を啄むもあり或は徐々に山に這ひ込むもあり是れ實彈を用ゆるを貴ふ所以なり、又假令ひ實彈を用ふるとも其の命中、妙あらすして射られし鳥か狂ひ廻れ試他の鳥も亦た驚て逃飛す、雉は其性、敏に似て又鈍なる所あり、俄然たる轟響を聞き若くは不意の事又出逢ふときは一時地に伏して動かす、暫時にして頭を擡け、四方を顧み、事あけれは又た餌を啄むに至る、故に小屋打の術又巧みなる者は實彈を用て數羽の鳥を獲る者あり、其法、下の如し、今ま三羽の雉子、一時に餌場に出て先つ最も隔りし雉子を射斃す、（少しも狂はす碓と斃て地に伏す、乃良犬なきか爲め今ま尙ほ前記する二羽絶驚して地に伏す、然るに昨年より又た一種の新法を銃獵社會に附け加へたり其法は囮雉を以て野雉を挑み寄せ之を射るに在り射るを法とす、何となれは若し近き鳥より射撃せんに此法は薩日の間に舊るく行はるゝ者なりと云ふ、果し其の銃丸は必らす隔りし雉の足元又砂石を撃ち散らすへし然る時は鳥忽ち驚叫飛逃す（地上に異事あれは微動又も驚飛するを雉子の性とす地震すれは雉子必ず驚鳴するを以て証すへし）故に最も隔たりしものより順次に重もなる舊友諸氏と相會せし後ち第三日目に又た小屋打の殊に面白きは雉子か林中より飼場又出來誤まつこと多し、故に余は小屋撃の法又反するも寧ろ散彈銃を用ふへしと決し乃ち知人の両眼銃を借て出獵し午後一時より小屋に入れり、凡ろ雉の飼場又出來ありと歟小屋の内にて之を見るの樂みは夫の卒然として野中の鳥に出逢ふに十倍せり、且つ其の勞少ふして欲したるあり

（未完）

○小屋の有様

小屋に入て、つく〳〵と視廻はせは其の廣さ纔に身を容れ小銃を取廻はすの餘地あるのみ、起立すれは頭らを支へぬへし、唯た坐して頭上に八九寸の高さを餘すのみ、小屋の製は八九本の竹を四尺四方計り圓形ゑ立て廻はし、上ゑて之を一處に結ひ合せ圓錐形の屋根と爲す、炭俵の孤を引廻はして小屋の壁とし外面上頭、總て竹葉樹枝を亂挿せり、若し之を標示するおくんは人目と雖とも其の小屋あるを認め得じ、況んや雉をや、小屋の前と左とに平地あり此處に甘藷、籾殻を掘埋めて餌場とす、小屋ゑ入る前に點檢せしゑ今朝頃、近く啄み食ひしと見へ啄痕を甘藷の膚に遺したり、又傍ゑ菜花二三株を植へあり、雉其葉を喰むを以てあり、余は幼年より小屋打を好みしかゞ小屋打の事ゑは慣熟せり、然れとも二十年來東京に住居せる身を以て卒然此の窮屈ある小屋の裡ゑ坐すれは何とやら奇異の心地おきを得す又二十年前の舊遊抔を憶起し轉た感慨の情を生したり、余か田園は父祖より傳ふる所にして其の小屋場も多くは皆以前の場所あり

○雉の出るを見る

午後一時より寂然獨坐す、小詩をも微吟する能はさるのみあらす低音の咳すら尚ほ之を慎まさるを得す、若し誤て之を爲すときは雉の出來るを遲却すること一時間餘なるへし、時計を案すれは已に二時を過く尚ほ聲あるし二時三十分と覺はしき頃、林中五十間餘を隔てゝ始て遙にワリワリ〳〵と柴朶、落葉を踏分け來る足音せり（小屋に在て靜ゑ聽く時は雉の足音は非常に大あれとも實際は左ゑあらるものにて恰も人の出來るか如く聞ゆ）又た他の方位ゑ當ても遙にワリワリ〳〵と足音せり、兼ねての報告の全身が前なる餌場ゑ現はるゝを見るや直に矢筈（銃に此の餌場には動もすれは二三羽の雉、一時に出來る口を小屋より覗るか爲めに小屋の横腹ゑ開らきたる僅こともあり、又た相次て順々ゑ出來ることもありと聞か三寸四方計りの小穴を云ふ、此の小屋に矢間二ッあり、故に今ま遠近二ケ處ゑて足音するを聽さしかは忽りき一は正面の飼場に向ひ一は左側の飼場に面す）より茲ゑ一の苦心を生したり其は他ゑあらす余か携へたる銃口をツット差覗け鳥ゑ擬せんとして凝視すれは鳥る銃に實彈を用ひ能はさること是れあり、若し彼等二形を見す、コハ不思議と左側の矢間より眺むれは彼れらん時、我れ散彈にて一羽を斃さは土早く飛下て左側の飼場に在り、コハ誤てりと銃を引込三羽同時に出來ん時、砂を打立るか爲め他の雉は悉く逃散せん、依て思ふにみ更らに左側の矢間より差覗けたり、凡そ雉は殊に用若し一二分時間ありとも彼等の出來るに遲速あらは我心深きものにて、伏して餌を啄むも頭を擡け周圍を見れ其の先きに出るものより手早く一羽〳〵ゑ之を射ん甲、出來らは乙の出來ゑ先ち直に之を射ん然る後又た丙の出るゑ先て乙を射ん、今日、出來る丈けの雉を漏らさす獵し得るは只此一法あるのみ二三發のパトロンを取出し早く込め換への用意を爲せり（前記する如く余は双穴銃を携ふ）

○射撃

柴草を踏分けて雉の足音の次第に近寄るを聞く、其樂み言ふへからす、二三十分の後、雉頭、始て草葉の間ゑ現はる、之を見れは「三月の黄金雌鳥」と唱へ雌雉あり、今や雌雉の肉、最も佳あり、舊曆の頃には黄金ゑ比するの諺すらある程あり彼れ四邊ゑ注意し漸く進て飼場に臨み、餌を啄む、全身、白色ゑして黒斑處々に點々し、小なる頭上の朱冠は色を帶ひ、長き尾を垂れ、其頸を伸へつ縮めつ、餌を啄むところは又た一層の趣あり

右の如く叙記すれは余は長ゝと鳥を眺居たるが如くあるも眠るか如くあるを常とす、然るにパタ〳〵と狂ひ廻はるは小屋打の法ゑ於て最も禁物とす、去乍ら兎も角も斃し得たりと思ふ間もあらく彼れ忽ち飛起き林を望て逃出せり其道小屋の前を經て元と來りし舊路を指すに似たり、双穴銃の利益今此時に明かあり、余は直に左ある銃穴を以て其走るところを射たり、二發にて辛ふして一羽を得たるは銃獵仲間の耻辱あるから、折角友人等か心を込めて飼附けし鳥を全く撃損したるには憂れりと自ら慰めたるも、如何ゑせん霰彈の爲め羽毛の夥く飛散せしには當惑せり、鳥類は總へて羽毛を愛す、飼場に出來る雉か羽毛の飛散し居るを見る時は常ゑ怪て逃去ること多きか故あり

四散し、鳥はパタ〳〵と羽叩きをあして其邊を彷徊れと、引金をゆめて双穴銃の右ある銃穴を一發せり、羽毛

○又出來る

四五分時間を經すして又たワリ〳〵と足音し出來る是れ亦た雌雉あり、直ゑ射て其處に斃す、十分間を隔てすして又たワリ〳〵と足音す、パトロンを塡裝して待つこと四五分間早く已ゑ出來る亦た雌雉あり、此をも射得たり、時計を案すれは尚ほ四時を過きす、此次ゑは雄雉の一二羽も出來るならんと樂み居たりしが夫より一町餘を隔てゝ雄雉の聲を聞けとも出來らす日沒前ゑ小屋を出つ三羽の雌雉を提て甚た得意あり余は二十年目にて久ゝ小屋打の面白き目に逢へり

○老人の悦ひ

夫より銃を荷ひ雉を提け山を下れは石田惣吉己に此處に待つ三羽の雉子を見て手を拍て欣躍せり此の石田は余の大父君と先君とゑ愛せられし者にして其家は余の田園を隔つる里餘の地ゑ在り、嘗て先君ゑ從て江戸勤番の供をあし主從の間柄にて絶へす余の家ゑ出入す今や齢已に七十を超へたる老人なり壯より農業を務め勞役を以て家を起し村内近郷ゑて今は屈指の富を起せり、性順良ゑして勤勉なり村内近郷の者皆其行を模範とするに至る村内の事亦た多く決を石田に仰く、子孫皆る業を勉め本人は氣樂の身あり、余か歸鄉する毎とには必らす田園ゑ隨行し父祖の舊を語て自ら慰ひ、余か童髫の時より相識るを以て今ま尚ほ余を見ると子供の如へ長き尾を垂れ徐歩して飼場に近寄り來る有樣は射きあるへし、余か三羽の雉を獵し得たるは彼れの目ゑは大ある手柄をあしたるか如く思ひ、斯くは抃躍せしゑ或は雉を持ち、或は鉄砲を持つ是より余か打方の手柄話とあり隨行の人ゝと共ゑ談話興に入れり此夜は田園の家に宿したり（田園は舊城下を距ること一里餘）（未完にて確と柱に縛付けたり、此時の嬉れしさ言はん方あるくして火の如く、喉より腹にかけて生茂れる黒綠の羽は光澤を帶ひて照り輝き、背上の毳毛には金、青、灰三色の斑紋あり、全身の羽毛を綴張して二倍の大さに見へ長き尾を垂れ徐歩して飼場に近寄り來る有樣は射る程に思はれたり已にして飼場の下ある畠迄進ゑ借き程に思はれたり已にして飼場の下ある畠迄進ゑ來りし時は最早や忍ふ能はす茲ゑ火繩銃を差覗け、疑來て命中したれとも鳥は尚ほ其邊を狂飛す、小屋より飛出て之を獲、小屋の中に馳返り紙撚を出て之を獲、小屋の中に馳返り紙撚

○十五歳の少年

田園にて小屋打を爲せしに付き、覺へす懐舊の感を催ふせり、舊藩の頃、士族は砲術師範より免許を得るにあらされは銃獵をあすを得す（下士以下平民は禁せらる）首を取りたるの心地す

○失策

余か十五歳の春、出精の廉を以て此の免許を得たり、大父君、先君余か年少くして之を得たるを喜ひ其年の三月余を田園に伴て小屋打を爲さしめたり、其頃世上にはゲベール銃、專ら行はれたれとも銃獵ゑは丸の小なるを欲するか故に多く口徑二匁五分内外の火繩銃を用ひたり、余も亦た火繩銃を携へ小屋ゑ入り、銃獵の作法ゑ隨ひ實丸を裝塡せしが熟ら考ふるに今日は我か生涯に銃獵をあすの手始めあり若し實丸を用て命中を誤まり、鳥を驚逃せしめは父祖及ひ獵友に對して不面目の至りと云ふへし、如かす大事を取て散彈をも交へ用ひ危かりしことは此宴の笑柄とあり余は少く面目を失ひたれとも兎も角も初獵に雄雉を得たるは是れ亦た仕合せありとて主客歡を盡くして散したりしか今ゑして之を思へは已ゑ二十餘年、恍として夢の如し、今や大父君、先君皆あ即世し十五歳の少年も亦た將ゑ老んとす雖か懐舊の感あからん

○櫻樹

余か田園は大父君か舊藩主より領せし所のもの、山林あり田畝あり先君か子孫の爲めとて植へ置かれし櫨樹は今尚ほ七百餘株を存す近年は蠟の價、低下あれとも尚ほ多少の収入あり父祖か遠く子孫ゑ貽こす所のもの厚しと云ふへし、田園の樣子は概して父祖の舊時ゑ異あらす爲めゑ少時の曾遊を憶ひ起し感慨の種とあること多し、林中には櫻樹多し、林木を伐採する毎とに先考命して櫻樹を存せしめしか故あり、山角に一大樹あり

し、先つ初獵に仕合せ善しと、日暮に至り鳥を提け山を下れは大父君先君亦た皆あ各ゝ獲物あり、大に喜て余の技を賞す、當時十五歳の少年、初獵に雄雉を得て鬼の首を取りたるの心地す

○失策

余か初獵の獲物開きを爲さんとて父祖は二三の知人を招し小宴を張れり料理人獲物を調理せんとて羽毛を剝去りしか來り報して曰く此の雉子ゑは全身ゑ創あしと、衆皆あ怪て調へ見るに如何にも全体別に傷痕あるを見す、ヨク〳〵點檢するに及て始て雉の眼の傍に一點散彈の微痕あるを認め得たり、衆皆あゑ笑ふ、蓋し余か狙を擬したる正線の實丸は狙を外れ、傍飛せる一粒の散彈のみ危くも雉頭に當り之を斃せしを以てあり、余か散彈を用ひたること及ひ命中の大ゑ笑ふ、蓋し余か狙を擬したる正線の實丸は狙を外れ、傍飛せる一粒の散彈のみ危くも雉頭に當り之を斃せしを以てあり、余か散彈を用ひたること及ひ命中の危かりしことは此宴の笑柄とあり余は少く面目を失ひたれとも兎も角も初獵に雄雉を得たるは是れ亦た仕合せありとて主客歡を盡くして散したりしか今ゑして之を思へは已ゑ二十餘年、恍として夢の如し、今や大父君、先君皆あ即世し十五歳の少年も亦た將ゑ老んとす雖か懐舊の感あからん

○櫻樹

余か田園は大父君か舊藩主より領せし所のもの、山林あり田畝あり先君か子孫の爲めとて植へ置かれし櫨樹は今尚ほ七百餘株を存す近年は蠟の價、低下あれとも尚ほ多少の収入あり父祖か遠く子孫ゑ貽こす所のもの厚しと云ふへし、田園の樣子は概して父祖の舊時ゑ異あらす爲めゑ少時の曾遊を憶ひ起し感慨の種とあること多し、林中には櫻樹多し、林木を伐採する毎とに先考命して櫻樹を存せしめしか故あり、山角に一大樹あり

花の開くは當ては小雪山の如し大父君最も之を愛す、本年歸り見れば、樹老ひ幹朽ち、且つ往年暴風の爲め甚過半を吹折られ今は枯木に同し、而て往時に若櫻と羅せし樹〻は皆あ繁茂して已ま美事ある大樹と爲れり、依て思ふに櫻樹は其壽餘り久しからぬものあらん、此地の櫻樹は皆あ早開の種あるか故ま一昨年の歸鄉にも其花を見る能はす今年も亦た然り遺憾と云ふへし

○雉笛の名手

余か少年の時より雉笛を吹くに巧あらす（時としては雄雉を招き來たすともあり）然れとも獵友は皆あ之を善くす、一昨年歸鄉せし時、雉笛に付て一笑話ありしを憶起したり、田園の所在地ある大入島は雉子多しと雖とも其地舊城下を隔る里餘ま して往返に便あるを以て雉狩とさへ云へは何人も必す先つ此島に赴く、故ま雉も亦た多く笛聲に慣れて容易に來り近つかさるものあり、余の歸鄉するや獵友諸氏は何とかして余ま獲物多からしめんと考へ雉笛の名手を雇來て余ま隨はしむることを謀れり、佐伯町を隔る三四里の地ま獵夫喜四郎ある者あり雉笛を以て有名あり此者一たひ笛を吹けは百聲の達する地に在る雉子必らす飛來らさるもの無く之か爲に喜四郎の近村には殆んと雉種を絶つに至るゝ云ふ諸友此者を雇來り一日余と伴ふて大入島ま獵す、余は此者と與ま小屋に入れり（兩人を容るゝは實に狹けれとも）三四町を隔てゝ頻に雄雉の鳴くを聽く喜四郎乃ち笛を出たして吹くこと數回、雉子嘗て來らす、又好む所の雌雞ま配す、已に久しく雌雞と相親しむ後ち小屋を出て處々を巡獵す喜四郎の笛を以てするも雉の之をして匹たらしむ、莘尾の時至る毎ま雌雞を掩ふに來るもの甚た多からす、茲に於てか始て知る獵夫少き小兒若くは袖を以てし之を振り動かして其間より雌雞地の雉子は笛を聞て來ると雌とも大入島の如く獵夫多き地の雉子は中〻獵聲を信せさるもの多きことを、然袖を振り若くは笠を動かすを見て雌雞其蔭に在りと想れとも喜四郎ある者は實に名手と云ふへし唯此地に於て像し必らすケーン〻〻と叫鳴す、是れ囮雉を鳴かしむ

○藪潜り

銃獵壯中の出獵するや皆多く「藪潜り」と唱る笠を戴く、其大さ縱に頭を掩ふま止まり、形は盧無僧笠の上頂三分一より切りたるが如し、藿を以て之を作る、雨を防き又た日光線を防く、草樹の中に出入して眼を防くの便あり、其色亦た枯草に同し、但し招打をあす時は笠の前面に小樹枝を挿み以て鳥の怪みを避く、獵者か此笠を用ひ來ること已ま久しきか故ま近來ま至ては鳩の類皆ま遠く此笠を望て逃飛す故に獵友中に於て近來此笠を變せんとするとの議ありと云ふ亦た以て鳥獸の大に減したるを知るへし

○新獵法

昨年より佐伯地方に行はれ初めたる新法は囮雉を用ふるま在り、凡ま雉子の林に在るや最も勇あるもの其地を領し他の雄雉をして同居せしめす獨り林中の雌雉を率ゐ、若し其の領内に卒然として他の雄雉侵來するを見れは直に出戰て雌雄を決し其地を爭ふ、是に於てか囮雉を用るの法起る

囮雉を仕立つるには先つ雉卵を孵し雛鳥の時より其の雌雞を配す、已に久しく雌雞と相親しむ後ち繩銃のみありしに今や西洋形の獵銃或は村田式、レーミントン式の無線銃を用ふる多く、余か獵友中の八九は皆あ後裝銃を用ひさるあし、速射遠射の利、共に火繩銃ま異なるは是れ亦た鳥類の減せし一因あるへし

余か田園は字を堀切と云ふ、昔し大友宗麟此地に戰馬を牧せしが其の廣きま過くるを以て地峽の狹き處を堀切り牧場を限りしと云ふ、是れ堀切の名の生せし所以あり此地は西、飛狐岳と相ひ對し前面の海は恰も湖水の如く諸山の爲に圍まる、一面碧瑠璃の鏡に似たり風景愛すへし

○勝景多し

佐伯地方、概して山海の勝景多きは地勢の然らしむる所、佐伯以南は日向洋ま面し海波、荒らさに過くと云ふ、又た北海部郡佐賀關以北は已ま內海とある、佐伯は內海と荒海との中間ま位して二十里に近き大灣を形つくり中間に大小の島嶼散點せり是れ勝景に富む所以あり

神戸より我縣に至るの海路は四國中國の間ある內海なり百五十里程の間、海上處々絕勝の地少からす是等の勝景を見過さ來るの者の眼ま尙は佐伯に至れは風景の佳あるを覺ゆ、佐伯沿海の大小島、景色の佳絕あるものを數ふれは閑島の如き、髣髴島の如き、之を移して三都の間に置かは如何計りか世人に賞美せらるゝあらん

突兀たる怪岩は崖上より突起し老松怪樹、其上ま生茂り、宛然たる一幅の唐畫あり、歲古く風濤に晒らされ、樹幹は屈曲して蒼苔を帶ひ名も得らぬ青綠色の雜樹岩面豊勝地中の一に數ふへきものとす、鄉友か遠來の客上を蔽ひ海波其下ま碎け逝るの景色は潤飾を加へす其南豊第一の勝とす、其當るや否やを知らされとも亦た僅ま寫し出すも亦た佳絕の風趣あり、又た斜に太平洋を襲ふ多く此樓ま於てす余も亦た本年此樓に遊ふて立し、深黑無底の海洋其下に澎吼す是等の如きは勝景と云はんより寧ろ荒涼として物凄き方と云ふへし

○龍溪松關の一勝

余の在鄉中ま麑人柏氏來訪せしが頻に此地の勝景多きま感せし旨を語れり、往年余の在鄉の時、秋田の大久保氏九州を漫遊するとて先つ余を來訪せしが氏も亦た風光の佳絕あるを賞讚せり、一日氏と與に舟を龍溪に浮ふ、（佐伯灣ま注く川を溯ること里餘の地、即ち龍溪あり）此邊は大小の諸山逶迤として崩濤の如く高低參差、流れて海邊に走る、平野あり田畝あり、銀色の溪流、蜿蜒として其間を走る亦た一種の勝地とす此地に成長せし頃は左程にも思はさりしが、久しく他鄉に在て偶まきも亦た其一とす、凡そ好味ある魚類にして佐伯に歸り見れは實に景光の人目を悅はしむるを覺ふ、余のらさる所のもの稀れあり（唯た鮭、鱈の二を欠く）佐伯號は即ち此の地名に取る、大久保氏、溪の龍と名くる所の魚類、中、最も珍味とするは白色のアマ鯛、是れあり、以を問ふ余答て曰く流溪縛列、深潭底を知らす、眞龍の形は通例の者に異あらすと雖とも色白くして風味濃厚家する所、故に此名あり、溪流の上ま寺あり龍護寺と云ふ蓋し眞龍護國の意に取りしものあらん、盛暑の納涼には舟を浮へて溪に遊ふもの多し

海灣ま近く松關と稱する地あり、往年は老松數種あり、藩制の時此地に關を設く、依て名つく、關上に松雲禪樓あり、舊藩主菩提寺の別院に懸かる今ま長老と相議して佐伯士人の倶樂部に共用す此の地は山を背き海を望み、風朝雨暮月夕花晨、風景愛すへし此地の人は稱して實第一の勝とす、其當るや否やを知らされとも亦た上を蔽ひ海波其下ま碎け逝るの景色は潤飾を加へす其南豊勝地中の一に數ふへきものとす、鄉友か遠來の客に面する海岸に至れは裂石千仞一片の石壁數百尺に聳と數次

○佐伯の八勝

地の都會ま近くして都人士の出遊ま便あるの山川は其の風景左ほどに有らぬ者迄て世に賞美せらるゝこと多し若し最佳絕の勝地を僻陬遠土に求めあは舊來世ま知られたる外、佳絕あるもの甚た多からん佐伯地方の如き亦た然るのみ、佐伯の八勝を左に揭く

松關の秋月　石間浦の歸帆
飛狐嶺の夕照　海福寺の晚鐘
花面灣の朝霞　九部野の晴嵐
堅田峯の暮雪

○珍味

余の歸鄉せしや親烟朋友皆あ饗するま新鮮の魚肉を以てす、最初四五日は非常に賞玩せしが、最早や六七日の後は殆んと魚賣ま陷るの姿あり、因て當分の間、刺身たけは斷はりし程あり、又た余の鄉ま一種の料理あり名けて薩摩汁と云ふ其製、近來東京にて流行する薩摩汁ま異あり、此の料理は佐伯地方ま行はるゝこと甚た舊し、其法最上の魚（アマ鯛を第一とす鯛、比目魚之に次

（未完）

○田園の名

往時と今日とを比較するに佐伯地方ま鴨、雉、鳩一切鳥類の減したる甚たし、是れ獵者の年に多きを加ふると、銃器の日に進歩するとに因るあらん、藩制の頃乃は中士以上にあらされは銃獵をあすを得す又た中士上士と雖とも砲術師範より免許を受くるにあらされは之をあすを得さりしま今や何人と雖とも鑑札を得る者は之をあすを得、且つ其頃の士族は皆あ勤務ありしか故に出獵の度數ま限りありしま今や之を好む者は朝夕出獵するを得是れ亦鳥の減したる一因あらん又た往時は火

く)を炙り肉を去て又た骨を炙り磨摺て之を末とし、炙肉も亦た之を末とし、麩味噌を摺り交せて一種の魚味噌を作り、鹽梅汁を和して味噌汁を作り最上の刺身を入れ、熱飯に混して之を食ふ、尋常の薩摩汁に比すれは自ら別種の味あり之を余郷の親友懇會の上饌とす、此の料理は濃味あるか故に酒客に可あらすと雖とも下戸には最も可あり、佐伯に歸りし以來頻に此の料理を所望せり

○鷺と河鹿

門を出れは紅塵千丈、車馬喧闐ある、都下に住する身は、時として故山の事を思ひ起し、ウラ、ヵある春郊ゑ鷺聲を聽き、清蔭ある溪流ゑ河鹿の聲を聽きたし抔、考ることもありしが、此旅は鷺、河鹿の聲を聽き飽く程とゑ聽得たり、聊かの間斷こそあれ東京を出て我縣ゑ着せし以來六十餘日間、鷺あらされは河鹿、面白き啼音を聽かぬ日とてはあかりき

大分町より直入郡竹田町に至る道は總て山間あり、四山春樹の中ゑは鷺聲絶へす、又た道路多く溪流に沿ひ山を上下するか故に、至る所、河鹿の聲あきはあり、又竹田より大野郡市場、市場より南海部郡佐伯間も亦た皆な同し、林間には櫻花亂發し、野山には若草、早蕨抔萠出てたり、菫菫の野花か時得顔に咲出てたる野路を山駕籠にて穏に搖られ進み行く、ウト〳〵と眠を催す耳に〻ウ法華經の聲するは得も言はれぬ心地ぞする、轉して溪陰ゑ入れは曉々たる河鹿の聲す、未た若葉の時節にて大ある魚こそ見へぬ、水晶の如く透明ある深川の淺瀨ゑは〻ヱ、抔の小魚、躍れり、用事を兼ねし旅なから、旅行には好時節ありき、其頃は雨天勝ちにて一日晴るれは一日雨る程ありしに、大分、大野、直入、南海部、四郡の道中は幸ゑ仕合好く何時も雨の間を縫て行此旅に於て困りしことも亦た少からす、第一は人力車きし如く、出立の日は晴和ありし、往年春晩の旅行ゑ下の彈機の非常に強きこと是れあり、近來我縣も大に力の奮製あり暖日晴風駕輕車、此行遊子不思家、江亭山驛を交通の便に用ゆるを以て道路の幅と云ひ築造方と云春多少、處々鶯聲處々花、と本年の旅行も亦た其趣を同ひ往時とは雲泥の相違あり、然れとも何分平坦砥の如き都下の街路に比すへくもあらす殊ゑ昨年大洪水の後を承け、損所甚た多く、修繕の尙ほ充分に行屆き兼る場所もあり然るに人車の彈機の強きこと殆んと彈機あくす

佐伯より大分郡別府に引返し同所より又玖珠、日田二郡を經て下毛郡ゑ赴きし時は前記する路次ゑ反對して多く雨を冒し巡行せり玖珠日田の道は何れも山路にして溪流に沿ひ山中の地勢甚た高きを以て暖氣晩しと目へ塗上も絶へす晩鶯の啼するを聞きしかは下の口吟ゑ木鶯と稱する地は幽邃にして風景佳絶あり、人或は耶馬溪に勝ると稱す、溪を夾むの老樹亦た異種多く、老幹瘦枝、矗々として唐畫の枯木ゑ似たる者少からす、殊に趣を添るを覺ゆ、之を土人ゑ聞くに山柿の一種ありと云ふ、鶯を過き峠を經て竹田の野ゑ出んとする左右路蓋し春來雨勝ちにて水多きに因るあらん、河鹿は蛙の一種ゑして其聲清曉ある絶て尋常の蛙聲ゑ似す、三都山見れとも飽ぬ心地す、然るゑ唯た困却せしは、折角ゑの好事家は深山より捕來て水鉢に入れ其聲を愛し聽く山鶯の風光に眺入り居るの際にガタリ〳〵と車輪回地者多し、形は尋常の蛙に似たれとも、色黑くして頸より腹に輪狀黃色の紋あり、東北地方ゑては河鹿と稱する一種の小魚、溪澗ゑ產するものあり、味甚た佳あり、然れとも上記する者とは同名異物あり、騷客の愛し聽く餘り鶯聲を聽れて後ゑい囀調の巧拙を解剖するに至れり、細に聽けは囀聲の前短くして後長きものあり、後線皆な二重とあり、近傍の物体すちビタ〳〵と二重に長くして前短きものあり、聲の高低、曲の長短皆な同し見へしむるに至るものありき、是れ此旅の苦しかりし

は即ち蛙種ゑ屬するものとす

我縣を去て西京に至れは又た鴨河にて頻に河鹿の啼く聲す、聞く、本年は河鹿の鳴くこと例年より甚た早しと云ふ、鶯を過き峠を經て竹田の野ゑ出んとする左右路

○人力車

部屋、四郡の道中は幸ゑ仕合好く何時も雨の間を縫て行此旅に於て困りしことも亦た少からす、第一は人力車の彈機の非常に強きこと是れあり、近來我縣も大に力の奮製あり暖日晴風駕輕車、此行遊子不思家、江亭山驛を交通の便に用ゆるを以て道路の幅と云ひ築造方と云春多少、處々鶯聲處々花、と本年の旅行も亦た其趣を同ひ往時とは雲泥の相違あり、然れとも何分平坦砥の如き都下の街路に比すへくもあらす殊ゑ昨年大洪水の後を承け、損所甚た多く、修繕の尙ほ充分に行屆き兼る場所もあり然るに人車の彈機の強きこと殆んと彈機あくす

佐伯より大分郡別府に引返し同所より又玖珠、日田二郡を經て下毛郡ゑ赴きし時は前記する路次ゑ反對して多く雨を冒し巡行せり玖珠日田の道は何れも山路にしてきゑ似たり其の激撞の甚しきゑと想ふへし

大分竹田間の路は多く山溪に沿ひ高嶺を越へ、途中、荒瘦枝、矗々として唐畫の枯木ゑ似たる者少からす、殊に趣を添るを覺ゆ、之を土人ゑ聞くに山柿の一種ありと云ふ、鶯を過き峠を經て竹田の野ゑ出んとする左右路蓋し春來雨勝ちにて水多きに因るあらん、河鹿は蛙の一種ゑして其聲清曉ある絶て尋常の蛙聲ゑ似す、三都山見れとも飽ぬ心地す、然るゑ唯た困却せしは、折角ゑの好事家は深山より捕來て水鉢に入れ其聲を愛し聽く山鶯の風光に眺入り居るの際にガタリ〳〵と車輪回地者多し、形は尋常の蛙に似たれとも、色黑くして頸より腹に輪狀黃色の紋あり、東北地方ゑては河鹿と稱する一種の小魚、溪澗ゑ產するものあり、味甚た佳あり、然れとも上記する者とは同名異物あり、騷客の愛し聽く餘り鶯聲を聽れて後ゑい囀調の巧拙を解剖するに至れり、細に聽けは囀聲の前短くして後長きものあり、後線皆な二重とあり、近傍の物体すちビタ〳〵と二重に長くして前短きものあり、聲の高低、曲の長短皆な同し見へしむるに至るものありき、是れ此旅の苦しかりしからさるは奇と云ふへし、蓋し春鶯の囀するは雌を求一事あり

ひるか爲あり、囀聲の巧拙は雌の心に幾分の好惡を生但し車夫の强健ある、驚くゑ堪へたり、二三里の路を走するものと見も、斯く動物學風に解剖して觀察すれはるも背汗、衣を沾はすを見す、轎夫の如きも山を越るゑ稍や風流氣も減するゑ似たり、唯た鶯聲は鶯聲として息杖を用ひさるあり、東京近地の者ゑ比すれは其の强健幾倍す、縱令ひ當人か自ら好んて勞役を誂るにもせ聽くへきもの歟

ゑ其の流汗衣に滴り、疲憊を極むるの狀を見るは乘客に取て愉快の感あるものゑあらす、又駕籠に乘り後ゑ

○自慢話

ある轎夫か喘〻く息の高く聞ゆる、車夫の汗か滴々として流れ氣息喘々たる抔、皆な乘人をして惻怛の情を發せしむ、然るゑ勞役者ゑ至る迄地方人の身体の頑健あるは旅客の爲めに亦た一快事とす

○給仕女

晝食若くは宿泊の節、腰帶十圍ある婢女か飯櫃を擁して膳の前に逼り坐するは是れ亦た旅中の一苦とす、各郡の都邑、然るへき場處に在て諸友の注意、歎待至らさる所あく、給仕人の類迄等閑の者を用ひさりしが、此旅ゑは隨分併ほゑ迄入込みしか故に是等の地にては往〻上記する事柄に出會せり、客を待するの好意は言語動作に溢るゝも何分肥太トリたる膝を膳に接する計り逼り對せらるゝは屏風抔に行詰りたる如き心地し、誰人も辟易しぬべし

○蠶虫類

之に次て苦しき者は蚤類の移住なり、都邑ゑは左さ是等の事無しと雖とも山村僻邑に入る時は途中休憩の間と雖とも亦た直に殖民を蒙ひること少からす、雨多き時にはあり、初夏催暑の頃にはあり、假令ひ意を用ひて清潔の敷物、新夜具を用ふるも尙ほ蚤抔の床下よりと爲る、居常煩難ある世波に漂蕩せらるゝ余の身には侵入し來るを免れす、故ゑ余と同行の諸氏と朝夕ゑ相唯た是れ樂易ある別天地に入り來の思ひす、余か斯く問ふ「昨夜は殖民如何ん」と殖民の二字は同行間ゑ一種鄕人と親愛の情あるい獨り余の一身の之を致せしのみ、規模は大あらさるも一通りの仕組は皆備へありての符調とあれり

（未完）

昨日の本欄龍溪松圃の一勝とある「一」は衍

○懷つかしき者

他人も定めて同樣あらん、余の身に取て故鄕の如く世に懷かしき者はあらす、好し其地を一片人影あき境とゑ通る親友も多く、居住ひを壞つし横臥しあから打語る如く余か鄕の士人に文事ある者多きは畢竟舊藩の文假定ひるも、唯〻其の山川溪野と相對するのみゑて既らふ間柄の知人もあり世間何れの處にか斯く親しく懷學家たりし秋月楠抔云へる良師か子弟の教育に其心を

に得も言はれぬ嬉れしき心地するを覺ゆ、況んや其地かしき地あらん

用ひたる賜あり

の父老子弟は總て皆な相識の人あらさるあきをや余か幼少の頃、朝夕常に眼ゑ見慣れたりし山頭の松樹、川畔の岩崖まで尙ほ往時の姿を變せす、其儘ゑ存するもの多し、一たひ其境ゑ入て之と相對すれは斯る無情の木言ひ難きも亦貧地にはあらす、山海共に產物に富めり、右すら尙ほ余に向て「龍溪居士恙あきや善くこそ歸來りし」と物言ふか如き心地ぞする

少時ゑ余の世話を爲し呉れたる父老もあり、余か世話を爲し遣りし子弟もあり、親族もあれは緣者もあり、家來筋の者、出入の者、男子たる女子たるゑ論なく舊友知人か余を待つの親きは恰も一家の人の如く、余か彼の人々に對するも亦た左樣にこそ覺ゆれ、之を要するゑ故鄕の知人は或る一事ゑ付ての朋友ゑあらすして（事業上の交、政治上の交、文學上の交、藝術上の交にあらすして）唯た是れ生來の朋友のみ知人のみ

何れの地ゑ遊ふも談話の先頭ゑ持ち出さるゝ者は第一ゑ政治談あらさるとあきに獨り故鄕のみは然らす、親友知人ゑ面會して第一番の挨拶は互に肥たりとか、瘦たりとか、家內は斯く〳〵ありとか、子は達者ありとか、の爲め喜ふに餘りあり

舊時は維新前より藩主か文學奬勵ゑ注意せしこと他藩に越ゆるとも劣らさりしか爲めあらん今日に至る迄、士人に文事ある者少からす、百事に手堅くして識慮あるべし東京より齎らし歸れる聊かの品物を土產ゑとて力者を漏らさす集合せる懇親同志會の類もあり、地方我より贈り與ふれは此頃の珍味あり、取次の手數もあり、青年會もあり郡內各町村の有の肉抔を贈り呉る、取次の手數もあり、青年會もあり郡內各町村の有ゑあらす父祖の時より一藩の交際甚た廣かりし餘澤あ銀行もあり英學校もあり、地方

ゑ通る親友も多く、居住ひを壞つし横臥しあから打語る如く余か鄕の士人に文事ある者多きは畢竟舊藩の文

ら ふ間柄の知人もあり世間何れの處にか斯く親しく懷學家たりし秋月楠抔云へる良師か子弟の教育に其心を

かしき地あらん

用ひたる賜あり

○射的會

銃獵社中は毎年獵期の末日に打寄て射的會を開らくをしかゞこハ必定、陸路より來るおらんとて翌日は人〻ゑ出合ひたり海鼠の芥子ァへ是れあり、是は此家に限り例とす、余も往年歸鄉の時此會に列したり「矢野は最早又た其方ゑ行て待ち居り呉れしに、何ろ圖らん余は滋る料理法おるか將た此邊一般の風おるかを知らされど や都人士の仲間入をなし操銃の術も益〻拙とおりしお舟に乘し漂然として他の處より歸着せしにぞ、父老のも味、殊ゑ宜し好事の人試みて可あり らん一杯と定めて思はれ居たりしおらんが幸ゑして此會には余の命中第一等おりき、是れ技の諸友に秀るゑあらす畢竟は銃器の最も銳利おりしか故のみ、諸友か命中の巧おるは實ゑ人を驚かせり、此時より射的會おる毎とに余ハ東京より彈藥類を懸賞品の一として寄恵せり、本年も餘日あらは大會を開らかんとの企あり|が出發を急きし爲め余は遂ゑ之に臨むに及はさりしを遺憾とす、射的も亦た武技を厲むの一端なり、壯年の人〻には最も適當の遊とす

○屢々歸鄉せよ

右の如く故鄉に歸るは余に於て無上の樂みおれとも又た屢〻歸鄉するを斟酌遠慮する事情おきにもあらす、余の發着する毎ゑ衆多の親友知人に送迎の煩勞を蒙ら食色も亦た人の性おり、今ま料理通の數寄者のためにしむこと甚た大おるを以ており、余か着する時は「久〻我縣の珍味を知らしめむ、佐伯の魚類の新鮮おるを」にて矢野が歸り來りし」とて遠方迄迎へ呉れ、又た出發除き余か此旅にて實驗せし我縣の珍味は大分町の子持する時は名殘惜しとて遠方迄送り呉る、其交情骨肉の沙魚、竹町のェノハ魚を以て最とす、大分灣は巖礁少おり寧ろ發着の日時を知らせまじきかと思ひしかとも魚と稱へ、胎に卵を充たし居るものは味最も妙おり、衆如く謝するに餘りありと雖も余は心中大に安せさる所く泥海に類するが故に沙魚鰭の類に富む、殊に子持沙亦た却て大ゑ人に累ひを增すを恐る蓋し往年の事に懲り若くは煮て膳羞とす、通例沙魚は骨、鯁くして食ふ又たれはおり往年の歸鄉の節は船路より佐賀關に上陸便おらされとも同地のものは首より尾に至るまて骨多せしが此地にて風雨ゑ阻てられ一両日滯在せり、即ち併せて食ふも差支へおし、故に此地の沙魚は骨の軟かし同處より着すへき日取りを通知せしに誤て道筋を報せなる種類おるかと疑ふ者おきにあらす然れとも全く煮さりき而して恰も其の前夜佐伯に着する滋船ありしか方に因るものにて混和劑を用ひ或は氣永く煮るときは骨軟かおると此の如きなりと云ふ、又た一種の沙魚には必定此船ゑ乘り來るおらんとて衆人皆お波戸場ゑ待

受け呉れたりしに船は着せしかとも余か乘り居らさり最好味とす、又た余は同地の旅宿にて一日奇おる料理

飲食の人は人皆おゑを賤んすと古人は嘲けりしかとも骨軟かおると此の如きなりと云ふ、又た一種の沙魚にり魚に斑點有て形ち矢の羽に類するか故ゑ爾か名つく

して長さ二寸に滿たす滿腹卵を有するの類あり、之を一

と、九州の他縣に於て現にヤノハと稱する所亦た尠おからさる由、此魚は山間の溪流清絶の水に產す、聊かにても濁流の混するあれは肯て住むとおし

○田舍氣

維新以後交通の便大に開け一般の事物進歩すると共に我縣の料理法も亦た同時ゑ進歩せり、大分町及ひ中津の如き第一位を占む佐伯の如きに至ても亦た昔日の比ゑおらす、東京に稀れゑして我縣に多しと思ひしは魚の切身ゑ味噌を着け炙りたるものの是れおり蓋し京坂地方より傳來せしもの歟

我縣の知友は余か都下ゑ住するを以て食物に奢れりと考へ居ると見へ到る處饗膳に注意せさるはおし然れとも余は今コヽ東京に住すれ本と〻田舍漢ゑして尚ほ山猿の故態を存す、如何おる料理ゑ出合ふとも空腹にさへあれは頓着せす、報知社友等動もすれは余か東京の家の料理を嘲て曰く矢野家の食物は如何ゑ注意するも田舍氣を脫せすと一家渾て田舍出おるが故ゑたとひ東京の眞中ゑ住するも猶ほ田舍氣を存すと見へたり好笑と云ふへし

○鐵漿羹

玖珠、日田の郡界は山脈重疊たり、道路總て坦夷おらさ雨天には別して難儀おり余は玖珠郡を十二時前に出發せしと欲せしは會〻青年諸氏ふ談話するとあり且つ著人のためゑ揮毫を求められ、一枚又一枚と數を增せ等の爲め時刻を遲れ、雨を冒かし出發せしに路程ナカ〻捗らす、途ゑして日暮る、一行皆な餓も乃ち路傍おる山中の一茶店を見出たし、立寄て晩餐を喫す、是時に當ては豆粥麥飯、選ふ所にあらす、菜ゑは蒟蒻の羹たるのゑは鯖の昆布卷をなせし如く、布團ゑて簀卷にせらを出たせり、蒟蒻は生來の好物おれゝ直に攻擊せしにる〻心地し、肩の邊に何か物足らぬ思ひあり、舊來我縣其の彈力おくポク〻として脆きと宛も燒豆腐の如しは夜着を用ゆると多かりしゑ近來交通の便開くるに從

且つ色の黑きは淡墨を混して煮たる歟と疑がはる、其の飯喰茶碗にて五六碗の飯を喫し了る後に至り蒟蒻の色の餘りに黑かりしを疑ひ同行の諸氏に聞けば是れ鍋の鉄氣の染め做すに因ると、果して然らは蒟蒻の鐵漿羹と稱するも可おり

○一口喫

然れとも食物に就て最も閉口せしは歸路の東海道氣車の辨當おり、西京を發し岐阜ゑ來るに及て十二時を過ぎ腹餓て堪へ難し乃ち岐阜近傍の停車場に駐く所の辨當を車上より買ひ求めたり、程おく氣車は駛行す、辨當を打ち開き喫せしゑ、飯の少おきこと一口喫ゑ當るゑ足らす、通例の握飯とすれゝ一ッ半分もおりぬべし、其形、恰も布袋の袋の如く金巾にて之を作る、廣さ二三寸の辨當を喫せしと云ふは名のみゑて空腹尚ほ辱ゑたり、ゑゑ當り全身を此袋に入れ喉の邊ゑて袋口を約す、頭の〻〻の停車場にて買入れんと見廻はせとも辨當食物外、全身總て袋入りとおる、袋は大おるか故に窮屈おらを嚮く者おきには困却せり、餘儀おく名古屋まで至てす手足自在ゑ動き得へし、斯くして夜着を蒙り眠に就復た一箱の辨當を買入れたり、鑒餐余に類する人は途き、以て蟻蚤の侵來を防き朝、起き出づれば袋をはたき中の辨當を顧みゑせんより寧ろ豫め之れを持込むを可とす

○一人を容るへし括紐ゑて袋口を開闔す、其人旅宿に寢る人は亦た其の利便を說くおらんが、何分にも不慣のもの、樹多し花方さゑ滿開おり、樹下に毛布を敷き書飯を喫す、飛花、吹雪の如し、山風、サッと吹來れは地上の落花を捲き上く古詩「落花起作迴風舞」の句を思ひ起し微細の景も詩人の筆ゑ通る所おきを感す

此地は余の眼を喜はしめし勝景の一とす、凡ろ山中の

○布團、大袋

此旅に今、一の困りしことは何れの地も寢るに悪布團を用ひ、袖ある夜着を用ひさると是れおり、東京關東は夜着を用ふ、夜着の兩袖は長く物に似たれども實は其の重みにて肩の左右を押へ、襟を以て双肩を包まし寢心甚た宜しきの功能あり、布團おれは双肩を露出するを免れず、之を用るに慣たる人は亦た其の利便を說くおらんが、何分にも不慣のもの、飛花、吹雪の如し、山風、サッと吹來れは地上の落花を捲き上く古詩「落花起作迴風舞」の句を思ひ起し微細の景も詩人の筆ゑ通る所おきを感す

○騎射場、祖母岳

風光景色は人各〻其の好みを異にす、世人の激稱せさる地ゑして却て余の喜ぶ可き勝地あり、直入郡より大野郡ゑ出る途上、竹田町を距る二十町餘ゑして騎射場と稱ふる地あり諸氏余を送て別を此地に告ぐ、其地櫻樹多し花方さゑ滿開おり、樹下に毛布を敷き書飯を喫す、飛花、吹雪の如し、山風、サッと吹來れは地上の落花を捲き上く古詩「落花起作迴風舞」の句を思ひ起し微細の景も詩人の筆ゑ通る所おきを感す

○竹田町の椒の葉

竹田町ゑ着せし夕、長さ六すばかりの煮たる魚を饗せられと語りしゑ或る知友曰く畢竟は足下が久ゑ歸り來るか故に我々も珍客として取扱ふのみ若し之を心苦く思はゝ成るへく屢々歸鄉せよと余は其の厚情の言外に在るに感せり

（未完）

○大分町の沙魚

人は人皆おゑを賤んすと古人は嘲けりしかとも西京のアマゴは丹波の深山に產するものを漁し來ると聞く余は同地に遊ふ毎とに多く之を賞味す、大さ七八名より前後相次て此魚の美事おる者を惠與せらる、大おるは一尺に餘り、小おるも亦た八寸を下らず、魚の形は鮎ゑ似て幅廣し、細鱗にして淡紅の點ポチ〻と脊腹の間に在り、之を見るに及て夫の西京のアマゴと稱するものと同種おるを知れり、命して刺身及ひ油煎とす、油煎、頗る佳おり

○西京の「アマゴ」

すのものを見ること極めて稀れおり、通例四五寸内外に止る、余は此の時まてアマゴは西京特產の佳味と信せしに何そ知らん九州地方にて賞美するェノハおらんとは、我縣の山中處々に此魚を產する所少おからすと云ふ

凡そ川魚の中ゑて肉味濃厚、海魚に匹すへきものは獨り此魚ゑるのみ、或は云ふェノハ」は「ヤノハ」の誤りゑ

風光景色は人各〻其の好みを異にす、世人の激稱せさる地ゑして却て余の喜ぶ可き勝地あり、直入郡より大野郡ゑ出る途上、竹田町を距る二十町餘ゑして騎射場と稱ふる地あり諸氏余を送て別を此地に告ぐ、其地櫻樹多し花方さゑ滿開おり、樹下に毛布を敷き書飯を喫す、飛花、吹雪の如し、山風、サッと吹來れは地上の落花を捲き上く古詩「落花起作迴風舞」の句を思ひ起し微細の景も詩人の筆ゑ通る所おきを感す

景は山〻相接して狹隘ゑ失するもの多きに獨り此の地外、玖珠、日田、速見三郡の諸氏も亦た疾くより余に向て一両年前、魚を通ずるか爲めにとて瀑の一端を毀ちし
は四望廣濶、此には黒岳、久住、大船の諸山聳立し油布て此の相談あり、余が歸縣するや前二郡と先後して此ゑ此時より上流ゑて稲れに鮎を漁獲するゑ至る、然れ
岳も亦た雲際に在り地勢西に開て遙ゑ大野あるを知るの求めありしが余は之をも固辭したり因て三郡の同志ども猶ほ甚だ多からざるを以て更らゑ大に瀑を毀つの
(之を肥後の平地とす)南山北嶺の與に西に至て絶へ、者聯合して候補者を定むへき說を進めしに諸氏、大ゐ議ありと、知友諸氏ェノハ魚を饗せんとて吟味せし由
地形平遠とある、其の中央ゑ一大岳の屹立するを望む余の言を容れ、數次評議の上にて愈〻余の說を實行すあれども不獵にて手ゑ入らず、森村は南山脈の中央な
之を有名ある阿蘇の火山とす其の中腹に當て烟の立昇可き旨返答あり就ては是非とも余の一たひ三郡ゑ巡遊る溪野ゑ在り余の宿せしは森村より二十町を隔てし一
るを見る騎射場より南望して其の最高あるものを祖母せんとを望て已まず、依て思ふに我の人に求むる所の聚落ゑて懇親會をも此地に開らけり
岳とす、古るき物語に傳る所、緒方三郎を生みし大蛇の住みしは則ち此岳あり
四面の山勢既に此の如く秀特あり、中央の地形亦た渺茫として廣濶、久住、大船、諸山の裾野か斜ゑ遠く陵夷するは恰も荒磯に打懸けし大波の餘勢を遺して遠く斜ゑ引き去りし姿に似たり、四顧一望、人をして高遠遙廓の想ひあらしむ

○沈蛇瀑

竹田、市場の間に沈蛇と稱する大瀑あり、河底數丈の高低あるが爲め一川變して懸河を爲す、地勢恰もナイヤガラの瀑ゑ似たり、路上遙に瀑の片端を望み見る、程たり、如何にも廣きとは廣けれども外圍あるか故に愧を急きしが故に赴き見るの暇あらざりき、傳へ言ふ瀑鬱の感あり且つ遠近の山を望むゑ宜しからず搖れ方も潭に大蛇ありと依て沈蛇の名あり今改て沈蟄と書す此亦た強し故ゑ今年の旅には一切、普通の山駕籠を用ひ頃好事の人、潛水器を用ふる者をして瀑潭を探らしめしむ、依て桐油の廻合羽を備へ雨天には之を被り一切しゑ潭口ゑ於て長さ四五尺の水蛇とも名くへきもの無駕籠をは露出して之を蔽はず、斯くして鬱を避くるの數あるを見恐れて浮び來りしと云ふ、藩政の時、罪人をみならず、諸山の烟雨空濛の奇を見んと謀る岸頭より瀑布に突き落すの刑を用ひしことあり、恰も羅馬古代の岩落しの刑に類す

○山駕籠

大野直入兩郡の人〻が余を衆議院に擢出せんと欲せし

し、其れより玖珠日田二郡に巡廻するに決す、二郡の道は山又山、人車を用ふる能はす駕籠を用ゆ、一昨年歸鄉然れども其地猶ほ產物に富み豊饒あり、日田、隈には舊
其詩を諸す、速見郡の重もある諸氏には別府にて會合置き九州各地の幕領を管せしむ此を以て南豊中最繁華
二三十里程、八九日の日子、余に於て何か有らんと乃ち臨み眺望甚だ佳なり、覇政の時、幕府此地に日田奉行を
とす、余ゑ於ても煩を避け勞を厭ふへきの時にあらす筑後河と爲る、隈川は其幅廣き處三町ゑ過ぐ、樓は川ゑ
を捨て、合し難きの三郡を合して以て余の說ゑ從はんあり一川の町ゑ沿て流るゝあり隈川と云ふ末流は則ち
我れ皆あ之を拒まは義に於て不可とす、諸氏既ゑ其私とす、日田は、豆田、隈の二郡に分る余の宿せしは隈町
ものは人皆あ之を聽るし、人の我に求むる所のものは、玖珠の山脈を越ると七里餘地勢稍や廣濶ある處を日田
の節、山越をあすに當り山駕籠をか稱する駕籠を用意し呉れて懸るもの多し、此日は夕刻より知人懇親會の催あり臨
會の時刻既に迫るを以て一々ゑ見盡す能さりき余ゑ最
も面白く覺へしは金扇の書帖あり一帖の書畫四十葉許
り、帖數三四十冊、余は僅に其五六帖を觀しのみ、諸種
の支那書風あらざる處あし、時方ゑ養蠶の節ゑて、主人
も其爲めゑ忙はしく家内も取り散らせしに余ゑ強て展
觀を求めしはサぞかし迷惑ありしあらん、支那長髮賊
の亂に珍藏の書畫を携へ難を我國ゑ避けたる支那人多
し、留ると久くして資ゑ乏く遂に之を鬻くに至る、千原
氏の藏する所は此種のもの多しと云ふ

○淡窓翁、萬里翁

日田郡にては懇親會を豆田、隈の中央ある公會堂ゑ開きたり、此處より田甫三四町を隔て〻遙に故廣瀨淡窓翁の家塾、宜園を望み見る、其傍に茅屋一宇、老松樹數株ある者、則ち翁の舊宅ありと、翁、帷を下して子弟を教へ、處士を以て終る、遠近就て學ふ其門ゑ遊ふ者前後通して三千人、兩豐の詩客文人皆其門に出つ、翁と時を同くして速見郡日出に帆足萬里翁あり、二人與ゑ大家を以て稱せらる、當時、文には帆足を稱し、詩には廣瀨を推すと云ふ

○矢野族

隈川の鮎は日田の名產とす、又此地に鵜飼をあすものもあり、季節猶ほ早くして鮎の大さ未た三四すゑ滿たす、「三月サラダケ」の諺あり、舊曆三月ゑは其大さ僅に小皿に及ふの意味あり、隈町の傍ゑ龜山の城趾あり、豊臣氏の時、余が舊藩祖此地を領して築し所の者とす、余の家は本と日田郡の矢野族に出づ家祖、舊藩祖ゑ此地ゑ仕ふ、關原の役終り舊藩祖、地を削られ封を佐伯に移さるゝゑ及ひ隨て與に日田を去り佐伯ゑ住す、余が此度ひ玖珠日田行を爲せしは專ら他の用事よりすと雖とも此序てを以て矢野族の家系を取調るも亦た一の目的とす而るゑ日田郡に入るゑ先たち、玖珠郡にて此事ゑ付既に多分の望を滿たすを得たるは余ゑ於て一の悅ひとす(他の條に關する所あるべし)

○中津行

玖珠日田の巡行を終らは大分縣を離れて筑前博多に出で乘船し歸京の途に上るの筈ありしに又下毛郡中津に巡遊せさるを得さるとと爲れり我縣の議長山口半七氏

中津より余に玖珠郡に來り會し同地より日田に至る迄の外に在るを覺ゆ、翌朝發するに望て、主人書を請ふ乃の間、萬事、懇篤ある世話を爲し呉れたり日田ゑ至るゑち一詩を題す其の後半ゑ曰く「夜半風定山蕭寂、誤認溪及び同氏より其鄉中津巡遊の事を所望せらる、日田ゑ聲是雨聲」と則ち夜來の事を記するあり、又た扁額を請り博多迄は一日程あり、日田より中津迄も亦た一日程ふ因て題して曰く「白雲生處家」と

とす、中津より馬關迄は滊船あり三四時間にして達す

○耶馬溪の地勢

べし、日子の上に於ては損する所、幾何もあし、且つ道耶馬溪の絶勝、世に名ある久し、余は始めて此地を過ぐには耶馬溪の勝あり是非、一泊ありとも中津に來遊せ、耶馬溪と名くる地、凡そ七里の長さに亘る、其間、兩派よ、是れ同志諸氏の望ありとて强談に及へり余は既に の山脈相對して屏風の如く溪を挾み屹立す、左右両山同氏の世話を受く今に及て、義、辭す可らすと乃ち同氏と脈の距離、遠さは十餘町、近さは三四町ならんとす、一堅く下の條々を約して遂に日田より中津に趣くゑ決す溪其間を貫き曲折して流れ去る、溪の幅、廣き所壹町、、其約は、(第一)下毛郡の諸氏は一人も余を途中に迎るあるとの煩勞を爲す可らす、(第二)遠近の同志者を多數招集して余か爲ゑ大宴會を開くへからすと云ふに在り余は各地至る所同志諸氏の鄭重ある待遇を受けて心苦しく思ひしが故ゑ豫め堅く此の二事を約束し置きたるあり

狹き所二三十間のみ、溪流多〻石に激す、溪の將ゑ終らんとするゑ至り稍や緩流して潭をあす、概して大ある溪流ゑあらず、道路は溪に沿て或は右し或は左す、新道あり舊道あり、兩道とも處に依て各〻景色を眺るに優劣あり

○耶馬溪口

日田出發の日は陰晴定まらず、且つ夜來の暴雨にて途中の橋梁損壞し行人を通せさるの恐れあり、人をして之を探らしむ、其報を待ち且つ用談を爲し、揮毫の賃を果たす等の爲め、又出發の時刻を遲れ、耶馬溪口に達するときは已に日暮あらんとす、有名ある勝地を夜間に通行せんは殘念あり且つ種々の都合もあれゞとて、此夜は耶馬溪に入る二里餘、熊谷氏に投宿せり其家、廣くして且つ清潔あり、隣保、僅か三四軒に過きす、其境最も靜寂あり、同行諸氏と與ゑ寢に就かんとするの際、雨の聲するを聞く「亦た明日も雨乎」とて障子を開らけば

全溪は七里の長さありと雖とも、七里の間、一面ゑ打續て勝景あるにあらす、其の佳絶ある處、五六ヶ所のみ、日田より中津に路すれは此溪を下り、中津よりすれは之を上る、上りつゝ見て佳絶なるあり、下りつゝ見て奇絶あるあり、山川の景は見樣位置次第ゑて大に其趣を異にす、余は日田より下りしか故に其の路順を以て之を記せん

○景皆あ趣を異ゑす

概して評すれば、此溪い山峰突兀奇狀多く、老樹碧草之を蔽ひ、赤く黃ばみたる山骨若くは黒く苔蒸したる岩壁、亦た處々に現はる、場所に依ては溪流、懸崖の下に淀みをあし或は奔放突激し、山溪幾んと文人書の趣を

極む、唯憾む所のものは地勢狹隘にして廣濶あらざるを下り溪邊に臨み山に接して之に對すれば、果して奇に在り、余は足迹内外に遍きほどの旅行者に非ざれと絶の趣あり、懸崖重疊溪流に臨て聳立し、一面に綠樹苔も、是迄余が通行せし山川中にて亦た此地の一奇たる生し、老松怪柏其間に點々す、最も大なる雨崖相ひ挾み色を覺ふ、凡そ風景の世に稱せらるゝもの皆な其趣を一對し、中間絶る所、天を見る、賴翁か愛して去る能はざた一勝とす、是地を机と稱す此處より一里餘を下り平にせす、須磨明石は三保に異り、松島は天の橋立に同かるもの蓋し此の處に在り、此の邊の地理に明かなる人田氏に投して晝食す、氏は此地の素封家にして家居甚らす、此地の如きも亦た然り、人々の好惡に依て其間に に聞くに果して舊道は溪流に沿ひ恰も余が眺望せし地だ壯あり、是より先き、其弟平田氏余等一行を柿坂の上優劣あるべしとも此地の勝景は亦た須磨にあらす三保にありしと云ふ、一昨年の大洪水前迄は猶ほ此邊に一に迎ふ、平田氏の家は今朝ころ余等一行來着の報を得あらす此地に限れる一種の景あり、余は未だ他の地軒の茶店ありし由、然れとも此處の景は方四五町の外て山中魚肉を求るに遠まあらすとて雞肉及び山蔬の類に此類の景あるを知らす、此地は山中溪間の一勝景とに出てす、余を以て評すれは、奇は乃ち奇と雖も要するを饗す、味ひ甚た佳あり、余等至る所の山鄕皆な多く雞して眺む可きあり、古人が「奇峯帶雨勢欲飛、野馬溪山に盆栽景たるを免れす、規模小あるを以てあり寧しろ肉を饗すと雖とも硬牢にして食ふ可あらす此地に來天下無」と詠せしも強ち溢美に非す、豊州鐵道が馬關逐次下に掲る者を以て優れりとす て始めて脆軟あるものに逢ふ同行人皆な之を稱す、弟より中津に達するに及ばば好事の士來遊して可あり、寺僧の說くを聞くに崖頭の老松愛す可きもの數株、近平田氏は是地より、余に伴ふて中津に至る、兄平田氏亦耶馬溪口は中津を距る僅か三里餘のみ く山主の爲に伐り去らるゝと又曰く奮時は崖下の溪流廣た翌日中津に來り會す、余の書を請ふ即ち題して曰く

○柿　坂

道、耶馬溪に入れば溪山忽ち他山と異あるを覺へ目慣れぬ奇峯怪岩瀟々に現はれ來る、下り道に於る第一勝を柿坂とす、賴山陽も亦た始め日田より此地を下り、其奇を愛するの餘り更に亦た之を溯り此處に來て其の絶勝を愛し去る能はず、一詩を賦せんとして成らず爲に筆を投せしと云ひ傳ふ、景は溪を隔て之を望む、路傍に寺あり、余を迎る諸氏、寺内に休憩所を設け茶菓を饗す寺門より望むに樹木等の多少は今昔の異あるありと賴翁か投筆せしほとの地とも思はれす依て考るに風景は眺むる位置次第にて有樣を異にす、假令ひ絶勝を以て稱せらるゝの地も縱に見ると横に見ると大ある區別あり、俯して望むと仰て見ると亦た非常の相違を生す、此景の地勢は寧ろ仰き見るに可ならんと、乃ち寺門

「地開足嘉禾、門族總親和、好景四邊在、君家清福多」と蓋し實を記するあり、弟平田氏亦た請ふ所あり即ち一詩を書して之に與ふ其の後半に曰く「耶馬溪中興無限最佳絶處又逢君」と氏か余を柿坂に迎へたるを謂ふ、氏は縣會議員たり先きに臨時會を以て大分に在るや頻に余の來遊を望み余か万一耶馬溪行を爲さば必す東道の主人たるへきを約したりしか今其の言を履む

○青　村

机に次くの勝を青村とす、其地耶馬溪の將さに終らんとするの處に在るを以て左右の兩山脈亦た漸く相ひ隔り、地勢稍や廣くして遠望に可あり、溪流亦た一町餘の幅と爲て緩流す、碧水潭をなし奇峯八九其上に列立す、就中一峯削立して天柱に似たるあり、天柱峯と稱して可あり、人多く此地を以て耶馬溪中第一の勝とす、山

○机及び平田氏

低都甯より八九町にして亦た一列の亂峯を望む、黄赤色の岩石多く綠草綠樹其間に點在し溪流稍や廣し、亦た壯あり、是より先き、其弟平田氏余等一行を柿坂の上に迎ふ、平田氏の家は今朝ころ余等一行來着の報を得て山中魚肉を求るに遠まあらすとて雞肉及び山蔬の類を饗す、味ひ甚た佳あり、余等至る所の山鄕皆な多く雞肉を饗すと雖とも硬牢にして食ふ可あらす此地に來て始めて脆軟あるものに逢ふ同行人皆な之を稱す、弟平田氏は是地より、余に伴ふて中津に至る、兄平田氏亦た翌日中津に來り會す、余の書を請ふ即ち題して曰く「地開足嘉禾、門族總親和、好景四邊在、君家清福多」と蓋し實を記するあり、弟平田氏亦た請ふ所あり即ち一詩を書して之に與ふ其の後半に曰く「耶馬溪中興無限最佳絶處又逢君」と氏か余を柿坂に迎へたるを謂ふ、氏は縣會議員たり先きに臨時會を以て大分に在るや頻に余の來遊を望み余か万一耶馬溪行を爲さば必す東道の主人たるへきを約したりしか今其の言を履む

○青　村

机に次くの勝を青村とす、其地耶馬溪の將さに終らんとするの處に在るを以て左右の兩山脈亦た漸く相ひ隔り、地勢稍や廣くして遠望に可あり、溪流亦た一町餘の幅と爲て緩流す、碧水潭をなし奇峯八九其上に列立す、就中一峯削立して天柱に似たるあり、天柱峯と稱して可あり、人多く此地を以て耶馬溪中第一の勝とす、山

溪の大小、遠近皆な備はる、此地を第一と稱するの評、其れ或は當れり、然れとも溪中の諸勝（柿坂、机、低都甯、青村）の互に趣きを異にするは恰も猶ほ前記せる松島、須磨、明石、三保の其觀を一にせざるが如し、此地に來遊するもの若し青村の第一勝たるを聞き耶馬溪の勝已に此に盡くと思はゝ、蓋し亦た誤れり、甲は乙に同しからす乙は丙に異あり、七里の長溪、到處多少皆な其の趣を異にす、好事の騷客は全溪を通覽せざる可らず、溪口は中津を距る三里餘あり同行の山口半七氏溪中に別業を設くるの意ありと聞き即ち一絶を口占して之を呈す「籃輿相伴陟崔嵬、雨打客衣急溪風、利國澤民業成後、君來結屋此山中」と君の縣會議員たるや十有餘年其間、常置委員たり、副議長たり、議長たり、縣下の後進を誘掖し諸郡の同志者を糾合し以て今日あるを致せしは君の力、多きを居る、後半故に及焉

右に掲るは單に溪中絶勝の地を示すのみ其他人目を悅はしむるの景は溪中處々に夥し、讀者馬溪の全景は右に掲る所に止ると思ふとなかれ「溪陰石老崖頭頹、山高遠樹弱點苔、絶勝七里看難盡、一景過時一景來」と是れ余か溪中の口占あり

○耶馬溪の地質

耶馬溪の地質は極て堅き石より成る者に非ずして、ポロ〳〵なる赤黄色の小岩土を握り堅めし如きものなり故に剝落し易き性あり峯頂、若しくは山腹の樹木あるものは、一たび文人大家の筆に入れば忽ち其爲めに價處は剝落を免かれ、其の他の側面及び麓は漸々と水雨を益し世人に激賞せらるゝに至る此溪の如きも亦た殃敗の張付けと爲せしあり余も往て之を見物せの爲めに剝落したるものあらん（尋常の雨に容易く剝り、山陽が一たび此地の勝を上國に吹聽せしより大に同人の書は思ふ儘に翩々と刻ね廻したるもの多く謹殿落せす何等かの變に遇へば即ち剝落せしあらん）故に面目を施すに似たり、山靈知るとあらば頼翁の恩を謝なる密書に至て世間に甚た稀れあり然れとも此堂に奇峯の形は尋常の山勢に反對して上部大に下部小なるすべし

○中　津

耶馬溪を出ずれば地勢忽ち廣く三里餘にして海邊に達し其方に赴かん、其節には必ず好事なる文人、畫工、寫口過來地形濶、八面山下路如砥」の句あり此地は大分郡時開鑿中の新道は風景耶馬溪に劣らずと聞けは此地に見て常に同じきか故に此名ありと、一絶を口占す、「溪り此地に來らん亦た耶馬溪の半より玖珠郡に達する當近くして最も高き山を八面山とす、其の山形八方より遊ふの好時節と爲す由、平田氏余に再遊を勸む乃ち約して曰く余若し幸に閑を得ば來秋紅葉の時を以て再び此方に來て稀に見る所あり余は三階の最高樓に寓す、遥に地に遊ばん其節は東京より直ちに馬關に到り、同處に來路の山を望めば蒼々として雲烟の中に在り、中津に眞師等を誘ひ來らん、唯恐る一身の閑忙常に期する所を去ると遠きに猶ほ由布嶽を天際に望む乃ち一詩を題に違ひ、或は此約を空くするに至らんとをと平田氏始して議員小幡小吉氏に贈る、其の後半に曰く「奇嶺聳天柱、めて諸氏皆な堅く余と再遊を契る、青村の東南里餘に羅天表、是れ君が來處の山」と前日別府より氏か雨を冒して溪寺あり、其景亦た愛す可しと聞きしが余は赴き見る余と與に由布岳を越へしを想起すれはあり

○耶馬溪の名稱

耶馬溪は本と半ば彦山領に屬し、半ば中津領に屬す、依我縣に至て百事進歩せるの地を數ふれは八指な指を此地に及ばざりし

山口氏又前約を破り、懇親會を催す、此地（中津）は福澤、小幡、諸先輩の出でし地にして士人皆な概ね文事あり

○大雅堂

耶馬溪の雅なるを以て、山を耶馬溪と稱する坐數あり室内一文人輩、山國と云へる唱の雅ならざるを以て、山を耶馬溪と稱せしより今は樵夫牧童迄皆な耶馬溪と稱するに至る、凡そ好山川の世に著らはれざる餘幅あり蓋し同人夫婦與に甞て此地に流寓し寺内に僑居せしとありし由にて當時畫く所のものを集め斯く坐の爲めに剝落したるものあらん（尋常の雨に容易く剝り、山陽が一たび此地の勝を上國に吹聽せしより大に同人の書は思ふ儘に翩々と刻ね廻したるもの多く謹殿落せす何等かの變に遇へば即ち剝落せしあらん）故に面目を施すに似たり、山靈知るとあらば頼翁の恩を謝なる密書に至て世間に甚た稀れあり然れとも此堂に在るものは稍や密なる者半ば居れり、然れとも着色

ものあり或は立幅子の如く、斜めに傾きたるもの又た山芋を突立てたる如きものあり、奇は即ち奇と云ふ可し、乍去ら唯に山峯の奇狀あるのみにして樹木あくんは何の趣きも無るへきに老松楓樹碧草の山に滿るか爲め、絶勝の名を得たり、山々紅葉の時を以て此溪に相ひ待てり、夜に入て中津に着し、忘言亭に投す、同家遊ふの好時節と爲す由、平田氏余に再遊を勸む乃ち約は蓋し我か縣下第一の割烹店にして建築の壯宏なる地

書はなし余の素人評を以てすれは同人の書は未だ極上中等たる所以あり、若し夫れ幽靈ならず狐狸あらざるに至るものと思はれず密書ゑ於て力の尙ほ貧しき所あるものに至ては奇々怪々人の意表に出るもの多し、是を齋し出すを見る大さ仁王の手の如く毛は蝟毛に似たりるを見ればあり、然れとも畧書に至ては一種の氣韻あ最上等となさゃるを得ず、凡ろ世間大体の談話は其の其者直ゑ飛び掛て其手を扼せしに、忽ち洞の前、十餘間の地ゑ投げ出されたり其怪の全身を詳かにするを得ざり、書亦た頗る奇あり、幾んと其人と爲りに類す、其妻前段を聞て已ゑ早く其の中段後段迄を想像し得へし、りしと云ふ是より以後は如何に祈るも塔神、復た村人玉蘭の筆に懸る者は竹の書唯た一幅あり、甚た佳あり、其の冒頭を聞て既に結局を知るの談は厭倦あ堪へず、の求むる所に應せさるとあれり古石塔は猶ほ其の儘余の家にも亦た玉蘭の書を藏す、若し此室の密書を以談話の始中終常理を以て想像し難く一段毎ゑ一轉して ゑ林間ゑ存在するのみ人の之れに近つき觸るゝを敢て大雅の本領とすれは寧じろ妻玉蘭の筆の勝れるを見事の意外あるものは蓋し怪談に如くはなく、人類の想るあり、大雅の畧書は酒々落々人をして一笑せしむる像力が如何ある所まで届き得ちものるものあかりき後ち二十餘年、近邑の素封家某、其庭ゑ足るもの多し、一僧山頭ゑ立て月の登るを見、佛子か亦た怪談に如くはあし、然れども人の想像力も亦た限ゑ假山を築くことあり此塔の空しく田間に廢棄するを鬼と首引きをなすの書抔は人をして笑を催さしひ何はりあるものと見へ幽靈談、狐狸談、を取り除くるときは思ひ其の古雅愛す可きを知て之を其庭ゑ移さんとす、兎も角も大雅の書のみを以て坐敷一切の張付けとあす怪談の種類極めて少きは驚くゑ堪へたり、西洋にても其人本と膽氣あり、親戚諫め止むれとも聞かずして曰者は蓋し亦た稀れあり、珍とすへし怪談少からずと雖とも其の絶奇と稱す可きものゑ至て く妖は人心に生ず、斯然たる一古塔何ろ怪を我家に爲は亦た甚た稀あり、怪談の面白きものも亦た得難きかすとを得んやとて遂に家僕數人に命して石塔を運送せ

○怪談

我縣大分町ゑ着せし以來終日の談話、何れも皆あ大小の政治ゑ關せざるは無し乃ち諸氏と約束を設け、至急のことを除く外は、夜分だけは一切互に政治談を避け專ら雜話會を爲すとを定む、雜話會の中にては怪談を專一とす、當時は全縣下各郡の諸氏多く此地に來會し又た臨時縣會開會中ありしを以て議員諸氏亦た皆あ此地に在り、日中は必要の用談をあし了り、夜分には皆な相携へて雜話會の爲めゑ來訪す、此の一事は蓋し亦た此度の旅行の一樂事の中に數ふ可し、人ゑ皆あ負けず劣らず種ゑの怪談を繰り出し人をして絶倒せしめたり余に於ては怪談中にて幽靈談を下等とし、狐狸談を中等とし、幽靈談は本と人事ゑ近きを以て如何樣にも多く之を作爲するに難らず且つ其趣も相似たるもの多し又狐狸談は短くして興なきもの多し、是れ兩者の下等たりし怪談の種類極めて少きは驚くゑ堪へたり、西洋にても其人本と膽氣あり、親戚諫め止むれとも聞かずして曰く妖は人心に生ず、斯然たる一古塔何ろ怪を我家に爲すとを得んやとて遂に家僕數人に命して石塔を運送せしむ之を運ひ去ると四五町にして塔の重み一二倍と爲る即ち更ゑ運夫數名を增す、行くこと七八町にして其の重み又一倍す、又た運夫を增す、斯の如くして數町毎と重みを倍し運夫を增し其家に達する頃には運夫百餘ゑ假山を築くことあり此塔の空しく田間に廢棄するを思ひ其の古雅愛す可きを知て之を其庭ゑ移さんとす、其人本と膽氣あり、親戚諫め止むれとも聞かずして曰く妖は人心に生ず、斯然たる一古塔何ろ怪を我家に爲すとを得んやとて遂に家僕數人に命して石塔を運送せしむ之を運ひ去ると四五町にして塔の重み一二倍と爲る即ち更ゑ運夫數名を增す、行くこと七八町にして其の重み又一倍す、又た運夫を增す、斯の如くして數町毎と重みを倍し運夫を增し其家に達する頃には運夫百餘ゑ假山を築くことあり此塔の空しく田間に廢棄するを思ひ其の古雅愛す可きを知て之を其庭ゑ移さんとす、其人本と膽氣あり、親戚諫め止むれとも聞かずして曰く妖は人心に生ず、斯然たる一古塔何ろ怪を我家に爲すとを得んやとて遂に家僕數人に命して石塔を運送せしむ之を運ひ去ると四五町にして塔の重み一二倍と爲る即ち更ゑ運夫數名を增す、行くこと七八町にして其

○古石塔

昔し我縣の某郡、某村、に一基の古石塔あり何れの代のものあるを知らす其高さ僅に五尺餘にして周圍亦た之ゑ重みを倍し運夫を增し其家に達する頃には運夫百餘に稱ふ塔傍に洞穴あり稱して塔神の住む所とす、村人名を要するに至れり、塔を置き庭成就す是より其家ゑ等か求め欲する所ある每とに之に祈れは多く驗あり、二三日を隔て怪事起ること無數あり、其の一二を擧く家具調度の類、入用の節にも之を祈れは必ず貸用するれは時としては銅羅を鳴らし經を誦し一列の葬式、門を得、例せは村内の宴會あるに當り、膳椀類若干人前を内ゑ入り來るを見る、時としては門前俄に大海と變し借さんとを祈るときは翌日石塔の前に必す此等の者あ滿帆の千石船、勢ゑ乘して庭内に突入し來るを見る、家るを見る、使用するの後は又返付するを例とす、其他大人愃恐すれとも主人曾て之を意とせず、恐ぶと半年餘小の事皆あ求むる所に應す、故ゑ村人之を神とし敬事あり、別に實害を其家に及ほすほとの事もあしと雖とすると甚し、近村の一壯年、豪氣ある者、其實を慥めんも、下女下男皆あ恐れて暇を告げ去る更ゑ代り來て奉と企て、村人か一日器具を借るとを祈ると聞き、夜半ゑ公する者なく家唯主人夫婦と爲る是に於て主人公亦た り天明ゑ至る迄窃かゑ塔傍ゑ潛み何者が器具を持ち來

に決す、又た運夫百餘名を用ひしに行くと數町にして其重みの一二倍を減す、數町毎とゑ斯の如し舊地ゑ至る頃には其輕さと常に復したり、之れより村人益ゝ之を畏敬し敢て近くものあく古石塔今尙ほ存せりと云ふ其の怪誕右の如く稻生平太郎物語ゑ類するものあり種々樣々のものあり、人事を外にして人を笑倒せしむること豈ゑ怪談の如く面白きものあるを得んや

○温泉塲

肥後阿蘇の火山脈と相ひ連あり我縣ゑは火山多し故ゑ温泉浴塲亦た從て少からず、最も遊浴ゑ可ある者を速見郡別府濱脇の温泉とす、速見郡は一面海ゑ沿て大灣を形くり、汕布鶴見の兩火山脈、陵夷すると一里餘、其の裾野亟れて海ゑ至る、處々温泉を出たす、別府濱脇は分れて名を異にすと雖とも其實は接近せる一町村と云て可あり、山を背き海に面して地勢平廣、風景亦た佳あり、山に遊ばんと欲すれば即ち山、海ゑ遊ばんと欲すれば即ち海、魚肉に富み、交通に便あり、全國他に斯の如き好浴地あるを知らす、大分縣廳の所在地を去ること三里餘、其間は道路坦夷ゑして人車を用ひ一時間にして往來すべし、全國の温泉塲は何れも皆な地勢の狹きもの多し、例せば熱海の如き願岳面水の地と雖とも土地狹隘ゑして行きつまりたる心地あきを得ず、其他有馬と云ひ伊香保と云ふ、何れも皆あ山間にして海ゑ遠し、往年伊豫道後の温泉ゑ遊ひしが此地亦た山間の隘境にして海を去る三里餘なり獨り我が別府は地勢平濶にして海あり山あり魚肉に富み灣港には四國、中國、大坂間を往來する滊船日夜滊笛を絶たす上國との船便も亦た甚た宜し、温泉は種々の効ありと雖も就中く胃病ゑ宜し、好事の人一遊して可あり、余い此地に遊ぶ每ゑ必ず日名子氏に投宿す、其家新たに坐敷を新築し家ゑ在る の浴塲亦た清潔あり此地の旅店に於て一二ゑ位するものとす、主人太郎氏年猶ほ壯ありと雖とも諸事に注意し家道日に盛を致すの勢あり、濱脇の海沙中にも浴塲あり其効殊に大ありと云ふ干潮の時、海邊ゑ出で沙を穿ては温泉湧出す浴客身を沙中に埋めて暖を取る、此豈ゑ每少を穿て温泉の湧き出つる處多し　（未完）

○五岳、杏雨、及び竹田

我縣に歸て見飽くほと見るものは、五岳、杏雨、我か鄕り到る處の扁額掛幅、五岳あらざれば則ち杏雨、我か鄕人の之を珍とすると亦た他府縣人より甚し、其間には眞物あり僞物あり必ずしも皆あ本人等の筆にあらざるべしと雖とも其多きと幾千枚あるを知らす、家ことゑ人ことに皆あ之を藏せざるものなき勢あり、五岳の書は風骨稜々たり其力を着くるものに至ては、隨分愛すり諸氏傍らより余を慰めて曰く政界ゑ奔走する人の詩可き所あるを覺ふ、杏雨の書も亦た佳あり、唯其の千幅一樣にして變態あきを慨む、始めて之を見れば甚た愛す可き樣あれとも既ゑ數幅を閱するの後は同一の筆意同一の木石、索然として味あきに似たり、寧ろ五岳を以て勝れりとす、然れども此老の書も人物あく鳥獸あく富貴の韻致ゑ乏く、書く所皆あ老蒼の景ゑ止る、乍去、ら一種の風骨ゑ至ては亦た爭ひ難き特得の妙あり、又其詩は時として吟誦す可き者あり、往々西洋風の新事物に滿たさるの意を寓する者もあり「老來頓見新奇事、四月春風吹百華」の類是れあり凡そ書工の名手と稱す可きは其の粗密大小ともに能くせざる所あきゑ在り、今に至る迄我縣の書を以て有名あるものを竹田とす、同人の書ゑ於ける粗密大小意の如くあらざるあし若し其の落款を掩ひ隱くすときは全く他人の筆に出るやと怪まるゝ者あり是れ其の書の後世ゑ名ある所以あり

○詩作

余は生來好で詩を作らず、唯何等かの境遇に於て覺へす詩思の湧き出づる時のみ稀れに之を作る、故に東京ゑ在ては嘗て一句半句も思ひを詩ゑ費やせしとあし、旅行中抔ゑて暫く塵事を忘れ感慨あるに當ては偶然一二句を得るとあり乃ち之を補足するに止るのみ巧拙は措き近來にて此行の如く詩句を得しことは稀れあり凡そ天然に湧き出でたる詩句は其時の實景を寫すもの多し、夫の險韻若しくは難題を課せられて無理無体ゑ事柄を絞り出すゑ比すれば稍や天眞を失せさる方と云ふへし、然處、折ゝ平仄を忘れ格を誤り後ゑ至て氣付き笑の種とあると多し、故ゑ各地にて揮毫の需に應じ新詩を題するゑ當り俄に心付て急ゑ平仄を更むる等の煩あり諸氏傍らより余を慰めて曰く政界ゑ奔走する人の詩は平仄などゑ頓着せぬ所却て妙ありと余は「近來既ゑ政治世界の奔走者たる籍を脫し、せめては文學家の末席ゑても加らんと望み居る際あり、今の文學家は支那の詩を作らさるに害あしと雖とも五七絶位は平仄たけも合せて置きたし」と答て相笑へり、畢竟するゑ我々の詩は之を詩と云はんより寧ろ詩調の文章と云はんのみ

○淡窓、旭窓の詩

余は先きに帆足、廣瀨、二翁の事を記せり、淡窓翁は經學經濟をも心懸けしと稱すれとも其の本領は詩家と評するの說當れり、翁の詩は其頃上國に名ありし鉄兜、竹外等の如く警敏あらずと雖も醇乎として繩墨を守るの風あり、其の流暢あると稍や晚唐の餘響あり宋以後の

詩人中にては蓋し陽鹹齋の調に近きか如し「洞簫吹斷江南夢、月上梨花第一枝」の如き又「日暮天壇人去盡、香烟散作數堆雲」の如き皆お陽鹹齋の境を出でず、故に他郷人は詩句の流麗纖巧あるものを稱して日田調、宜園調と稱するに至る、勁拔を愛する大家は之を嘲て纖弱氣力に乏しと爲す者あり、翁の詩にも雄偉あるわり壯大あるわり然れども強て其の病の在る所を求むれは此言亦た認ひざるに似たり毀譽は兎もあれ翁は當時の一大家たるお恥ちざるものとす

翁の弟を旭窓と云ふ、材思縱横幾んと小東坡たるの勢あり、然れども其の人品の甚だ高からざると才氣の横溢あるが爲めに往々逸して詩境の外に出づるものあり「躓ッ不レ汚」衣春草ノ路、行ッ宜レ曝ス背夕陽ノ村」の如き又「人走ッ雌ノ如ク矢、路曲ッ奈ノ似ノ弓」の如き時として誤に墮落す然れども太宰を咏して「一世英雄大理獄、百年臣子小朝廷」の如き字々適切其才の縱横を知るに足る、然れども淡窓の詩は胸中規矩を存す蹤然として老儒の体を失せず、旭窓の詩は何處迄も機敏あるお才子風を脫せず

○日本の詩、支那の詩

詩に潛心刻苦して心血を吐くほとの者にあらされはおか〳〵作家の苦心を知り得へきにあらす、余等の詩を評するは唯自已一個の好惡を以てするに過ぎされとも序てに此處に於て日本ま好詩少き所以を畧記せん、總して日本人の詩は渺皮に止り眞底迄て届かさるの心地す早く云はゝ極々有りふれたる事柄を漢字ま塡し辛して詩調ま入れたるか如く見ゆ、支那人の詩は之に反ー少く、毀譽も少く、世間も狹し、此の如き有樣ふして焉て思ひ骨に入る者多し「步出城東門、遙望江南路、前日を支那の詩の如く詩境の極處に達するを得んや且つ日風雪中、故人自是去」僅々二十字、何ろ其情の盡ささる本の文學は德川氏の覇政三百年間にこそ大發達を爲し や、「常於送人處、思得別家情」何ろ其境の深きや、「月假日光爲半面」何ろ其の警拔なるや、「十万軍聲半夜潮」何ろ其の壯おるや、若し唯、「芙蓉露下落、楊柳月中疎」の一聯を誦するも瞑目して一たび其境を想像するときは人をして清思骨に徹せしむ、日本の詩集中、果して之を何れの處にか求むへき

余は自ら詩を作らされとも常に詩を讀むを好めり、而るま日本人の詩集を繙けハ之を終るま至らずして忽ち卷を掩ふと多し、依て其の所以を求め、日本の作家は支那の作家より損多き理由あるを思ひ得たり、彼れの作家の境涯は甚だ廣くして我か作家の境涯は甚だ狹し、何を以て之を謂ふ、彼れは郡縣の制久しく士を取るま及第の法を以てし大臣宰相より以下皆お書生を以て身を起さゝるものおく詩文ともま縉紳の間に行はれさる時代なし、詩を作り詩を愛する者の世界甚だ廣しと云ふ可し、一詩を以て立身の緒とおすものあり、詩の世界已に此の如く廣く、作家亦た斯の如く多ければ巧拙の競爭亦た從て甚しからざるを得ず、舊時の日本詩家の境涯に比較せば其の世界の廣狹果して如何んそや、日本の儒者は(詩人のみに限らす)醫者役者おどの如く幾んで世外に置かれ、一藩の機務ま參する者すら稀れまして、全く浮世の外に立てり、故ま其の交遊亦た從て狹く競爭者も廣し、作家亦た斯の如く多ければ巧拙の競爭亦た從て甚しからざるを得ず、舊時の日本詩家の境涯に比較せば其の世界の廣狹果して如何んそや、日本の作家は支那の作家より損多き理由あるを思ひ得たり、彼れの作家の境涯は甚だ廣くして我か作家の境涯は甚だ狹し、何を以て之を謂ふ、彼れは郡縣の制久しく士を取るま及第の法を以てし大臣宰相より以下皆お書生を以て身を起さゝるものおく詩文ともま縉紳の間に行はれさる時代なし、詩を作り詩を愛する者の世界甚だ廣しと云ふ可し、一詩を以て立身の緒とおすものあり、詩の世界已に此の如く廣く、作家亦た斯の如く多ければ巧拙の競爭亦た從て甚しからざるを得ず、舊時の日本詩家の境涯に比較せば其の世界の廣狹果して如何んそや、日本の儒者は(詩人のみに限らす)醫者役者おどの如く幾んで世外に置かれ、一藩の機務ま參する者すら稀れまして、全く浮世の外に立てり、故ま其の交遊亦た從て狹く競爭者も

○大門の漁法

大門の漁舟は小にして其長さ二三間を出でざるものおり船尾ま松明の篝火を焚く火光水を照して水底四五尺の間を分明ま見るを得へし、エソ、サヨリ、鰈の類一尺内外の大さおる者、火光を慕ひチラ〳〵として游き來る、漁人は長き柄の網袋(東京にてい「玉」と稱へ或る地にては「ヌイデ」と唱ふるもの)を用て是等の魚を拉ひ上ぐ、其法甚だ迂遠に似たれども漁夫は巧みに魚を捕ふ、之を拉ふまは網袋もて魚の進み來るに逆ふ、魚の行くを追ふときは皆お逃し去て網に入らず、余の如き素人も亦た、エソ、鰈の類二三尾を漁し得たり、藍色の水底に大

(未完)

ある、エソ、サヨリ、等の泳き來るを見て之を捕るい實に面白し、若し馬關に再遊するとあらば必す此遊を再びせん

魚は海面の明るみを怪み火光を慕て游き來る、急流の間を來往して或は横きり或は溯るか故ま其の去來、通常の如く敏速ならず、故ま此の迂遠なる漁方を用て能く之を捕へ得るのみ、然れども此法ま慣れざる者は魚の近き來るを見るや、忙てゝ網袋を水に突き込みザンブと聲するか故に忽ち魚を逸せしむ、又天氣工合ふて得物に多少あり若し曇天ふして細雨霏々たる時は魚の集り來ると夥しく素人ふても亦た一二時間に數十尾を捕へ得しと云ふ

○九州の漁法

尋常の海面ふては魚の去來敏速なるか故に此の漁法を用ふるも決して此地の如く魚を得ると能はじ然れば此の漁法は此の急流ある地ま限るものと察せらる、九州の沿海にても亦た入江、河口には篝火を焚き魚を漁するの法あり、此地の如く網袋を用るに非すして鉄叉(東京にては「ヤス」或地にては金突きと稱するもの)を用ひ魚を突き刺して之を取る、天曇り雨を催して風おきの夜、之を爲す、風おく波おきか爲め火光は海底一丈四五尺の處までを分明ま照らし見るを得鰹、比目魚、コチの類、動かすして海底にあり、之を叉して引上ぐ、右の魚類は深夜皆お眠に就て水底の沙上に安着し動くと無きものおり、其法自から馬關お同じからず

○古行宮、安德帝の廟

馬關より水を隔てゝ九州地を望めば海邊に老松百餘株茂生するの地あり是を平家が西國ま落ちし時の安德帝行宮の迹とす、馬關には安德帝を祭るの祠あり廟宇壯宏おり又東軍か帝の龍舟を襲ひ平家最後の戰をおせし小幡柳川の兩氏のみと爲る、爲成小三郎氏は我縣の人壇浦は馬關の東、二十餘町に在りと聞く御裝河も亦たおり余が歸縣する毎に必す送迎す、我縣に着して始め其邊にありとそ、馬關の漁人ま平家の家筋あるものて相遇ふ人の中ま必す氏あり最後ま相別るゝ人の中少からず安德帝祠の祭禮には書しより或る役目を受けには必す氏ありしが氏は二年前より馬關に住居し此度も相變らず懇篤おる世話を爲し呉れたり深く其の厚意を謝す

○一快事

馬關より神戸ま赴くには郵船會社の飛脚船の長崎より此地を經るものに乘るへく又た商船會社の船の博多より此地を經るものまも乘るへし余は本と飛脚船に乘る性有て甚だ船を好まず、横濱神戸間の海路を取るは歸積りおりしま折惡く余等の着せし後は四五日の間、飛脚船に滯在せんも無益おりし時、識慮ある一知人の說を聞て其の甚だ利あるを覺り此地の新聞を閲して始て舊友諸氏か大坂に於ても船暈を感せず、亦た此旅の一快事とす

○螺輪船、兩輪船

馬關より神戸ま赴くには郵船會社の飛脚船の長崎より此地を經るものに乘るへく又た商船會社の船の博多より此地を經るものまも乘るへし余は本と飛脚船に乘る性有て甚だ船を好まず、横濱神戸間の海路を取るは歸積りおりしま折惡く余等の着せし後は四五日の間、飛脚船に滯在せんも無益おりし時、識慮ある一知人の說を聞て其の甚だ利あるを覺り此地の新聞を閲して始て舊友諸氏か大坂に於ても船暈を感せず、亦た此旅の一快事とす

○螺輪船、兩輪船

發し十一日神戸に着せんとす、余は十日を以て馬關を商船會社の船は其長さ僅に二十間内外のもの多く、船云ふへし左おきだに種々の噂を立てられ勝ちおるに今意するが爲めに之をと云ふほとの難儀は無けれども、又同志者の大會ある日を以て大坂に至らハ又たもや喰唯何とおく不便おるは其船の大おらざるを以てあり、はぬ腹を探られ「矢野こそは同志者の大會に列せんが速力は十「ノット」内外のものを多しとす左まて遲きを爲め九州より馳せ上ほれり」おどと心にもなき風說をあらす今も猶ほ絶へず新船を造て舊船に引き換へつゝ立てらんとの、五月蠅サヨ、左れはとて大會の日を過こありと云ふ、歸京の後、商船會社の氣船の事に語り及びさんが爲め此儘空く數日を馬關に滯在せんも無益おりし時、識慮ある一知人の說を聞て其の甚だ利あるを覺り、好し〳〵大會の日に神戸に着すれとも大坂をは通り拔け、今内外の氣船を有する人の爲めこを畧記せん、凡そけて直に琵琶湖邊に至り遊ふこそ宜けれ東京の舊政友には春來既ま我意を通じ其の承諾をは得置きたり、何も義理を欠く譯けにはあらすと、大坂に立寄らざるとは早や此時ま同行諸氏と定め置きたり我縣より余と同行の迹とす、馬關には安德帝を祭るの祠あり廟宇壯宏おり又東軍か帝の龍舟を襲ひ平家最後の戰をおせし小幡柳川の兩氏のみと爲る、爲成小三郎氏は我縣の人壇浦は馬關の東、二十餘町に在りと聞く御裝河も亦たおり余が歸縣する毎に必す送迎す、我縣に着して始め其邊にありとそ、馬關の漁人ま平家の家筋あるものて相遇ふ人の中ま必す氏あり最後ま相別るゝ人の中少からず安德帝祠の祭禮には書しより或る役目を受けには必す氏ありしが氏は二年前より馬關に住居し此度も相變らず懇篤おる世話を爲し呉れたり深く其の厚意を謝す

○一快事

馬關より神戸ま赴くには郵船會社の飛脚船の長崎より此地を經るものに乘るへく又た商船會社の船の博多より此地を經るものまも乘るへし余は本と飛脚船に乘る性有て甚だ船を好まず、横濱神戸間の海路を取るは歸積りおりしま折惡く余等の着せし後は四五日の間、飛脚船に滯在せんも無益おりし時、識慮ある一知人の說を聞て其の甚だ利あるを覺り此地の新聞を閲して始て舊友諸氏か大坂に於ても船暈を感せず、亦た此旅の一快事とす

○螺輪船、兩輪船

發し十一日神戸に着せんとす、余は十日を以て馬關を商船會社の船は其長さ僅に二十間内外のもの多く、船云ふへし左おきだに種々の噂を立てられ勝ちおるに今意するが爲めに之をと云ふほとの難儀は無けれども、又同志者の大會ある日を以て大坂に至らハ又たもや喰唯何とおく不便おるは其船の大おらざるを以てあり、はぬ腹を探られ「矢野こそは同志者の大會に列せんが速力は十「ノット」内外のものを多しとす左まて遲きを爲め九州より馳せ上ほれり」おどと心にもなき風說をあらす今も猶ほ絶へず新船を造て舊船に引き換へつゝ立てらんとの、五月蠅サヨ、左れはとて大會の日を過こありと云ふ、歸京の後、商船會社の氣船の事に語り及びさんが爲め此儘空く數日を馬關に滯在せんも無益おりし時、識慮ある一知人の說を聞て其の甚だ利あるを覺り、好し〳〵大會の日に神戸に着すれとも大坂をは通り拔け、今内外の氣船を有する人の爲めこを畧記せん、凡そけて直に琵琶湖邊に至り遊ふこそ宜けれ東京の舊政友には春來既ま我意を通じ其の承諾をは得置きたり、何も義理を欠く譯けにはあらすと、大坂に立寄らざるとは早や此時ま同行諸氏と定め置きたり我縣より余と同

凡そ客を乗する船の第一に速力の大なるを貴び第二に備ふるもの余ゑ於ては獨り西京なるのみ、神戸の如きば青々たる楊柳、列りて加茂の邊ゑ至る、(假令ひ其間船中の廣やかなるを貴ぶ、若し今両輪船を用ゆとすれも亦た余が愛する地の一なり然れども諏訪山上より眺ゑ顧續ありとも)三條橋以下は両岸皆な町屋ゑて一株は一時間十五海里より二十海里以上の大速力を得可し望する時、其の眼下に滊車、滊船が煤烟を噴立て西に東の柳だもなし、樓より東を望めば東山粟田口の諸山、(螺輪船なれは十四海里以上を得る能はす(船小なれはゑ行き通ふ有様は如何にも人世の忙たしげなる姿を目垂れて南に走る「布團着て寝た姿なり東山」の句は、よなり)且つ務めて船の幅を狹くせざるを得す、之を狹くすれば船内狹くして萬事に不便なり、則ち以上の二不前ゑ寫し出せり、一たび之を望むときは「我も亦た働くも形容せり東山は總体柔和ゑして恰も人の布團を被かでは叶はじと世人も斯く汗水を流して働きつゝあるヅり臥したる寝姿ゑ似たり、山亦た翠松緑樹多し、圓山の利あり、両輪なれば其速力大なるが上に又船体を廣くするを得、故に両輪船は船内を廣くすると、速力を倍加するとの大なる利益二つあり、日本人は今日何故か両輪船を西洋に行はれさる舊形の如く思へども大に然らず、歐米なれども内海若しくは距離近き外海を通ふ客船は今日、現ゑ両輪船を用ふるもの甚だ多し、是れ上ゑ記するの大利あるか故なり、商船會社ゑても若し両輪船を用ひて二十ノット内外の大速力を得ば、唯其れ丈けにても船客は非常に増加するならん何とあれば今日螺輪船ゑて三十時間ゑ着し得る場處をは僅か十五時間にて着し得ればなり況んや其の船内も廣くして乗客ゑ不便少なきをやと商船會社其他内海の滊船を新造するものゝあらバ此論を參考して可なり、尤も螺輪に比すれば両輪を爲るには幾分の入費を増す可しと雖とも其は高の知れたるとあり後來乗客多き収益ゑ比すれば實に幾許の費ゑも當たらす熟慮す可きものとす

○西京

西京は余か最も愛する地の一とす、其の清閑ゑして且つ便利なるを以てなり、若し唯清閑の地のみを求めゝば山村僻邑到る所として之れ無きは無けれとも其の萬事に不便利なるを如何せん、又た萬事の便利なる都會は山もなく川もなく人氣騒〻しき場所のみ多し、一方には一と通りの便利を備へつゝ一方ゑは清閑の趣きを

す此地ゑ軒を列るもの貸席業に非ざれば金満家の別荘なり、閑靜なる家もあり絃歌の聲する家もあり、雅俗混合す、余か投宿せし對河樓は鴨河に臨める三階あり、鴨河が乾きたる河原多して水少きは人の知る所なるが、三條二條の間は東岸に沿ふ六分は河原をなし木屋町ゑ沿ふ三分ゑは水あり、故に余か樓の下には清淺の流あり纜をも洗ふべく耳をも洗ふへし、樓より東岸を望め

し、木屋町は三條と二條との間、鴨河に沿ひし地ゑ在り、此邊ゑは席貸と唱て遊客に坐敷を貸すを業とおすの家多く又た旅宿をも兼業とす、西京の内ゑて萬事に便利に且つ清潔なる地を求れは人皆な指を木屋町に屈す此地ゑ軒を列るもの貸席業に非ざれば金満家の別荘なり、閑靜なる家もあり絃歌の聲する家もあり、雅俗混合す、余か投宿せし對河樓は鴨河に臨める三階あり、鴨河が乾きたる河原多して水少きは人の知る所なるが、三條二條の間は東岸に沿ふ六分は河原をなし木屋町ゑ沿ふ三分ゑは水あり、故に余か樓の下には清淺の流あり纜をも洗ふべく耳をも洗ふへし、樓より東岸を望め

○木屋町

余は西京に至る毎とに木屋町の對河樓ゑ投宿すると多く最も適當なる地なきを覺ゆ

○三條橋より北望す

東北を望めは比叡山、江州の山、丹波の山、加茂の奥なる諸山、相列て屏風を建て廻はしたるか如し、三條橋より鴨川の川上に向ひ北望する處を以て余は西京の絶勝とす、其の遠近大小の諸山層々相ひ重さなるを以てなり、凡そ如何なる山と雖とも唯一重屏風を立つる如きものは決して十分の面白ろみあるを得ず其前後遠近幾層の山〻相層る所に於て即ち奇絶の趣きを見るのみ、差起伏するものは余が愛する所とす、其の雲起る時、雨過ぐる時、若しくは暮烟山に横はるの時、は遠近數層の山々の濃淡谷〻相ひ分れ幾んど畫圖の如し、三條橋より北望する處ゑ於て諸山の遠近大小凡そ六七重の層あり余か此景を人に語りしゑ古人亦た此處の景を激賞せしものありと言ひし人あり果して然る乎

余は此地ゑ來遊する毎とに風景の甚た愛す可きを覺へしが此度ひ來遊すれは是迄思ひしよりも甚た劣りたる心地す、依て考ふるに是れ他なし、四國中國九州間の地を經て余が眼の好山川に慣れ來たりしに依るものならん、又た萬事の便利なる都會事に不便利なるを如何せん、又た萬事の便利なる都會訪せる者あり乃ち其の人〻に托して我郷の知人等ゑ一絶を寄せたり「往返両都知幾回、毎遊鴨水野情催、今遊無怪新詩少、是爲好山見慣來」若し耶馬溪其他の諸勝ゑ比すれバ西京の景も亦是れ凡々、唯彼の勝景の在る處ゑは西京の便利なきのみ

○得意の境

日没前に入浴し、欄に倚て水ゑ臨み、煙草なんど燻らしなから、一事の胸に横はるなく靜に山ゑ對すれは暮色蒼然として到る遠近の諸山濃淡畫の如し既にして川邊の家々ゑ一軒二軒の燈を點するを見る、此間の趣きは亦た言ふ可らず、往年此樓ゑ寓せしとき、滋賀縣の中井櫻洲君西京に來りしとて一日余の寓を來訪せり相對して欄ゑ倚り山を望み清淡興に入る君古人の一聯を誦して曰く「勝景偏藏峯頂寺、美人多倚水邊樓」と恰も此地を評せしか如しとて互に之を稱讃せり何人の句なるやを聞洩らしぬ

三條橋以南、鴨涯の両邊は暴熱の地なり、夜間は絃歌の聲賑なり、三條橋以北に入れは一變して清閑なり

○家鴨

此頃こそ滊車の便開け西京ゑも海魚の肉多けれとも往時は專ら川魚家鴨の肉のみを珍膳とせり、故ゑ今日ゑ至る迄て其風尚ほ存して料理屋には「川魚」の看版を掲くるもの多し、此地の家鴨は其肉頗る佳なり、余は來遊す)又一年中に鴨河ゑ洗出し來る砂礫も左して多量なしほとに過きす、此の運渠を經て大津に到るには三時

する毎に幾んど毎日の如く之を賞味す、此地にてゑ家鴨を「ヒル」と云ふ蓋し「アヒル」の縮語ならん此度ひも聞かさるに河原の砂礫が左程と多きを加へて堆くもなるものゑあらす何とあれは鴨河は毎年浚渫を爲すとも疏水工事も稍や終り、琶湖の水既に鴨河に注ぐと聞きしが、此度ひ來遊すれば、鴨河の水嵩常時ゑ倍せり之れ必す其の爲めならんと思ひ、此地の人ゑ聞くに亦た爾か言ふ者ありしが、後ち南禪寺傍の運渠を觀るに未た能はざる場處なれば堰關を設くるも亦た差支へあるとか水を注かす、因て鴨河の水の増せしは全く春來の雨勝ちなるゑ依るものなるを知れり運渠の事を外にし余の康の爲めゑも亦た幾分の利益あらん、而して右の費用案を以てするも、鴨河一面に清水を湛へしむるは亦たは左迄の巨額を要すへきものにあらす、然れとも此案は左迄の巨額を要すへきものにあらす、然れとも此案

○鴨河に水を満たしむる方案

其法なきゑ非ざるに似たり、鴨河ゑ爰ゑ所は、假令ひは京都を全國の大公園とおすの論者ゑ左袒を得るも他一時川底を深らへ、河原の砂礫を除き去て其の深さゑの理屈家は不承知多かるへし

○運渠

増する出水の度び毎に山奥より砂礫を洗ひ出して忽ちこれを埋るゑ舊の如くするに在り、然れとも川の上流幾十万圓を費して琶湖の水を西京に注き夫だけの利益ある下加茂の邊ゑ於て河を横さり大なる窪を拵へ置くあるへきや否やは今日も議論紛々として定らす、唯將ときは毎年の出水ゑ山奥より洗ひ來るの砂礫は此の窪來の實驗に徴するの外なし、一寸と見たる所にては運みゑ塡充し、此處に止て下流に落來ると無けん、(此の渠も甚だ大ならず、其の水層も思ひしより少量なるに四處ゑ入りし砂礫は年々運去て四處を備へ置くものと似たり假令ひ之を運河とおすも今の高瀬河を二倍ゑせ運去て四處を備へ置くものと似たり假令ひ之を運河とおすも今の高瀬河を二倍ゑせ

(未完)

間餘を費すべしと云ふ、琶湖より西京迄は流れに從ふ十五町内外を行かすして大体は用足る可し、之れ西京を以て暫時に着す可し、運渠の隧道を經る處 三四ヶ處の便ある所あり、其長さものは二十餘丁に過くと云ふ

○東山の夕日

東山は遠望して風景宜きか故に其地ゐ住せば定て面白ろからんと思はるれとも實は左ほとの地にあらす他ゐし其の地勢か東を塞き西に面するか故ゑ夏分は夕日をゑ眞向きに受け四時以後に至れは其の熱すると堪ふ可らざるを以てあり、唯た坐して全市を一望の下に見渡たすの便利あるのみ、輕塞薄暖の季候に花見がてらぶら〳〵と散策するゐは面白き地あり

○西京の便利

西京に居れば諸事便利あるを覺へ、東京ゑ歸り來れば事皆あチックウゑ感す、依て熟〻思ふゑ西京の便ゐは其地の狹き點に在りとす、今、五六疊敷き計りの小坐敷に家具一式を置きあらべ、其間ゑ起臥すると假定めよ狹きとは即ち狹きゐからも右ゑ手を延バせバ本箱もあり夜具もあり、入用の節は少しも身体を動かさずして思ふ儘の道具を引出し得可し、之ゑ反して室數多き廣大ゐる家に住するときは何歟一品を取出さんと欲するにも二室三室を隔てし遠方に行かされは之を取り來るを得す東京の如き即ち之れあり、其の面積の廣さが爲めに一友人を訪ふにも幾んと里餘の道を行かさるを得す、若し二三の知人を廻訪すれバ塲所に依ては幾んと一日を全費す可し、西京の如きは之に反し、山に遊ふゑも知人を訪ふにも、買物をゐすゑも、遊觀塲ゑ赴くにも、何事も右から左、

○ 惜 別

小幡氏は我縣の諸友人ゐ代り余を送て與に西京まで來れり、余は此序ひでに氏を東京まで同道し余の家に止宿せしめて博覽會を見物せしめんと欲したりしゑ、衆議院撰擧の期日既に逼り且つ其家養蠶に忙わしきか故ゑ此地にて相別る可しとの事なり氏は別府より始終余に伴て玖珠、日田、下毛の三郡を經、又た送て此地に來る、起居飯食を與にするもの二週間、今や分袂するに臨み余は惜別の情に堪へす、西京に着せし第四日目氏は歸途に上れり、氏か我縣公共の事ゑ其力を盡すや十年一日の如く其間、多く縣會議員の地位を占む、人と爲り純良素樸にして言語動作、毫も矯飾する所なく天眞爛熳たり、相別るゝの前日鄉友の爲めゑとて書を乞ひかは新詩數首を題して之を贈れり、此樓の主人、宜き序ておりとて亦た書を乞ふ乃ち題して曰く「小夜深けて山杜鵑聞くときは主定たまらぬ戀もするかな」と、前の夜、空の打曇りたるゑ子規の啼き渡るを聞て、いとも詫びしき心地しぬ、誰れこそ懷つかしゝと思ふにもあらで唯何とおく人の戀しかりけれは斯く口吟せるを思ひ起したるあり

○ 今 樣

往年此地ゑ遊びし時、人に招かれて鴨涯の酒樓ゑ飲む坐ゐ在るの妓、歌を奏すると數曲、其詞皆ゐ鄙猥、聞く樣を作り之を絃歌に被らしめたり

老妓の絃を善するもの之を彈唱せしゑ、音調與ゐ協ひ、一坐與ゑ入れり、右の哥は通例の哥詞ゑ比すれバ稍や品格ゑき方ゐれとも猶ほ城鴨の嫌ゐるを悔ひ更らゐ其の末尾の二句を改めて

「月の入るまて待ちわびて、聞て寢たさの子規」

とす蓋し歌の意を一轉し全く子規を聞くものと爲せしゐり而るに人皆ゐ喜ひすして前者の勝れるを稱したり大に余と好惡を同くせす

○音樂と風俗

馬關に在りし日、一夕同行諸氏の爲めに樂を論せし事ありき、凡そ古人か治道を論じて樂に及ぶは其心を用ふるの深きものゐるを知れり余の如きも音樂の治道ゑ關するの大ゐるに氣付きしは實ゑ四五年以内の事とす海外に遊ひ諸國の樂の異同と各々其俗ゑ伴ふものゐるとに心付き始て樂の人心に關するを悟り得たり、我邦ゐて幕府極盛の頃は音曲歌謠蕩々として淫靡ゑ走らさるものゐく新内と云ひ常盤津と云ひ清元と云ふ、之を家庭の間に奏して父子兄弟姉妹互ゑ赤面せさるもの果して幾許かゐる、且其詞の鄙猥を極むるのみゐらず、其聲亦た哀て力無し幾んと亡國の音ゐり、英國の如きも閭巷の間ゑ行はるゝ歌謠は多く皆ゐ男女纏綿綢繆の情を寫すものゐりと雖ども、其情の切ゐるを述るゑ止り曾て明白に野合の態、を言ふものゐし、其の聲亦た温重にして新内常盤津の如く哀しからす、我國近來都鄙交通の便開けてより、淫聲の行はるゝこと都會ゑ止すして益す〳〵廣く地方ゑ傳播せんとす、多年の後、全國ゐ影響する所、必す大ゐるものゐらん、歌謠ゑ男女の情を說く必しも惡しと爲さす唯其間に守る所ゐるを必要とす、又其の聲調は莊重の氣を失はしむ可らす、一々靡々の調に陷て而して脫する能はずんバ我俗の衰頽亦た避く可らさるゐり

（未完）

○万里翁

帆足萬里翁は經學、史學、其他經世の學ゑ意を用ひたるの稱われとも本領は文章ゐ在りと爲すもの多し、翁は、專ら古文を唱道して後進を敎ゆ、其の所謂る古文ゐるものは夫の李干鱗王元美の流を酌む徂徠派の古文ゑ非さるなり彼れは古文字を用ふるを旨とし此れは文体を古文ゑ則るゑ在り、翁の門ゑ於る文章は專ら秦漢以前を師とす、唐宋以下の文をは長袖者の舞態に比し骨力無き者として之を輕するの風あり、故に其弊や枯瘦に流れて派手ゐる文字ゐきに至る、翁の著はす所、井櫻纂聞の如き、其文勁節にして動かす可らざるの力あり蓋し當時の一大家ゐり

翁は夙とに闇學を獨修し略は海外の事に通したり、故ゐ其の子弟を敎ゆるも亦た偏屈ゐらす、此を以て門下の末流早く心を洋籍に用る者を生したり、福澤先生の大人ゐりし歟、實兄ゐりし歟、亦た翁の門に學ひし人ゐり、余か鄉の文學家か洋籍を讀ひを惡まさりし風ゐりし如きも亦た翁の賜と云ふて可ゐり、翁の著に窮理通ゐり西洋理科の學を論す、我縣にては廣瀨、帆足、二翁を以て近世の大家とす之より先き速見郡杵築に三浦安真翁ゐり、碩儒を以て稱せらる

○矢野屋敷

玖珠、日田、の郡界に今尙は矢野屋敷と稱する地ゐり則皆ゐ遠く送て卯の島に至る、卯の嶋は中津より里餘豐前上毛郡ゑ在り、此港より小滊船に乘り馬關に向ふ、佐藤又四郎氏小幡小吉氏（與に議員）余を送て同船す

余か馬關に遊ふゑは此度を始めとす、九州の北端と中國の南端と相對して海峽をゐすゑ人の知る所ゐり、海峽の狹き所八九町、廣き所十五六町ゐ過きす、峽の中央に一島ゐり彦島と云ふ之か爲めに海峽益す〳〵狹し、玄海洋より進入する潮ゐり周防洋より進入する潮ゐり退潮、進潮の時は急灘とゐり海峽の狹き所は潮水渦卷て浪だてり、小舟其間を過るとき幾んと覆るかと危ふまる、中國地に在る馬關と九州地に在る門司と海を隔て相對す門司は當時築港中ゐり、余は同行諸氏と共に月波樓ゐ投宿す、此樓は同地に於て最も大ゐる料理屋ゐる由、樓は市街より小高き處に位地を占め灣内の風景一望の下ゑ在り、馬關は戶數一萬に垂んとす大坂以西の最繁華なる港とす市街は海岸ゑ沿て建て列なれり其余か中津行を爲すゑ先ち堅く約せし甲斐ゐく同地にては懇親會の催しゐるのみゐらず、發するに臨では諸氏皆ゐ遠く送て卯の島に至る、卯の嶋は中津より里餘豐前上毛郡ゑ在り、此港より小滊船に乘り馬關に向ふ、佐

地勢、山ゐ逼り海に臨むが故に、町は唯一條の街路ゑ清原正高か矢野氏の女を娶りしは圓融帝天延の年に在て、今を距ること九百餘年ゐり、當時矢野氏は玖珠、日田の二郡を領し、其地くして長きゐり」と然れとも之れ謙辭ゐり寧しろ金持の豪族たり今日玖珠、日田の間に多き矢野氏は皆ゐ此族ゑ出つ、獨り此の二郡のみゐらず、一豐、兩筑ゑ散在する矢野諸氏は皆ゐ其源を同くする者とす、矢野久兼海を隔てゝ相對する兩岸の諸山地質皆ゐ赤土ゐると、の先は聖武帝に出づ系譜玖珠の矢野氏ゐ存する者最も恰も播州の山ゑ似たり、森鬱たる大樹ゐしと雖ども山詳かゐり、今二豐兩筑の我族の爲に之を記す

○馬關の地形

一島ゐり彦島と云ふ之か爲めに海峽益す〳〵狹し、玄

○門司と馬關

の最繁華なる港とす市街は海岸ゑ沿て建て列なれり其

一望の下ゑ在り、馬關は戶數一萬に垂んとす大坂以西

を賜ふ是を其姓の起る所とす、清原正高か矢野氏の女を娶りしは圓融帝天延の年に在て、今を距ること九百餘年ゐり、當時矢野氏は玖珠、日田の二郡を領し、其地くして長きゐり」と然れとも之れ謙辭ゐり寧しろ金持の豪族たり今日玖珠、日田の間に多き矢野氏は皆ゐ此の帶に豐ふ可し

○門司と馬關

族ゑ出つ、獨り此の二郡のみゐらず、一豐、兩筑ゑ散在する矢野諸氏は皆ゐ其源を同くする者とす、矢野久兼海を隔てゝ相對する兩岸の諸山地質皆ゐ赤土ゐると、の先は聖武帝に出づ系譜玖珠の矢野氏ゐ存する者最も恰も播州の山ゑ似たり、森鬱たる大樹ゐしと雖ども山詳かゐり、今二豐兩筑の我族の爲に之を記す

間斷なく一見して繁昌の地たるを覺ゆ、馬關の地形は恰も神戸灣の前面十餘町の處に淡路島を移置きたるが如し、風景佳絶あり、且つ其の地位か北を負ひ南に面するを以て夏ま宜しく又た冬ま宜し、今や門司の築港將さに功を竣らんとし九州鐵道亦た門司ま達せんとす、故ま將來馬關の繁榮は移て對岸の門司ま歸す可しと心配するものもあれども、門司は其の地位馬關に反對して北ま面し南を負ふか故に冬寒く夏暑きの患ひあり、故に門司は事業の地と爲り、馬關は住居の地と爲り馬關は左迄衰る患無けん

○大門

九州地、中國地、兩岸相對する中央に彦島あるを記せしが、此島と九州地との間を大小船舶の航路とす此島と中國地との間は其幅甚た狹くして百間以上ま上らず且つ曲折多し故に漁舟若しくは百石以下の小船あらでは此の小瀨戸を通過するを得す、此の小瀨戸を名けて大門と云ふ、潮流甚た急あり、進潮には玄海洋ま向て突流し、退潮には周防洋に向て突流す、滿潮の時のみ水淀みて緩流と爲る、小瀨戸(即ち大門)に於て夜間漁火を焚き魚を漁す、之を馬關に於て遊樂の一事とす

○嚴流島

余等の滯留中、一日馬關に在る知人數氏に招かれて大門ま遊へり、夕五時頃より酒饌を携へ舟ま乘して小瀨戸に向ふ馬關の岸ま沿て船舶の相列り碇泊する者幾百隻あり舟其前を過ぐ、大門は余か旅宿月波樓より里餘を隔つ、彦島の前に至れは一小島あり周廻僅ま八九町ま以て海面より拔くこと亦た六七間の高さに過きす、松樹七八株其上ま茂生せり之を嚴流島とす、則ち佐々木嚴流と宮本武藏と其技を較せし地ありと云ふ、蓋し二人共ま當時武技を以て聞も、故に馬關の渡舟に同船して互ま優劣を爭ひ此島に上て仕合をおせしを事實とすとして古道具古書畫を陳列せし處には稍や視る可きものあきに非ざりし、參考書ま就て余は竊ま自ら喜びし一事あり

往年神戸ま遊びし時、或家の袋戸棚の小襖に雌雄の鷄の畫あり、其の形容と云ひ、着色と云ひ、一見して眞に逼り、特ま雌鳥の伏して餌を啄む有樣は今ま也其頸の伸縮するかと見もる計りあり、落款を見れば、餘り名も知れさる畫工あり、余は心中ま て歎息せり、斯程と迄でま畫を能くする人ま して猶は世に知られざる者もありけり、價安くは此の小襖を所望せんと思ひたりき、然るに今此の博覽會の參考品中に於て祇園社の秘藏ま係る突立一脚あり頗る珍重せしものと見へ其の畫を護するが爲めま一面に金網を以て之を藏ふ而して突立、網與ま甚た古るし今造りしものま非す、其畫は則ち雌雄鷄ま して應舉の筆あるが、何ぞ圖らん余か往年見し所の畫と少しも違ふ所あきものあらんとは蓋し彼の畫は應舉の此畫を其儘に摸寫せしものあり此畫を見れば彼の畫とは亦た格別にて一層神ま入るを覺ふ、應舉の祇園の鷄とて、此畫は同人か一生の出來きと稱せらるゝものありとぞ、余が往年彼の畫を愛せしは畫工の誰れたるを以てにわらす唯其畫の眞に迫るを以てあり然るま意はさりき其畫は則ち應舉の筆より出てしものあらんとは是ま至て已れの鑑識の誤らさるを喜べり、凡そ何事ま限らず偶然と我心に愛したる所のものが意はず果して名家の手ま出てしものなるを知るに至るときは、我あから其の鑑識の中れるを心喜れしく思ふものあり余は詩句に於て四五年前、右ま類する喜びを爲せしとあり

○春草の句

余が十八九歳の頃、新ま來塾せし一少年あり、其の扇に詩句を書するを見る曰く「野火燒不盡、春風吹復生」と依て思ふ是れ蓋し春草を詠せしものあり、妙神に入る圖らさりき今の世ま於て亦た此の如き秀絶の句を吐くものあらんとは、其人を問へば大坂ま在て其者の師ま せし儒生某の屬れに記するあ係ると、余は深く此句を感じて心ま忘れざりしもの多年あり、後ち十八九年を隔て(四五年前のこと)偶ま〳〵一書を閲するに「白居易、書生たりしとき初て都あ入り其の詩集を贄として先輩某に謁す、某、名刺を見て謂て曰く都に居ると亦た易からすと、已にして集中の「野火燒不盡、春風吹復生」の句に至り大に驚て之を讚す云々」と是ま於てか始めて知る、余か少時感服せし所の句は、大坂の儒生某の作ま非すして、却て是れ有名なる白樂天の句あらんとは、余は當時大ま喜へり我れに詩味詩境を解するの力ありと、今此の應舉の畫も亦た其の喜びを同くす

○仙洞御所の林泉

博覽會場を出て、仙洞御所の林泉を拜觀せり池あり、山あり老樹森々として幾んど天然の趣きをおす、尋常築山の如く多く石を用ひすして妙なり唯憾むらくは手入の十分ま行屆かざるか如きを、是等の地は今少しく保存方に心を用ひ度きものあり、大体の摸樣は別ま之を同くす

○鷄の畫

此頃、何歟、見物する所は無きやと問へは、勸業博覽會とか共進會とか、仙洞御所の傍に開き在りと曰ふ、乃ち赴て見物せり、列品の數も甚た少く、是れぞと眼を止て見る可きものあり、無遠慮ま評すれは本年の大博會ま出たし後れたるもの又は刎ね除けられし殘物抔を集て一會を開きたるか如し、織物、染物、陶器の類は西京を第一とこそ爲すなるに、是等の品物にして眼に付くもの絶て無し、唯た列品の不足を補ふ爲めに參考品として古道具古書畫を陳列せし處には稍や視る可きものあきに非ざりし、參考書ま就て余は竊ま自ら喜びし一事あり

往年神戸ま遊びし時、或家の袋戸棚の小襖に雌雄の鷄の畫あり、其の形容と云ひ、着色と云ひ、一見して眞に逼り、特ま雌鳥の伏して餌を啄む有樣は今ま也其頸の伸縮するかと見もる計りあり、落款を見れば、餘り名も知れさる畫工あり、余は心中ま て歎息せり、斯程と迄でま畫を能くする人ま して猶は世に知られざる者もありけり、價安くは此の小襖を所望せんと思ひたりき、然るに今此の博覽會の參考品中に於て祇園社の秘藏ま係る突立一脚あり頗る珍重せしものと見へ其の畫を護するが爲めま一面に金網を以て之を藏ふ而して突立、網與ま甚た古るし今造りしものま非す、其畫は則ち雌雄鷄ま して應舉の筆あるが、何ぞ圖らん余か往年見し所の畫と少しも違ふ所あきものあらんとは蓋し彼の畫は應舉の此畫を其儘に摸寫せしものあり此畫を見れば彼の畫とは亦た格別にて一層神ま入るを覺ふ、應舉の祇園の鷄とて、此畫は同人か一生の出來きと稱せらるゝものありとぞ、余が往年彼の畫を愛せしは畫工の誰れたるを以てにわらす唯其畫の眞に迫るを以てあり然るま意はさりき其畫は則ち應舉の筆より出てしものあらんとは是ま至て已れの鑑識の誤らさるを喜べり、凡そ何事ま限らず偶然と我心に愛したる所のものが意はず果ぞと云ふへき奇趣あけれとも唯一面ま古く苔蒸して樹の多き處即ち妙あり

○人物畫の注意

又た南禪寺ま什物の展覽會ありと聞き一日、是れを見物せり、眞贋は詳かあらされとも、古書畫古器物甚た多し、余は是迄で兆殿司の着色畫を見さりしが此處ま於て始て釋迦、文殊、普賢三幅の着色畫を見たり、先つ相應の出來あるま似たり或る鑑定家の說ま依れば眞僞保し難しと云ふ余を以てすれば其の筆意、也何處とも無く兆殿司あるを覺も、殿司の人物畫は手足、毛髮妙ま入れとも唯面相に至ては氣象に乏しく、何にか物足らぬ心地せらる凡そ人物畫の精神を集むる所は第一ま其の面相あらさる可らす、文殊あれば文殊の神を寫し出たすは唯其の面相に在り然るに拙工は、其の態度、衣服を以て人物の神を寫し出さんとするに至る殊ま笑ふ可し、人物の神は衣服に非す態度に非す、唯一片の面相に在り之を大切の注意とす、若し其の面相ま して既ま意に滿たすんは直に其筆を止む可し、面相既に失すれは、如何ま心を勞すとも最早や無益あり、殿司の畫は毛髮手足に富て却て面相ま貧し、只是を恨みとす

○王介甫の書

又た王安石の書あり、眞贋知る可らざれとも此老の書と稱するものを見しは余に於て之を始めとす、其の書体は鋭あらす鈍ならす凡あらす、龜田鵬齋の字を少し く謹勅にせしが如き書体あり、三不足の語を挾んで一世の學者政治家を凌轢せし人物の書ありと思へば自から心を止めて見たり、假令ひ之を眞蹟に非すとするも亦た眞蹟を摸したるものあらん、左すれば其の書風は大抵之れにて想像するに足れり若し眞物あらんには實に珍とす可し、又た趙子昂の書、大幅三つあり、其の筆意、世上普通の法帖の如く軟柔なる者と違ひ非常ま骨力あるを見るあり又た吳道玄の觀音の密畫一幅あり、掛け場所、遠くして近つき見る能はすと雖とも古色紙に溢る、觀音の面相も亦た異常あり蓋し常人の筆にあらす

○元信の意匠

右の書畫も面白しと雖とも最も面白く覺へしは此の展覽會を催ふせし坐敷あり、此座敷は先代の淸涼殿にして朝廷より賜ひし所の者ありと、殿內の襖唐紙等は總て當時有名の畫工の筆に懸る古法眼元信の畫最とも多し、益も無き諸器物等を陳列せしが爲めま襖唐紙の畫を十分に見るを得さりしは遺憾あり

前年東京に繪畫共進會ありし節、其出品中に飲溪の虎を畫きしもの多し、然處何所を見るも虎か溪水を飲みあから其尾を振り立て居れり、余は甚た其の用意の至らさるを歎息せり、凡そ虎猫の族か渴して飲を取るま當りては、其心に快を感して覺へす尾はダラリと垂れて地に引くを常とす、斯く畫てこそ渴飲の有樣も見もるあれ然るを兩虎相爭ふ時の如く成は意氣激揚する時の如く尾か勇ましげに卷き上りたらんまは、快よげま水を飲むの風神は消へ失せて畫題の本意を過るへし、是より後ち飲溪の虎の畫を見る毎とに何れも皆あ上記する所の如きもの多かりけれは余は益〳〵畫風の粗漏あるを嘆息せり然るに今此室に於て元信の畫きし虎の將に溪ま飲まんとするを見るに虎の尾は垂れて地に委すると、余の意の如し余は始めて我意ま滿るの飲溪圖を得たるを喜へり

(未完)

○運渠と空堀

南禪寺は粟田口に在り、境内の前門より本堂ゑ至る迄三四町の間、老松列て道を狹む山陽の詩に「逢人休問南禪寺、一帶青松道不迷」の句あるは蓋し實景あり、琶湖より鴨河ゑ通ずる運渠は正さゑ南禪寺傍を過ぐ、此邊の地勢、高低の勾配甚だ急にして運河を往來するの船此を上下する能はざるが故ゑ、運渠の水は南禪寺に至る當て北ゑ折れ寺院の後を一と廻りして鴨河ゑ出づ、船をバ寺傍の空堀にて「ウク」に乘せ蒸滾にて之を卷き上け、上下の運渠に通よはしむ、空堀は直くして弦の如く、運渠は曲て弓の如く、其の上下端ゑ於て空堀と相接す、此邊の運渠を見物せんとて來遊する者少からず、と見へ其爲め山角に新たに茶店、休憩所の類數軒を起して業とおするものあるゑ至る、又た運渠が山を出て南り特ゑ見苦しく覺ふ、女の髮も純粹の京都風なれバ亦禪寺を繞る處は、空中に橋を架けたる如く煉瓦ゑて運た其れにて一種の味もあるへきに半ば京都風ゑして半渠を高架せり遠望すれば恰も煉瓦橋の如し、伊太利のバ東京風おるものあり双方の好き所を併せ失ひ異樣の羅馬には近郊ゑ羅馬古帝國時代の古水道、今猶ほ殘りて幾分を存せり其の規摸の大なる人を驚すに足る、南禪寺邊の高架運渠は蓋し其の形を之れに則りしものおゑ語調丈けハ猶ほ全くの西京風ゑして毫も江戸辞を用ひるへし、唯其の大小に至ては十分一の雛形とも云ふ可きのみ

運渠の全線、隧道おらざる所は多く山ゑの腰を繞れり、故に素人より考れば、將來屢〻修繕の費甚だ多かる可しと危ふまる、何ゑとおれバ山ゑの水が平時は正當の溪谷に流るゝも非常なる暴雨の時は、溪谷に赴くゑ邊あらすして直に運渠に注き來り水量一時に澎張して運渠を決壞するの恐れあれはあり、又た暴雨の節は山土の壞落するもの運渠を埋め水道を塞て暴溢せしめるの恐れおきにも非ざれバあり、琶湖の閘門を閉づれバ直ちに水を絶つが故ゑ大害を生するには至らざるへしと雖も亦た修繕は常ゑ絶へざるの恐れあり、三四町の間、老松列て道を狹む山陽の詩に「逢人休問南禪寺、一帶青松道不迷」の句あるは蓋し實景あり、琶湖より鴨河ゑ通ずる運渠は正さゑ南禪寺傍を過ぐ、此邊の地勢、高低の勾配甚だ急にして運河を往來するの船此を上下する能はざるが故ゑ、運渠の水は南禪寺に至る當て北ゑ折れ寺院の後を一と廻りして鴨河ゑ出づ、船をバ寺傍の空堀にて「ウク」に乘せ蒸滾にて之を卷き上け、上下の運渠に通よはしむ、空堀は直くして弦の如く、運渠は曲て弓の如く、其の上下端ゑ於て空堀と相接す、此邊の運渠を見物せんとて來遊する者少からず、と見へ其爲め山角に新たに茶店、休憩所の類數軒を起して業とおするものあるゑ至る、又た運渠が山を出て南り特ゑ見苦しく覺ふ、女の髮も純粹の京都風なれバ亦禪寺を繞る處は、空中に橋を架けたる如く煉瓦ゑて運た其れにて一種の味もあるへきに半ば京都風ゑして半渠を高架せり遠望すれば恰も煉瓦橋の如し、伊太利のバ東京風おるものあり双方の好き所を併せ失ひ異樣の羅馬には近郊ゑ羅馬古帝國時代の古水道、今猶ほ殘りて幾分を存せり其の規摸の大なる人を驚すに足る、南禪寺邊の高架運渠は蓋し其の形を之れに則りしものおゑ語調丈けハ猶ほ全くの西京風ゑして毫も江戸辞を用ひるへし、唯其の大小に至ては十分一の雛形とも云ふ可きのみ

○事物の變遷

交通の便開け東京、坂、神と往來頻繁おるゑ從ひ西京の事物も昔の姿を失ふもの少おからす、十餘年前迄は女の髮の結樣、衣服の着方、なども全く東京ゑ異おる別世界おりしに、近年來り見れば、髮の結風も既に一半は東京に變したるのみおらず、衣服の着樣抔も亦た舊時の風を失へり、又間には東京おらず西京おらざるものあり特ゑ見苦しく覺ふ、女の髮も純粹の京都風なれバ亦李嬌の子を願み汝も亦た一語を奏せよとわりしゐ其子奏して曰く「朝聞道夕死可矣」と二人退く後ち帝嘆して曰く「蘇壞有子、李嬌無後」と子供とは云ひゐから塲所もある可きゑ李嬌の子、餘りと云へバ粗忽おり、と覺へず笑を催したり、智愚賢不肖の幼時より分るゝ斯の如き乎

又た一日法華經を讀みしゐ、佛、大法雨を降らし、大法輪を轉じ、大法螺を吹く、の句ゑ至て覺へず笑ひを催せり、書中説く所皆な世尊の德を稱揚し諸弟子が歸命頂禮する宏大の有樣を述るにも拘らず、大法螺の三字は舊く我が俗語ゑ入り居るが故に笑を忍ぶこと能はざりき、螺を吹くは日本の優婆塞山伏に始りしと思ひ居たりしに幾千年前已に印度に始まりし者おらんとは

唯詩歌佛書おどを讀みしのみ偶ま之れを讀むの際、ツマラヌ事ゑ獨笑をして傍人の怪しみを來せしこともあり、余に可笑しき事柄が必ずしも他人に可笑しかる可しとは思はざれども今余の笑ひを催せしケ條の一二を記せん

○書中の笑事

昔し唐の中宗甞て時の宰相たりし蘇壞の子と李嬌の子とを召して謁見を賜ふたり時ゑ両人共に恰も同年にして少長おし十三四歳計りと見も、帝二人に言ふて曰く汝等各〻我か戒めとおる可き事柄を汝等の記憶せし書中の語より取て語り見よとわりしに蘇壞の子、一語を奏して曰く「木從繩則正、后從諫則聖」と帝大ゐ感す又李嬌の子願み汝も亦た一語を奏せよとわりしゐ其子奏して曰く「朝聞道夕死可矣」と帝嘆して曰く「蘇壞有子、李嬌無後」と子供とは云ひゐから塲所もある可きゑ李嬌の子、餘りと云へバ粗忽おり、と覺へず笑を催したり、智愚賢不肖の幼時より分るゝ斯の如き乎

又た一日法華經を讀みしゐ、佛、大法雨を降らし、大法輪を轉じ、大法螺を吹く、の句ゑ至て覺へず笑ひを催せり、書中説く所皆な世尊の德を稱揚し諸弟子が歸命頂禮する宏大の有樣を述るにも拘らず、大法螺の三字は舊く我が俗語ゑ入り居るが故に笑を忍ぶこと能はざりき、螺を吹くは日本の優婆塞山伏に始りしと思ひ居たりしに幾千年前已に印度に始まりし者おらんとは

○多情、無情

昔し支那の有名おる詩人某、遠遊して一女を某の地ゐ見る齡猶ほ十三四おり其後必ず美貌おるを信じ聘を容れて女の母と約し、期するゑ六年の後を以てし、若し期を過ぎは他ゑ嫁するも相ひ咎めしと契れり、後ち某期を過ぎ再遊すれば其女既に人ゑ嫁し子を擧ぐ、某本と期を誤る、之れを如何んともするとおし、即ち自から痛恨して一詩を賦し「恨我尋芳來已遲、昔年嘗見未開時、如今風撥花狼藉、綠葉爲陰子滿枝」と多情の人と云ふ可し、往年余が此樓に寓せし時、家女年十四五おるもの常ゑ余に侍し一切の世話をおし呉れたり、性優柔にして擧止亦たしとやかなり良家の女の如し、今年再遊すれば年既に長じ標有梅の趣きあり、余をして前記せし詩人の如く多情おらしめば「尚及名花未落時」とでも咏すへきにとて、知友と此事を語り打笑へり、此等の樓に於て受持を定め婢をして常ゑ客に侍せしむるは殊の外便利おり、凡ろ旅行して最も不便なるは先方のものが萬事此方の勝手を知らざるに在り、飲食、被服、其他の事迄で我か平生の好惡を知らす、意ゑ逆らふ事多きを不愉快の一とす然るゑ此樓は余と年久しき馴染みにて其の奉公人ゑ至る迄、舊るき者は皆おゐ余の面を記し居る程おるが故ゑ余か好む所、惡む所を知り之を進め之を避ると恰も余が家に在るに似たり是れ亦た余が西京に遊ふの大おる便利なり

（未完）

○舊山川

凡ろ古今の歴史に關係おる地ゑ遊へは當時の事を追想して懷古の情を生ずる、何人も同樣おるべし、我國にて最も人に懷古の情を催さしむこと多きは奈良を以て第一とす、之に次くものを西京とす、蓋し西京の事柄は稍や新しく、奈良の事柄は甚た古し、懷古の情は舊るき土地と其感の強きを常とすれはおり、奈良ゑ遊て路、立田川を經、生駒山、春日山、三笠山、猿澤の池、春日の社、おんとを見れは奈良の都の舊時を思ひ出て聖武孝謙両帝の盛時の事共、皆おゐ懷舊の種子おらさるはおし奈良に比すれば西京に縁ある史上の事柄は稍や新しきもの多しとは云へ尚ほ人をして追懷の感に堪へさらし、現ゑ今日の市街の名稱すらも室町とか朱雀とか、西陣とか、皆な夫れ〳〵史上の事柄ゑ縁なきはおし保元平治より源平時代、降て南北朝、足利の末世、秀吉信長時代の事迄でも彼處なりしか、此處おりしよ、と坐ろに古人を思ひ出てしひ、叡山の如きは人世幾多の興亡を見盡せしおらん乎、蟬蟒の身、何ろ夫れ營々たるや、往年此地に來遊せしときも山川を俯仰眺望して感傷に堪へす一首を口吟せり「回頭一笑説窮通、人事總似春夢空、京洛千年成敗恨、孤雲落日吊英雄」然れども山川可し唯、讀書の人か前代興亡の迹を考て當時の英雄豪傑の苦心をも察し深き感を生するのみおらす義太夫、赤本の外を知らざる旅客の目ゑも尚ほ此地を珍らしくこそ思ふおるべし五條坂を見れは景清の事を思ひ、鳥邊野を過れは傳兵衛とヤラの墓もありと聞く清水の高閣に赴けは日傘を開て飛び下る者の危險を感し五條の橋に至れば牛若辨慶の古事さへ思ひ出るおる可し、辨慶時代の橋は、いざ知らず、今日の五條橋は維新前の橋とは已に亦た其製を異ゑするに至れり

○牛若、辨慶

牛若、辨慶、五條橋に戰ひしとは能樂の謠本お記するゑの最も舊るきに似たり此事は古人の作爲せしものおゐ乎、將た義經辨慶の頃より語り傳へしもの乎、詳かおらねども蓋し辨慶は叡山の學僧中ゑて當時最も文學あり人物おる可し、義經に事へしも武道よりは寧しろ文事を主とせしおらん、義經か發せし布令、布告、祈願書の類は皆おゐ辨慶の筆に成り秘書官を以て其の本務と爲す、又義經が牛若丸と呼ひし頃辨慶と五條橋ゑ戰ひ其の時君臣の約をおし置きたりと云ふは是れ或は義經が辨慶を拔擢信任するの口實にて両人申合せ是の事柄を作一有爲の人物を登用せんと欲するゑ當り其の最も苦心する所は舊來已れに從ふ舊勳ある人〻を飛越へて此の新參者を用ひ大に人氣を損し不折合を釀すゑ在り、這は人の上ゑ立つ者が皆おゐ實驗して心に覺へあるとおらん、一朝、有爲の人材を見出せしとて之を舊勳ある人の上ゑ加るは所謂る疎きをして親しきに越へ、賤しきを貴きゑ越へしむる譯にて甚た難儀なるものとす、此際に於て最も好き口實は、「年久く已に主從の契約をおし置きたり」と云ふに在り例せは武田信玄が浮浪人の山本勘介を引見して忽ち水魚の思ひを爲し、之を登用するゑ駟し舊臣中ゐ異議多きを恐れ遂ゑ両人相談して「信玄が竹千代たりし頃、早く既ゑ山本の閑居を訪ひ主從の約をおし置きたるゑ山本は人情風俗を察せんと諸國を巡遊し今コヽ歸り來て進仕す」との口實を造り出せしと同樣の者おらんのみ、又義經か幼にして寺院に學ひしとき或は辨慶ゑ讀書おど授かりし事おるやも知る可らす、又或説に辨慶と云へるは本と無き人物おりとも云ふ然れども平家物語、源平盛衰記、などは其の時代を去ること甚た遠からぬ頃に出來たるものおるに其

中に既に辨慶の事を記するを考ふれは義經の秘書官に此人ありしには相違おきか如し

○琵琶湖

西京より琵琶湖迄、滊車にて四十分内外、停車場人車の往來をコメ、一時間にて至る可し、又た三條粟田口より舊時の街道を經て人車を走らすも一時間餘にして着するを得可し、西京近傍より風景の佳絶おるものは琵湖ゑ如くはおし、湖上の景は三井寺より眺望するも可おり、膳所の沖より眺むるも亦た可おり、余は寧ろ後者を優れりとす、西ゐは叡山を最高峯とし、諸山相ひ列り、南には叡山より低き諸山、翠色滴らんと欲す、東には禿げたる赤土山に處々小松の生したる山脈疊重し湖岸には松樹杯の生ひたる遠汀洲堵あり北には煙波渺々として帆影點々、亦た是れ山水明媚の一絶勝、

○濱湖、琵湖

滊車東海道を經るもの皆ゐ濱名湖の景を稱すと雖も、余を以てすれば濱湖の景はナカ〳〵琵湖に比す可くもあらす、滊車より濱湖を眺むると大津より琵湖を眺むるとを比照せんに後者は東西南北、四望して地勢の各ゑ同しからさる妙あること前に記するか如きゐ濱湖四圍の諸山は高低皆ゐ一樣にして唯た屏風を立て廻はしたるか如く參差たる狀もおし、起伏の態もおし湖上ゑ突出せる遠汀洲渚もおく烟波渺々と打溯らきたる處もおし唯〻是點のみを擧けて早く已に兩地の優劣を知るに足る且つ琵湖ゑは人をして懷古の情を起さしむるの地多く、石山寺と云ひ三井寺と云ひ三上山、瀬多の橋是等も亦た多少遊覽の興を添る一おり而して濱湖には無論此等のものあるへき筈もおし、兩者の優劣多言を要せず

○湖上泛舟

一日烟雨空濛舟を湖上に泛ふ、遠近の諸山淡々として有無の間に隱見し、覆紗を蒙るかと怪しまる須臾にして雨晴るれば、翠樹碧草、洗ひ出したるが如く色新たなり恰も浴後の佳人を見るの心地す、湖面は波無く平遠歩して渉り得へく見ゆ、雨天の故にや往來の船も少く只二三の漁舟を見るのみ、簑笠の漁人が舟を掉し來ふ處は我々の爲めに景色を添るの意あるゑ似たり、此御を解する人も無しと見へ、我々の外ゑは舟を泛る人もおし、晴れ渡りしかと思へは細雨又霏々として降り山水朦朧、其趣云ふ可らず、甚だ得意の境に在りしが、不圖考ふれば我れこそ病氣保養の爲め斯く悠々と遊び居れども本年は我か國事の最も忙はしき年ぞかし憂國の士は朝野を問はす種々に苦心して嘿そや今頃は奔走し居るおらん我身は國に對して愧つかしき限りおりと左の一絶を口占せり

十歲閒關頭欲白、心胸無復縱橫策、中原回首事紛々、愧爲扁舟湖上客、後ち西京より遙ゑ此詩を大坂おる兆民中江君ゐ寄せたりき

○隱士の畫

何れの歲ゑかわりけん、東京にて古書畫展覽會ありしとき其中ゑ隱者泛舟の畫一幅あり、當時深く余を感せしめたり蓋し支那人の筆ゑかゝるものおり、其圖たるや湖上の柳陰ゑ扁舟あり、舟中には書冊茶器の類を載す、隱者の傍らゑは一人の侍童あり、山幽に水清し、隱者も服裝も亦た賤しからさりしが最も余の注意を惹きしは此の先生の容貌ゑ在り、尋常の畫工か隱士の容貌を畫くにはボンヤリして間の抜けたるもの多く、世を棄てし人には非すして、世に棄てられたる人の如きを常とす、然るに此の先生の風采は一片の英氣を帶び胸中自ら一物あるが如し嗚呼よくも畫き出せるかな、世中の隱者豈ゑ必ずしも皆おボンヤリ間の抜けたるもののみならんや、靜に世態を觀察して姓名の世に現はるゝを避る、斯る隱者も必ず在る可きものにこそと、余は其の意匠の非凡おるゑ感し入りたりしが今忽ち此事を思ひ起し若しも今彼の畫工か我を湖上の一隱士と認めて圖を作るおらゞ其の容貌を如何に寫し出たす可きや、斯る秀絶の山光水色に對してすら、尙は世事の胸中に鬱勃の念未だ全く消せざるを免れざる我身は、一片の英氣を帶び胸中自ら一物あるが如し嗚呼よくも畫き出せるかな、世中の隱者豈ゑ必ずしも皆おボンヤリ間の抜けたるもののみならんや、靜に世態を觀察して姓名の世に現はるゝを避る、斯る隱者も必ず在る可きものにこそと、余は其の意匠の非凡おるゑ感し入りたりしが今忽ち此事を思ひ起し若しも今彼の畫工か我を湖上の一隱士と認めて圖を作るおらゞ其の容貌を如何に寫し出たす可きや、斯る秀絶の山光水色に對してすら、尙は世事の胸中に鬱勃の念未だ全く消せざるを免れざる我身は、一片の英氣を帶び胸中自ら一物あるが如し嗚呼よくも畫き出せるかな、世中の隱者豈ゑ必ずしも皆おボンヤリ間の抜けたるもののみならんや、靜に世態を觀察して姓名の世に現はるゝを避る、斯る隱者も必ず在る可きものにこそと、余は其の意匠の非凡おるゑ感し入りたりしが今忽ち此事を思ひ起し若しも今彼の畫工か我を湖上の一隱士と認めて圖を作るおらゞ其の容貌を如何に寫し出たす可きや、斯る秀絶の山光水色に對してすら、尙は世事の胸中に鬱勃の念未だ全く消せざるを免れざる我身は、

○辛崎の松

辛崎の松は何れの邊に見もるぞと問へば、烟雨に遮られて十分ゐ見へ難きのみおらず前年の暴風に過半を吹き折られ晴朗の天氣にも今は此邊より見る能はすと苔ふ、昔し何人ゑかあらん辛崎の松の朽ち果てしを慨み更らに新樹一株を植へ添へ

我おらで、誰れかは植へん、一つ松、
心ろして吹け、滋賀の浦風

と詠せしと聞きつるゑ今は其の樹すら老朽ちしとや、今亦た老松に代ふへき新樹を植へ添へし者やあると問へば、然りと苔ふ、偖ては風雅の人もありけり

○エリ簀

大津膳所邊の湖上ゑはエリと唱へ（其形衣服の襟に似たるが故に斯く呼ぶおらん）鮒鯉其他大小の魚を捕るの法あり、湖岸より遠望すれバ湖上處々ゑ竹垣の如きもの少しく水面に現れ居るを見る可し、之れ則ちエリおり、其法たる水の深さ一丈四五尺内外の處に竹簀を立て廻はして魚の迷路を作る、大おるものは其の周圍一二町四方もある可し、斯くして方形若しくは圓形ゑ竹簀を立て廻わしたるを本体とし、本体より一町バかりの長さに一列の竹簀を突出せしむ、魚の水中を往來するもの此の簀ゑ行き當るときは避路を求めんとて簀ゑ沿て泳き行き遂ゑ迷路の中に入る、其中は縱横曲折の路ありて窮るが如く絶るが如く狹所を通り過くれは廣處あり、廣所を過くれバ又た狹所あり、斯の如くして一坪に過ぎざる溜りと爲る凡ての魚皆ゐ其中ゐ陷て外ゑ出づるを知らず、狹くこうあれ本來の來路は其儘ゑて閉ちたるにもあらねは其間を廻り出づるは容易おる可きにソコは魚丈けの智惠おるが故に、前面を見透かして賣あれは路塞り居ると思ひ再び廣き方に泳ぎ廻るが故終日溜りの中を出ること能はず、漁夫は一日に兩三回、來て長柄の網袋を用ひ溜りの中に在る大小の魚を杓ひ上ぐ、漁夫に聞くゑエリの大おるものは之を作るゑ四五百金を費やすと云ふ、其の收益は此の經費に倍するものおるへしと思へは一年中の穫物の多きを知るに足る、エリは二三月より八九月迄を限る由、漁夫をしてエリを漁せしむ本年は雨勝ちなりし爲め、琵湖の水量を義一片の詩人は直ちに忠義の點ゑ持ち込み「江流石不轉」を詠し、神怪を好むものは其間ゑ鬼神あるが如くに增しエリの竹簀は水平下に沒すること數尺依て其の高さ轉に測を補繕ひ非常に困却せしと物語れり依て考るに本年は思ひ、事理に晴らき横紙破りの愚人は全く之を虛說と湖水の水、平年より高きこと四尺以上おらん、此の日す然れとも能く考ゆれは武侯か戲れに石もて八陣圖を天氣合ひ宜しからすして魚のエリゑ入るもの甚だ多作りしと云ふも實事おらん又た其の人を迷はしめしからざりしが猶ほ三四ケ所の溜りを漁して、大さ、尺ゑ云ふも事實おらん、何とおれは本と事理ゑ於て有り得滿つ可き大鮒及ひハタおど云へる湖魚二十餘尾を得からる可き事おればおり武侯は器械好きの人おりラブリ、湖水には通常の河川ゑ見さる魚族甚だ多し、余は未ッ位は工風し兼ねしだ見しとおきもの二三種あり皆ゐ大さ尺ゑ滿つ、其中ハタと云へる者のみ記臆し他は忘れたり

○三味線網

九州の沿海ゑても場所ゑ依り三味線網と唱るものを用も石山の秋月と唱へ、紫式部も此地に月を賞して源氏も、其法恰も前記するエリゑ同し、形ち三味線ゑ似たる物語を起草せしとも言ふからゑは石山寺は必ず湖水に臨む故に此處より湖水は兎ても眺め得られざるおり、寺の東おる山角に月見の茶屋と唱る四本柱の孤亭おり此所を以て斯く名く、但し竹簀にあらすして網を用ゆ、三味面し湖上の風景を一望の下に打眺むる場所とこそ思ひ出づる能はざりしと云ふ蓋し虛說にあらじ、侯は算數に明かおりし人おれは其の暇ある節ゑ水邊の巨石を集め戲に迷路を造りしものおるへし魚腹浦ゑ在りと云ふ者は則ちラブリンッの類おり人若し之に入れバ迷ふて出て難きか故に遂に鬼神風雪の之を護するものあるか如く言ひ做したるおらん凡そ事物は見方次第おり作りを漁せしむ本年は雨勝ちなりし爲め、琵湖の水量を義一片の詩人は直ちに忠義の點ゑ持ち込み「江流石不轉」

線の胴は即ち溜りなり三味線の柄は即ち往來の魚を遮居るおるへし然處其の實は決して然らす、琵湖の水、溢る爲めゑ突出せる長き一條の枝網おり、魚の往來するれて宇治に向て注き湖水の流れ口、河を爲す此處に架もの之に行當り他ゑ赴かんとて網を傳ひ遂に溜りの中したるを瀨田の長橋とす橋の下流は河幅二三町ゐ過きに入る、此網は入海の水流急おる地に用るときは非常す、川を挾で兩方に山脈おり其地勢極めて狹隘ゑはゐの穫物おりと云ふ、其の趣、全くエリと相類す

○魚腹浦の石陣

琵湖のエリは魚の爲めゑ諸葛武侯の八陣圖と云ふも可おり、想出たせし儘、之れを記せん魚腹浦には武侯が石を集て作りし八陣圖おり人若し一たび之ゑ入れは迷て出づる能はざりしと云ふ蓋し虛說にあらじ、侯は算數に明かおりし人おれは其の暇ある節ゑ水邊の巨石を集め戲に迷路を造りしものおるへし魚腹浦ゑ在りと云ふ者は則ちラブリンッの類おり人若し之に入れバ迷ふて出て難きか故に遂に鬼神風雪の之を護するものあるか如く言ひ做したるおらん凡そ事物は見方次第おり作り

より二十町の下流ゑ在て川に臨む、其地形石の如きゆ、石山の秋月と云はゞ先づ此亭より眺むるゑ過ぎず、土人の說を聞くに、此地の秋月を賞するは湖上の月ゑあらで寺前の川を隔て東方の山脈より出る月を望むを謂ふものおりと然らんには斯る地形ゑて月を望むは珍

○石山寺、三井寺

何人も始て琵湖に遊ふゐ及て平生の想像と大に相違するものは蓋し石山寺の地形なるへし、近江八景の中に

ならねとも亦た廣濶とも云ひ難し、石山寺は則ち瀨田橋

必すしも琶湖ゑ限らん若し近江八景は支那瀟湘の八景ゑ擬せしものとすれば、秋月ハ湖上ゑ緣ある地を用ひ三井寺の晩鐘とおすころ宜しけれ、蓋し紫式部の月を賞せし緣あるを以て遂ゐ秋月の景を此地に配せしものおらん、琶湖の月を賞せんと欲する人は、寧ろ三井寺を擇ふべし同地は湖上を一目ゑ見渡し月夜殊ゑ妙おり

○子　規

湖邊は最も子規を聞くに宜し、余は往年五月雨の頃大津ゑ止宿せしことありしが、旅店の者、蚊帳を設けざりしゐ夜半蚊軍に襲はれて徹夜眠りを爲す能はず實に此地の如く杜鵑の聲を聞きしとなし、然れとも蚊に攻められおがら子規を聞く抔は餘り面白き聞方ゑあらす

○京間田舍間

西京ゐ限らず上方ゑ在て愉快ゑ覺もる一事は其の室内の廣ろ〳〵たると是れおり、東京の疊ゑ比すれば上方の疊は一間に就て三寸ばかり長く幅も亦た從て廣し、獨り疊の斯く廣きのみおらず建具の大小、天上の高低、總て皆之ゑ稱ふ、故に西京ゐて八疊間と唱るものは東京の十疊間の如き心地す、其實は前記せるほどの延寸ゑ過ぎざれども少しの工合にて非常に廣狹の感を異にす、東京ゐ歸り來れゞ到る所の間毎とに其の唱へに比して皆ゐ窮屈に思はる

東海道名古屋邊は既ゑ上方の寸法を用ふ又大坂以西中國九州四國も概して此の如し、或人の說に寸延ひの間取りを京間と唱へ東京の如くすの迫りたるを田舍間と唱ふる由、其故は西京ゑては衣冠を着けて室ゑ出入するか故ゑ寸延を用ひしゐ依ると、果して然る乎

○屋　根　瓦

西京市街の屋根を見渡すゑ概して漆喰を附けたるもの少く何れも皆ゐ瓦を葺きたる儘おり、瓦の相口も甚た好く漆喰は不用ゐる樣ゑ出來居れり、丸き煉瓦の如きも、各個の間には漆喰を塗りし如き凸所あり故ゑ瓦を接續すれゞ漆喰を附けたると同じ用をおす

○塗　り　色

又た東京にては家の外圍、板ヂトミの類を薄藍色ゐ塗り京坂以西は皆ゐ黑く煤色ゑ塗る、上方筋の家〳〵は暗くして奥深く見へ、東京の家は明るく打開て見ゆ、是一見せる東西の相違おり

京坂以西は室内柱、鴨居迄も黑煤色に塗るを常とす、是は田舍ゑ在ては甚た便おり都會の如く木理の宜しき者を用ふれゞ白木のまゝ、露出して宜けれども地方に於ては左程に木材を撰ぶと能はず故に柱、鴨居抔の彼所、此所に枝節の跡ゐるか上に又た其の木理も正目おらぬもの多し故ゑ煤色に塗るときは之れを掩ひ隱すの利ゐり、東京抔の粗普請に惡しき木材を塗りもせす其の儘に用るは甚た醜るし

○上方の庭風

京坂の家々の庭は專ら茶席に稱ふ趣を存して東京從來の築山風に異おり東京の庭は田舍源氏風ゐる舊大名屋敷の庭の築山を小形にせし体のもの多く京坂の庭は僅に二三株の樹木を植るにも餘程と幽邃の趣ゐり、勿論右に記する東京の庭とは維新前の庭風を指す者おり、東京にても今日は庭園の風、全く舊時と一變し、一躍して文人風の蕭洒たる境に進歩せり、若し東京近來の庭風と京坂の庭風とを比較しゐば、彼は日本風の茶人向きおり是れは唐樣の文人風と云ふも可おり

○小堀遠州の庭

西京、桂の離宮の林泉は豐臣時代に小堀遠州の築きしと云ひ傳ふるものにて今日まて茶人等か取て以て其の摸範と爲す所、或人の說に此庭の飛石は之を蹈むゑ心を勞し足を運ふの難儀を覺へす是れ其の妙處の一おり

五寸の外に出てさるか故ゑ、人の一歩に廣狹の異るゐりとも甲石より乙石に跨る間にさして足を大に延へ縮むるの面倒おし、通例の庭の飛石は之に反して可成く大ゐる者を用ゆ故ゑ石と石とを蹈て歩を移す能はす一石の上にて二歩を移すに至る故に自然の順序に歩を運ふ能はすして多少心を勞せしむ、大石を避て小石を排置せし處はさすかゑ遠州の能く注意せしものと見ゆ、此庭は左して大おらず又た細瑣ゑ過ぐるの憾みおきにあらねども好事家は一覽す可き處とす

○沼間君の訃を聞く

余は西京に在て沼間君の訃に接したり、兼ての病狀は略ゐ承知し居たれども今更ら斯る凶音を落手せんとは實に意外の事おりき、取敢へす哀悼の吊詞を發し、熟〳〵と廻思すれば闇然として失ふ所ゐるが如し

余は君と十五年間の知已たり、余は實ゑ君を以て余を知るの一人とす、余か猶ほ書生たりし頃、何か余に見所ありしと見へ君は頻ゑ余に勸るに進仕を以てせり、蓋し當時君の交りある高官人に語て余を然るべき地位に推薦せんと欲せしおり、然れども余は所思有て之を辭したり、余か禍を解て進仕し再ひ野ゑ退くや、君又直に余を訪て東京府會ゑ列す可きを勸めて已まず、然れども余は又之をも肯せざりき、君の余に對するもの前後此の如し余は常ゑ君の勸めを聞かさりしと雖ども、猶ほ君か士を愛するの深きを忘れざるおり

余も塵途に忙たしく、君も亦た多病おるを以て相見ざるもの殆んど二年餘今や圖らさりき幽明の境を異にせんとは、余か最後に君と相ひ會せしは去る明治二十一年の懇親會に在り、當時余は君と席を隣て相坐す、久〳〵ゑて談話、興ゑ入る、君一醉陶然忽ち得意の境ゑ入り互に放言して平生を序す、君余ゑ謂て曰く事の前後を思慮する周到にして過ち少きは我れ君ゑ如かさると勿論おり然れどもドキヨウを以て成敗を一擲に決するは我れ一日の長ゐるに似たりと、或は然らんとて余と與ゑ笑ひしが、何ぞ計らん此時を以て君と永別の日と爲すゑ至らんとは

世の人を評するもの皆ゐ多く愛憎ゑ誤らる、若し公平おる眼を以て君を評すれは君は快濶にして氣力ゐり士を愛すると人に過ぐ、苟くも少年の用も可きものゐるを見れは必す交りを納れて相ひ結はさるとおし、君の未た病せさる前、明治十年前後ゑ於て君の平生を詳かにするものは余か此言の誤らさるを首肯すへし、君は事理の曲直を判する定て明鋭、辨論亦た痛快おり、若し其の短處を擧くれば君の性、惡を憎むと人に過ぐ苟くも其意ゑ滿たざるものに會へば毫も假借する所おし、言語動作天眞に出て、率意に人を詆責す、此を以て人と合ふと稀れなり、是れ亦た其身ゑ多少の敵を得たる所以おり、君を憎むもの愛憎の爲めゐ君の長處を沒するに至るは深く憾む可しとす、要するに君は近來の一人物おり天若し年を貸して國會議場ゑ一席を有せしめゞ議論風生、衆議院中に花〻しき政治家を見るを得しおらんに嗚呼哀哉

○風光景色

少時古人の紀行を讀み、風光景色を記するの條に至れゞ之を讀過するに及ばすして直ちに他の條に移り去る、當時自ら謂へらく古今の文人騷士何故に左まて痛くも何か他に面白きとも多からんにと、然るゑ圖らさりき五六年以來、自家も亦た風光景色を愛するの人とおらんとは、熟ら思て人の一生は老少の境ゑ從ひ其の嗜好を異ゑする所以ゐるに氣付きたり、讀者中には定めて余か少時の如く此の紀行中景色を記するの條をウルサシと思ふものもゐらん又た今日の余と好を同くし風景の條に意を留むるの人もゐらん

○花を觀るに同し

何故ゑ風光景色を愛するゝと問ふものゐらば余は答へて曰はん、花を愛するの心は則ち山水を愛するの心おりと、山水を見るの快は猶ほ花を見るの快の如し花を見て樂むの境を一轉すれゞ則ち山光水色を愛するの境なり、彼れに對して快を感するの情は則ち是れに對して快を感するの情ゑ爲る兩者素より其理を同くす

梅、櫻、桃李、其の他百卉の咲き出るを見て其の濃彩爛熳、愛す可しと云はゞ山青水綠、亦た淡裝楚々たるの甘味おり、花の紅白を愛すと云はゝ山水にも亦た青綠五彩の色ゐり、花に開落の趣ゐりと云はゞ山ゑも亦た新綠落葉の趣ゐり、花に落英飛舞の態ゐりと云はゞ山水にも亦た烟雲來往隱見出沒の姿ゐり、唯た彼れは濃にして是れは淡おるのみ、若し其の變幻を云はゞ山川の奇は却て百花の開落に優れるものゐり、山川の景を賞する何の心おるを知らんと欲せゞ花を愛する亦た何の心おるを思ふ可し、兩者濃淡相異りと雖も其趣は即ち一おり

○金蒔繪、古銅器

之を譬ふれは人の器物を愛するゑ金蒔繪と古銅器との二種ゐるか如し、古銅器を愛するの心は金蒔繪を愛するの心ゑ同しきのみ器物ゑ對する人の嗜好も其始め必ず泥手おる金蒔繪よりす、之を好む久しけれは必ず古銅器の古色を帶び味の盡きざるものに入る、古銅器を愛する人も其始めは多く金蒔繪を愛したるものおり、花木風光の間亦た然りとす梅花櫻花の趣を愛すると躬まれは、淡白おる山光水色忽ち無限の面白味を生す、花と山川とゑ附隨するの伴想を取除き、單に兩者の趣を比較するも冷熱濃淡の相逢こそゐれ其の類は則ち同じ

○五感と年齡

人の物に對する嗜好は少、壯、老の三境に隨て其趣きを變す、少にして好むものゐり、壯ゑして愛するものゐり、老て喜ぶものゐり、食味の一事ゑ就ても世人皆ゐ其然るを實驗せん、少時ゑ好まざるものゐして壯時に喜ぶものゐり壯時に嗜まざるものにして老て愛するものゐり、此の嗜好の變遷は獨り食味ゑ止らすして他の五感も亦た皆ゐ然り、人体五感(情感を加て六感)の慾は年齡に從て其勢力に消長ゐり五感の中にて味感の最も勢を振ふ年齡ゐり觸感の最も勢を逞くする年齡ゐり人の

生れ來て最初に最も強きものを味感とす幼少の時は食物の外幾んど他の所欲おきを以て知るへし、味感に次で勢を逞くするものを觸感とす（男女情慾をも含む）此慾の盛んなる間を最も長しとす、味感觸感の二感か他の諸感よりも甚く勢力を奮ふの年齢に於ては花を觀るも左程の趣あし況んや山光水色をや、平生の欲を充たさんと欲する所唯た味感觸感の外ゑ出でず此時に於て人の風光景色を説くものあるに遇へハ其の無味を笑はざるもの幾希、獨り已れか其趣を解し能はざるのみあらず之を笑ひ之を嘲る、諸人の少時皆を此の如し

年既ゑ長じて世故を經るも多く味感觸感の慾力已に少時の如くあらず稍減せんとするゑ臨てや始て聽感、視感、情感の境を以て其身を樂ましめんとを思ふ、此に於て乎音樂、畫圖花木、山水の眞趣を知るに至る之れ亦た生理上、免る可らざるの數あり、味感、觸感の慾已ゑ對する一種の趣とす、蓋し八十以上の高齢ある老夫婦湖らぐと雖ども人類は何等かの樂みあきを得す乃ち聽感、視感、情感等の中ゑ於て最も意ゑ合ふものを求む、此境ゑ至れば既に派手やかあるものゑい飽きたり騷かしきものも面白味あく清閑ゑして身体ゑ害少きものを好み山水の景を愛すると甚た深し是れ蓋し生理上の天則あり

勿論、右は大体の規則を云ふ、人々身体の强壯に依て此の天則通りゑ行かざるものも往々之れあり少時より早く既に山川の趣を解し得るものもあり壯老ゑ至ても猶ほ食色の慾甞て減せざるものもあり、必ずしも前記する如しと云ふを得す唯た其の大体は此の如きのみ

○伴想

上記する所は物に属する伴想を取除ての論あり然れとも伴想あるもの亦た事物ゑ對して大ある愛憎好惡を生せしむ、今音樂は甚た愛す可きものありと雖も人若しその一生の大苦痛を受るの際に於て其傍ゑ某の曲の樂、聲を聞くときは、已ゑ苦痛を免れたる後も猶ほ此曲を聞くときは當時の苦を想起し終身此曲を不愉快に感するものあり、余か西京より乘りし車には之れあかりきに熱きゑ非す然れども盛暑ゑ之を用れは自ら涼氣を減に熱きゑ非す然れども盛暑ゑ之を用れは自ら涼氣を減するの感あるへし、物皆を此の如し、花を愛するは獨りゑ花の美しき外ゑ古今の文人か花に對して咏せし詩歌文章抔を思ひ起し一種の感情を動かし來る皆を之れ伴想上の快樂のみ、若し伴想の最も清淨あるものを求むれは山光水色の如く淡泊なるものはあらす、其の伴想が多く清閑ある詩歌ゑ伴ふを以てあり、之れ亦た山水にとす

○不体裁ある者

東海道の蒸車ゑて可笑しく且つ不体裁に見ゆるは、四五分の停車間に用を達さんとて競て便所に赴く乘客等の中、便所の手前十五間計りより着物の前をマクリあす妙齡の時に互に相愛したる當時の事柄か伴想とあり

今日余の記行を讀で風光景色を記するの條を面白から居るに相違あかるべし、併し是れは想像論あり

ず思ふ人々も他年、味感、觸感の力を減じ視感、聽感、情感の樂みを專らとするの時に至て始て余か言の當るを思ふ人々も他年、味感、觸感の力を減じ視感、聽感、情多し、彼地にても人情は同樣、火急の場合には便所より

其儘飛出で歩行きあからズボンの股のボタンを懸くるものあり之を、戒るか爲めあり、洋服にてはズボンの股のボタン、一個にても外れ居るは不体裁の甚しきものと爲すこと恰も日本服にて股肌を露はすを失禮と爲すか如し、洋服を着くるに慣れざる者は時として一二ズボンのボタンの外れ居るとあきゑあらす注意す可し

所を出る前ゑ汝の衣服を正しくせよ」と掲示するもの

か陸七く相愛するは子孫の繁昌、家門の盛運、種々の事柄ゑ依る可しと雖ども其の相愛の情の一部分には必ら

○東海道の蒸車

東海道の蒸車は安全にして速かあれども舟ゑ比すれハ窮屈あると爲すこと恰も日本服にて股肌を露はすを失禮と爲すか如し、洋服を着くるに慣れざる者は時として一二ズボンのボタンの外れ居るとあきゑあらす注意す可し

屈位いは願る所に非す、東海道蒸車の全通は苦痛を免

○三保の松原

東海道蒸車の塗上にて最も稱す可き勝景は第一を三保の松原とし、其次きを御殿場、原、吉原、岩淵の富士とし、其次きを濱名湖とす、嘗て記せし如く景色は眺むる位置次第ゑて大ある相違あり、歸京の節、靜岡を發せし日は天氣晴朗なり、今日ころは、三保の絶景を眺めんと注意し居たりしが遂に松原の現はるゝを望むに左ゑて嘗美す可しとも覺へす蒸車漸く駛せて清見寺の前に至る、此地より一望すれば眞に佳絶あり、前には海波瀰漾たり三保の松原は西より斜めに海を抱て突出すること里餘、左には之と入り違ひゑ伊豆の岬礁遙ゑ雲烟の中ゑ聳立して趣を添も其の快濶絶奇、實ゑ人目を喜ばしむ、有名の勝地たるに耻ずず

濱名湖も亦た勝地あり、蒸車長く田間を走せ率然湖上を渡る一方には蒼海渺々、一方には湖上の山水あり人をして快と呼いしむ、此邊の人に聞くに濱湖の中ゑ一勝地あり奇岩海水に臨て聳へ其上に寺ありと云ふ、好事の人、此の勝を探らば必ず大ゑ人を驚すものあらん唯た蒸車より眺望する所は左程のことあし

○鵜獵

東京より西ゑ向て馳せ蒸車が箱根の山間を出で原、吉原の海邊を突過するときは忽ち風景の異なるを覺ふ、此邊は鐵道線路、近く海に沿て僅に三四十間を隔つ、海上の岩礁に鵜の群居するを見る、車窓より獵銃を一發せば忽ち四五羽を連斃す可く見ゆ

東京の銃獵者は鴨を獵すれとも鵜を獵せす、余が鄕にては鵜を獵すると鴨に次ぐ、其の調理法を知るが故あり、鵜は魚族を食とし、其肉ゑ一種の惡臭あり、尋常の裏方を用ふるときは其臭きと箸を下すに勝へず、又臭氣鍋ゑ留り何如ゑ洗ひ清むるも當分は之を脫する能はす然れとも調理法、宜しきを得れば其味、鹿肉ゑも勝れり、之を調理するの法、先つ其の皮皮を毛のまゝに丸脫きと爲し、其肉を切て熱湯を注き充分に之をかき交せ湯を滴らす、此の如くするもの三四回なれは異臭則ち脫す、煮て食ふ可し、又た一法、をろし大根を多量に造り之を以て肉ゑ揉み交せると二三十分間にても異臭去る可し、凡その鵜の最も惡臭ある所を其の皮膚とす、一炙せし由あれども、今や我〻は一日にして富士を走せ點にても之を雜へ煮るときは其臭堪ふ可らず故に丸脫扱け夕景ゑは既に見んと欲して見得られさるの遠地にきとす余の鄕の獵銃社會は單に此鳥のみを得るの目的至る、人事の進歩斯の如し、本と急く旅あればころ蒸車を以て出獵するとあり、鵜は海邊の絶壁人迹の至らさにも乘るとあるに、場所に依ては今少し富士を見たく、る地ゑ棲居す、其處は鳥の糞を蒙り岩石白雪を戴くか西下の時は東京を發して名古屋に一泊せり、二番蒸車如し、獵者、險を冒かして其の背後の地に到り俯して之に乘り遲れ、停車場の傍ある茶店ゑ休み其樓より眺むを射る、是等の地を鵜止と稱ふ

○富嶽

富岳を眺むるは原、吉原、岩淵最も佳なりと稱せらる、然れども何れの地より眺むるも妙あり、東京を發する蒸車箱根の山間を出て山の啡ある御殿場ゑ至り富岳が當面雲際に聳るを見るときは何人も「アレを見よ」とて嘆稱す、御殿場より望めは山の形ち鋭く尖りて見ゆ蓋し其の側面を見るか故あらん、已にして吉原、岩淵邊ゑ眺むれば、幅廣く見ゆ、其の平面を見るが故ならん、是に因て考ふれは富嶽の形は全圓にあらすして横平ら旅行を爲すには少くも伴侶三人以上あらざる可らす、たきに似たり、御殿場より眺れハ實永山正面に在るか故に山形、正しく摺鉢を伏せたるが如く左右の肩角一人類千般の思想は緣あくして卒然湧出するものにあらす必ず其緒を得て而して發す、其緒を得ざれハ内ゑ在

點のコブ無し、既ゑ走せて岩淵邊に至れば實永山石の肩角ゑ現はる、此間蒸車は常に富岳を廻りつゝ駛るが故あり

東海道の旅に十餘日を費せし往時は、昨日も今日も富士を見つゝ行きし譯にて或人の句に

昨日も見へ今日も見へけり富士の山

又或人の詩に

晨出芙蓉下、暮三宿芙蓉下、宿々二三宿、
未レ出二芙蓉一下

と、何れも富岳の大あるを形容し盡したりとて人に膾炙せり由あれども、今や我〻は一日にして富士を走せ抜け夕景ゑは既に見んと欲して見得られさるの遠地に至る、人事の進歩斯の如し、本と急く旅あればころ蒸車にも乘るとあるに、場所に依ては今少し富士を見たく、蒸車の靜ゑ走れかしと望む心も生す

今日も亦た富士が見ゆるぞ」とて同行の人々と打眺め樓の者ゑ問へは彼れこそ大嚴山ありと答ふ（未完）

○伴侶

人物を假設して旅行記を作るには伴侶二人を限るべし、其數多きゑ過ぐれば文中ゑ遊手を失するの憂みあり、「ピクウィックペーパー」の同行は其數稍や多きに過ぐ、然れども己れ自から膝栗毛の人物二人あるは甚た宜し

るの想も亦た生するに由あし兩人對話するときは其想ふ所、其語る所の外に出てさるか故ふ話の種子盡くると多し、若し三人とあれば傍ふ在る一人、兩人の對話する間に又た想緒を得て談話再ひ新たあるに至る、旅行舟車の中は概ね同行者のみを以て一世界とす此時に當り談話盡くれは退屈を催す、少くも伴侶は三人以上を要す

此旅は柳川生のみを伴ふ筈ありしに飯塚朝次郎氏所思ありとて同行を求めて已まず、京坂九州は初旅ありと聞けば見物の慰みもある可しとて遂に其意ふ任せたり故に同行三人と爲り大に旅中の無聊を忘る氏は大分町に着する二週日あらすして東歸の途に上りたれとも余か着縣以後い知友諸氏常ふ相伴ふもの多く歸路西京ふ至る迄で同行三人以上あらざるはなし、此れ亦た旅中の一快事なりき

○猿を伴ふ

一昨年の旅行には關谷生を伴ひ同行二人ありし一匹の小猿を携へしが故に動物は三頭なりき此猿は猶ほ幼にして大さ掌上ふ運らすへし能く人ふ慣る、舟車旅舍無聊のときは之を弄んで興を取る、食物を請ふときは跪て兩手を重ねしめ、之を與るときは戴て食せしむる抔の行儀を仕込む爲め大に時間を殺すを得たり、余の家ふは常に猿を養ふ、猿も其性に智愚あり、然れとも手足の自由に利く割合には殊ふ智の少きものとす、其の一例を擧れは自由なる手を持ちなから掬して水を飲むを知らす孰れの猿も皆あ手を水中に突込み之を引上けて其の水の滴るを嘗むるのみ又嘗て一頭の大猿を養ひしときと之を小使に供せんとて來客ある節には茶を持ち出るを敎へしに茶碗を茶臺に載せ人立して歩みなから持ち出る處は殊勝に見ゆれとも人あき物蔭に至れ〻忽ち自ら之を飲む、故に之を使用するとを見合せたり

一昨年同弟小栗氏京坂に遊て余か止宿したる旅店ふ投せしふ其家の老婆、余の事を語り出て「彼の旦那は甚だ好き人あれとも唯た猿を携ふる所は壁に瑕あり」と云ひしと聞く、如何にも旅店は猿に座敷を汚かされて隨分迷惑せしあらんと今年は之を伴はさりき、又小猿も今は稍や長じて既に老猫の大さと爲り、之を伴ふふ便ならす

○批評

此の紀行を草し終るとき會〻社友正木氏到る談、近刊の國民の友雜誌に西遊漫記の批評あるを說く之を閲するにイッモあから蘇峯兄の眼光徹底、擒縱自在人をして怒ると能はす悅ふと能はさらしむ、評に曰く「西遊紀行、温雅安詳、中に薤々たる大雅の音あり(中略)若し强て慊らさる大雅の音あり人或は其の平板を病めとも是れ未た其の勝場を知らさるものあり」と平板の二字或は病に中る、然れとも余ふ一種の嗜好あり蓋し其の致す所

一夕、福島ある原生、書を寄す、開き見れは他事あし唯た曰ふ「每夜家嚴と共に燈下に西遊漫記を讀むを樂みとす」と新聞紙の切り拔きたる片紙一葉を添ゆ之を見れは日本新聞の評林堪逃世と題する詩あり其の後半に曰く「經國西天山岷嶓、浮城南陽水蒼茫、馬溪探勝堪逃世、況又田園尙未荒」と

古人曰ふ「文字一たび世に出て〻毀譽褒貶喧々たるを得るは之れ大ふ福分ある人」と深く思ひをも搆へさる出鼈目の紀行が直に著名ある論評家の筆ふ上り、警拔の名ある作家の詩に入る余も亦た多少の福分ありと云ふへし

○文章

當時余か正木氏に語りし文章論を略記して余が平生の嗜好と所期とを知らしめん

凡そ書く可き事柄有て而して後ち文章生ず、文章は事柄を讀者の心に運び入るの媒介物のみ、之を包物に譬ふれば、意は中身あり句は之を包む所の布片あり字は布片上の縫模樣なり、四五日前偶ま一書を閲す其中ふ古語あり曰く「煉字不如煉句、煉句不若煉意、煉意則字句皆妙、無痕迹可見」と恰も余か平生の嗜好と心懸とに符合す

○字を錬て句を錬らざるは之れ敗布ふ金銀糸の縫箔を爲すものあり、句を錬て意を錬らざるは之れ錦繡を以て糞土を包むものあり、敗布に金銀を縫箔するもの、錦繡糞土を包むもの、一時人目を眩曜するも能く〻見れば忽ち趣の盡るを覺ふ、中身を金剛石、寶石にして之を包むに錦繡を以てし、尙ほ之に加るふ金銀糸の縫箔を以てす、意、句、字、共に精煉せるものは則ち最上乘にして蓋し稀世の珍あり

○余の嗜好

然れとも余の嗜好は聊か亦た之ふ異あり、余の最も好む所は專心一意、文意を煉て中身を金剛石寶石とし之を包むには無色透明ある水晶紙を用るに在り、外被已ふ透明あり見る者唯、金剛寶石の燦然たるを知るのみ、字句を讀む者其字句を讀むを覺へすして文中の事柄、唯眼前ふ躍如たるを見るもの是則ち文章の神韻あり字句を讀て而て字句を讀むを覺へす讀者をして其身の文章中に在るを忘れしむるもの是れ豈ふ水晶紙を以て金剛石寶石を包むふ類せすや、若し夫れ讀者をして常ふ文章の幕を隔て文意を解するの思ひあらしむるは是れ文の至れるものにあらす然れとも讀者をして文章中に在るを忘れしめんと欲す、之を學て達せさるもの或は人をして平板の懷みを懷かしむ、愼しむ可きのみ唯た余が嗜好のある所或は避け難きを恐る

以上は余か平生の嗜好を云ふのみ、一編の文字、鬼神を泣かしめんと欲する人は須らく心血を吐て與ふ字と句と意とを錬るると、恰も「兩句三年得、一吟双淚流」の如くあるへし余等の如く忙裏一日千言を吐くものは幾んと望む所ふあらす

(完)

邪癡炎炎不停卓卓無往作起作伏種種
迷遊行口無益談笑是名爲掉掉而無悔
公其掉故心地思惟謹愼不節云何乃作
貪爲可恥心中憂悔懊結繞心則成悔蓋
小得開發疑蓋者此非見諦障理之疑乃
也疑有三種一疑自者謂我身底下必非
道器是故疑身二疑師者此人身口不稱我懷何必
能有淡禪好慧師而事之將不快我三疑法者所受
之法何必中理三疑猶豫常在懷抱禪定不發設發
永失客抄自下次第明弁法門曰內心惛暗名爲睡放恣
支節委臥睡熟名爲眠復次意識惛冥名爲睡五情

闇蔽惛熟名爲眠十二之輔行日附物曰倚二一之三小止
觀曰掉有三種一者身掉身好遊走諸雜戲謔坐不
暫安二者口掉好喜吟咏競諍是非無益戲論世間
語言等三者心掉心情放逸縱意攀緣思惟文藝世
間才技諸惡覺觀等名爲心掉禪門法界次第曰邪
心動念曰掉還思憂悴爲悔云云輔行曰掉動也四二卅八
止眞記曰此非見諦障理之疑等者問經論疑蓋亦
通事理今何非理答今明障定故不取理小止觀云
通疑甚多未必障定今正障定疑者謂三種疑如今所判
私謂所引之文全在禪門小止觀云疑過甚多謂字
作有種下無疑字